
虹色ノ夢

幼ゐこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色ノ夢

【Nコード】

N4766G

【作者名】

幼ゐこみ

【あらすじ】

ヒトが獣に獣がヒトになることが当たり前の大陸、虹色の世界。そこを舞台に繰り広げられる、それぞれの物語。2008年の秋に出版した著作『黒狗率イル旅ノ群レ』の世界観を元に作った短編集です。読んでみて何かピンと来た方は、是非書店やネットなどでお探し頂ければ幸いです。

獵犬ト狐 其ノ巻（前書き）

只今ネットや書店で販売中の著作『黒狗率イル旅ノ群レ』の番外編です。直接著作に続くように書きましたが、何しろ作者の稚拙な文章力がそのまま野放しになっているので、注意が必要です。それと、本作はいきなり『黒狗』のネタバレがあります。【それでもいい方、すでに読んで下さった方、別に『黒狗』に興味のない方】は普通にお読み頂いて結構ですが、もしも【『黒狗』でのネタバレを避けたいという方】は、お気を付け下さい。それでは長々と失礼しました。第五部編成の『獵犬ト狐』よろしく願います。

2009年3月27日 幼ゐこみ

獵犬ト狐 其ノ壱

獵犬ト狐 其ノ壱

虹色の世界。そう呼ばれている大陸がある。其処は、ヒトが獣になり、獣がヒトになる事が当たり前の世界だった。その大陸の中心に広がる大平原を西へ千里。それが、大帝国バザイへの道筋だ。

この大帝国バザイに仕える剣士の中に、いつも鴉羽の衣を纏う剣士がいた。漆黒の長髪を一つに纏め、深海の様な藍色の目を輝かせるその剣士。或いは、漆黒のしなやかな肢体に、藍色の目を輝かせる獵犬。通り名は、クロウ。本名は、親しい者しか知らない。或いは、クロウを従える重鎮中の重鎮——例えば、皇帝やその執事、武將など——のみぞ知る。

クロウは自分の本名を隠せる限り隠した。

そうしなければならぬ状況にいるのだ。

クロウの立場は、如何に部隊員の一でしかない剣士とはいえ、やんごとない立場である。所謂エリート出世で、生まれ柄の特殊さ、そして、他ならぬ剣術の能の高さによるものであるが、周囲からの羨望の眼差しを感じずにはいられなかった。

それだけならいい。

だが、それだけでないのだから、クロウは本名を隠すのだ。生まれはとつくに知られている。隠しているのは、生まれではない。

クロウエン・バルサミコ。

クロウの本名はそれだと信じている者も多い。だが、違うのだ。本当は、その間に名が入る。誰にも知られてはいけない名が入るのだ。

バルサミコ家。

クロウはその血を受け継いでいる。十数年前までは、今は亡きクロウの祖母が纏めていた以降、継ぐ者を失った家だ。だが、ただの

落ちぶれ貴族ではない。其処は、廃れた王族の末裔なのだ。

そもそもこのバザイ大帝国が建つ前は、ラビラ七王国という、七つの王家中心に成り立つ豊かな国があった。もう三百年近くも前の事だ。無論、クロウは生まれていない。

ラビラ七王国には、青い目を特徴とするケラヴァアラ人という人間達が住んでいた。だが、突如、地底に住めなくなった地底人ルチフェル達が地上へと現れ、その一派によって、ラビラ七王国は滅ぼされ、代わりに建ったのがバザイ大帝国らしい。

その時、後にバザイ人と改名するルチフェル達を率いたのが、他でもない今の皇帝バザルライだというから驚きだ。その執事であるメデルキもまた、彼が幼少の頃から仕えている元剣士だという為、クロウはこの話を俄かに信じられなかった。

その真偽はともかく、クロウの出自であるバルサミコ家は、この滅ぼされた七つの王家の内の一つだった。今や廃れたその家。廃れたとはいえ、大層な家と財が残された。政略された後も、その本性が犬であるように大人しく尻尾を振っていたため、新しい国でも然程虐げられずに済んだのだ。

こればかりはクロウも信じた。そうでもしなければ、とつくに滅ぼされていたか、他の王家の子孫の様に人質として生まれつき城に仕える羽目になっていただろう。

ラビラ王家は犬なのだ。新しい主に従い、頭を垂れる犬なのだ。牙を剥けば、滅ぼされる。嘗ての領地にいた民も含めて、滅ぼされる。そして、もう既に、二つ、三つほど、王家は滅んでいる。

——出来るだけ私なりに足掻こうじゃないか。

クロウはそう思いつつ、騎士養成アカデミーからそのまま城に仕えた。もうすっかりバザイとケラヴァアラの混血が進んでいるというのに、城には未だにクロウのその藍色の目を蔑む者がいる。蔑みつつ、利用しようとする者もいる。

だからこそ、クロウは本名を隠す。

クオロウエン・バルサミコ。

例え出自を知られようが、全てを知られてはいけない。

気の抜けない日々に、クロウはうんざりしていた。

——城仕えなど投げ出して、何処かに行きたい。

ふと気付けば、そんな事を思っている。

「おい、何ぼけつとしてんだい？」

不意に声をかけられ、クロウは我に返った。

昼下がりの林の中。

クロウはある男を追跡していた。

どうも城下町のとある富豪の動きが怪しいらしい。他の者の管轄だったため、他人事のように思いながら取った休暇。

一緒に過ごす相手を間違えた。

クロウと共に男を追跡しているのは、カラカル。

黒と銀の混じる髪、ガラス玉のような水色がかった目。彼もまた、ケラヴァラ人の血を引いていた。クロウと同じ、城に仕える剣士。ただの一兵卒だったくせに、クロウに深く関わった為に近々密偵に正式任命される何ともまあ大抜粋された男だ。その本性は銀妖狐。首のまわりだけは白い襟巻の様な銀色の狐。

その狐の姿をたまに見ると、クロウはいつも思うのだ。

——売れば高くなるだろうな。

「おーい、聞いてんの？」

カラカルが呆れたようにクロウを見やる。

クロウは溜め息を吐いた。

事の始まりは、偶々、カラカルが同時に休暇を取った所からだ。

気ままに時間を過ごすために城下町へと向かったクロウに何故か、彼は当たり前のように付いて来た。それだけならいい。其処で、彼が見つけてしまったのだ。富豪の家から出て行く外套を羽織った怪しい男を。その怪しい動きをしているという富豪でもないし、親

戚でもなさそうだ。

誰かに似ているとカラカルが彼に注目したのも束の間、尾けてみよう、と彼が言いだした時には、クロウは呆れかえった。

彼は何も城への忠義などで言いだしたのではないのだ。

飽く迄も、好奇心。

——お調子狐め。

クロウはそう言いたい気持ち在必死に堪えつつ、一人で行かせるわけにもいかない為にカラカルについてきたのだ。

別にクロウも好奇心が湧いたわけではない。

「いや、誰だろうねえ」

カラカルが男を見つめながら忍び笑いをしながら言う。とても楽しそう。何がそんなに楽しいのだろう。

「本当に見覚えがあるのか？ 私には全く見覚えがないのだが……」

「ううん、若しかしたら、アカデミーで一緒だったのかもしれないな。もしくは、部隊とか？」

クロウは眉を顰めた。

二人の見張る男。頭からすっぽりと外套を羽織り、その特徴的な部分は全く見えない。もちろん、犬であるクロウに匂いは伝わってくるが、カラカルは飽く迄狐だ。クロウほど嗅覚もないだろう。

「いやいや、狐侮んなよ。俺だって城の隅にいるあんたの匂い分かるんだからよ」

「あつそ」

「あつそっておい、信じてないだろ？ 本当だぜ？」

カラカルの言う横で、クロウはその男の背後を見つめる。

何故だろう。

クロウも彼を知っている気がした。何処でかは分からない。若しかすれば、同じ部隊だったか、アカデミーで一緒だったか。其処まで思い、クロウは我ながら呆れた。

——カラカルと一緒にじゃないか。

自分はこの狐よりも記憶力が悪いという事だろうか。

腹だたしい。

クロウは益々気だるさを感じた。

「おい、クロウ？」

カラカルが覗き込んできた。

「あんた、何か今日ボケつとしてんな？ 休んだ方がいいじゃないの？」

「誰の所為でその休暇が台無しになっているとでも？」

「あ、いや、その、あははは……」

クロウがさらりと切り返すと、カラカルは急に濁し笑いをしながらクロウの背を叩いた。

「あ、それともまさか、好きな奴でも出来た？」

殺すぞ。

クロウは横目で、にやけるカラカルを振り返った。

この男、会った時から急速に遠慮というものが無くなってきている。

いつか身の程を教えてやらないと、そんな物騒な事を考えながら前に向きなおり、クロウは呟いた。

「カラカル」

ちらりと振り返り、前を指差す。

「あいつ、いなくなったぞ」

こうして二人の貴重な休暇は終わった。

「クロウ、ほら御覧よ。日が昇り始めて美しく山際を彩っているよ。小鳥達の声も聞こえるし。きっと、森に住む獣人の一部だろうねえ。いやあ、本当に清々しい朝だねえ。だからさ……そろそろ機嫌を直してくれよ」

「五月蠅い、黙って歩け」

バザイ城の廊下で、クロウとカラカルは共に歩いていた。

休暇が明けた翌日明朝、早速上官からの呼び出しがあった。如何に皇帝やその執事、武将と関わりがあるとはいえ、上官の命を有耶無耶にする理由にはならない。休みたかったのに、結局しっかりと休めなかった、寝起きのクロウの機嫌は最悪だった。

——もともと寝起き悪いからな……。

カラカルは息を飲んだ。

初めてその寝起きの悪さに直面した時は、短い一生だった事を悔いた。というのは大袈裟だが、傷一つ負っていないのが不思議なほど、心がずたずたになった。

何をされたわけでもないのだが。

「……にしても、何なんだろうねえ。こんな朝早くにお呼び出して」

「舞踏会の件じゃないか？」

クロウは会館のある方角を顎で指した。沢山の有力家の集う舞踏会。ちよくちよくと開催されているのだが、月に一回大きな舞踏会がある。

それが今宵。

「警護？」

「恐らくね。悪くて、強制参加」

クロウは苦笑交じりにカラカルを振り返る。段々と機嫌が良くなってきたような気がする。カラカルは内心安堵しながらも、腕を組んだ。

「えー、そんな急な」

「昨日は欠番だったからね、あり得ない事もないだろう？」

「なら俺は警護だね。そんな御家柄じゃねえし。あんた、きつと強制参加だな」

「笑うな。私も意地でも警護についてやる」

クロウが本当に不服そうに言った為、カラカルはすぐに笑みを消した。

クロウはこのような世間の貴族と言われる者達の集まりを極端に

嫌う。クロウだって、その貴族の一人に間違いはないはずなのに、その集まりに進んで参加する事を嫌うのだ。

——まあ、そうだろうなあ。

カラカルは思う。

たった一人となつてしまったバルサミコ家の生き残り。とつくにか督もない今、実質上クロウが家督なのだ。ずっと城に仕えるクロウは、隣の地方にあるその本家にずっと足を運んでいない。主を無くし、すっかり無人となつてしまったその家は、だが、それでも財と名誉と地位を有している。

ここに目を付けられないわけがないのだ。

こうしてクロウと行動を共にするようになってから、決して長くは経っていないのだが、それでもカラカルは、バザイ人有力家たちがクロウに対して下心のある近づき方をする所を、何度も見てきた。その都度のクロウの避け方は上手い。感嘆してしまうほど、その家と自分との立場を汚さずに、逃げてしまうその姿は、闇の霧の様だった。

だが、如何に上手く逃げられるとはいえ、そう何度も言い寄られてはうんざりするだろう。

そんな事を思いつつ、カラカルは扉を開けた。

「遅いぞ、クロウ。カラカル」

上官の声が響き渡った。何時もは聞こえやすくて結構なその声も、このような明朝では、耳に障ってしまう。こんな朝早くに城で響いても大丈夫なのだろうか、と心配してしまう程に、五月蠅かった。

この部屋は防音効果がしっかりとしてあるのだろうか。

「待たせてしまったようで申し訳ないですね。バーク隊長」

クロウが全く悪びれる様子もなく、ぶっきら棒に言った。カラカルが同じ態度を見せたならば、殺されないまでも確実に減給だろう。否、若しかしたら、既に減給されているかもしれない。

クロウもカラカルも。

しかし、既にクロウのそういう態度に慣れているのか、上官であ

る隊長バークは、溜め息を吐いただけで何も言わなかった。彼が取り仕切るのは、先陣と呼ばれるエリート部隊の第一部隊。若しも戦でも起ころうならば、クロウも、現段階のカラカルも、この先陣の第一部隊に配属される。少し前のカラカルでは、これだけでも予想もしなかった出世なのは兎も角、つまりバークは、周囲から見ても異常な出世を遂げた、今のカラカルに取っても、立場こそいいが、まだまだ若いクロウに取っても、逆らう事の出来ない直属の上官なのだ。

「相変わらずな御挨拶だな、クロウ。まあいい。そんな事に構っている暇はない」

バークも随分と眠そうだった。

そう言えば、この部屋には使いの者がいそうにない。彼は、クロウとカラカルの元に伝言が来るまで、ずっとここで待っていたという事になる。

それは随分と御苦労な事だ。

「今日呼び出したのは、今宵の舞踏会の件だ」

予想通りだった。こうも予想通りだと、却ってがっかりする。

どうせ何も無いのに。

この甘さがいけない、とよくクロウに怒られるのだが、これ程生欠伸か堪えられない任務もなかった。

——まあ、平穏なのが一番なんだけどね。

カラカルはもう直、正式に密偵として任ぜられ、国を出されてしまふ。そうなれば、仔の様な平穏である可能性の高い任務など、めっきり減る事だろう。毎日が緊張の抜けない日々となる事には間違いない。

「今宵は我々第一部隊と、第二部隊が警護に当たる。……のだが、此間の事故で第二部隊が手薄だ。お前達二人は、第二部隊につけ。以後、第二部隊長の指示で動くように」

此間の事故。それは、第二部隊の訓練中に起こった落下事故だ。森林で行われていたらしいが、その間に部隊員数名が次々に濡れ葉

の土地に足を取られ、崖から転落。経験をしっかりと積んだ者たちを大層呆れさせた事故だ。

だが、その事故には不審な事も多く、何ともまあ不気味な事故だったらしく、気ままな一兵卒の間では、もう怪談となっているという話だ。

「彼が第二部隊の隊長レイヴンだ」

クロウもカラカルもはっとした。ここにはバークしかいないと思っていたのだ。だが、バークに指された方向には、確かに人がいた。壁に掛けられた絵画の傍にて寄り掛かる、腕組みの男。

カラカルは目を見張った。

黄緑色の目を輝かせるその男。焦げ茶色の髪は肩ぐらいまで伸び、薄らとウェーブがかっている、角無しのバザイ人。

そもそもバザイ人の特徴は、尖った耳と二つの角である。目の前にいるバーク隊長もその特徴をしっかりと有している。

これらは地底人ルチフェルの特徴であるのだが、東へと分岐した彼らの一派で、自らの女王ズペルシスを奉り東の地にズペルス国を建てたズペルス人と比べると、耳は短く、角は長いとかいう。

だが、バザイ人の方は、ケラヴァラ人との混血もすすんだ為か、こうした角無しの者が多く出ている。多くとは言え、統計的には角有りの方が多いだろうが、それでも両親ともに角有りなのに、子は角無しという事もざらにある。

このような混血は庶民貴族を問わずに進んでいるらしい。特に、貴族の場合は、上流階級であればあるほど、その混血率は高い。彼らは嘗てこの地を制していた七王家のうち、一番力を有していたと言われるジャスミン家の血を引いているのだ。既にジャスミン家は、その本家以外、純粋な血を残してはいない。跡取りでない者は尽くバザイの有力家の元に嫁や婿として取られていった。

三百年も経った今、ジャスミン家の血筋は、確実にバザイ人の上流階級に流れていた。

そして、このレイヴンとかいう男も、明らかにその筋だった。

——バザイの混血ぼんぼんか、嫌だねえ……。

カラカルは内心思っていた。何故ならば、クロウやカラカルのような純粋なケラヴァアラ人を表面的に差別する者は、バーク隊長のような純粋なバザイ人よりも、このレイヴンとかいう男のような混血貴族の方が、ずっと多いのだ。

彼らは自分達にも同じ血が流れているのを忘れているのか、はたまた、劣性で根絶的に打ち消されてしまう青い目を受け継がない事からの安堵の為か、こちらが呆れるほど差別意識を顕わにしてくるのだ。今宵上官となるこのレイヴンとやらが、そのような差別意識を持っていないとは限らない。

カラカルはこれから先の事を考え、肩を落とした。

レイヴンはクロウとカラカルを見つめると、ふっと笑んで近寄って来た。その途端、クロウがふと眉を顰め、体を強張らせたのに気付いた。

カラカルは怪訝に思ったが、レイヴンが話し出した為、注目を逸らさざるを得なかった。

「噂は聞いている」

低く唸るような声だった。

「バルサミコ家の生き残りに、急速に出世した庶民狐」

その翡翠のような目が光った。

途端にカラカルは、寒気が走るのを感じた。

何故だろう。人間に見つめられているとは思えない。

まるで、森林に入り、運悪く獣人の熊か何かと遭遇してしまったような感覚。下手に口答えすれば、今この場で八つ裂きにされるのではと思うような感覚だった。

「せいぜい足手まといにならないように」

翡翠のような黄緑の目を細め、レイヴンは部屋の扉へと歩いていった。そして、体質直前にふと振り返り、ぼそりと言った。

「昼に顔合わせをする。十五時に庭に来い」

どの庭か、と問う隙もなく、レイヴンは去っていった。きっと、

彼も朝早いから機嫌が悪かったのだ。きつとそうだ。カラカルはこれからの事を思い、そう自分に言い聞かせた。

庭の事なら大丈夫だ。きつとあの場所だろう、と見当がつく。

だが、カラカルは気になった。

すぐ横で、未だに身体を強張らせるクロウの事が。

獵犬ト狐 其ノ弐

獵犬ト狐 其の弐

その後、バークからはすぐに解放された。

珍しく減給覚悟の皮肉一つも言わず、クロウは軽く頭を下げただけでその場を逃げるように離れていった。

カラカルはその様子を不審に思い、バークへの挨拶も疎かにすぐにクロウを追った。

バザイ城の廊下をクロウは足早に歩いていく。

その姿は何処か慌ただし。

何かを振り払うように、落ち着きなく、クロウは歩いていった。

ついてくるカラカルにも気付いているようだが、クロウは何も言わなかった。

「おい、如何したんだよ？」

暫く黙って歩いた後、遂にカラカルは訊ねた。何故だか、バークのいるあの部屋の傍では聞いてはいけない気がした。振り返るクロウの藍色の目が、それが適切な対応だった事を物語っている。

「お前は気付かなかったのか？」

クロウは至極、押し殺した声でカラカルに言った。

「気付くって何を？」

「レイヴンの事だ」

「レイヴンがなんだ？」

惚れたのか。

そんな冗談を言えるような雰囲気でもなかった。クロウは頻りに周囲を気にしつつ、そっとカラカルに囁いた。

「レイヴンの匂いだよ。分からなかった？」

「匂い？ ただのバザイ人の混血御曹司の匂いだったけど」

カラカルが言うと、クロウはあからさまな溜め息を吐き、呆れたようにその藍色の目でカラカルを見やった。

「やっぱり狐だね、お前、城の隅にいる私の匂いは分かるんじゃないのか？ それに、闇の気配はあっただろう？ 如何して気付かない」

「闇の気配？」とカラカルは首を傾げる。レイヴンの気配。何か不審な所でもあっただろうか。たしか彼を取り巻く気配は闇の様だった。だがその闇は、クロウの周囲に取り巻くものと同じ物。白、光、闇、朱の四種類に分かれる命の核を持つこの世界の者の一部が、当たり前前に宿すものにすぎなかった。

カラカルは光。クロウは闇。

生き物に当たり前に宿るその気配。

レイヴンからは、飽く迄もその一部としての闇しか感じ取れなかった。

「そうだよ、闇だよ」

だが、クロウの言う闇は少し違う。

カラカルはそう感じた。

同じ闇を宿すクロウが、闇を恐れている。

「気付かなかったの？」

藍色の目に覗かれて、カラカルはぎこちなく頷いた。

クロウはだが、カラカルを莫迦にする余裕もないらしく、ただカラカルの手を握りしめて、荒げられかけたその声を必死に押し殺しながら、カラカルに言った。

「狼だよ。狼の匂いがしたんだ」

「狼？」

カラカルは眉を顰めた。

クロウは頷いた。

「ああ、狼の闇の気配だ……」

狼と言えば其処ら辺に居そうなものだが、この大陸では一部に住む一種属しかいない。狼である以上その出自である事は隠せない。

バザイ国の外の大平原に沿うように広がるグレイ山脈。其処に住み着く、ジュノア人という人間の一派なのだが、人間よりも、また獣人と人間の混血である半獣人よりも、獣、或いは、魔物に近い者――人狼として、恐れられていた。その特徴は、狼である事と、感情によって変色する灰色の目。その目は、ジュノア人全体の特徴でもあるが、人狼達の目は殊更に目立つらしい。らしいというのは、この国から出た事のないカラカルは、余り見た事がないからだ。

「レイヴンが人狼の血を引いているというのか？」

カラカルの問題に、クロウは静かに頷く。

「そんな事――」

在る訳が無い訳でもない。

そもそも森に住む獣人達と、町に住む人間達の混血が生まれるのだ。況してや同じ人間同士である人狼との混血など、あり得ない事はないだろう。何かよっぽどの理由でもあって、里に降りた人狼が居たのかもしれない。そして、巡り巡って、その血が此処バザイに流れてきたとしても、おかしくはない。

大体、誰もが恐れるような人狼の血が流れる者を、無下に扱える強者がいるだろうか。いたとしても、それは、伝説上の人物だろう。カラカルは寒気を感じた。

出来れば、クロウの勘違いであって欲しいことだ。

「で……でもさ、レイヴンの目を見たら？ 黄緑色の人間の目だったぜ？」

「目だけ人狼の特徴を引かなかったのかもしれないだろう？ 兎も角、あの気配、あの匂いは狼に間違いない……何とも不可解な匂いだった……」

「考えすぎじゃないかい？ それに若し、そうだとしても、其処まで恐れること……」

そう言いつつ、カラカルは口籠る。

やっぱり無理だ。

怖い物は怖い。

クロウは周囲を見つめ、溜め息混じりに言った。

「兎も角、余り関わりたくないな。早くもバーク隊長の有り難さを知る事になりそうだ」

その言葉に、カラカルも納得した。

絶対同じ血を引いている癖に、純粋なケラヴァラ人である自分たちを蔑むようなその冷徹な目付き。

思い出すだけで、凍ってしまいそうだ。

「十五時に庭だったっけ？」

カラカルは欠伸を堪えながら呟いた。

この世界の一日は長い。三十時間もあるのだ。すっかりそれが当たり前となっているけれども、やはり長いと感じるのは確かだ。

子ども時代よりも、些か短くなってきたいるけれども。

「そんなに暇あるなら、何もこんな朝早くじゃなくたっていいのねえ」

「カラカル」

その時、クロウがぼそりと言った。

「付き合え。打ち合いだ」

荒々しいその声に、カラカルは苦笑いしつつも承諾した。

日の光が注ぐ闘技場。その周囲の壁は、逆光の為か真っ暗だった。ただ闘技場の真上から覗く太陽のみが、その広場を照らしている。

明るいけれども薄暗い、そんな空間。

たった二人のみのその広場で、クロウとカラカルは向き合っていた。

ラクダ色のマントから剣を抜くカラカルに、クロウは静かに声をかけた。

「お互いに手加減なしだ。いつかみたいにぼやぼやしていたら傷が増えるぞ」

「へいへい」

カラカルはうんざりと返事をしつつ、にやけた。既に数回カラカルとは打ち合っているが、彼は一度もクロウに勝った事が無い。こぞという時は何度もあった筈だ。それなのに、彼は躊躇い、隙を作り、いつもクロウに剣を飛ばされる。

油断しているのか、遠慮しているのか、分からない。

だが、クロウは、その事を面白く思わなかった。

「いいか、手加減なしだからな」

「いいから始めようぜ」

カラカルが剣を軽く回して目を細めた。

ガラス玉のような光が、明るいけれども薄暗い空間で光る。クロウの闇を刺激する光だ。きっと、クロウの藍色の目は、闇が渦巻いているだろう。そして、それもまた、カラカルの光を刺激する闇なのだろう。

クロウは左手をぐっと握り、空気を横に切るように振った。同時に、黒霧の剣が握られる。この剣こそが、クロウの愛剣だった。体の核として存在する、闇から作られる霧状の剣。その剣を握りしめ、クロウはにじり寄った。カラカルも同時に動く。カラカルがふっと笑みながら、口を開いた。

「なあ、手加減無しってどの位だい？」

「どの位って？」

クロウは答えつつ、素早く闇の奥へと引っ込んだ。カラカルが斬り掛かってきた。随分と早い仕掛けだ。遊んでいるのだろうか。

「例えばさ、ほら、変身とか？」

「犬と狐の取っ組み合いが希望なのか？」

クロウは呆れつつも、カラカルとの距離を測った。カラカルも体制を立て直し、クロウへとにじり寄る。

「たまにはその姿でいないと、感覚を忘れちゃうだろ？」

「それじゃあ、打ち合いじゃないだろう？」

クロウはそう言いながら、闇の風のようにカラカルへと駆けた。カ

ラカルが剣を構える。その動きを読みながら、身を翻し、避けるように背後へと回る。そして、カラカルが振り返る前に、打ち込んだ。しかし、カラカルは瞬時に身を逸らし、剣を落とされないように持ち帰ると、クロウへと向き直る。

「おいおい、落ち着けよ。苛々し過ぎだぜ?」

「五月蠅い。黙って落とされろよな」

「まあ、待て。俺だって負けっぱなしじゃいられねえからね来る。」

クロウは身を屈めた。

その上をカラカルの剣が通る。

うまく避けられた。

だがその直後、クロウは背中に痛みを感じた。

クロウは苦笑しながら、藍色の目を背後に回ったらしいカラカルに向けた。

「変身については、まだ何も返答していなかったけれど?」

「あんたが言っただろ? 手加減無しだって」

カラカルの声で、狐が言う。クロウの背後には、銀妖狐がいた。

白い襟巻の、美しい毛皮。そのガラス玉のような目は、同じ。

クロウは背中を軽く払い、言った。

「確かに、本来の姿にも慣れておくべきだな」

クロウは笑みを浮かべた。

「何だ、お前の爪。まるでネズミじゃないか」

「酷ッ! 仮にも肉食獣だぜ?」

「悔しかったら飛び掛かってきなよ」

クロウは目を細め、闇に身を隠した。

狐姿のカラカルは身構えて、飛びだすようにその後を追う。

決して広い訳でもない闘技場。

だが、クロウもカラカルも、ここが異空間と繋がっているのでは、と感じる程に、互いを見つけては見逃し続けた。ヒトの姿で、はたまた、獣の姿で、互いに探り合い、互いに打ち合い、互いに躍り懸

る。

クロウは傷を負った。初めて、カラカルとの打ち合い——もう取っ組み合い以外の何ものでもないのだが——で、傷を負った。

それまでカラカルは何処か本気を出さなかった。クロウが勝ち続けていたのは、彼が本気を出さないからの他ならない。若しも彼が最初から本気を出していれば、勝敗は五分五分だろう。

百歩譲っても、カラカルが勝つ可能性が高いなどとは言わない。

飽く迄も、五分五分だ。

久々に、クロウは燃えた。彼に釣られて黒い犬の姿を晒し、狐を追う。まるで、キツネ狩りの猟犬の様に。実際、クロウはキツネ狩りの猟犬として駆り出される事もあるため、この打ち合いは狩りの練習に他ならなかった。カラカルはカラカルで、猟犬を惑わす罠にかける狐の様にクロウを誘い出し、いきなりヒト型になって襲いかかってくる。それが、不思議と面白かった。

そのまま騙し合い続けて、どのくらい経った頃か。

乾いた金属の音と共に、この打ち合いは終了した。

ヒト型のクロウが持つ黒霧の剣が、ヒト型のカラカルを持つ剣を打ち飛ばした。

互いに息を切らし、互いの青い目を見つめたまま、しばし時間が過ぎた。

一時間以上は経ったかもしれない。或いは、二時間だろうか。

クロウは汗を拭いながら、その場に座り込んだ。

ふと、カラカルが笑みを浮かべ、同じく座り込んで言った。

「また負けちまった」

息を吐きながら広場に寝転がり、カラカルは大声で笑った。

「だけど、次こそは負けねえからな」

「次こそは最初から本気出せよ」

クロウも呟くように言った。

そして空を見上げ、溜め息を吐く。

「そろそろ昼時だ。十五時までに何か食おう」

その夜、舞踏会は盛大に行われた。

集まるバザイ国の有力家たちの中には時折、クロウが出来るだけ関わりたくないような者もいた。気の良い者もいるにはいるが、そのすぐ傍には関わりたくない者もいる。国に仕える剣士になってよかったと思うのは、こういう時に警護側へと回れることだった。

会場の入口付近から中を見つめながら、クロウはつくづくそう思った。

苦手なのだ。

彼らの青い目に対する目が怖い。その血筋を殆ど上流階級に吸い取られていったジャスミン家の者でさえ、彼らは珍獣でもみるような物珍しそうな目で、或いは物欲しそうな目で、見つめるのだ。まるで、値踏みをしているかのように。

クロウは会場を見つめた。

そのジャスミン家の者も会場の奥に見受けられる。クロウとは遠縁の者たち。本家の者もいれば、その家の姫を貰ったバザイの有力家もいる。

——確か、ガナツシュ家だったか。

クロウはじつとその姿を見つめた。

年取ってもまだ端麗なその姫の名は、ラプリツアス。クロウの母のまた従姉に当たると聞いた事がある。バザイ人有力家のガナツシュ家の跡取り息子と結婚し、子どもも儲けた。その長男はズペルスへと留学しているらしい。

——ズペルスか。

クロウは溜め息を吐いた。

バザイと同じルチフェルが建てた王国ズペルス。其処は、最近急速な発展を遂げ始めているらしい。とはいえ、まだまだバザイに比べれば大したことはないのだが、武力ではなく、技術で発展してい

るというその国に、クロウは些か興味があつた。

——いつか何処でもいいから行ってみたいな。

「ぼさっとするな」

無愛想な声が聞こえ、クロウは横目で見やり、心の中で再び溜め息を吐いた。其処にはレイヴンがいる。最悪な事に、隊長の彼がいるとすぐ傍につく事になってしまった。あのお調子者のカラカルが恋しい。こんな気持ちが起こるなどとは、忌々しき事態だ。

「いつ何があるか分からないからな。特に、今は改国と名乗る輩の影が見え隠れしている。気を抜くんじゃない」

「分かってます」

クロウは静かに答えた。

改国。それは、バザイ国にとって思わしくない集団の名前だ。活動は地味だが、どうも捨てておけない存在として、見張られているような集団である。彼らはラビラ懐古派とも言われ、ラビラ王家に忠誠を誓い、嫌ケラヴァラ派と呼ばれる過激なケラヴァラ殲滅を掲げる集団と対立している。

どちらにせよ、クロウにとっては不気味な存在だった。

ふと、クロウはまた横を見やった。

レイヴンがじっと見つめてきている。

クロウはやや首を傾げ、その黄緑の目を見やった。

レイヴンはやや目を細め、クロウに呟くように言った。

「クロウ。お前、俺を避けているな？」

「何ですか？ いきなり」

クロウは冷静に返したが、内心冷や汗をかいた。知らず知らずのうちに態度に出してしまったのだろうか。それでなくとも、未だにレイヴンから匂う狼の気配が、クロウには我慢できなかったのは事実だ。

押し殺したつもりだったのだけど。

「隠さなくてもいい。犬であるお前には匂うのだろうな。気付いているだろうが、俺には狼の血が混ざっている」

あっさりと告白され、クロウは戸惑った。どう反応しろと言うのだ。

だがレイヴンは、反応など期待していないとでもいう様に会場を見つめ、苦笑交じりに続けた。

「勿論、ジャスミン家の方じゃない。バザイのある冒険家が、グレイ山脈を旅し、其処で出会った人狼の娘を貰って帰ったそうさ。俺はその血を強く引いている」

レイヴンの黄緑の目が薄らと光る。

狼の眼光に間違いない。

クロウはそう思った。

レイヴンはちらりとクロウを見やり、軽く笑んだ。

「そう硬くなるな。その様子だと、見切っていたようだな。あの狐も同じか？ まあ、どちらにせよ、心配せずとも俺はお前達を襲ったりはしない」

その表情は、朝の初対面や昼に顔合わせで会った時よりもは、親しみやすいものだった。クロウはふと気になった。その表情。何処かでみたような気がする。

クロウは首を傾げたまま、レイヴンを見つめた。

「何だ？」

短く彼に問われ、クロウは訊ねた。

「あの……前に何処かで会った事ありませんか？」

恐々と問うクロウをじっと見つめ、レイヴンはふっと鼻で笑った。

「さあね」

彼は腕を組み、クロウから目を離れた。

「アカデミーの若造を指導したことはあるがね」

——そう言われれば、そうだろうな。

クロウは思った。レイヴンの見た目はクロウやカラカルと変わらないように見えるが、バザイ人の事だ。様々な意味で、年齢など見た目で分らない。レイヴンが、まだ剣士として未熟者だったクロウを指導した事があったとしても、別段驚くことではないだろう。

きっと、そのためだろう。

クロウはそう思いつつ、会場へと目をやった。

其処で、ふと目に入る者がいた。

——あの富豪だ。

後ろ暗い噂の付いて回る富豪。最近目をつけられているバザイ人有力家。クロウの貴重な休暇が無残にも引き裂かれた根源がいる。

「チシャだな」

レイヴンが言った。

彼もあの富豪を見ているらしい。

チシャと呼ばれたその富豪は、さつきから喋りながら豪勢な料理を食べ続けている。

クロウはちらりとレイヴンを見やった。

「最近良くない噂の付いて回る者だったか。自分がマークされているとも知らず、暢気なものだ。ああはなりたくない者だな」

レイヴンの嘲る様な微笑みが、妙にクロウの目に焼きついた。

レイヴンはそんなクロウには目もくれず、ただじっと会場を見つめていた。

獵犬ト狐 其ノ参

獵犬ト狐 其ノ参

チシャは豚のようなバザイ人だ。というよりも、その本性が豚なのだ。山羊や猫系の多いバザイ人に、豚は珍しい。その為、チシャは何かしら目立っていた。特に他種族の血を濃く引く訳でもなさそうなのだが、とクロウは思ったのだが、どうやら、その遙か昔の祖先に雄猪の獣人がいるらしい。

獣人は本来、森で生きてこそ生き甲斐を感じるものだとかクロウは聞いていた。その一方、人間達は狩りと称し、獣人達を狩る。彼らの容姿、毛皮は美しく、その血肉は秘薬にもなるからだ。若しも人間に捕まれば、その獣人の未来は、奴隷にされるか、毛皮にされるかの双方である。だが、最近はまだ、昔ほどは酷くないらしく、公には奴隷でも家族同然に人間の元で暮らす獣人もいると言う。

そんな獣人達だが、彼らの中にも勿論成功者はいる。聡明な力を以て、人間社会で相当の地位を得た者も、数は少ないがいるのだ。チシャの祖先である雄猪は、その数少ない成功者だった。

詳しい事は分からないが、どうもその雄猪は奴隷として働いていたのだが、その雇い主に成功の助言を与えたとか、与えなかったとか。

——ああ、もうどうでもいいや。

クロウは大きく溜め息を吐いて、寝台に横たわっていた。

あの後、舞踏会は成功し、夜遅くまで続いた。成功と言っても、何を以て成功なのかクロウはいまいち分からないし、分かりたいわけでもない。やっと解放されてひと時の休憩を楽しんでいるのだが、何と舞踏会は今夜もあるらしい。

正直言って、もううんざりだ。

あの空気だけでも酔いそうだと言うのに。

今夜も確か、レイヴンの傍に配属されている。

——憂鬱だ……。

一刻も早くレイヴンの部下が回復し、カラカルと共にバークの元へと帰りたいのだが、時折、このままレイヴンの部下に定着してしまうのではないか、という不安が過る。

——駄目だ、考えてはいけない。

そう思いながら、クロウは寝返りを打った。

——思えば本当になるかもしれない。

それだけは嫌だ。人狼の部下になるなど、甚だ恐ろしい。若しも彼の機嫌を損ねれば、それこそその場で喰われてしまうだろう。

狼は侮れない。

そう思いながら、クロウはふと、思った。若しかしたら、バークを舐め過ぎていたかもしれない。その更生も兼ねて、今、レイヴンの元に配属されてしまったのなら……。

——反省訓練措置としては、随分な御親切じゃないか……。

自嘲気味にクロウは思った。きつと、これで、上官に素直に従うという事が身に叩きこまれるだろう。若しもそれが目的ならば、もう反省しているから、早く迎えに来て欲しい。

「クロウ？ 寝てるの？」

その時、カラカルの声がした。

クロウは返答しようとしたが、疲れていたのか声を出す気にならず、片手を軽く上げて答えた。カラカルが入って来た。山猫のようにそつと。狐だと言うのに、彼の事を見ていると山猫を思い出す。だから、カラカルと呼ばれているのだっただろうか。

クロウはちらりと振り返った。薄暗い部屋の中で、カラカルのガラス玉のような目が光っていた。まっすぐとクロウを見つめ、窺う様に近づいてくる。寝台から程よく離れた椅子に座り、彼はやや目を細めた。

「何か、用か？」

クロウが素っ気なく言うと、カラカルは小さく鼻で笑った。

「水臭いな。俺は何処に居てもあんたを守るって決めてんでね。傍に居させてもらうよ」

「そう」

クロウは一言だけ呟き、目を伏せた。何故だろう。ただの警護だったのに、体の底から疲れている。緊張の所為だろうか。どんな激しい任務の後の疲労よりも、回復が遅い様な気がする。

「おい、どうした？ 具合悪いのか？」

「何でもない。ちょっと疲れただけ……」

クロウは壁側へと向き直った。カラカルに心配かけたくなかった。背中に注がれるガラス玉の目線が、少し辛かった。

「あ、まさか、アレだったりして？」

「カラカル」

からかう様に軽快に笑うカラカルの声聞きながら、クロウは閉じかけていた目を開いた。どうしたら、このお喋り狐を黙らせる事が出来るだろうか。其処には既に、彼に心配をかけたくないという気持ちは消え去っていた。

「おい、チシャってどう思う？」

「へ？」と、カラカルは不意をつかれたように間の抜けた声を出すと、軽く濁し笑いをして、訊ね返した。

「チシャってあの怪しい富豪の？」

「ああ、昨日の舞踏会に来ていた」

そう言って、クロウは再び振り返った。

カラカルは肘を吐き、苦笑する。

「へえ、気付かなかった。マークされてんのに暢気な奴だねえ」

「レイヴンも同じこと言ってた。きっと今夜も来るだろうけれど、少し気が抜けないかも知れない」

昨夜レイヴンは、貴族達と共に豪華な料理を食べ続けるチシャを見つめながら、聞いてもいないと言うのに、様々な事をクロウに語ってきた。意外と噂好きなのだろうか。それとも、根拠のある話だ

ったのだろうか。

「気が抜けないって？」

「チシャが改国に狙われるかもしれないという話でね」

チシャの家は代々の富豪なのだが、その裏には関わらない方が良さそうな影が見え隠れする。その財閥は何処から見てもとくに傾き切っているというのに、チシャの贅沢ぶりは傾いているように見えないのだ。この事は、何か不合理な財力独占の疑いが強いとして、見えざる所で改国の連中が蠢いており、チシャ本人にも脅迫文染みた手紙が届くというような事をレイヴンが言っていたような気がする。

「改国に疑われているというのは、どんな事だろう？」

ふうん、とカラカルは考え込み、頬杖を吐いた。

「密輸、賄賂、脱税、詐欺……」

呟きながら、彼は腕を組んだ。

「まあ、あまり関わりたくないようなおっかない事だろうねえ。……てか、どうしたんだい？ あんた、富豪の話は興味無かっただろ？」

クロウは起き上がり頷いた。だが、体を起こすには少し早かったようだ。なんだかくらくらする。

「昨日ずっとレイヴンが言っていたものだから、何だか気になってね」

「レイヴン？ 確か、あの富豪の件は、俺達の所属する第一部隊の管轄だろう？」

カラカルが不思議そうに言った。

そうなのだ。彼の言うとおり、チシャの好からぬ動きについては、クロウとカラカルが配属される第一部隊から成るチームが調べている。とは言っても、クロウもカラカルも元々からそのチームに入っていないのだが、レイヴン隊長率いる第二部隊には、全く関係ないことである。尤も、現状として、その第二部隊に臨時配属されたクロウもカラカルも、更にその件から遠ざかったしまった事も確かだ。「チシャの事が気に喰わないと言った感じだね」

「そういや、あんた、昨日はレイヴン隊長殿とずうっと一緒だったもんなあ」

相変わらず茶化すように笑うカラカルに、クロウは疲れてきた。だが、何も返さずにただ溜め息だけを吐くと、流石に彼も空気を呼んだのか、短く「ごめん」と詫びて、続けた。

「まあ、レイヴンが言うんなら彼なりに見当はあるんじゃない？」

まあ、管轄外だから全部単なる戯言なんだろうけど。それよりもさ、あんた今日もレイヴンの傍じゃなかったっけ？ 若しかして、レイヴンの隊に引き抜かれたりしてねえ」

「冗談じゃない」

クロウは吐き捨てるように言った。終わりがあから我慢できると言うのに、この先ずっとレイヴンの隊に入れられるなど、考えるだけで地獄だ。

「それぐらいなら、潔く騎士名を返上するね」

「脱兵は犯罪だぜ？」

囁くように言うカラカルを、クロウはふと見つめた。さっきと変わらない、にやけるような目付き。だが、その奥に、違う心が垣間見える。

「誰の受け売りだ？ バザルライか？」

くすりと笑うクロウに、カラカルは顔色を変えて声を顰めた。

「口を慎めよ。陛下って呼べ、陛下って」

「平気さ。そのくらいで私を罰するなら、既に私はこの世にいないよ」

「そりゃ、あんたの口の悪さは陛下もご存じだろうけどさ、何処で誰が聞いているかも分かんねえんだから、気をつけろって」

「分かったよ」

クロウは笑みを堪えつつ、肩に掛かる髪を払って窓の外を見やった。

そろそろ夜が明ける頃だ。

「忠義心が無いわけじゃないんだ」

クロウは呟いた。

幼い頃から入れられた騎士養成アカデミー。其処で修業に専念しつつも、たった一人の身寄りであった祖母を失った後。今のクロウが在るのは、他ならぬ皇帝バザルライの恩恵があったからに過ぎない。彼は未だに悔やんでいるらしい。この地を制覇した後、ラビラ七王家のうちの三つが途絶えた。それを悔やんでいるらしい。

若しも彼の恩恵がなければ、クロウは生きていないか、全く別の、傀儡のような人生を送っていただろう。

薄明かりが射してきた部屋で、カラカルが見つめてくる。

クロウはその顔を横目で見つめ、寝台から降りた。眩みは取れた。一体何だったのだろう。クロウはふと疑問に思いながらも、カラカルの横を通り過ぎ、扉に手を掛けた。

「何処行くんだよ？」

当然、カラカルが慌てたように訊いてくる。

クロウは一旦立ち止まり、静かに言った。

「ちょっと外の空気を吸うだけ。カラカルは休めば？」

カラカルが返答するより先に、クロウは部屋を抜け、扉を閉めた。日が昇ったばかり。

クロウの部屋の廊下はしんとしている。足音も気配もないその場所。クロウはやや耳を澄ませてみた。予想通り、無音が耳を突いてくる。その感覚の中で、再び、眩みの様なものを感じた。

「大丈夫？ 何っーか、やっぱり休んだ方がいいんじゃない？」

カラカルにそう問われたのは、昼の事だった。

あの後から、ずっと、眩みのようなものが纏わりついている。心成しか、日が昇るごとに酷くなってきている気がした。とうとう隠しきれなくなつて、カラカルに付き添われて医務室へと向かったが、特に異常はないらしい。

「酒飲んだ？」そう、あっけらかんと医者に言われ、クロウは少し腹が立ったのだが、怒る気力もなかった。「任務中に飲むわけないだろ」と言いたい気持ちを必死に押し込めて薬を求め、取り敢えず、と貰って来たのだが、それが、まあ、何とも、効かない。

「今日は休めて。昼の顔合わせで言っというてやるから」

そうカラカルに説得されている此処は、廊下だ。医務室から部屋へと戻る途中で、眩みが酷くなったのだ。何だか朝よりも酷い。薬の所為だろうか。

——くそう、積まされた……。

薬は高かった。何が原料かは知らないが、とても高価な有難いものだったらしい。だが、幾ら高くても、幾ら原料が良くても、効かなければ意味がない。況してや酷くなるなんて。積まされたと思ってもいいはずだ。

カラカルに心配をかけてしまうが、その受け答えに構っていられなかった。

「お前ら、何をしてる？」

そんな時、廊下の向こうから声が掛かってきた。

カラカルも、やや朦朧としていたクロウも、そちらを見やると身を竦めた。何故よりによってこんな時に彼に会ってしまうのだろう。クロウはそう思ったが、カラカルは丁度良かったと踏んだらしく、彼の名を呼んだ。

「レイヴン隊長」

「よせて……」

小声で言ったがもう遅かった。レイヴンは瞬く間に近寄り、クロウの前に屈みこんだ。

「おい、どうした？　しっかりしろ」

余り心配していなさそうな声に聞こえるのは気の所為だろうか。

覗き込んでくるレイヴンの黄緑の目線から、クロウは目を逸らした。

「平気です」

「おい」

空かさずカラカルが顔を顰め、彼はレイヴンに向かって説明した。「何だか、立ち眩みが治まらないらしくて……。原因も分らなけりや、薬も効かなくて、今、部屋に連れて行こうと思ってたところなんですよ」

レイヴンはカラカルを見つめながら静かに聞いている。その表情からは何も読み取れない。ただ人狼の匂いが、彼から漂ってくる。上手く言えないが、不安メーカーのような男だ。と、クロウは感じた。

ちらりとその黄緑の目が、クロウを再び捉えた。

「これは病じゃないな」

黄緑の視線が、瞳を覗き込んでくる。

「蟲が憑いている。お前、有害な蟲のいる物を口にしたのだ」

「蟲……？」

蟲とは、魔物のような生き物の一種だった。塵のように見えないその姿を、普段認識するのは難しく、魔術師でもない限りは忘れている者が大半だ。無論、応用的な魔術に疎いクロウやカラカルも、蟲の存在など深く気にした事もなかった。だが、彼らがこの世でもっとも多い生き物であり、その種類によっては害を引き起こすという事実は知っていた。

「薬だって？ この医者には相当な藪だな」

レイヴンは呆れたように言う、クロウの額に手を置いた。暖かい闇の気配が、額にじわりと染み込んでくる。その感覚が頭全体を包み込んだ直後、痺れが駆け巡った。頭から手足にかけて、電流でも走っているかの様。だが、それも束の間、痺れは消え、クロウはふと目を開いた。

——眩みが消えた？

「薬の所為かは分かんが、蟲は死んでたよ。死骸を除去してやった」

レイヴンが言った。額から手を退け、何事もなかったかのように立ち上がる。

「昨日、何か飲んだのか？ それとも、魔術師と喧嘩でもしたか？」

「記憶にないな」

クロウはぼんやりと地面を見ながら言った。何か変わった物を飲食しただろうか。記憶を起こす限りでは、特に思いつかない。魔術師と喧嘩するような暇も昨日は無かった。

「そうなのか？ 昨日の昼から随分と擦り傷だらけのようだが……」

「あ、それは……」

カラカルが気まずそうに言いかけたのだが、怪訝そうに窺うレイヴンの目線に、次の句が継げなくなった。クロウは溜め息を吐いて、代わりにそれを継いだ。

「カラカルと稽古してただけです。兎も角、魔術師の恨みを買う覚えはありません」

ふうん、とレイヴンは軽く流した。納得しているのか、していないのかは謎だが、これ以上原因について探る気はなさそうだ。そのクロウの読み通り、レイヴンはそれ以上何も問わず、右手をぐっと握りしめていた手を軽く払う様に離れた。途端、彼の手からは黒い砂の様なものが舞い落ち、クロウとカラカルの前で消えていった。

——蟲だ。

クロウの中にいた、蟲の死骸。死骸だけでも取り出せなければ、もっと酷い目にあって居たかも知れない。そう思うと、先ほどの眩みがぶり返してきそうだった。

とりあえず、礼を言っておいた方が良さそうだ。

「蟲はもう居ない。これで具合は良くなっただろう？ 今夜の舞踏会までに体調を整えとけ。お前等でも居ないよりはましだからな」

無愛想にレイヴンは言い捨て、去っていった。昨夜感じた親しみやすさなど皆無だ。クロウとカラカルの見つめる中で、レイヴンは真っ直ぐ続く廊下を進んでいく。その背を見ると、礼を言う気にもならなくなった。

「良く分からない奴だねえ」

カラカルが言った。

クロウは肯きつつ、立ち上がった。少しふらついたものの、もう酷い眩みはない。やはり蟲だったのだ。目の前で消えていったあの蟲の所為だったのだろう。

「なあ、この蟲の事、本当に心当たりないの？」

カラカルが声を顰めて訊ねてきた。

クロウは息を吐いた。

ない、と言えば嘘になる。魔術師との喧嘩は本当に身に覚えがないが、早くクロウに消えて欲しいと思っている人間は沢山いる。青い目を毛嫌いする嫌ケラヴァラ派の重鎮を筆頭に、財産目当て、不正告訴の逆恨みから、単なる私怨、羨望、勝手な妄想など、迷惑極まりない因縁をつけてくる者もいる。また、皇帝や執事——その執事の孫娘である武将等——から、恩恵を受けている事も既に露見しているため、宜しく思われていない場合も多々ある。実際に、命にかかわる様な罫を掛けられた事も無い訳では無いのだ。

——洗い出したら限がないとはよく言ったものだ。

カラカルは少しクロウの様子を見つめると、何か察したのかそれ以上は問わずに、レイヴンの消えた方向を見つめて、呟く様に言った。

「それにしても、あいつ、別に俺たちみたいなのが嫌いって訳じゃないようだな」

「分からないぞ。いざとなったら真っ先に切り捨てられるかも」

「おいおい、まさかそんな訳ないだろ。疑い深いなあ」

カラカルが苦笑する。さりげなく伸ばされる手を押し返し、クロウは廊下を歩きはじめた。原因の蟲が去れば、こうも早く治ってしまうものなのだろうか。兎も角、クロウは歩くのに不自由を感じなかった。

「まあ、感謝はしてる。言いそびれたけど。案外いい奴なのかもね」

「可愛くない奴。本当は惚れちゃったんじゃない？」

「趣味の悪い冗談止めてくれる？」

任務目的が若干変わったのは、その夜だった。

全ては、昨夜の舞踏会の後、チシヤが好からぬ会合を行い、今夜もその会合が開かれるという垂れ込みからだった。より確実に尻尾を掴む為に、第二部隊の任務は単なる警護から、第一部隊の補佐つまり、チシヤ監視へと変わった。昨夜と同じく、チシヤが舞踏会へ来る可能性もある以上、誰かが舞踏会場で目を光らせなければならぬ。

単なる警護は第三部隊へと引き継がれ、クロウやカラカルを含めた第二部隊の一部は、チシヤが訪れていないかの見張りとなった。レイヴンと第二部隊の他の者達は、昨夜会合が行われたというチシヤの豪邸の見張り、及び、バーク率いる第一部隊と共に、付近調査を行い、チシヤとの会合相手とその目的を探っている。

舞踏会は、昨日と同じように派手に行われている。

享樂的なその空気が、昨夜とは全く違う苛立ちを生み出してくる。何も考えずに警護していた昨日はすぐに見つかったチシヤだが、今日は中々見つからない。参加していない訳でもなさそうだ。度々鉢合わせになる仲間からは、見かけたがすぐに人ごみに飲まれてしまう、との声も聞く。粗方、この会場にて会合相手と落ち合うといった所だろう。ここにいるのならば、何としても見つけ出して、去ってしまう前にマークしなければならない。

クロウは見渡した。派手な舞踏会にふさわしく、昨夜と変わらず会場は参加者でごった返している。しかし、少しくらいチシヤの姿が見えたっていいだろうに、今日、クロウはまだ一回もチシヤを見ていない。見たけれども見逃したという仲間の声を聞けば聞くほど、クロウは焦った。誰か一人でも、チシヤをマーク出来ればいいのだが。

と、その時、傍にいたカラカルがクロウの肩を叩いた。

無言で指をさすその先。

楽団の傍の席。

バザイ人貴族と酒を飲み交わす男。

チシャ。

移動した。

クロウとカラカルはすぐに追った。注目している事を悟られないように。距離を取りつつチシャの姿を追う。彼が声をかける者。彼に声をかける者。一人一人じっくりと吟味する。だが、チシャはその内の誰とも一頻り話し、笑顔で別れる。その誰もが、チシャと行動する兆しがない。

「あ、まずい……」

カラカルが思わず小さな声を上げた。

クロウは素早く横目でカラカルを見た。

「何だ、どうした？」

「もう直ぐ会場が暗転すんだよ。魔術を使った演出による舞踊」

クロウは慌てた。

チシャは何処にいるだろう。会場が暗転した直後に抜け出されたら非常に困る。

クロウは会場内を見渡した。

もう時間がない。光と闇を駆使する二人の奇術師が、頭を下げる。楽団の演奏が変わる。時間がない。五、四、三、二、一……。

会場が暗くなった。

——チシャは？

序曲が演奏される中で、クロウは目を光らせた。最後にチシャを見た位置。いるだろうか。いないだろうか。沢山の人の匂い。沢山の人の気配で分らない。チシャの居た位置は如何になっているのか。遠すぎて犬の目では分らない。

「カラカル？」

「悪い、見えない」

クロウはふと考え、カラカルを引っ張って会場の入口へと抜けた。若しもチシャが抜け出すのならば、入口で見張っていた方が良さそ

うだ。そう思ったのだ。だが、入口を抜けた時、会館の扉の向こうで、馬車が走っていくのが見えた。

——まさか……。

違う事を祈りたい。

「クロウ、カラカル？」

不意に小さく声を掛けられた。

見ればそれは、第二部隊員の者達だった。彼らはクロウ達を外へと誘いながら、早口且つ押し殺した声で告げた。

「チシャが馬車で抜けた。間に合わなかったが、四名ほどすぐさま追っていった。内、二人は馬だ。かなりの駿馬だから上手く追えるだろう」

「我々は？」

クロウが空かさず問うと、隊員達は「勿論」と呆れたように言った。

「彼らを追うぞ。ここは第三部隊に任せて去ろう。先に行った仲間の匂いを追え。他の犬も同じだ」

クロウは苦笑し、カラカルをちらりと見やった。

「鼻はいいんだよな？」

その問いに、カラカルは笑みを返した。

「当たり前だ。上手くサポートしてやるぜ」

他の隊員と共に扉を抜けたと同時に、カラカルの姿が狐へと変わる。

クロウも体の力を抜いた。

手が前脚になり、足が後ろ脚になる。四肢を伸ばし、地面を蹴り、すぐさま仲間の匂いを探る。とほぼ同時に、別の犬が匂いを探り当たった。

クロウとカラカルは、急いでそちらへと向かう。探り当てたのは、一頭のボルゾイ犬隊員。彼は見つけ出した途端、猛進的に走り去ってしまった。

「ちょ、ちょっと、嘘だろ」

カラカルが絶望視する中で、ボルゾイの背は遠くなる。

「追いつけるのかな？」

「匂いがあるだろ」

クロウは呆れ気味に言い、ボルゾイの背を追った。

獵犬ト狐 其ノ肆

獵犬ト狐 其ノ肆

暫く走った後、既に見えなくなっていたボルゾイが、立ち止まっているのが見えた。追いついたクロウとカラカルに気付くと、ボルゾイはヒトの姿に変わり、言った。

「匂いが途切れている。この先、獣姿でいても意味がないぞ」

そう言われ、クロウもカラカルも顔を見合わせ、獣姿を解いた。

其処は、町へと向かう遊歩道の一部である林の中。真っ直ぐ町へ行ったと思う方が自然だが、別れ道もあり、町外れの何処かに行った可能性も否めない。

「他の者は？」

ボルゾイだった隊員の男が、ぼそりと訊ねる。

クロウは振り返った。すぐに追いつくとは思うが、姿も見えない。なかなか足の遅い者たちのようだ。

「そのうち来るんじゃないですかねえ？」

カラカルが言い、ボルゾイだった男が溜め息を吐いた時、ふとクロウは気付いた。追い掛けて来ている仲間とは違う匂いがする。はっと気付き、そちらを見やった。ボルゾイの男も同じく気付き、その方向を見つめる。カラカルだけが、不思議そうにクロウ達の見つめる方向に目線を合わせた。

クロウは目を凝らした。

林の木々の影に、誰かいる。

匂いが教えてくれるその者。

「レイヴン隊長？」

「お前達か」

影が答える。

ボルゾイの男が首を傾げてレイヴンの影を見つめた。

「隊長、ここで何をしているのです？」

影が一步踏み出した。確かにレイヴン隊長で間違いなかった。二、三人程の手連れと共に、彼はクロウ達を見つめていた。

「お前たちこそ遅い。何をもたもたしている。チシヤはとっくに屋敷に戻っているぞ？」

「隊長は？」

クロウが短く問うと、レイヴンはうんざりとしたように自身の背後を差した。

「また垂れ込みがあつてな。この先の館にチシヤとの会合相手が潜んでいるらしい。今宵の会合には、チシヤはそちらへと向かうらしい。お前達は早くチシヤの屋敷へと行き、チシヤが動き出したら確保しろ。俺達はその会合相手とやらを探しに行く」

「分かりました。チシヤの屋敷ですね」

ボルゾイの男が頷き、クロウ達共々走りだそうとした時、レイヴンが付け加えた。

「待て」

慌てて立ち止まって振り返ると、レイヴンは表情なく言った。

「こちらには俺以外に鼻に秀でた者がいなくて困ってる。一人こちらにつけ」

三人は見合わせた。確かに、レイヴンの連れている者は、嗅覚の優れている者ではなさそうだ。今の時点で、レイヴンのみが匂いを感知し、指示を送っているのだろう。

「分かりました。では、私が」

ボルゾイの男が言ったが、レイヴンは首を振った。

「いや、お前はカラカルと屋敷へと向かい、バーク隊長にこの事を伝えろ。彼らはまだこちらの事を知らないようだ。クロウ、こっちへつけ」

「はい」

クロウは素早くレイヴンの元へと向かった。彼の元は嫌だなどと

駄々を捏ねている場合ではない。それに、昼間の蟲の一件から、少しは彼に慣れてきた。彼についている者達も、既に幾らか会話した者たちだ。

「よし、行け。こっちは任せろ」

レイヴンの号令と共に、ボルゾイの男とカラカルは町へと駆けて行った。ボルゾイの足についていければいいのだが、とふとクロウは心配になった。

「俺達はこっちだ。行くぞ」

レイヴンに唸るように言われ、クロウは慌てて彼について行った。暗がりの中の林。その先の館と言えば、確か主を持たない城だった気がする。クロウは考えていた。其処には数多くの逸話があり、奇跡を呼ぶ館だとか、はたまた、呪われている館だとか言われている。噂で流れているのは、圧倒的に後者の方が多く、その為に近寄る者も余りいない。

——怪しげな会合場所としてはうってつけだ。

もしかしたら、クロウ達が張り込んでいるのがばれたのだろうか。だが、チシャさえ押さえられれば、例えば会合相手に振り切られたとしても、口は割れるだろう。無論、レイヴンがついている限り、会合相手が逃げられるわけもないが。

クロウはレイヴン達と共に、忍び足で館へと向かった。

遊歩道から然程離れていないその館。

見えてきた。

あの奥だ。

「会合相手とはどんな奴なんでしょうね」

クロウが押し殺した声で言うと、二人の隊員が、ちらりとクロウを見つめた。レイヴンは無表情のまま歩き、ぼそりと答える。

「狡猾な男だろう。チシャを言葉巧みに操り、己の私腹を肥やすような詐欺師。利益の為なら手段を選ばないような腐った男だろう」

「何か心辺りでも？」

クロウが訝しんで問うと、レイヴンはやっと目を細めた。

「いや、単なる妄想だ。実際はもっと意外な奴かもしれない。兎も角、誰が相手かは分からない気を緩めるな」

レイヴンが低く唸った時、クロウ達はやっと、館のすぐ近くへと抜けだした。

ヒト型へと姿を変えた後も、ボルゾイの足は速かった。だが、カラカルは懸命にそれを追った。チシャはとくに屋敷へ帰ったという。もう動きだしただろうか。張り込んでいる第一部隊の者達は、もう踏み込んではいないだろうか。抵抗甚だしいチシャを殺してはいないだろうか。否、幾らなんでも優秀な彼らがそんなへましていないだろう。そう信じたいのだが、妙に不安だった。

「おい、狐、遅いぞ。早く来い」

ボルゾイの男に言われ、カラカルは必死に走った。

足には自信があった。幼い頃から逃げ脚だけは早く、その様子が警戒してすぐに逃げる山猫に似ていると言う事で、本当の名前であるニングルよりも、山猫の種族名であるカラカルと呼ばれる事の方が多かった。

それなのに、この差は何だろう。何時だったか、町で酔い歩いていた折、何の経緯でか、道すがら出会った狩猟豹とか言う山猫と思われる他民族の女と短距離勝負をしたのだが、その時は信じられないくらいの惨敗だった。酔いも醒める程だ。

その時程ではないが、その時を思い出す。

「見えてきたぞ。町だ」

ボルゾイの男が言った。

——やっとか。

カラカルは思った。早いところチシャを確保して、クロウ達の援護に行きたい、と言うのが本音だった。

カラカルはあのいつかの狩猟豹になった気持ちで走った。

チシャの屋敷は確か、遊歩道からそう遠くはない。此処まで来れば、カラカルでもすぐに行ける。

「先に行け」

カラカルはボルゾイの男に言った。

「すぐに追いつくから」

ボルゾイの男は頷き、瞬間に駆け抜けて行った。いつか彼とかの狩猟豹の女との短距離勝負も見てみたいものだ。そう思いつつ、カラカルは既に小さくなっているボルゾイの男の背を見ながら、急いで屋敷へと向かった。

館はしんとしていた。人氣が全くない。だが、所々明かりが点いており、明らかに使われていた痕跡も残っている。

大階段の広間。レイヴンの命で、隊員の一人とその右側へと忍び込み、一部屋ずつ確認する。まずは大広間に出た。宴会などがあれば、此処を解放するのだろう。きっと左側は食堂だったに違いない。クロウは一人考えながら隊員と共に忍び足で進んだ。人がいた痕跡がある。だが、もう居ないようだ。チシャを待っていたのだろうか。煙草を吹かした跡。匂い。その煙草の匂いの所為で、当人の匂いが打ち消されている。

一体どんな者が潜んでいるのだろう。

クロウは隊員と共に大広間を抜け、木の扉をそっと開けた。少々小さめの厨房。第二厨房だろうか。否、その前の一部の小部屋に過ぎない。横の扉を開けたら、もっと広い厨房があった。きっと、左側の部屋と繋がっているのだ。右も左も使う時に役に立つ作りだ。此処が活気付いていた時は、左だけでなく、右の大広間もよく使われていたのだろう。大きな厨房を見つめ、クロウは目を凝らす。奥に微かな光が見える。左へ行ったレイヴン達だろうか。

「居ないようだな」

そう言ったのは、クロウと共にいる隊員だった。

クロウは見渡した。人がいれば、その吐息や気配、匂いで分かるものだ。況してや煙草を吹かした後だったら、クロウにはすぐに分かるだろう。だが、仲間の彼の言うとおりに、此処には誰も居ない。奥の光も、左側の部屋からの光だ。

クロウは仲間と共に、広い厨房を出て扉を閉めた。小部屋を抜け、再び大広間に出る。ふと、その横に、もう一つ扉があるのに気付いた。開けてみて、クロウは納得する。化粧室への廊下だ。何気なく、厨房に継ぐ小部屋とも繋がっている。厨房側の化粧室を開けてみるが、無論、誰が潜んでいる様子もない。そのまま扉を閉め、クロウは隊員と共に、廊下を進んだ。行きつく先は分かっている。

先ほどの、大階段の広間。

ほぼ同じくらいに、レイヴン達も辿り着いた。

クロウと共にいた隊員が真っ先に小声で言った。

「居ませんでした」

「こちらもだ」

レイヴンは眉を顰め、ふと階段を見やった。

「……という事は、二階かな？」

「探りますか？」

クロウが訊ねると、レイヴンは軽く顎を掻いて、自分の部下二人に言った。

「お前達はここで待機しろ。怪しい奴がいはいか見張れ」

二人の隊員は素早く頷いた。

レイヴンはそのままクロウへと目をやった。

クロウが頷くと、やや目を細めて再び階段を見上げた。

「行くぞ」

カラカルが追いついた時、ボルゾイの男が既に報告を終えていた。

チシヤはまだ動きだしてないらしい。

屋敷の中で、寛いでいるのだろうか。

カラカルが辿り着いて暫く、大分遅れて舞踏会場に張り込んだ他の仲間もやって来たが、まだチシヤは動きだしてはいなかった。

「おいおい、本当に動くんだろうな？」

第一部隊の仲間がぼそりと愚痴った。直ぐに動く気配は無さそうだ。せめて、屋敷の中まで踏み込めるような証拠が欲しい。此処が片付けられれば、直ぐにクロウの元へと援助に行けるのに。そうカラカルは思い始めていた。

まさにその時だった。

バーク隊長の元へと蝙蝠の知らせが飛んできた。彼も第一部隊の隊員。別ルートでチシヤの身边を洗っていた男だ。その男がバークに何やら耳打ちをする。途端、バークの顔色が変わった。待機している全体に、目を配り、彼は押し殺した声で告げる。

「今すぐに殴りこめる情報が入った。チシヤに密輸の疑いが上がった。花の世界の芥子の子どもだ。誘拐の疑いもある。直ぐに踏み込むぞ」

花の世界とは、植物であるマンドゴリアを中心に虫人インセラ、蟲や、はたまた海中の人であるアクエリアス達の住む世界である。人間や獣人、或いは天使や堕天使と称される天翔人、赤い特殊な目を持ち悪魔と呼ばれるポエニシー人等とは一線を引いた世界であり、うち、一番近くに居られるのは獣人、一番遠くにしか居られないのが人間だと言われている。花の世界の者たちの人間社会での扱いは、国を持たない獣人のそれと似ているが、そもそも住む世界が違う。獣人程酷くはない——とはいえ、獣人は獣人でも国を持つ獣人ならばそれ相応な待遇を受けるのだが——為、花の世界の者達の殆どは、余り注意せずに人間社会の傍へと現れる事も多いのだ。

芥子の子ども。

可能ならば、花の世界に行き、その大人たちに自分たちの置かれている危機をよく知ってもらいたいとカラカルは思う。そして、子

ども達にもそれを伝えて欲しい。度々起こる花の世界からの略取の被害者が、芥子の一族なのだ。無論、他にも沢山の一族が被害にあうのだが、芥子は見逃されやすいのか、その中でも群を抜いて多いという。

彼らは金になるのだ。麻薬として。高値で取引される。取引材料は、子どもが多い。まだ果実をつけていない子ども。果実をつける前に連れ去られ、誰にも気付かれぬ場所で成長し、阿片等の材料になる。

「チシャの確保及び、芥子の子どもの保護だ。急げ！」
バーク隊長が吠えた。

もう深夜だと言うのに。

だが、たじろいでいる場合ではない。急がなければ。

カラカルは周りの者達とほぼ同時に動き出した。真っ直ぐチシャの屋敷へと向かい、踏み込む。屋敷の者が驚愕する。彼らが気付いていないわけがない。怯えて叫ぶ芥子の子どもの声に気付いていないわけがない。

「チシャ。本名、チ・シャ・ルレット。麻薬密輸、及び、誘拐罪の疑いで詮議に掛ける。穏便にご同行願うと同時に、家宅搜索にご協力願おうか」

第一部隊の副隊長が屋敷内で叫んだ。

血相を変えてうろたえる者達を余所に、合図が下った。

蝙蝠の隊員が裏を取った。この屋敷の何処かにいる芥子の子どもが見つかれば、もうチシャに釈然の余地はない。隊員が一斉に散る。カラカルも素早く合図を受け、二階へと上がった。広い屋敷。広い豪邸。企業は落ち目だと言うのに、その富豪振りは代々変わらないらしい。その金は、何処から現れているか、もう答えは見えたも同然だ。

声が上がった。

チシャ本人が見つかったらしい。

カラカルはすぐにそちらへと向かった。

チシヤは一人、プライベートルームで暢気に茶を啜っていたらしい。今は怯えて部屋の中で縮こまり、取り囲む隊員達を見上げている。

第一部隊の副隊長が、チシヤを覗き込んだ。

「チシヤ。本名、チ・シヤ・ルレットだな？」

ぶんぶんと首を振って、チシヤは肯定する。その怯え様は余りにも見つとも無い。

「麻薬密輸及び、誘拐罪の疑いで詮議に掛ける。ご同行願おうか」
冷たく言い放つ副隊長に、チシヤは必死に手を上げた。

「ま、ままま、待ってくれ！ 私は何もやってない！ 大体、証拠は？ 証拠はないだろう？」

焦りつつも妙に目を細めるチシヤに、副隊長は面倒臭げに「おい」と他の隊員に呼びかける。呼びかけられた隊員が頷いて廊下へと出た瞬間、屋敷を詮索していた別の隊員が、彼らに耳打ちをし、何かを手渡して去っていった。退出しようとしていた隊員は、渡された袋を掲げ、大声で報告した。

「二階、北東の書庫の一角で、これが見つかったようです。さらに、三階、西の隅で隠し扉を発見。数名が潜入中です」

これを聞いて、青ざめたのが、チシヤ。彼は目を真丸くして、歯をがちがちと言わせた。手をわなわなと振り、恐ろしげに取り囲む兵士を見上げる。

副隊長は目を細め、彼に言った。

「どうだい、優秀だろう？ これが先陣というものでね」

「せんじん……」

その名前を聞き、チシヤは更に震えあがった。

彼の中で何かが弾けたらしい。喚き散らしながら床に伏せ、ひたすら謝り出す。カラカルはそれを見つめながら思った。

——こうはなりたくないな……。

そして、チシヤは少し落ち着いたのか、再び自分を取り囲む者達を見上げると、手を合わせながら乞い始めた。

「お願いします。何でも話します。だから……階級だけは……階級だけは剥奪しないでくれ……頼む……」

「それは詮議の場で乞うんだね」

隊員の一人が鼻で笑った。

副隊長はチシャに目線を合わせた。

「それは、今言った罪を認めると取ってもいいのだな？」

チシャは壊れたばね人形のように何度も頷いた。

副隊長はふと眉を緩め、更に訊ねた。

「それでは、もう一つ訊くがいいか？」

「はい、何なりと」

「夜な夜な行われていた会合は、この麻薬密輸に関わることか？」

チシャはやや口籠った。

だが、副隊長の「どうなんだ？」という凄みにすぐに負けた様子で、彼は狼狽しつつもしつかりと答えた。

「そ、そその通りです。麻薬精製の為の芥子の子どもを格安で買える伝手を、仲買役のある男を通して紹介してもらっていました」

チシャの言葉の最後は、力なく床に落ちた。あれ程うろたえていたのが嘘のように、彼は段々と虚ろになっていく。腑抜けのようになっってしまった。

副隊長は凄みを利かせたまま、チシャを問いただした。

「それで？ その仲買の男の名前は？」

チシャはぶるっと一瞬だけ身震いし、完全に力を無くした表情で、取り囲む者達を見上げた。そして、口内に溢れているだろう唾を飲み込むと、ゆっくりと、噛み締めるように、吐き捨てるように、告白した。

「ダクネス・フィリアチュア・レイヴァリン」

ダクネス・フィリアチュア・レイヴァリン。

カラカルはその名前を反復し、反復し、反復して、目を見開いた。途端に冷や汗が噴き出る。今何と言った。この男は何と言っただろうか。誰と会合していたと言っただろうか。誰が仲買だと言っただ

ろうか。

副隊長のみならず、その場にいた隊員達が狼狽える。皆、動揺を隠せなかった。副隊長がはっと我に返り、カラカルに問いかけた。

「クロウは何処にいるって？」

カラカルはその問いに答えなかった。答える間もなく、足が動いていた。部屋を飛び出し、階段を駆けおり、誰が何を言っているのかも聞こえない。問われても答えられない。

ダクネス・フィリアチュア・レイヴァリン。

その男、通称レイヴン。

第二部隊長及び、バザイの混血貴族のエリート。

——会合相手が潜んでいるだって？

カラカルは走り続けた。

途中、何度か呼び止められたかも知れない。だが、構っている暇などなかった。

——会合相手が潜んでいるだって？

レイヴンの出まかせだ。傍にいた二人もきっと、共謀者だ。垂れ込みを聞き、チシャが長くない事、己の悪事が露見すること察したのだ。

——そして、クロウを連れて行った。

人質だ。

クロウが皇帝の恩恵を受けている事を知っての、バルサミコ家の最後の者を見離せば、どんな事になるか、今のバザイ国の世が、どのような危険を孕んでいるのか、重々分かっての人質だ。

レイヴンを咎めれば、クロウは死ぬ。クロウが死ねば、如何なるだろう。今のバザイ国は、嫌ケラヴァラ派のみならず、ラビラ懐古派の改国の影がちらついている。バルサミコ家の最後の者を国が見離した。改国は、そう取るだろう。そうなれば、どうなる。嫌ケラヴァラ派と改国がぶつかり、内乱が起きやしないか。

きっとバザライ皇帝ならば、そう心配するだろう。因って、レイヴンを嚴重処分から救い、クロウの命を守る。そう、クロウが助

かる可能性の方が高いのだ。

だが、その後はどうなるのだ。

クロウには知られてはいけない事があるというのに。

特に、レイヴンのような野心を抱きかねない者には、知られてはいけない。若しも知られれば、彼は更にクロウを利用しようと企むだろう。

――間に合ってくれ。

カラカルは闇を駆けた。

一匹の狐となって。

獵犬ト狐 其ノ伍

獵犬ト狐 其ノ伍

二階の右側の部屋にはやはり誰もいなかった。

最奥部の客間にも、人が潜んでいた後しかない。

それらには必ず煙草の跡がある。癖で吸っていると言うよりも、匂いや気配の特定を誤魔化す為に吸っているようにも思える。誰かが探ってくる可能性を考えてのものだろうか。だとすれば、最後の可能性を除けば、ここにすでに此処には居ない可能性も生まれる。クロウは息を吐いた。つまり、左だ。レイヴンが向かった先。其処にいなければ、もう逃げたと思う方がいいかもしれない。

しかし、若しかしたら、思わぬところに潜んでいる可能性もある。クロウが気付かないような、通路があるかもしれない。此処は二階建てに見えるが、若しかしたら三階、四階に繋がる階段でも隠されているかも知れない。

——もう一度、一部屋ずつ洗うべきかもな。

そう思い、振り返ろうとした時、扉が閉まった。

見れば、其処にはレイヴンがいた。

「レイヴン隊長？ 何故此処に来たんです？ 全部洗ったんですか？」

レイヴンは無表情で部屋へと踏み込んでくる。

クロウはふと怪訝に思い、後退った。何故だろう、最初に出会った時に感じた、あの冷たさ以上の物が其処にある。狼の目線どころではない。何か。

「会合相手は居たよ」

レイヴンが言った。

クロウは、はっと息を飲んだ。

レイヴンが剣を抜いている。

何のつもりなのだろう。

「彼は人質を取るそうだ」

レイヴンがふと目を細めた。

「何も知らずにこのこついて来た、哀れなケラヴァラ人をね」

レイヴンの声が響いた。

その言葉が、がんと部屋に鳴り響く。

クロウは目を見開いた。

その意味が、ゆっくりと、頭に浸透していく。

——こいつがチシャの会合相手？

すぐに状況を読み直し、クロウは見渡す。出口は一つしかない。

レイヴンの後ろ。レイヴンは笑みを浮かべ、剣を構える。

「大人しく言う事を聞けば、危害は加えない」

やはりそういう事らしい。

クロウは上がり掛かった息を整え、左手にゆっくりと力を流し込んだ。

自分でも間抜けな程に、上手く掛ってしまったものだ。

後々の事まで考えての人質選びだったのだろうか。それとも、あのボルゾイの男も共犯だったのだろうか。それなら、カラカルはどうなる。バーク達の元へと行ったカラカルは。彼は無事なのだろうか。不安が過った。

否、それよりも、まずは此処から逃げるべきだ。下に二人。彼らはレイヴンの仲間かも知れない。二人に気付かれず、此処から逃げる方法。クロウには、まともに闘って、レイヴンを倒せる自信がない。陽動攻撃で隙を作ってそのまま扉をぶち破るか、どうにか足止めして窓をぶち破るか。

クロウはちらりと窓を見やり、顔を顰めた。

選りに選って格子窓だ。

なら一つしかない。

左手を払い、クロウは剣を抜いた。

レイヴンがふっと笑った。

「歯むかうのか？」

レイヴンの剣が唸る。クロウは身を屈めた。まともに受けるな。飽く迄も陽動。飽く迄も逃げる為だけの攻撃。闘って勝てるなどと思いがあってはいけない。

クロウは駆けだした。レイヴンが剣を構える。来るだろうか。彼が剣を振り下ろしたら、素早くその動きを読んで、彼の後ろへと飛び込む。集中すれば出来なくはないはずだ。

レイヴンが読み通り、剣を振り上げた。クロウは身を更に屈め、剣の動きを見張った。振り下ろされる。その軌道を読む。

——左だ。左へ……。

だが、クロウは、はっとした。

レイヴンの剣が床に落ちた。胸倉を掴まれている。レイヴンもまた、クロウの動きを読んでいたのだ。まずい。

抜け出す間もなく、レイヴンの左手が、クロウの腹を殴る。鈍痛に、クロウは顔を顰めた。その直後、クロウは部屋の奥へと投げ飛ばされた。壁に背中をぶつけ、全身に痺れが走る。痛みが酷い。まともに食らってしまった。

「そう意固地になるな。言っただろう？ 大人しくすれば、悪い様にはしない。大切な身体だからね。傷が残るのは嫌だろう」

レイヴンが来る。

——逃げないと。

レイヴンはにやりと笑んだ。

「なあ、御姫様？」

クロウは睨んだ。

藍色の目で、レイヴンを睨んだ。

レイヴンは余裕だった。ゆっくりと近寄ってくる。まともに戦える相手ではない。やはり逃げる方に専念すべきだ。

だが、立てない。

怯みから立ち直れない。

頭では逃げる手順を考えているのに、体が動かない。

「如何して男の形をしている？ 女剣士なら女剣士らしい形があるう？ バルサミコ家最後の姫だからか？ 決めた男以外は近づかせない為か？」

「お前に告げる……筋合いはないね」
逃げられなかった。

レイヴンはすぐ目の前にいる。

叩きつけられた事よりも、腹への一発が強かった。

もう逃げる気力もない。

彼を信じてついて来た自分が莫迦だった。

レイヴンの手が伸びてきた。

顎を掴まれ、クロウは低く唸る。

黄緑の目と合わせられる。

とても不快だった。

「いくら足掻いても、何時かは露見するのにな。静かにしていて貰おうか。じゃないと、お前が女だってことを、ろくでもない連中にばらすぞ？ どうなるか分かっているのか？ お前もその事を恐れて男の形をしているのだろうか？」

「何故、チシヤなんかと会合を……」

クロウは完全に逃げるのを諦めた。

今更、もう彼からは逃げられないだろう。

助けが入るのも、随分と遅そうだ。

きつとこの勝負、レイヴンが一人勝ちするのだろう。しかも、クロウはその勝利に貢献してしまう事となるのだ。そうなれば、例え命は助かって、もう先陣にはいられない。城仕えの剣士としては、終りだ。

——だったら、悔いのないようにしようか。

クロウは溜め息混じりに、レイヴンを見上げた。

その諦めを見通してか、レイヴンにはやけて答えた。

「利用してやったのだ。幾らジャスミン家の血を引くとは言え、俺のような人狼の血を引く家は……しかも、跡取りでもない男は、こ

うでもしなければ、その地位を守れない。同じく火の車だったあの豚男を助けてやったのさ。それだけだ。だが、思わぬ方向に転んで思わぬ収穫を得たもんだ。バルサミコ家の生き残りが美しい女で嬉しいよ」

「嬉しくない世辞だ……。私を人質にしても、何も好転しないぞ。お前は捕らえられ、罰せられる。私を殺したとしてもね。先陣も皇帝も、動じはしない。私を捕えるだけ無駄だ」

クロウは全身の痛みを堪えながら言った。彼はクロウを利用できなければ今、この場で殺すのだろうか。別にそれでも良い。生き恥をかかされるよりは、楽にも思える。ただ、最後に、カラカルに会いたかった。

レイヴンは鼻で笑った。

「良く言うものだ。嫌ケラヴァラ派と改国の衝突を避けたがつているのは他でもない皇帝と先陣だと言う事はよく知っている。お前が死ねば、その責任は先陣に押し掛かる。当然、止められなかった皇帝にもね。そうなれば、改国は動きだすだろう。改国が動けば、嫌ケラヴァラ派も動く。皇帝もそれを恐れているから、嫌ケラヴァラ派からお前を守るのだ」

駄目だ、見通されている。

クロウは嫌になって来た。

人質など成りたくない。プライドが許さない。

それも、彼のこの様子、人質だけでは済まなさそうだ。

レイヴンの手が、クロウの頬へと触れる。

「そう唸るな良く顔を見せろ。心配しなくとも、お前には眠っていて貰う。気付いた頃には全て終わっているさ。確かに、剣士としてのお前は御終いだろうが、新しい世界がお前を取り巻いているだろうよ」

「触るな。お前見たいな狼、願い下げだ。私は認めない」

クロウは遂にレイヴンの言葉に応対した。彼が望んでいる物が分かる。バルサミコ家の家督の座だ。どういう意味かも分かる。だが

認めない。絶対に認められない。殺されても何をされても認める訳にはいかない。

レイヴンはやや眼光を鋭くし、剣を持ち替えた。

「眠れ。お前の同意など関係ない。何も考えずに、眠れ」
何だろう。

意識が遠ざかっていく。

体を動かすのもだるい。

嫌な匂いが鼻に纏わりついているのだ。

何だろう。

レイヴンは平気そうなのに、クロウには辛かった。

何故だろう。

——これは、葉？

瞼が閉じていく。

何故、レイヴンには効かないのだろう。

何故、自分だけ辛いのだろう。

クロウの意識が段々と闇へ落ちていく。

だが、その奥で、クロウは音を聞いた。耳をくすぐる音。一気に意識を引っ張ってくる音。必死に意識を手繰り寄せる音。段々と、近づいてくる。

クロウは意識を醒ましていった。

体にレイヴンの手が掛けられている。

「来たか。狐だな。随分、お前を慕っているようだ」

——カラカル？

薄らと、クロウを呼ぶ声がした。

「下の奴等はやられたのか？ 情けない」
剣が目の前で光る。

——ここだ。カラカル。

叫びたかった。

だが、口を塞がれた。

階段を登る音がする。

来る。

「くそ」

レイヴンが苛立ちを見せた。剣が突き付けられる。もがかなければ。だが、自分で情けない程に、力が出ない。狼の见えない力に押さえ込まれてしまっているようだった。

扉が開いていく音。

此処へ来る。

近づいて来る。

そして、開かれた。

「クロウ……」

カラカルガラス玉の目が光る。そして彼は、すぐに剣を握りしめた。白い光がずっと剣を這っていった。彼は無言で部屋に入ってくる。真っ直ぐとレイヴンとクロウを見つめ、無言で近づいてくる。「見えるか？」

レイヴンに静かに言われ、カラカルは其処で止まる。レイヴンはくすりと笑い、クロウを抱えたまま立ちあがった。

——苦しい。

支えられているとはいえ、立ち上がるのは苦しかった。

殴られた所為か、叩きつけられた所為か、薬の所為か、分からない。

「救いのヒーローの登場か。御姫様の奪還にでも来たのかな？」

「クロウを放せ……」

「狐如きが、狼に勝てると思うな」

レイヴンが笑んだ。

その殺気に、クロウは凍りついた。

彼は隙あらばカラカルを殺す気だ。そんな事をする必要はない。カラカルは手を出さない。レイヴンを突き出す事よりも、クロウの安全を確保するだろう。我ながら思い上がりにも思えるが、カラカルはそう言う男なのだ。

——彼に手を出すな。手を出す必要はない。

そう言いたい。だが、口を塞がれている。何故塞ぐ。塞いだって意味がないのに。

カラカルは睨んだまま、剣を握りしめた。さっきから、白い光が剣を行き来している。彼の光の核より流れる気が、剣に充満している。

「それを使う気か？」

レイヴンが言った。

「使ってみろ。闇の核の俺は死ぬだろうさ。だが、お前の慕うこいつも道連れだ。俺の目は誤魔化せない。こいつも闇の核なのだろう」核には相性がある。其処から生じる気は、時に他の種類の核を傷つけ、それを宿す生き物を死に至らしめる事もある。光は闇を、闇は光を受け付けられない。赤と白は両方受け付け、赤は白を受け付けられない。因って、この世の頂点は白となり、この世の生き物の殆どは、白の核を有している。逆に、唯一白を受け付けられない赤は、絶滅の一途を辿っているという。それほど、核と其処より生じる気は、生き物の生命を左右する。

今、カラカルは光を放てば、確かに闇の核を持つレイヴンは倒せるだろう。

だが、彼は同じ闇を宿すクロウを盾にしている。

カラカルは溜まりに溜まった光を放てないまま、唇を噛んだ。

——カラカル……放て……。

クロウは目を光らせた。

こういう時こそ、テレパシーを放てるテレパシストの存在が羨ましい。せめて、もう一人そんな仲間がいたら、とクロウがつまらないう後悔をし始めた時、ふとカラカルの手動きが目に入った。

クロウは身を強張らせた。

一か八か。

レイヴンが怯めばいいのだが。カラカルがタイミングを外さなければいいのだが。そして何より、クロウ自身が上手く動けばいいのだが。

カラカルの手が上がった。ふっと笑んで、ガラス玉の目を光らせる。

「降参。降参だ。そう凄まれちまったら、何も手出し出来やしねえよ」

カラカルがうんざりしたように言う。

「確かに、俺の光はクロウまで殺しちまうかもしれないねえ。そんな事、俺は出来ないからね。ここに攻め込んでくる皆も、多分同じだぜ？ 其処まで意気込まなくても、軽く剣でもそいつの首に当てときなよ。それだけで十分だ」

ガラス玉の目がレイヴンを見つめている。まるで、意見でも仰いでいるかのように。

レイヴンは鼻で笑った。

「はっ、誰がお前みたいな狐の言いなりになるか。そんな面白くもない助言寄越す前に、武器を捨てろ。話はそれからだ」

「はいはい。って、俺が武器捨ててもあんた、クロウを手放さないだろ？ あーあ、大した逆玉だぜ？ 俺からも祝福するよ」

——早く来い、タイミング。

クロウが苛立ち始めたその時、カラカルが剣を投げた。クロウは目を見開いた。すぐに瞋り、胸元に回されているレイヴンの腕を噛む。直後、瞼の向こうが真っ白に光った。レイヴンの腕がぴくりと動き、呻き声上がる。クロウは身体を滑らすように腕を擦り抜け、ひたすら前へと身を投じた。程なくして、誰かの手が触れる。

カラカルの匂い。

カラカルの気配。

「もう目え開けても大丈夫だ」

カラカルに言われ、クロウは目を開けた。

部屋の隅で両目を手で覆うレイヴンが見える。

カラカルの放った閃光を直接見てしまったらしい。闇の核を宿すその目が、入って来た光を拒み、拒み、拒み続け、暴れている。

レイヴンが唸った。

狼の唸り。

両手を震わせながら退け、その下から恨めしそうに眼光を光らせる。血が溢れている。光の所為か、己の手が傷つけたのかは分からない。

だが、その目は呪うようにクロウとカラカルを見据え、一歩、二歩、と近づいてきた。

「ここは逃げよう」

カラカルが言った。

「直に仲間が来る。奴もこの怯みから直ぐに立ち直っちまうだろう。俺達が無理に相手するまでもない」

「分かった。だが、下の奴等は？」

カラカルは目を細め、クロウを支えた。クロウは立ち上がり、ちらりと振り返る。今のレイヴンの足は遅い。逃げるなら今しかないだろう。

「寝てるよ。目が覚めた頃には詮議の御時間さ」

くすくすとカラカルが笑った。クロウは安堵し、素早く部屋を抜けた。二階から一階まで駆け抜ける。殴られた痛み、叩きつけられた痛み、そしてそれよりも、薬を嗅がされた所為で身体は思わしくなかったが、レイヴンからは逃げられそうだった。

「今更だが、転ぶなよ。この部屋の床。薬が気化して沈んでいるらしい。所々に煙草みたいなのが落ちてたろ？」

「あれはなんだ？」

「さあね、専門家じゃねえから分かんねえ。だが、吸わない方が良さそうだ」

——確かに。

きっと、叩きつけられた後に眠りそうになったのは、その帰化した薬の所為だろうか。何なのだろう。魔術の一つだろうか。人質を眠らせるためにあんな事をしたのだろうか。それだけの為にあんな事をしたのだろうか。

疑問と共に階段を降り、クロウとカラカルは扉を破るように館を

抜けた。外ではレイヴンの部下の二人の男が、すやすやと眠っている。クロウはちらりとそれを見つめ、軽く舌打ちをした。

ふと手を掴まれ、クロウは前を見た。

カラカルが林の向こうを見やり、ふっと笑んで振り返る。

「あのボルゾイが案内したらしい。仲間がいるぞ」

林の向こうには幾つかの人影が見えた。月の光が彼らを差し、その姿を現す。

クロウはやっと安堵した。

それは、バーク隊長率いる第一部隊と第二部隊の一部だった。

目を覚ますと、クロウは自分の部屋にいた。

相変わらず体中が痛かったが、何時だったか狩りで失敗した時よりは大分増しだった。もっと酷い怪我にも慣れている。少々頭が痛かったけれども、取り敢えず、すぐに起き上がる程には回復した。酷い目に遭ったものだ。

剣士としての自信を無くすほどに。

それぐらいで甘えるな、とバーク隊長には言われるだろうけれども、易々とレイヴンに捕まったのは酷く気に病む事だった。

何の気力もないが、動けるようになった以上は、今日も変わらずに務めを果たさなくてはならない。

やれやれと思いつつ寝台を降りようとすると、部屋にカラカルがいる事に今更気付いた。

どうやら、鼻もおかしくなっているらしい。

カラカルは頬杖を突き、片手を上げた。

「よお、目え覚めたか？」

酷く眠そうだった。

寝ていないのが明らかだ。

「大丈夫か？」

カラカルが同じ事を聞く前に、クロウが先に訊ねた。カラカルは
けたけたと笑い、頬杖を突いたまま答える。

「眠い」

「だろうな」

クロウはそのまま寝台に座り込み、カラカルと向かい合った。

暫し過ぎ去る沈黙。その間に、館での事を思い出す。カラカルが
真っ先に来なかったら、クロウが完全に眠ってしまっていたら、助
からなかった。生きていたとしても、目が覚めたら、きっと違う状
況の中に居ただろう。クロウが最も望まない世界が広がっていた事
だろう。

「礼を言うよ」

クロウはぼつりと言った。

「お前が来なかったら。取り返しのない事になってた……有難
う」

カラカルは惚けたようにクロウを見つめ、面白そうに笑みながら
クロウを眺めた。ガラス玉の目が、薄暗い部屋の中で光る。

「へえ、珍しい。あんたがそう畏まっちゃうなんて」

クロウは息を吐き、カラカルを見やった。

「茶化さないでくれよ。こっちは本気で言ってるんだから」

カラカルは笑みながら「ごめん」と手を合わせると、照れ臭そうに
言った。

「どう致しまして」

クロウの藍色の目が、にやけるその男を映す。密偵任命の正式発
表まで、あと数日。そうなれば、彼は国を発つ事になる。数少ない
味方の中でも最も頼りになる者が、傍から消えてしまうのだ。クロ
ウは少し、寂しく思った。だが、すぐにその寂しさを打ち消し、彼
から軽く目を逸らした。

「それで、チシャとレイヴンは如何なった？」

カラカルの笑みの色が少々変わった。不敵に笑いながら、彼は答
える。

「あの後詮議立てがあつて、二人ともへこたれちまっている。チシヤがべらべら喋っちまったからね」

「で？」

「チシヤの家で芥子の子どもが保護された」

「芥子？」

「ああ、密猟にあつたらしい。成長段階で、阿片を取ろうとしていたんだろ。前科もあるようだ。これまでに何人もの芥子の子どもを違法に買い占めていたんだろ」

「レイヴンがそれに関わっていたの？」

クロウはやや眉を顰めた。

先陣の隊長ともあるレイヴンが、何故わざわざそのようなリスクの高い犯罪に手を染めたのだろうか。金に困っていたのか。それとも、他の理由なのか。

「ああ、あいつ、仲買として、密猟業者とチシヤとを取り持っていたらしい。だが、あいつ、どうやらチシヤを殺す気だったみたいだぞ？」

「チシヤを？ 何故？」

「殺して芥子の子どもを取り返して、また違う奴に売る。そう言う手らしい。若しかしたら、奴の後ろには、もっと大きな影があるかもな」

カラカルが楽しそうに笑っている。そう言えば、彼は前々からこのチシヤの件を面白そうに推察していた。その後、思いがけず関わる事になったと言うのに、今もその時と変わらず、他人事のように話し、笑っているカラカル。

とんでもない野次馬だ。

——いや、狐か。

クロウは溜め息混じりに立ちあがった。

何が理由であれ、もう事件は終わった。レイヴンにしろ、チシヤにしろ、その詳細や未来などクロウの興味からは大きく逸れることなのだ。

レイヴンの後ろに見え隠れする影は、少し気になったけれども、様子を窺うカラカルに、クロウはぼそりと告げた。

「腹が減った。何か食いに行くよ」

「んじゃ、俺も行く」

慌てて立ち上がるカラカルを、クロウは呆れながら見つめた。

「寝なくていいの？」

「眠れないんだ。眠れないうちに俺も腹が減ってさ」

嘘だろう。

如何見ても眠気が振り払えていない。

きつと、一睡もしていないのだろう。

そう思ったのだが、クロウはふっと微笑んだ。

「そう。じゃあ、行こうか」

そう言いながら、一人廊下に出る。

「あ、待てよ、リズ！」

思わずカラカルがそう叫んだため、クロウは身を竦ませて振り返った。

「その名前で呼ぶなっつたろう？」

唸り声とともに、藍色の目を光らせる。

カラカルは焦ったように目を逸らし、場を濁して笑っている。

「ごめんごめん、もう言わないから機嫌直して」

細められるガラス玉の目を見つめながら、クロウは軽く微笑んで扉を閉めた。

「あー！ ちょっと、待ってよ！」

叫ぶカラカルを無視して、クロウは廊下に一人佇む。闇を照らす光。とても温かな光。その光が国を発とうとしている。彼は外から守ると誓った。何かあったら真っ先に駆けつけると誓ってくれた。それだけで、十分だった。

クロウは壁に凭れかかり、そっと息を吐く。

クオロウェン・リズ・バルサミコ。

その名前を知る最も力強い味方が、傍を去っていく。

それはとても寂しい事だったが、とても切ない事だったが、とても心細い事だったが、同時に一つ彼女の中に希望を産みつけた。そう、外への、掛け橋を。

獵犬ト狐 其ノ伍（後書き）

『黒狗率イル旅ノ群レ』番外編として書かせていただいた今作品、いかがでしたでしょうか。まだまだ勉強不足でなかなか稚拙さは拭えておりませんが、それでもこの物語で楽しめて頂ければ嬉しい限りです。

今作『獵犬ト狐』は『黒狗』に続く番外編です。この後、カラカルが密偵として国を出た後に何が起きたかは『黒狗』に書かれております。興味を持っていただけならな、と思いつつ次の作品の制作もがんばります。それでは、ここまで読んで下さって本当にありがとうございます。これからも宜しく願います。

2009年3月27日 幼ぬこみ

囚ワレノ万華鏡 其ノ巻（前書き）

『黒狗率イル旅ノ群レ』のスピノフにと考えている『赤星渡シ 蜃気楼ノ仔』のプロローグに繋がる話です。『黒狗』にも登場するミルという魔獣の誕生秘話のような話で、今回は、『黒狗』の直接のネタバレはありませんが、続編に考えている『赤星』と最終章に考えている『人狼望郷ノ念抱ク』という話のネタバレが含まれています。前作同様、【それでもいい方、すでに前作の草稿を読んで下さった方、別に『黒狗』の続編に興味のない方】は普通にお読み頂いて結構ですが、もしも【『赤星』や『人狼』でのネタバレを避けたいという方】は、お気を付け下さい。それでは、今回も前置きをまた長々と失礼いたしました。『囚ワレノ万華鏡』第七部編成をよろしくお願いいたします。

2009年4月15日 幼ゐこみ

囚ワレノ万華鏡 其ノ壱

囚ワレノ万華鏡 其ノ壱

虹色の世界。そう呼ばれている大陸がある。其処は、ヒトが獣になり、獣がヒトになる事が当たり前の世界だった。その中心に広がる大平原には決して消えないと言う大虹が掛かり、その虹が伸びる北側には、山脈が広がっている。グレイ山脈と呼ばれるそれは、大陸の端から端まで伸び、北の広大な砂漠地帯である赤の世界と平原以下を隔てている。特に東はグレイ山脈の尾と呼ばれる岩地が広がり、嘗ては大陸上第二広さを有するキャロット砂漠があった。だが、今ではそのキャロット砂漠もほんの一握りを残しては、信じられない程豊かな国となっている。

その国の名、ズペルス。

女王ズペルシスを中心に、三百年ほど前に建てられた。その時から女王は変わらずにズペルスを守っている。つまり、三百歳を優に超えるのだが、彼女は誰もがその歳を疑う程に若々しく、たおやかに国を守り続けている。

ズペルスは技術大国である。

ここが建つ前は何も無い砂漠だった。

東にある国と言えば、グレイ山脈の尾部の北、密林の傍にある竜国キャヴィアや、東の果ての島国ギャロップ、南の島国マスカッチが、皆、砂漠を避けるように点在していた。

其処に辿り着いたのが、ズペルシス率いる地底人ルチフェル達だった。彼女は辿り着いたこの地を見て、愕然としたのだが、西へと渡った弟バザルライの率いる同胞の成功を耳にし、ここに国を建てようと奮闘した。だが、いかに地底と言う過酷な条件で住んでいたとはいえ、地上の砂漠は全く別の脅威だった。

だが、果敢に国を建てようとする彼女達の事を気に入っただのか、

それに手を差し伸べた者たちがいた。

北の果て赤の世界にただ一つあるとされる悪魔と称される者達の国マクア。その国王であり、自然界までもを仕切ると言うキマイラの魔王バルバラ。グレイ山脈の何処かに――大虹の頂上の真下とも言われている――住んでいる彼は、同じく海を隔てた南の果てのミルゼリオという国に住む天使や墮天使と称される天翔人の太陽王であるコロナと連絡を取った。

西の変事に頭を抱えていた彼らは、東にも同じような国をつくることで、この世の調和が取れるかもしれないと期待し、ズペルシス達を支援する事にした。

そうして、使わされたのが、双子の守り子。ミルゼリオから一人、マクアから一人、それぞれ同調し合う者たちがズペルシスの元へと降り立ち、彼らを守る柱となった。その途端、ズペルシス達の国作りは異常なまでに安定し、遂に彼らはズペルシスの名から肖った東国ズペルスを砂漠の真ん中に建てる事に成功した。その後、双子の守り子達の技術がズペルスに浸透し、彼らの国は急速に発展していき、次第に国領も広がり、砂漠と岩地は緑で一杯になった。

一方、広がった国で消費されるエネルギーを確保する目的で、ミルゼリオとマクアから使わされた守り子達は代を重ねて研究をし、その開発の為に巨大な生体研究所を立ち上げたのは、ここ最近の事だった。その後もズペルスの技術も発展を重ね、いつの日か、西を制し、世界をも制覇しているバザイに追いつくのではないか、そう言われていた。

ヨウシエリイ・リア・アランシア。

彼女は幼い時からシエリアと呼ばれていた。幼い時からとはいえ、今も幼いのにには変わりない。だが、如何に幼いとはいえ、彼女を軽く扱う者はここズペルスにはいない。

金に輝く髪を傾け、背中に生える小さな黒い羽根を揺らすシェリア。その層の分かれる不思議な赤い目は、小さなフラスコを見つめていた。

薬品がたくさん並ぶ其処。白衣を着たズペルス人の男に支えられ、シェリアはそれを見た。白い豆の様なものが、どくどくと動いている。

シェリアは眉を顰め、その豆を見つめた。

「これ、何になるの？」

シェリアが訊ねると、支えている白衣の男は彼女を下に降ろした。眼鏡の奥の赤茶色の目が、細められている。

「珍しい生き物だよ。成長したらきつと綺麗な生き物になる。若しも元気に生まれたら、この仔はシェリアが面倒みるんだよ。ミルジエと一緒にね」

「本当？」

シェリアは目を輝かせた。誰かの面倒を見るのが人一倍好きな彼女は、今からそれが楽しみだった。薄紅色の液体の中で、蠢いている白い豆。成長した綺麗な獣。その面倒を見る事が出来るのだ。嬉しくないわけがない。無事に生まれたら、どんな生き物になるのだろう。男だろうか、女だろうか。どちらでもいいけれども、楽しみだ。

「ミルジエは？」

白衣の男ガークが言った。彼はこの豆の様な生き物を研究している班の班長であり、シェリアにも、彼女の相方であるミルジエにも好かれていた。彼自身子ども好きなのか、よく二人の相手をしてくれる。他の者が恐れる中でもだ。

シェリアは飽き飽きしていた。

双子の守り子だか何だか知らないが、この研究所ではつまらない勉強ばかりで遊ぶ時間が足りない。もっと背中の羽根で飛びまわって、此処ズペルスの国中を駆けまわりたいのに。そうしてズペルスを楽しんだら、早くマクア国へと帰りたい。

シェリアは自分の両親の事をよく知らない。物心ついた時から魔王の元にいた。魔王が本当の親だとは勿論思っていないが、王室は楽しかった。同じくらいの年頃の娘が何人かいたのだ。内一人に憑いている精霊をからかうのは本当に面白かった。

——また帰りたいなあ。

シェリアはいつも思っていた。しかし、そう呟くと、この研究所にいる者たちが血相を変えて、シェリアに何が不満なのかを聞いた。だす為、おちおち溜め息も吐けないのだ。

——大人って変なの。

シェリアはいつも思っていた。

「外にいるの。風とお話しているんだ」

ガークに応えつつ、シェリアは部屋の扉へと駆けて行った。

「ミルジェの所に行ってくる！」

ガークの反応も待たず、彼女は駆け抜けた。

もうすぐ生き物が生まれる。自分たちが面倒を見る生き物が生まれる。シェリアが母でミルジェが父、それとも、シェリアが父でミルジェが母だろうか。

——お母さんの位置は渡せないもんね。

シェリアはしっかりと頷き、部屋を後にした。

その小さな悪魔の少女の背を見送り、ガークはそっとフラスコに触れた。こんなにも小さなフラスコに収まってしまふほど、小さな豆のような生き物。だが、そのうちに、大部屋に移さねばならない日が来るだろう。この生き物の為に作った、巨大カプセルの《フラスコ》に移さねばならない日が来るだろう。

薄紅色の液体に揺られ、白い豆のような生き物がどくと動いている。

今は健やかな成長と、無事を祈るだけ。

ガークは目を細めた。

「やっと手に入れた」

眼鏡の奥の瞳が、怪しく光る。

「待っていたよ、ミル」

薄紅色の液体が、仄かに震えた。

シェリアはそつと研究所の裏口を開けた。何時だったか、激しく開け閉めしていたら、傍のラボに眠る研究用の獣人がノイローゼになったらしく、小言を言われたからだ。ノイローゼが何なのかシェリアにはよく分からなかったが、きつとその獣人に申し訳ない事をしたのだろうと理解し、その後からはそのラボの傍では音を立てないように注意した。

開けた時同様に、扉をそつと閉めると、目の前には緑の草原が広がっている。その草原を見つめるシェリアの目の前に、赤い羽根が舞ってきた。

見れば、草原の中で、赤い四枚羽根を折り畳んで空を眺めている桃色の髪の少女がいる。シェリアとあまり変わらない歳の天使と称される天翔人ホーリア。南の国はミルゼリオからやって来たという天使。

シェリアは此処へ来てから知ったのだが、ミルゼリオに住む天翔人は、皆、卵から生まれ、五年で蛹になり、羽化して大人になるらしい。生まれたての天翔人は、天使でもなく墮天使でもなければ、男かも女かも分からないらしい。その後、羽化して、羽根の形で天使ホーリア人か、墮天使マジエロ人かが決まり、男なのか女なのかもはっきりとする。

つまり、シェリアの目の前にいる彼女はすでに大人だった。シェリアとはそんなに離れていない様に見えるのに、ミルゼリオに帰れば、立派な大人として扱われるのだ。

でも、シェリアは知っている。

——ミルジェはまだまだ子どもだもの。

その少女、ミルジェと出会ってまだ一年にも満たないが、シェリ

アとミルジェは不思議と気があった。一緒にいると、何だかしっくりきて、ともかく楽しい。シェリアはミルジェの事が好きだった。ミルジェもシェリアの事が好きだと言ってくれた。

二人は時に勉強を投げ出して、いたずらばかりしていた。此処、研究所には、勉強の為に来ている。普段は、ズペルス城の女王の庇護のもとで、のびのびと育っているのだが、鷹揚なズペルス人の氣質の為か、はたまた、単に二人の養育係がずばらなだけか、二人はかなり放任的且つ開放的に育てられ、城でも研究所でも大人達の頭を悩ませている。

「シェリア？」

ミルジェが振り向いた。赤紫の仔馬の目が、シェリアの赤いフェネックの目を見つめている。ミルジェは四枚羽根の天馬だった。一度だけ、シェリアはミルジェと互いの獣姿を見せ合ったのだが、そのミルジェの美しさに、シェリアは見惚れてしまった。まだあどけない仔馬ではあるけれども、桃色の鬣はくると巻かれ、真っ赤な馬体はすらりと伸び、同じくらい赤い美しい羽根と、可愛いオレンジの後ろ羽根を整えた天馬が、シェリアの前に現れたのだ。桃色の鬣を纏めるのが、いつもミルジェの付けている揚羽蝶の髪留めだった事と、天馬が他でもなくミルジェの声で喋っている事がなければ、シェリアはその天馬がミルジェである事を忘れていただろう。と同時に、今度は自分の獣姿を見せる番となり、シェリアは尻ごみした。こんなに美しい姿を見せつけられて、自分の獣姿を晒すなんて何だか気が引けてしまう。

だが、ヒト型に戻ったミルジェに少々凄まれて、シェリアは止む無くそのフェネックの姿を晒す事となった。真っ黒い羽根の生えたフェネックの姿。ミルジェのような四枚羽根の天馬の美しさの欠片もない。シェリアは落胆した。

しかし、ミルジェは歓喜の声を上げて、フェネックになったシェリアを抱き上げた。曰く、このままペットにしたいくらい可愛い、らしい。結構嬉しかったが、ペットにされては堪らないので、それ

以降シェリアは見せ合いを止めたのだった。

勿論、今も二人はヒト型で見つめ合っているのだが、時折瞼を過るのが、その時に見た互いの獣姿だった。美しい天馬のミルジェ。可愛いフェネックのシェリア。互いの瞼の裏に、互いのその姿が過る。

「どうしたの？ シェリア？」

ミルジェが再び声をかけた。

軽く目を細めて、微笑みを浮かべて、シェリアを見つめている。

シェリアは我に返り、ミルジェに言った。

「知ってる？ ミルジェ？」

「何を？」

「新しい生き物の話！」

シェリアはミルジェに駆け寄った。たった今、ガークから教えて貰った素敵な話。早速ミルジェと分かち合わなければ。

「ガークに聞いたの、知ってる？」

「あの白い豆みたいな生き物？」

ミルジェが不思議そうに首を傾げた。

シェリアは頷いた。

「そう、その生き物よ！ ちゃんと生まれたら私たちが面倒看るんだって！」

シェリアが言うと、ミルジェは驚いたように目を丸くした。

「だって、凄く大切な生き物なんでしょう？ 私たちが看てもいいのかしら？」

「ガークが言いって言うてるんだから、いいんじゃない？」

シェリアは嬉しそうにミルジェの手を取った。

二人が面倒を見る事になる生き物ミルは、他でもない二人の力を吸い取って合成された合成獣キメラ。とある異国の地から来た人狼の血を引く特殊な力を持つ娘の遺体から遺伝子を取り出し、グレイ山脈で見付かった古代獣の牙から取り出した遺伝子とを組み合わせ、更にそこに幾らかの魔獣の情報を組み込むという実験。当初は成功

しなかったのだが、先代の守り子が残した方法によってミルジェとシェリアから抜き出した力で、それは成功した。

二人はその生き物が自分達の力で生まれる事が出来た事に驚き、それから度々小さなミルの育つ様子を覗きに行った。守り子であるミルジェとシェリアの力を利用した事もあってか、ミルを作る班長のガークは、二人が見守る事を快諾したのだ。そのミルの面倒を任せられる。

ミルジェも嬉しかった。

「私がお母さんで、ミルジェがお父さんなの」
シェリアは言った。

手を握られるミルジェは「あら」と、やや不服そうな顔をした。
「私がお母さんで、シェリアがお父さんの間違いでしょう？」

赤い羽根を広げ、つんと目を伏せるミルジェ。
シェリアも不満げに眉を顰めた。

「何で？ 何で私がお父さんなのさ」

「だって、シェリア、男の子みたいだもん」

ミルジェがくすくす笑って言うのと、シェリアはむっと黒い羽根を広げ、ミルジェの手を離れた。

「それとこれとは違うでしょ。兎に角、私がお母さんなの」

ミルジェは「あら」とシェリアの様子を窺い、軽く肩に触れた。

「じゃあ、二人でお母さんになればいいじゃない」
にこやかに言われ、シェリアは目を丸くした。

「二人でお母さん？」

「そう、お父さんは、どうせ、ガークでしょう？ なら、二人でお母さんになればいいじゃないの」

「そっか！」

シェリアは頷いた。

名案だ。それならば、シェリアもミルジェもお母さんの座を奪いあわなくて済む。二人でミルのお母さんになろう。そうと決まれば、ミルが成長して生まれてくるのが本当に楽しみだった。いつか目を

開けて、縋りついて来るのだろうか。

美しいというその生き物の姿は、どんな姿なのだろう。
シェリアは思い描いていた。

警報が鳴ったのは、その直後だった。

ミルジェとシェリアは飛び上がった。

初めて聞くその音に、恐怖すら感じる。

何が起こったというのだ。

「行こう！」

ミルジェが目の色を変えて、シェリアの手を引いた。研究所の裏口を開けて、廊下を走る。警報が鳴り響いている。さぞかし、この傍のラボのかの獣人は、怯えているだろう。

——大丈夫なのかな？

ふとシェリアは思った。

次第に慌ただしくなる所内。だがラボの殆どは、警報に驚く実験獣達を鎮静化させようとしているだけだった。

一体何処の警報なのか。

不安が過る。

ミルジェもその不安を胸に、走っているのだろう。

そして、ミルジェが開いたラボの一室の扉。

既に警報は治まっていた。

シェリアはその中の騒然とした様子を見つめ、はっと息を飲んだ。フラスコが割れている。薄紅色の液体が飛び散り、硝子の破片が床に散乱している。研究員たちは既にその後片付けを行っており、液体に汚れた薬品の始末などをしていた。

「ミルは？」

シェリアがいきなり口を開いた為、研究員たちが驚いて振り返った。彼らはすぐさまミルジェとシェリアに気付くと、ほっと溜め息

を吐き、軽く微笑んで答えた。

「今、違う部屋に運んだ。後で案内してあげるから待ってなさい」

答えたのは、焦げ茶の髪のスペルス人研究員レバ。かなりの長身で、ミルジェとシェリアは彼と話す時は、いつも遙か上を見上げていた。ズペルス人は長い尖った耳と、小さな二角が特徴なのだが、レバの耳と角を確認する事は難しく、二人は彼が屈んだ時に、やっとその長い耳と髪に埋もれた小さな二角を発見する事が出来たものだ。

「何が起きたの？」

ミルジェが訊ねると、レバは答えた。

「ミルの入っていたフラスコが突然爆発したんだ。何、ミルは大丈夫。その瞬間、不思議な事が起きてね、二つの赤いオーラのような物が、ミルを包み込んだんだよ。すると、ミルは投げ出される事無く、割れたフラスコの間に傷一つなくぽつんと横たわっていた。とはいえ、まだまだ外に出る訳にはいかないような状態だったからね」
シェリアはぞっとした。

ミルにはまだ心臓と脳までしか出来ていない。生き物としては未熟だし、目だって薄ら見えるかどうかしかないのだ。その状態で、液体の外に出てしまったとなれば、幾ら幼いシェリアでも、ずっとミルを観察していたのだから、想像がついた。

「本当に大丈夫なの？」

ミルジェが不思議そうに訊ねると、レバはふっと笑んだ。

「だから待ってなさいって。もう少しで片付くから。そしたら、新しいミルの観察場所に案内してあげますよ」

シェリアはほっとした。

ミルは生きている。その場所にいるのだ。何が起こったかは分からないけれども、ミルが無事ならばそれでいい。無事に成長して、生まれてきてほしい。

ミルジェも安堵の溜め息を吐くと、頷いた。

「分かったわ。きつと案内してね、レバ」

ええ、と目を細め、レバは再び片づけへと戻った。

その様子を見つめながら、シェアリアは考えた。

新しい観察場所とはどんな所だろう。この部屋の様に、机や書類や本や薬品だらけの狭い部屋なのだろうか。それとも――。

囚ワレノ万華鏡 其ノ式

囚ワレノ万華鏡 其ノ式

其処はだだっ広い部屋だった。

奥に《フラスコ》と名付けられた巨大な球体カプセルが浮かび、その中には紅の液体が満たされている。そして液体に揺られる様に眠っているのは、白い髪を藻の様に漂わせる少女、否、少年だろうか。唇からは小さな牙を漏らし、時折苦しそうに身を振る。その身体を拘束するように、手足、首、胴のあらゆる場所に、管が刺さっていた。

その者の名前は、ミル。ミー・ルクエシオ・ストロベリーというのが本名である。

女王自らが考えたと言う贅沢な名であるが、その名前の背景には、国内で事故死し、特異な性質を持った体だったがために、遺族から引き取った人狼の血を引くミ・ルクエシオの遺体、通称ミルケシオという女性の影が残されている。

ミルは紛れもなく、ミルケシオの血を継いでいたが、ミルケシオの子どもではなかった。というのも、ミルケシオが生んだのではなく、ミルケシオの遺伝子が元になっているからである。ミルケシオだけでなく、ミルは他にも古代獣や魔獣等の遺伝子を組み込まれ、その半分は獣人、つまり、半獣人として存在していた。

掛け合わされた古代獣や魔獣の多くが猫族の生き物だった為か、ミルは時折猫の様な一面を見せた。ミルケシオ自身も、山猫と人狼とのハーフだったらしい。たまに《フラスコ》から出されたミルは、面倒を看てくれる少女たちに猫のように甘え、その愛撫を受けていた。だが、その一面は、虎でもあり、獅子でもあり、度々ミルは、研究員たちを冷やりとさせた。また、ミルは完全に猫という訳でもなく、やはりミルケシオに流れる人狼の血が現れるのか、犬族のよ

うな一面も持っていた。

人のような状態のミルとの接し方は最も難しく、ミルはその時々で、少年のようだったり、少女の様だったり、その雰囲気を変えていった。ミルが雌雄どちらなのかを判断するのも難しく、完全体なのか、未分化なのかで、意見は割れた。互いが互いの説を批判し、それぞれミルの研究に没頭したのだが、当のミルは何処までも能天気で、何処かあどけなく、危なっかしい。いつだったか、侵入者に遭い、ミルが攫われそうになった事もあったが、ミルだけが動じていなかった。と言うよりも、理解していなかった。

シェリアは《フラスコ》にて眠るミルを見つめながら溜め息を吐いた。

かつて、ミルが生まれるのを心待ちにしていた時があった。

どんな生き物が生まれるのか、とても楽しみだったのだ。

あの頃は、ミルが少しずつ大きくなっていくのが楽しみで、早くその身体を抱きしめたくて仕方無かった。

今はと言うと、早く成長が止まって欲しくて仕方無かった。

ミルの可愛さは期待以上だったが、時折ミルは、手が付けられない程に暴れてしまうのだ。研究員たちはそれをトランスと呼ぶ。トランスは、ミルが耐えがたい恐怖を覚えた時に起こりやすく、傍にいる者は命からがら逃げ出さなくてはならない。ミルが何に恐怖を抱くかは中々判断がつかず、ミルを傍で見守るシェリアもミルジエも、気が抜けなかった。

今はまだいい。ミルはまだ生まれて十年ほどしか経っておらず、力が弱くて、押さえ込むのも容易い。

だが、この所のミルの成長は目覚ましいのだ。

昨日まで子猫だったのに、今日は山猫だった。明日には、虎にもなるかもしれない。

確か、ミルに掛け合われている古代獣は、剣牙虎という恐ろしい生き物だった。その上、魔獣ときているのだから、シェリアの気苦労は増すばかりだ。

「ミル、いい子だから言う事を聞いて」

その言葉が届かなくなってしまうえば、研究所はミルの脳手術を行うつもりだと聞いた。つまり、感情を生む部分を切除し、機械のように従順な獣にしてしまおうと言うのだ。

シェリアはそれだけは避けたかった。ミルジェだってそうだろう。そうなれば、二人に甘えてくるミルはいなくなってしまうのだ。

——守らなくては……。

だが、それを提案しているのが、他でもなくミルの研究班長であるガークなのだから、シェリアは更に頭を抱えることになる。しない研究員の戯言ならばよかったのに、選りに選って、彼が言い出すなんて、信じられなかった。

「シェリア、ここにいたの」

ミルジェの声が響いた。

シェリアが振り向くと、部屋の扉に凭れるようにしながらミルジェが覗き込んでいた。ミルジェはそのまま部屋に入り、シェリアの元へと近寄る。そして、《フラスコ》を見上げた。目を細め、そっと手を上げる。

「ぐっすり眠っているみたい。どんな夢を見ているのかしら」

ミルジェが羽根を揺らし、手を下げる。その桃色の髪を纏めるのは、揚羽蝶の髪留め。ずっと同じ物を使っているようにも見えるが、心成しか、その大きさがミルジェの成長に合わせて大きくなっている。

「ミルがね、町を見たいって」

ふっと笑みを浮かべてミルジェが言った。

「お城を見てみたいんだって。私たちが帰るのが寂しいんだって言うってたわ」

「そう」

シェリアは力なく呟いた。

それが出来たらどんなにいいだろう。トランスさえなければ、ミルを自由に連れだせるというのに。ミルを狙う他国の工作員は沢山

いるけれども、ミルジェとシェリアからその存在を奪おうと言うのは命知らず甚だしいものだ。実際、ミルを狙った侵入事件は、ミルジェとシェリアがズペルス城へと戻っている時に起きていた。

ミルが大人しくなってくれば、何時でもミルを監視下におけるし、ミルにもまた研究所の外の空気を吸わせられる。だが、脳の手術だけは避けたかった。そんな事をしてしまえば、今のミルの愛らしさは如何なってしまうのだろうか。

ミルは不思議だった。

週末と呼ばれる日が来ると、ミルジェとシェリアは何処かへ行ってしまう。出来ればその日々はずっと《フラスコ》で眠って過ごしたいのだが、そうでない日もある。そうでない日は、大抵、遊戯室という場所に閉じ込められる。ミルジェとシェリアがいれば、自由に外で遊べるのだが、二人がいないと遊戯室でしか遊べない。

だが、ミルは不思議だった。

一人で遊戯室にいと、時折、傍に見守ってくれる者達がいるのだ。

それは、光の様に寄り添い、ミルの不安を和らげてくれる。蝶々のような娘。堇色の目で、見守ってくれる娘。または、水色の髪の青年。綺麗な光を操り、ミルを楽しませてくれる青年だった。

名前は分らない。

しかし、二人はミルジェとシェリアがいなくなると、すぐにミルの傍へと忍び寄ってくる。その気配はいつも、冷たくて、背筋が凍ってしまうのだが、いざ触れられると、ミルはいつも不安を解消させていた。

二人はミルの名を知っていた。

特に蝶々は、時折ミルの左胸に手を当てて、静かに光を浴びせてくれた。暖かく、甘い香りのするその光に、ミルは酔った。とても

心地良かった。

ミルジェとシェリアとは違うその二人の愛撫。

現実と夢のように、ミルの存在に沁み込んでいた。

「でも、誰なの？」

ミルは訊ねた。白い髪を撫でる蝶々の手、寄り添いながら共に遊ぶ青年の灰色の目。桜色と灰色の目を光らせて、ミルは彼らを窺った。二人はミルを囲み、昼寝を拒むミルを眠りに誘う。だが、眠る前に、ミルは聞きたかった。

「名前は……」

董色の目と灰色の目をそれぞれ見つめ、眠る前にミルは聞いた。

「名前、教えて……」

暖かい光の手が、ミルの瞼を軽く撫でる。

心地よさの奥へとミルは沈んでいく。

甘い匂いの中へとミルは沈んでいく。

その奥で、二つの声が、耳を介して入って来た。

「あたしはパピヨン」

「私はダブル」

ミルが熱を出したのは、ミルジェとシェリアが城から戻って来たその日だった。

何時もよりは安定していたらしく、遊戯室にて二人の帰りを遊びながら待ち続け、真っ先に扉を開けたミルジェに飛び付いたのだが、その身体の熱にミルジェは驚いた。

ミルは何ともないのだろうか。

「ミル、苦しくない？」

ミルジェがそう問いかけた為、シェリアも異変に気付いた。急いで駆け寄り、ミルの額を触り、驚愕した。高熱だ。慌ててミルの顔を窺うと、目がやや潤んでいた。

——トリコだ。

シェリアは思った。

トリコとは、この大陸で子どもに罹る流行病の事である。多くは風邪の様な症状で終わるのだが、時には意識を失い、永遠に眠りから覚めない状態になる油断できない病だ。この大陸の中央にあるジュウニネン国での罹患率が高い病気なのだが、シェリアもミルジェも疑問を拭えなかった。

研究所に閉じ込めているミルが、如何してこの病気に罹るのだろうか。

ミルは如何してミルジェとシェリアがそう問うのか分からなかったらしく、首を傾げた。だが、「《フラスコ》にいれなければ」という研究員の言葉に反応し、慌てて遊戯室の奥へと逃げてしまった。「やだ」

ミルは《フラスコ》を嫌う。ミルを使った多くの実験は、ミルの負担を考えて《フラスコ》内で為されるのだが、苦痛を生じるものも多いらしく、注射や採血、葉などと共に、《フラスコ》に入る事を極端に嫌うのだ。無理強いすれば、トランスしかねないので、ここは慎重にミルを眠らせるしかない。

ミルは遊戯室の隅へと潜り、其処で蹲っている。

嘗てこの遊戯室には沢山の物が置いてあったのだが、こういう事も多いために殆どが取り払われた。遊具は小さな物に限られ、ミルが逃げ隠れ出来る場所は全く無い。

「やだ。一緒にいる」

ミルは小さく鳴くように遊戯室の隅からミルジェとシェリアに訴えた。なかなか可愛いことを言うが、なかなか我が侘でもある。到着早々シェリアは頭を抱えた。

「ミル」

ミルジェはその蹲る小さな獣に近づき、目線を合わせた。ミルは縫るようにミルジェを見つめている。その灰色の片目が、オレンジ色に変色している。

ミルの灰色の目は感情によって色が変わる。人狼を含むジュノア人という人間の特徴なのだが、ミルは片目だけその性質を受け継いだ。もう片方の桜色の目は、恐らく古代獣のものだろう、と推測されている。

「落ち着いて。すぐ済むから」

「苦しいのやだ」

「苦しいのを止めるのよ」

ミルはだが、ますます小さくなった。怯えている。そもそも、何も施さないで《フラスコ》に連れて行くのは危険かも知れない。ミルがただの駄々っ子であれば、言い伏せて引っ張っていくのも可能だが、それは出来ない。何故ならミルは、獰猛性を孕む、魔獣なのだから。

「ミルジェ、離れて」

シェリアが叫んだ時、ミルのオレンジがかった目の色が変わった。真っ赤に燃えあがり、血よりも荒々しい赤へと変わっていく。力なく響いていた鳴き声も、猛獣の唸り声へと変わった。

気づいたミルジェが離れると同時に、ミルはその腕に食らい付いた。

その姿を見て、シェリアは息を飲んだ。

——虎……。

真白な二尾の縞無しの虎が、ミルジェの腕に食らいついた。ミルジェは短く悲鳴を上げつつも、空いた片手を素早く振り、空中からベルを取り出した。急いでそのベルを鳴らし、虎姿のミルに聞かせる。

「ミル、大人しくしなさい。私の言う事を御聞き」

ミルジェの震えた声が上がった。

そのベルの音が鳴り響くごとに、ミルの目の色は段々と薄らいでいき、元の桜色へと戻っていった。途端、虎姿が解け、ミルは先程のヒトの姿に戻った。震えながらミルジェの腕を離し、そこから流れる血を見つめ、自分の牙に付いた血を拭った。

腰を抜かしたミルを、ミルジェはゆっくりと抱きかかえた。

「ごめんなさい」

ミルはぼつりと言った。

「ミルジェ、ごめんなさい」

シェリアはミルジェに抱かれるミルの顔を見つめた。

どんどん成長が進んでいる。虎になってしまった次は、何になつてしまうのだろう。

ミルジェは慎重にベルを持ちながら、ミルを遊戯室の中央に寝かせた。ミルは驚いているのだろうか。自分のやってしまった事に。自分のやろうとしていた事に。

ミルは動けずに、ミルジェにされるが俥になっていた。獣使いの力を持つミルジェのベルが、今のミルを使役している。だが、ミルジェのこの力は、ミルの意識が完全になれば通用しない。トランス中のミルは、その意識がまるで別の何かに乗っ取られたようになってしまい、言葉もなかなか通用しなくなる。

研究所が脳手術をしたがるのも、無理はなかった。

「すぐに安定剤を」

ミルジェが言うと、ミルは乞う様にミルジェを見上げた。だがミルジェは、わざとその視線に答えずに、シェリアを見つめていた。

「腕、大丈夫？」

シェリアが問うと、ミルジェは苦笑した。随分深く牙が食い込んでいるように見えた。包帯の巻かれる其処からは、まだ少し出血しているのが分かる。今までの引っかけ傷や噛み傷とは明らかに違う。

ミルジェは軽く包帯の巻かれる自分の腕を見つめ、溜め息を吐いた。

「これで、また少し手術へ近づいちゃったのかしら？」

その言葉に、シェリアは口籠った。

ミルジェは目の前のガラス窓を覗いた。

遊戯室の中央で、ミルが背を向けて寝ている。その身体の至る所には管が刺さり、ミルの動きを少しずつ制していく。管を取りたがるミルだが、管より流れる薬によって、動けなくなっていく。今は小さく唸り、不快を示しているだけだった。

——完全に薬が効くまでは誰も入れるな。

そう言ったのは、騒ぎを聞いて駆け付けたガークだった。

彼はどう思っただろう。やはり、ミルは手術を受けるべきだと決心を硬くしたのだろうか。ミルが愛らしく笑うと、ふっと微笑みを漏らすのは、ガークも同じである。その愛らしさを殺してまで、彼は手術を強行するのだろうか。

「様子はどうです？」

ふと、声がかかった。

ミルジェとシェリアが振り返ると、其処にはレバがいた。ミルジェとシェリアの背が伸びても、彼の角はやはり見えない。二人が見上げていると、レバはガラス窓からじっと遊戯室を覗き、小さく溜め息を吐いた。

「トリコですか、変ですねえ。何処で感染したんだろう」

不思議そうにするレバを窺っていると、ふと彼がシェリアとミルジェの頭に軽く手を置いた。

「ところで君達、予防注射は受けてますか？」

その問いで、二人はやっと自分たちがまだ子どもである事に気付いた。ミルジェは既に大人扱いを受け始めて何年か経っているが、それでもトリコに掛かる恐れがあるし、世界的に見ればシェリア同様、まだまだ子どもである。丈夫な二人は、例えトリコに掛ったとしても、ほんの軽い症状で済むとは思うが、執務や勉強に支障をきたすわけにもいかない。

気不味そうに見つめ合う二人を見て、「おや」とレバは眼鏡を掛け直した。彼の眼鏡は紫外線防止効果がある為か、ガークがかかるものよりも反射しやすい。その為、時折、マッドサイエンティスト

に見えなくもないのだ。

トリコの予防。あれは、確か、かなり痛いタイプの注射器を用いたような気がする。

「それでは、今すぐに予防しな——」

「待って、待って待て！」

シェリアは早口に言った。

「ほら、確か、種族が違うとトリコは感染しないんじゃないか？」

「そ、そうよ、半獣人ミルからは、私たちには感染しないでしょう？」

ミルジェも濁した笑いを浮かべながら言った。

だが、レバは意地悪そうに笑った。

「残念でした。ミルは半獣人の魔獣だから、色んな種族に感染する恐れがあるですよー。もちろん、天翔人であるミルジェにも、ポエニシアンであるシェリアにも、ちゃんと感染の可能性があります」

レバは笑顔で言った。

ポエニシアンと言うのは、シェリアのように真っ赤な層の分かれる目を持つ者全般をさす総称のことである。そのような目は、悪魔と称されるマクア人達の特徴である為、悪魔の目と呼ばれる。悪魔と称されるのに相応しく、特殊な力が宿っている場合も多いのだが、稀にこの目は、マクア人の血を極薄く引く者にも継承される。つまり、隔世遺伝を起こすのだ。また、マクア人とは何の縁もない者にも現れる事がある。恐らく突然変異なのだが、悪魔の目を持つのにマクア人でない彼らは、時に蔑まれ、子どもならば山に捨てられる事も珍しくない。大人ならば故郷を追われ、マクア国へと亡命するか、当てもなく放浪している者などもあるという。マクア人でないポエニシアンを、ポエニシー人と称する事もあるが、その裏には悪魔を貶す意が込められている事も多い。

レバの言葉にはそのような意識が感じられる事は全くなかったのだが、シェリアは少し思った。シェリアとミルジェに病気が感染するのは、ミルの人間の気質ではなく、魔獣の気質によるものなのだ。

つまり、天使と称されるミルジェにも、悪魔と称されるシェリアにも魔獣に近い性質がある、という事になる。悪魔である自分はともかく、天使であるミルジェも同じと言う事が、シェリアは少し面白かった。

一方ミルジェは、注射の事でそれどころではないらしい。そう言えば注射だった、とシェリアはすぐに肩を竦めた。

夜中。《フラスコ》を満たす液体と、内部に巻かれた管を流れる液体とが、暗い大部屋の中で淡く光っていた。静寂に包まれる其処では、水の流れる音のみが響き渡っている。

その《フラスコ》に軽く触れる者が一人。部屋の中にいた。紺と紫で着飾られた見事なまでの翅で羽ばたき、栗色の短い髪から生える細い触角を揺らし、董色の目で《フラスコ》の内部を見つめる。

彼女は、蝶々だった。

花の世界と言う、人間達とは一線を引いた世界で生まれた虫人の彼女。沢山の蟲という小さな生き物を使役する、光の妖精のような魔女。彼女は幸せだった。ずっと、ずっと、何十年、何百年も欲しかった物が、目の前にある。そして、これは、いつか確実に自分の物になるのだ。

蝶々は《フラスコ》に頬擦りした。

軽く口付けし、その中にいる者を想う。

直に触れる度に、その者は大きくなっていく。だが、その内に秘められた無垢な魂はそのまま。無垢な光も無垢な闇も、蝶々の思うままに留まっている。

従順な獣。

蝶々はそっと《フラスコ》を指でなぞった。

「ミル……」

「ちよっと、遊びすぎましたね。パピヨン」

不意に声がして、パピヨンと呼ばれた蝶々は顔を顰めた。下を見ると、水色の長髪を揺らす美しい青年が彼女を見上げている。その無表情な灰色の目を輝かせ、彼は腕を組んだ。

「まさかちよつとからかったぐらいでトリコになっちゃうなんて、意外とひ弱なんだね」

「ダブル……」

パピヨンが目を細めると、ダブルと呼ばれた青年は壁際へと向かい、寄り掛かった。

「どうぞ続けて、パピヨン。私は見張りでもしますよ。時が来るまで我々は影の中の者なんですからね」

ダブルにそう言われ、パピヨンが戸惑いつつも再び《フラスコ》に触れた時、「成程」と声が上がった。驚いた二人だが、慌てなかった。二人の見上げた先。上段の入り口へと続く室内の階段部分に、一人の男がいた。

「何かおかしいと思えば、貴方達の撮み食いが原因ですか」
忍び笑いをする男。

その男を見つめ、ダブルは微笑んだ。

「ばれちゃったね」

ダブルがくすりと笑い、パピヨンを見やる。パピヨンは渋々《フラスコ》から離れてダブルの傍へと着地した。パピヨンは眉を顰め、その男を睨みながら言った。

「お前こそ、撮み食いするんじゃないよ？ それはあたしの獣。あたしだけの槌なんだからね。分かってるかい？」

「自分は撮み食いた癖に」

そう男は言い、腕を組んだ。

「安心してください。幾らなんでも、大切な魔獣を傷つけることは出来ない。凶暴だけど、意外と貧弱でしてね。若しも噛みつけば、ショック死しかねない」

薄らと牙を漏らし、男はにやりと笑った。

「折角美味しそうな朱の血が流れているのに、残念です」

「元氣だしなよ、ロタス」

ダブルが言った。ロタスと呼ばれた男は牙を漏らしたまま、溜め息を吐き、ダブルへと目をやった。

「貴方の槌もめでたく朱の核を宿しているそうじゃない」

そのダブルの言葉に、ロタスは目を細めた。

朱の核は滅多にいない。他人の血を好む性癖を持つこの男ロタスは、特に朱の核を宿している血が大好物だった。この大陸の生き物は白、光、闇、朱のどれかを宿しているのだが、捕まえてみればどの獲物も白の核ばかりで味気ない。かく言うロタスも白の核を宿している。光と闇は不味い事はないのだが、それでもたまたま捕まえた朱の核の味は忘れられないのだ。

だからこそ、ロタスは我慢していた。

目の前をうろちよる動く、獣ミルの事を。

二人きりになれば、とつくに襲っているかもしれないが、今は採った血をこっそり撮んで我慢している。それよりも、心の底から懷かせて、愛撫しながらこっそりと食したらどうだろうか。きっとミルは悲鳴を上げないだろうし、ショックで死ぬ事もないだろう。パピヨンに隠れてなら、何時でも行える。

だが、それには問題があった。

あの小賢しい天使と悪魔の小娘達だ。彼女達は研究所にいる時にはミルから片時も離れない。ミルもまた、あの二人に心から懷き、パピヨンを嫉妬させている。

ロタスは考え、息を吐いた。

やはり別の獲物を狙った方が速そうだ。

「ええ、ですが、なかなか注意深くてね。また見失ってしまった」「ドジだね。物影にでも引き摺って食べちゃえばいいのに」

パピヨンがくすくすと笑んだ。そのパピヨンこそが、今にでも物影に引き摺られ食べられてしまいそうな状況にいる事を、ロタスは言わなかった。

パピヨンが蟪蛄と蜘蛛の二人の魔女に見張られている事は知って

いる。如何にもお調子者のパピヨンの事だ。うっかり何かやらかさない事もない。また、そうでなくとも、パピヨンには自由がないのだ。だから、彼女はずっと影からミルを包み込んでいる。自分の思うとおりに、好きなように、扱う事の出来る唯一の存在に入れ込んでいる。

パピヨンはすでに、ミルの心を鎖で繋いでいた。

ともすれば、あの天使と悪魔よりも、懐いているのかもしれない。

「ともかく、ミルをちゃんと治してね、ロタス」

パピヨンが笑むのを、ロタスは溜め息混じりに見つめた。

「それは勿論ですが、貴方達、ここで私の事をロタスと呼ばないでと言ったでしょう？」

呆れたように言うロタスを、パピヨンとダブルは笑いながら見つけた。そして、影へと身を寄せていき、目を細めて呟く。

「分かってる。悪かったよ。レバさん」

二人の気配が、部屋から消えた。

囚ワレノ万華鏡 其ノ参

囚ワレノ万華鏡 其ノ参

シェリアの心配を余所に、ミルの成長は十歳を過ぎた辺りから緩やかになっていった。研究も進み、トランスを極力起こさないような処置が取られ始めた今は、ミルの灰色の目が真っ赤に変色する事も少なくなった。特に、ミルジェの持つベルの効果は絶大で、歳月と共にミルの我が侘は、ミルジェのベルの音に説き伏せられるようになっていったものだ。

だが、それでもミルは、《フラスコ》に入るのを拒んだ。理由は述べず、ただ嫌だと叫ぶばかりのミルに、研究員たちは頭を抱えた。結局説き伏せつつ、隙を突いて眠らせて、《フラスコ》に戻すしかない。その為に、ガーク以下数名の研究員は脳手術の決行を急ぐのだが、ミルジェやシェリアを含む他の研究員の反対もあり、計画は難航していた。

——このまま無かった事になればいいのだけど。

シェリアはその不安を胸に抱きつつも、ミルに悟られないように気をつけた。周囲の不安をミルが感じ取ってしまえば、またトランスを起こしかねない。しかもこのトランスは、ミルが危険を感じた時、その意図とは別に起こってしまうようだ。大抵の場合、トランスは大事に至る前に治まる。というのも、ミルが自傷行為をし始めると、空かさずミルの影から幻獣の様なものが飛び出してくるからだ。恐らく、ミル自身の体の一部なのだろうが、その幻獣達はミルから飛び出し、暴れはじめるミルを拘束する。ミルジェとシェリアはそれを、使い魔と呼んだ。使い魔達は稀に、何でもない時に気紛れに現れて、研究員たちを驚かすことがある。

ところでトランスは適切な処置によって、その発生が減少してきているのだが、トランス状態に陥っている時間は年々長くなってき

ている。その時のミルの人格は、普段のあやふやな人格とは、一線が引かれており、凶暴な男性のような口調で研究員を威嚇する。その人格をガークはレアと名付けた。というのも、ミル自身がレアと名乗ったらしいからだ。

ミルジェもシェリアも俄かに信じられなかったが、間近で目撃して納得した。

レアと名乗ったというその人格は、明らかにミルではなかったのだ。まるで、ミルの体に何かが乗り移っているかのようなだった。それがミルの体に組み込まれる剣牙虎の人格なのではという意見も成された。

だが、トランスで思わぬ救いもあった。レアの発見を封切に、ミルの人格への注目が高まり、観察が行われたのだ。観察結果では、普段のミルの性格パターンは七つであり、それがランダムで切り替わる事が分かった。肉体の性別が分からないのと同じく、人格も男性、女性、にもよらぬ中性的なものが多かった。また、ミル自身が使う一人称も変わってしまう事も確認された他、レア以外にも一線の引かれた女性的な人格の存在も確認され、ミルの基となったかの女性の名からミルケシオと名付けられた。

こうして、ミルの人格に着眼点が置かれたことで、脳手術の意義が問われ、研究所の方針も揺れはじめた。

しかし、ガークは退かなかった。そもそも、ミルが開発されたのは、広大なズペルス国を維持するための生体エネルギーの産出実験の一つであったのだ。因って、ミルからエネルギーを十分に採れる事が先決であり、それを抽出する為の《フラスコ》入管を阻害する恐れのあるミルの人格は、排除されなければならない、というのがガーク以下、脳手術を推す研究員達の意見だった。

其処で、ミルジェとシェリアはどうにかミルが《フラスコ》を嫌がらないように、調教することにした。トランスをある程度コントロール出来るようになった今、《フラスコ》だけが問題点なのだ。此処さえ解決できれば、ガーク達も納得してくれるだろう。

しかし、ミルはなかなか頑固だった。この時ばかりはミルジェのベルも効かない。《フラスコ》のある大部屋に入れようものなら、渾身の力でミルジェとシェリアの手を振り払い、部屋の外へと飛び出してしまおう。一度、そのまま研究所から抜け出してしまえば、冷や汗を掻いた事もある。

だが、克服の為の調教は続いた。

頑丈な鎖と口輪を嵌められ、ミルを《フラスコ》のある部屋へと引っ張り、その《フラスコ》へと触れさせるという荒療治だ。鎖と口輪はトランスへ対処なのだが、小柄な少年か少女のような姿のミルには、少し残虐にも見える。この事がトラウマにならないといけないのだが。

「ミル、落ち着いて。もう怖い事はなにもないから」

ミルジェが穏やかに語りかけても、ミルは信じてくれない。

拘束されてまで信じろと言う方が酷かもしれないが、実際に今の段階では《フラスコ》内で、ミルが苦痛を感じるような実験はされていない。エネルギーを抽出する作業も、ミルに一切の不快を与えないように配慮されている。と言う事は、幼い頃に為されていた実験が、未だにミルの心を傷つけていると言う事だ。

シェリアはいつも、頃合いを見計らって調教を止めていた。ただでさえミルが嫌がっているのを、その影の中から使い魔達がうずうずとしながら見つめているのに、あまりに無理強いして、鎖を切るまでに抵抗されては堪らない。

ミルが不快に打ち震え始めたら、直ぐに止め、その恐怖を打ち消してやらなくてはならなかった。

「嘘だ。また電気流すんでしょう？　また体中に管を刺すんでしょう？」

「《フラスコ》内ではしないわよ、そんな事」

「兎に角、やだ。どうして入んなきゃなんなの？」

シェリアは悩んでいた。

脳手術の計画の事をミルに打ち明けるべきか、否か。ミルは既に

大人に近づいている。合成生物であるミルがいつ大人になるのかはつきりした事は分かっていないが、それでも以前よりはずっと物事が分かってきている。脳手術の計画を理解させた方が早いのではないだろうか。

だが、それに反対したのが、レバだった。

そのような蛮行を計画している事を知れば、ミルはこの研究所から脱走しかねない。それだけは阻止しないといけない。そもそも研究所の所有物があまりに知恵を付けてしまうと、それだけで厄介なのだ。

彼は脳手術に反対を示していた味方だった為、ミルジェもシェリアもその言葉がショックだった。だがしかし、彼の言い分は尤もだった。ミルが若しも本気で脱走を計画すれば、捕まえることは不可能かもしれない。特に、相変わらず城へと帰る週末は、ミルジェもシェリアも見張りがてらミルの傍につく事が出来ないのだ。

やはり教えないで、無理にでも調教するべきだ、とシェリアは肩を落とした。

「もう止めよう。部屋に戻ろうよ」

ミルが半泣きになりながら言いだした頃、《フラスコ》の大部屋に人が入って来た。レバだった。

「薬の時間です。ミルを遊戯室に連れてきて下さい」

静かに告げる彼の言葉に、一番ほっとしたのはミルだった。だが、すぐにミルは考えなおし、複雑に顔を顰める。薬も我が俚なミルが嫌う事物である。飲み薬であれ、注射であれ、点滴であれ、不快に思うものは全て嫌うらしい。そんなミルに薬を飲ませるのが一番上手いのが、レバだった。

彼はふっと目を細めると、ミルの真っ白な頭に軽く手を置いた。

「ほうら、我が俚はいけませんよ。もう大人なんだから」

ミルが大人なのかは兎も角、「大人なんだから」という言葉をかけると、いつもミルは口を噤み、我慢し始める。だが、同じ事を他の研究心がしたとしても、こうはいかない。ここはやはり、レバの

言葉の駆け引きの上手さが物を言うらしい。

ミルは小さく項垂れて、「うん」と頷いた。

遊戯室の中で、ミルは寝転がっていた。

ここ最近、ミルジェとシェリアは妙に《フラスコ》へと近づけようとする。あんなに怖いと訴えても、分かってくれない。

ミルは少し寂しかった。何故、分かってくれないのだろう。何故、聞いてくれないのだろう。まるで、何かを恐れているように、ミルジェとシェリアは心の鞭を取る。一体二人に何があったのだろう。

――我が侘過ぎたのかな、僕……。

ミルは溜め息を吐いて、寝転がった。遊戯室の床はとてもふかふかで心地良い。この上を寝転がっていると、不思議な夢を見た。一面が緑色で、上には真っ青な天井が果てしなく広がり、とてもいい香りのする風がミルを包み込むのだ。其処にいるととても温かく、幸せな気分になれる。たまに見る美しい夢だ。

ふと、目を覚ますと、遊戯室の《妖精》が傍にいた。パピヨンとダブル。代わる代わる訪れる彼らは、独りきりのミルを慰めるように撫でてくれる。何処から来ているのか、どうやって部屋に入ったのか、ミルは知らない。きっと《妖精》だからだ。ミルを取り巻く使い魔達と同じで、物体を通り抜ける事が出来るのかもしれない。

だから、彼らの存在は、全く怖くなかった。

危害を加えずに、優しくしてくれる彼らを如何して怖がれるのだろうか。

「素敵な夢を見たようだね」

現れたのは、ダブルの方だった。灰色の彼の目を見つめると、ダブルはそっと手を伸ばし、ミルの髪を軽く撫ぜる。

「その幸せ、少し分けてよ」

ダブルが言うと、途端にミルは全身の力が抜けていくのを感じた。

《妖精》と遊んでいると、よくこのような脱力に襲われる。苦しくはないし、寧ろ、不思議な快感があったが、ミルは必ず、眠ってしまうのだ。

微笑むダブルの美しい顔を見つめながら、ミルは段々と目を閉じていった。

昼は騒がしいが、夜は静寂に包まれる研究所。

少しの物音が瞬く間に所内に響き渡るが、大抵の場合、この場所に多く住む実験体の誰かによるものだ と解釈される。

だが、油断は出来ない。

その青年は、通気口からラボの床へと慎重に忍び込んだ。

確かに所内はそうだが、その中でも嚴重な警備が敷かれている場所があるのだ。魔術師でも雇って結界を張るまでもないようだが、それはきっと、侵入者に慣れているからだろう。どんな侵入者でも、その目的を果たすことは出来ない。

とんだ思い上がりだ、と青年はくすりと笑んだ。

——俺は他の奴とは違うからね。

侵入者が目的を断念するのは、その入り組んだ構造と、折角辿り着いたのに開かない遊戯室とやらの扉である。試行錯誤の末に、見つかって退却を余儀なくされたという話はざらだ。だが、幸いな事に、こうして侵入する者達は皆、只者ではないため、捕まって何処の回し者かを暴かれるという間抜けはしない。

無論、青年も、その初めの者にならない自信はあった。

黒と銀の混じり合う髪を布の切れ端で纏めると、彼はそつとラボの扉を開いた。よっぽど所内の警備に自信があるのか、外と中の番人番犬の数には差がある。

——番犬か。

青年は暢気に微笑んだ。

——あいつ、如何してるかな……。

こっそり廊下へと忍び、ぐるりと見渡す。別の仲間が仕入れた情報によれば、目的のものは、誰もが断念する遊戯室にいるらしい。今宵は守り子たちがいないため、《フラスコ》に入れるのを渋ったそうだ。

青年は溜め息を吐いた。

ここで只の侵入者だったら、《フラスコ》だったらどんなに良かったか、と悔しがらうけれども、彼は違う。

ガラス玉のように輝く目を細め、青年は廊下を進んだ。

見つからない自信もある。

音を立てない自身もある。

遊戯室に着けば、こっちのものだ。

遊戯室は、一見唯のラボにしか見えない。大きなガラス窓が設置されている他、扉も普通の物に見える。だが、それに油断するようではまだまだ未熟者だ。この扉こそが曲者なのだ。どんな針金も使えず、限られた者しか開ける事が出来ない扉。施錠されているもの以上に厄介な泥棒泣かせの扉なのだ。

青年はものの五分でその扉の前へと辿り着いた。

——新記録だとうれしいかもな。

相変わらず暢気に思いながら、青年は扉へと手を掛ける。ぐっと力を込め、扉の力を緩める。扉はやはり一筋縄ではいかなかった。流石は泥棒泣かせ。だが、青年もただの侵入者ではないのだ。さらに力を込め、ふっと光を放った。青年の手の中で籠るように放たれた光は、扉の鍵穴を弄り、嘲るように扉の抵抗を抑え込む。

かちやりと小さな音がして、青年は汗を拭った。

すぐに扉を開くと、遊戯室の内部が目飛び込んできた。

ふかふかの床に、水色の壁。そしてその真ん中に眠る、白い小さな獣。

青年はそっと獣に近づいた。

何処から如何見ても、少年か少女かといったヒトの姿をしている

半獣人。唇から小さく牙が漏れ、真っ白い長めの髪を垂らしている。特徴が合致した。

——後は目の色を確認出来たら完璧だけど。

そう思いつつ、青年は獣に手を伸ばす。

——そんな時間はないしね。

ふと、獣が動いた。目を覚ましてしまったらしい。

「誰？ 何？」

寝呆けた声で獣が言った。

「おじさん、誰？」

「おじさんじゃねえよ」

青年は思わず口を開いた。

「お兄さんと言えって。安心しな。悪い人じゃないから」

「おじさん。泥棒？」

「だから」と言いかけた所で、青年は目的を思い出し、獣を抱え上げた。時間がないのだ。小さく悲鳴をあげる獣の口を塞ぎ、優しく語りかける。

「静かに。名前なんて言うの？」

「ミル」

獣は震えつつも答えた。

「そうか、ミル。ちよつと散歩に行こう。外、みたいだろ？ 連れてってやるよ」

「本当？」

ミルと名乗った獣は、嬉しそうに青年を窺った。

——ちよろいもんだぜ。

そう思いつつ、青年は声を押し殺して囁いた。

「ああ。だから、静かにね。内緒だぜ？」

「うん」

素直に応えるミルを、青年は軽く撫でた。だが、思わぬ事をした。ミルの首に繋がる管をうっかり取ってしまった途端に、警報が鳴ったのだ。

青年は慌てて遊戯室を抜け、入って来たラボへと向かった。

幸いミルは、ちょっと散歩に行くだけ、と信じているためか、助けを求めなかった。騙すのは忍びないが、これも任務。

——許してくれよ。

青年は走り続け、ラボへと辿り着いた。逃げ脚が速いのは、こういう時に役に立つ。また、ミルが軽いのも救いだった。入って来た通気口へとミルを押しやり、自分もその中へと滑り込む。

此処まで来れば、もう誰にも見つからない。

通気口の蓋を閉めた青年は、溜め息を吐いた。

通気口の向こうは地下通路が広がっている。とっくに地図からは消えた、研究員の知らない通路である。

「ソトってここ？ 変な匂いー」

ミルが不満そうに言った。

「おじさん、おじさんは何て名前なの？」

見上げてくるミルを抱え上げ、青年は呆れながら言った。

「だから、おじさんじゃねえって言ったろ？ お兄さん」

「おにーちゃん、名前教えてよ」

青年はミルの背を軽く叩き、答えた。

「好きなように呼べって」

だが、ミルは「えー」と不満そうに言うと、肩にかかる青年の髪をびっと引っ張った。なかなか遠慮のない奴だ。

「だって、あたしは名乗ったのに、酷いじゃない」

ミルは先ほどの少年の声とは打って変わって、少女の様な声で言った。

——成程、これが不定形の魔獣か。

青年は納得しつつも、「こら」と一喝して髪を引っ張るミルの手を退けた。

「あーだから、好きなように呼んでってば」

青年が面倒臭そうに言うのと、ミルは一気に顔を顰めた。

「いいもん。じゃあ、人呼んじゃうから。誰かああ！ たすけ——」

「しいー!」

青年は慌ててミルの口を塞いだ。

何と喰えない奴。

他愛無いと思わせといて、何とも狡猾な獣だ。

幸い、ミルの声はこの地下通路の中ではあまり響かなかったが、大人しくさせるためにも名乗った方が良さそうだ。

「降参だ。俺の名はジャック」

だが青年が言うと、ミルは手を口から離して不満げに言った。

「偽名乗るくらいだったら、あたしは——」

「ああ、分かった分かった。お前には敵わないよ」

青年は溜め息を吐いた。

何故、ばれたのだろう。魔獣だからだろうか。

まさかこんな所で名乗らないとならないなんて。

「俺の名は、カラカル。本名じゃねえが、みんなカラカルって呼んでるよ」

カラカル、とミルは首を傾げ、くすくすと笑いだした。

カラカルと名乗った青年は顔を顰め、ミルを見つめた。

「なんだよ、何がおかしいんだよ」

「だって、狐の癖にカラカルって変なのー」

ミルはそう言うと、ひょいっとカラカルの手を抜けた。慌てたのも束の間、ミルはカラカルの服を掴み、目を輝かせて言った。

「ねえ。僕、本物のカラカルに変身出来るよ? 見たい?」

カラカルはふっと笑みを零した。

ミルは全く恐れていない。きっと、状況を理解していないのだからけれども、全力で助けを求められずに助かった反面、無邪気に甘えられると、自分がとても悪い事をしている気にもなった。

——って、言っても、任務だしなあ……。

「ねえー? 見ないの?」

ミルが服を引っ張る。

見たところ、十代中頃に見えなくもないのに、まるで幼い子ども

だ。相当甘やかされてきたのか、もともとこういう性格なのかは謎だが、可愛いとも言えないでもない。眼鼻立ちもいいし、送り届けた後、研究が終わったら皇帝はミルをどうする気だろうか。

ふと、そんな事をカラカルは考えていた。

ミルの白い頭に手を置き、カラカルは言った。

「後で見せて。今は此処を出ようか」

ミルの手を掴み、カラカルは歩きだした。

「ミルがいないだ？」

ガークは警報の鳴り響く中で、遊戯室へと急いだ。この所、徹夜続きだった為、やっと一息つけた今日、彼は熟睡していた。そんな中での警報に飛び起きてみれば、この騒ぎだ。

また、ミルジェとシェリアがいない時を狙っての侵入者だ。しかし、今回は一味違う。侵入者はあの扉を突破し、五分にも満たない間にミルへと到達したのだ。

誘拐だ。それとも、略取だろうか。どちらにせよ、窃盗には間違いない。

この手際の良さ。何処の国の回し者か、目星は付いている。だが、根拠がない上に、易々と喧嘩を吹っかけていいような相手ではない。国外へと逃げ出されてしまったては、後あと面倒な事になる。

遊戯室へと辿り着いたガークは、息を荒げたまま、低く唸った。

何とかしなければ。

ついて来た研究員を見やり、ガークは告げた。

「ここはいい。後は私に任せろ」

研究員は頷き、去っていった。

その背を見つめると、ガークは遊戯室の扉を閉めた。周囲を窺いながら、押し殺した声で恨むように言う。

「何て様だ。すぐ近くで見張ってながら、易々と盗まれやがって」

荒々しく言うと、遊戯室の隅で灰色の目が光った。薄らと目を細め、宥めるような声が上がった。

「まあ、落ち着いて。今、パピヨンが追ってますよ。彼女を怒らせたら怖い。心配しなくても、すぐにミルは返って来るでしょ」

「ダブル、お前も行け。此処でミルに逃げられたら元も子もない。唯一手元にある槌だというのに。お前はその価値が分かってない」

「だから、落ち着いて下さい、ロギラ」

ダブルと呼ばれた声が言うと、ガークは目を光らせた。

「その名で呼ぶな。兎に角、お前も捜せ。万一、捕まえられなかったら、お前を研究材料にしてやるぞ」

「おお怖い。分かってますよ。ガーク班長」

声が消えていく。

ガークは唸りつつ、遊戯室を飛び出した。

——何処にいる……？

鼻に問いながら、彼は歩きだした。

——絶対に、逃がさん。

「ねえーまだソトじゃないのー？」

歩き始めて五分もしないうちに、ミルは飽き始めた。初めはその不満を無視していたカラカルだが、ミルがふらふらとカラカルの傍を離れようとした為、カラカルは慌ててその肩を掴み、目を合わせた。

「おぶってやるから寝てな。外に着いたら起こしてやるよ」

だが、ミルは不満そうな表情を浮かべると、溜め息混じりに首を振った。カラカルの袖を掴み、ミルは言った。

「そろそろ帰らないと、ミルジェとシェリアに怒られちゃうよ」

もと来た道に戻ろうと促すミルを見つめ、カラカルはラクダ色のマントの下へとそっと片手を突っ込んだ。

——早くも御入用とはね。

懷に忍ばせた小瓶を掴み、ミルに見えぬように中身を布に含ませる。ミルは気付いていない。ただ素直に付いて来て、素直に飽き、素直に帰りたいと言っているだけのようだ。だが、早いところ手を打たねば、大声を出すかも知れない。

「分かった。ミル、ちよつとこっち来い」

カラカルは手招き、ミルを寄せた。その刹那、ミルを捕まえてその口に布を宛がった。ミルは突然の事に驚き、激しく抵抗を見せ、如何にか叫ぼうとしたが、それも長くは持たず、ぐつたりとカラカルの腕に倒れ伏した。

「悪いね。恨まないでくれよ」

カラカルはその頭を軽く撫でると、素早く抱えた。流石に、起きていた時よりも幾分か重いが、容易に運べるのには変わらない。此処からは今まで以上に手早く進めそうだ。

カラカルはにやりと笑み、走りだした。

だが、その時だった。

「お待ちよ、泥棒狐サン？」

声がした。娘の声だ。

——まさか。

カラカルは目を丸くして周囲を窺った。如何に狐相手とは言え、こんな狭い場所で音や匂い無しに忍び寄れる者がいるだろうか。だが、居たのだ。カラカルは警戒した。進行方向に誰かがいる。声かまして、女だろう。だが、唯の女ではない。このような近づき方が出来る者が唯者なわけがない。

「その仔を連れて行く気かい？」

堇色の目が、暗闇に光っている。

冷たいその目線。

カラカルへと向く、殺気。

カラカルは身構えた。剣を抜かなければ。だが、堇色の目は、カラカルがミルを下ろすのを待っている。取り返しにきた者だ。研究

員なのだろうか。

「あんたは番人かい？　それとも保護者？　随分甘やかして育ててみたいだねえ」

「ふうん、余裕じゃない。なら、容赦なくいかせて貰うわ」

堇色の目が、ふっと消えた。

カラカルは目を見開き、全身の感覚を研ぎ澄ました。気配や匂いは消していても、存在は消していない筈だ。気付かれないように忍び寄り、カラカルからミルを奪い返す気だろう。カラカルは走りだした。

——くそ、取られて堪るか！

此処を抜けさえすればいい。出口の先は、研究所の区域外。其処には仲間が待っている。其処まで逃げ果せれば、カラカルの任務は終わる。せめて自分の任務は穩便に終わらせたいというのに。

——来るなよー！

カラカルは祈りながら走った。

途端、ずっと背後を風が切った。

ミルを何かが掠る。

あの目が動き始めた。

カラカルは前へ前へと飛び込むように走った。

戦うだけ間拔けた。

ミルを取られたら無意味なのだ。

だが、そんなカラカルの抵抗も、気休めにしかなかった。

「畜生おおお！」

カラカルは唸った。手元が軽くなっている。

くすくすと笑う声が聞こえ、カラカルはガラス玉の目を血走らせてそちらを見やった。

暗闇の向こうで、堇色の目が笑っている。その手の中には、熟睡しているミルがいる。愛しむように頬を撫で、堇色の目は嘲るようにカラカルを見つめていた。

「一昨日来なさい、泥棒狐サン」

鈴を鳴らすような音と共に、董色の目は消えた。と、同時に、あれだけ苦勞して捕らえたミルも、持っていかれた。

カラカルは立ち尽くした。

脱力感だけが残る。結局自分は、ミルのベビーシッターと、インストラクターをただけだ。本番が始まったらすぐに終わってしまった。襲って来るのは、疲労感と、虚無感。もう一度、盗みに行くなど、考えたくもない。

任務失敗。

なかなか自信を無くさせる言葉だった。

「向いてないのかな」

旧友に打ち合いで負け続けた故国での日々を思い出した。あの時も確か、こんな独り言を宣っていたものだ。

ともかく、もう諦めるしかないだろう。そもそも、任務の内容は、研究所内部の構造及びミル計画の確認。その中で可能ならば、という上での略取依頼だ。可能ならば、と言う事は、この場合は諦めてもいいだろう。

彼に出来る事は、内部報告と、ミルの確認報告ぐらいだろう。

だが、やはり現物を押さえられなかったのは、痛い。

「やる気無くすぜ……」

カラカルは溜め息混じりに、出口へと進んでいった。

ミルが発見されたのは、合成生物生成ラボの目の前の廊下だった。熟睡したまま廊下のだ真ん中で丸まっており、駆けつけた研究員たちが遊戯室へと運ぶ際も、ミルは全く目を覚まさず、本当に生きているかと研究員たちを冷や冷やさせたが、何とか無傷で帰って来たようで、皆、安心した。

だが、ガークは頭を抱えた。

何処をほつつき歩いたのかは謎だが、ミルは泥だらけで、絶対に

雑菌だらけと思われるような姿だったからだ。目覚めるのを待ってから、殺菌するしかないだろう。

「檻にでも入れとけ。絶対に監視を付けろ」

ガークは怒鳴るように言い、大きく溜め息を吐いた。

パピヨンが追い付いたからいいが、下手すれば、完全に奪われていただろう。

何にせよ、ミルが無傷なのが幸いだった。

「起きたら風呂に入れて、その後に面談する。何があったか詳しく聞こう」

ガークは溜め息混じりに言い、自室へと戻っていった。

やはり、ミルジェとシェリアは此処に必要なかも知れない。だが、ずっと居て貰うのも、困るのだ。困る理由があるのだ。ガークもレバもパピヨンやダブルも、出来るだけ長く、彼女達に城にいて貰いたい。そうして欲しい理由があるのだ。

居て欲しい、だが、居て貰っては困る。

——彼女たちを洗脳出来たらいいのに。

ガークは怪しく笑いながら、思った。

——そうすれば……。

ズペルスは、自分達の物になるのに。

自室の扉を開き、ガークは素早く部屋に入り、そして、静かに音がしないように扉を閉めた。

囚ワレノ万華鏡 其ノ肆

囚ワレノ万華鏡 其ノ肆

ミルが盗まれそうになったという話は、瞬く間にミルジェとシェリアの耳に入った。今までそのような報告は何度もあった。実際に誘拐されたのも初めてではない。だが、すぐに戻って来たとは言え、一時行方不明になったのは初めてで、ミルジェもシェリアも不安を感じた。

そのため、週末が終わると、急いで研究所へと駆けつけたのだが、呆気にとられるほどミルは暢気に二人を迎え入れた。研究員の話によれば、ミルに攫われた時の事を聞いても、知っていそうな癖に話したがらない素振りを見せるらしく、ガーク達を大層悩ませているらしい。

シェリアは呆れた。

如何してここまで協力的でないのだろう。

「ミル？ 何があったか話してくれる？」

擦り寄ってくるミルにそう訊ねたのだが、笑顔で誤魔化されてしまった。ミルの特性は甘えることらしい。獰猛な生き物の遺伝子を組み込んだ反面、力無く他の種族に頼ってしか生きられない魔物の血も混じっており、その性質が現れているのだ、とある研究員が仮説を立てていた。可愛らしく甘えることで、自分よりも遥かに力を持つ生き物の寵愛を受け、守ってもらいながら上手く生きていくという変わった魔物らしい。

ミルが時折、周囲の者の顔を綻ばせるのは、この特性の所為だろうか。

シェリアは心を鬼にした。

「ミル！ 言わないなら《フラスコ》に入れるよ！」

ミルは驚愕し、目を見開いたままシェリアを見上げた。《フラス

コ》という単語は効果があったようで、ミルはぶるぶると震えだし、ミルジェの方へと縋りついていった。

シエリアはミルジェを見やった。

ミルジェも溜め息を吐きつつ、ミルへと語りかけた。

「ミル？　何があったのか話して頂戴？　じゃないと、私たち本当に困ってしまうし、貴方の為にもなるのよ？」

ミルはおずおずとミルジェとシエリアを交互に見上げ、大きく息を飲んだ。そして、口をぱくぱくと開き、絞り出すように訊ねてきた。

「言ったら……《フラスコ》に入れない？」

「今日は絶対入れない」

シエリアは言って、他の研究員をちらりと見やった。目があったレバが軽く頷いた為、シエリアはほっと胸を撫で下ろしつつ、ミルと目線を合わせた。

「約束するわ。お願い、話して？」

ミルは体を小刻みに震わせながら、自分を取り囲むミルジェとシエリアや、他の研究員たちを見上ると、観念したように項垂れて答えた。

「分かったよ」

そう言い、すぐにミルジェとシエリアを見上げた。

「でも、何だかあやふやにしか覚えてないのだけど、いい？」

「いいわよ」

窺うミルの頭を撫でながらミルジェが言うと、ミルはやっと安心したように笑い、話しだした。

ミルを盗んだ国。

それは、西にて権力を揮うバザイ大帝国なのではないか、という憶測がなされた。

これまでミルを狙った侵入は何度もあった。

ミルを管理するこの研究所はズベルスの国家機関。こんな場所に泥棒目的で入る者など、余程の命知らずな大泥棒か、他国より命を受ける工作員しかいない。特に、人工のエネルギー産出生命体であるミルには注目が集まっている。極秘に進められてきたはずなのだが、とつくにミルの存在は多くの国が知っており、自国の発展と安定を求める指導者たちは、挙ってミルを横取りしようと密偵や工作員を送り込むのだ。

勿論、表向きではその片鱗を見せる事はない。だが、その表情に潜められている裏心は、研究所への侵入と言う形で見え隠れする。侵入痕跡、略取方法、技術などで、何処の国の回し者なのか、大体予想がつく。だが、根拠が無い上に、あらゆる問題が積み重なり、その事を表だって詮議する事は不可能だった。

ミルを盗まれないのは、ミルを匿う場所がいいからだ。

遊戯室は特に侵入者泣かせの扉で守られており、どんな破壊活動もその扉の前では通用しない。針金を使ったとしても、特殊器具を使ったとしても、結果は変わらず、此処で誰かに見つかかり、計画を断念する者ばかりだったのだ。

ミルが誘拐されかけたのは、《フラスコ》に入れられている時ばかりであり、その時は研究員もいる中の強行である為、目撃者も多く、結局は誰かに拘束されてミルは保護される。だから、今ではミルジェとシェリアがいけない時にはなるべく遊戯室でミルを匿う事になっている。万が一、ミルが不安定になったとしても、ミルジェとシェリアがいなければ、遊戯室に寝かせ、薬を注入して持たせるしかないのだ。

そのお陰で、侵入者こそあれども、誘拐される事は長年無かった。

「その、遊戯室が突破されたのは痛いわね」

遊戯室の廊下で、ミルジェが赤い羽根を下げながら言った。

遊戯室が突破されるのは、本当に信じられない事だったのだ。そんな事が出来る国など限られてくる。だからこそ、西の大国バザイ

の名が挙がったのだ。

「そろそろミルにも自覚を持ってもらわなきゃ、駄目じゃない？」

ミルジェの赤紫の目が、ちらりとシェリアを眺める。

シェリアは頬杖を突いた。

周囲の国も発展を重ね、その技術力を上げている。だが、ミルへの注目は治まらず、未だに密偵や、略取目的の工作員は送られてくるのだ。

どこぞの国――今の段階では、バザイが有力だろう――が、この研究所の難関を全て突破し、大切な情報や物を奪っていきける日も、もう既に来ているのかもしれない。

確かに、これからはミル自身にも自覚を持って貰い、最低限は身を守ってもらうしかないだろう。今まで、家出をすると起こる怖い話などは十分に話したが、他国の怖い話ももっと沢山話さなければならぬだろう。

「結局、侵入者の情報は狐の男って事しか分からなかったしね」

ミルジェが頭を抱えながら言った。

ミルは寝呆けていたのか、単に記憶力が残念なだけか、余計な事ばかり覚えていて、大切な侵入者の特徴を覚えていなかった。名前も聞いたらしいのだが、記憶からは完全に抜けており、期待させた研究員たちをがっかりさせた。ミルジェのベルを使っても同じだった所から、侵入者の肩を持っているのではなく、本当に忘れていたのだとも証明され、シェリアは苦笑いした。

「ともかく、管理をしつかりとすべきね」

シェリアはそう言って、遊戯室へと入った。

振り返るミルの項には注入器が刺さっている。点滴と注射器を合わせたような物で、点滴の管をすぐに抜いてしまうミルには、よく施される。安定剤などはこれで注入しているのだが、これに慣れると、如何しても注射や点滴で入れなければならない薬の投与が不安で仕方ないというネックもある。

「ミル、具合はどう？」

ミルジェが訊ねると、ミルは指を弄りながら答えた。

「何ともない。これいつ取るの？」

首の後ろへと手を伸ばしてミルは訊ねる。

見たところ、薬は半分も減っていない。

「まだまだかな」

シエリアが呟くように言うと、ミルはつまらなさそうな顔をした。確かにこの投薬中は、ミルが出来る事も限られてくる。無理に動けば薬が漏れ、相当痛い思いをする為、ミルは大抵部屋の真ん中で横になるか、積み木を徐に転がすぐらいでしか暇を潰せない。

だから、シエリアはこの時間を使って、ミルに授業を行う。知っておいて欲しい事や、知っていても差し支えない事を教えるこの授業は、ミルが周囲に付いているいろいろ尋ね出した頃から行われている。無論、ミルが知らなくていい事は伏せて。

ミルも投薬中にシエリアが来たら、その授業が始まるのだと覚えているらしく、大人しく座ってシエリアが喋るのを待つのだ。

「ジュギョー今からなの？」

ミルが言った。

シエリアは頷いて、ミルの前に座る。この時、大抵ミルジェは部屋の隅の椅子に座り、様子を窺っているが、授業に介入することはない。

「今日は何の話？」

ミルは少し期待をしているらしい。毎回話の前はそんな素振りを見せるのだが、単に話と言うものが好きらしく、どんな話でも大抵面白そうに聞いている。ちゃんと理解しているのはさておき、大人しく聞いてくれるのはシエリアに取っても救いだった。

「今日は、追い人の話」

シエリアは軽く手を叩き、余所見を仕掛けたミルを注目させると、語り出した。

追い人。それは、大人の言う事を聞かずに家を飛び出した子ども達を追いかける鬼である。彼らは子ども達を追いかけて続け、捕まえ

た子どもを食べてしまおうと言う。捕まった子どもは食べられた後もあの世でずっと辛い思いをし、泣きながら親に乞うが、許される事は稀な話で、大抵はあの世にても追い人に追われ、永遠に食べられ続ける。

ミルはその話をいつも怖がって聞いていた。

それを利用しが、シェリアはよく、勝手に研究所を抜けだしたら追いや人が現れると言い聞かせていた為、聞き終わったミルは、絶対に勝手に研究所を「家出しない」と誓っていた。にもかかわらず、ミルは侵入者にほいほいついて行ってしまったのだ。

シェリアはうんとミルを怖がらせることにした。即ち、言い付けも聞かずについて行った子どもを追い人がどう捉えるか。

十五歳前後にもなって、普段のミルはまだこういう話を信じ込んでしまうのだ。

良く言って無垢。悪く言って単純。

いつもの追い人の話をした後、シェリアは付け加えた。

「追い人がね、この研究所に悪い仔の匂いがするって言っていたわ」
ミルは目を見開いた。笑い飛ばしつつも、その様子は落ち着かない。

「ま、まさかー。だって、なんで、シェリアがそんな話知ってるのさ」

ミルは莫迦にしたように言った。だが、それは、些か自分に言い聞かせている感が拭えないものだった。

シェリアはくすりと笑い、赤い目を光らせた。

「あら、私は悪魔なのよ？　追い人も悪魔の一種だから、私と知り合いなの」

事実、様々な理由で独りきりで放浪する子どもを攫い、食べてしまうような悪魔や魔物はいる。シェリアのようなマクア人にもそういう言った輩を止められない者がいるため、全てが嘘と言う訳ではない。研究所にいるミルを狙う者は、幸い生きているミルを求めているが、外に出れば必ずしもそうとは言えない。一步外に出れば、魔

物も猛獣も一杯いる。彼らは人間よりも獣の血を求め、更に、普通の肉よりも変わった力を持つ肉を求める。いざと言う時に得意な甘えに失敗すれば、ミルのその後は一つしかないのだ。

そのような危険を避けるためにも、釘を刺す必要がある。

シェリア自信が悪魔と言う事実が効いたのか、ミルは失笑した。

代わりに小刻みに震え、不安げにシェリアを見上げた。

「僕、食べられちゃうの？」

期待通りの反応。

シェリアは軽くミルを撫でて、言い聞かせた。

「追い人には、『此処にはいない、人違いよ』って言つといたわ。でも、次に追い人が来てしまったら、こうはいかないかも知れない。分かった？」

「僕、行かないよ。もう外になんて勝手に行かない」

少年の様な声で、ミルはしっかりと誓った。

この誓いが数日持てばいいのだが。

「いい子ね。じゃあ、もう一つ話をするわ。余所の国がどんなに怖いか教えてあげる」

「余所の国？」

「ミルがついて行った男の人は、余所の国の人よ」

ミルは首を傾げようとして、項の注入器を揺らして慌てて動きを止めた。幸い、針は動かなかったらしい。

「余所の国の人について行くと、余所の国に連れて行かれちゃうの」
シェリアは語った。

「気付いた時には自分が何処にいるかも分からない。余所の国っていうのは、とても恐ろしい所よ。特に怖いのは、ジュウニネン国」

「ジュウニネン国？」

シェリアは頷いた。

「この大地の中央にある国よ。一見平和そうで、暖かな国に見えるけれど、其処には差別が犇めいている。獣人の場合は、気に入られれば檻に入れられ、気に入られなければその場で殺されてしまうの。」

ミルは可愛いから、誰かに気に入られて、ずっと暗くて狭いじめじめとした檻の中で暮らす事になるでしょうね。とても、嫌な事をされ続けて、鞭で打たれて痛い思いもするかもしれないわ」

嘘は言っていない。

大陸の中央にあるジュウニネン国では、特にその中心地では、悪魔の目や猫族、獣人や魔獣等への差別が根強く残り、魔女狩りも近年まで行われていた。ある程度の地位に居るマクア人やそれ以外のポエニシー人等も、悪魔の目と言われる赤い目を持つ限りは気が抜けず、獣人を連れた旅の一群も、ジュウニネン国にいる間は獣人だけの外出を禁止するなど、注意が必要な場所である。

あり得ないと思うが、若しも、ジュウニネン国の工作員にミルを取られた場合、用無しになったミルがどう処理されるか分からない。直ぐに獣人を売り捌く事を生業とするハンター達へと高値で引き渡されるかも知れない。そうなれば、シェリアの言った事も現実と化すだろう。

それならば毛皮にされないだけましなのだが。

「ジュウニネン国じゃなくても、危ないの？」

ミルが恐々訊ねた。

シェリアは頷いた。

獣人を売るハンターはこの世界の各地に散らばっている。

多くの場合、町中での狩りは禁止されているし、襲われた獣人が助けを求めれば、警察が助けしてくれる国もある。

だが、そうでない国がある事も事実であるし、町中でなければ野放しになっている事も事実だ。その上、節度の無いハンター等は、禁止されている町中でも狩りをする。つまり、人攫いだ。特に、持ち主のいない獣人こそ、いい獲物であり、万一、攫われた途中で逃げ出したミルが、彼らに鉢合わせにでもなれば、ズペルスがミルを探すことは極めて困難になってしまう。何処に売られるかが分からないからだ。

「兎に角、知らない人について行っちゃ駄目よ。これは約束」

「分かった。約束する。もう知らない人には近づかない」
始めの追い人の話が効いたのか、ミルはかなり素直に頷いた為、
シェリアはほっとした。

変な夢を見始めたのは、余所の国の狐について行って、ミルジェ
やシェリア達に怒られたその次の日だった。

ミルは夢の中で、大きな獅子を見た。

獅子の目はシェリアのそれにそっくりで、ルビーのように輝いて
いる。良く見てみると、その胴からは山羊の体が生えており、尾は
蛇の形をしていた。

ミルは夢の中でその獅子に平伏し、自分のではない声で言うのだ。
「偉大なる自然界の長、バルバラ魔王陛下」

ミルよりもずっと年上の低い女の声だった。紛れもなくミルの口
から出ているその声に、ミルは混乱しつつも、夢だからなのだと辛
く納得した。

深い唸り声が聞こえた。

バルバラ魔王陛下とやらの声だ。

「ミルケシオ。我が声を聞く、麗しの人狼の華。我が声をよく聞き、
我が言葉に従って欲しい」

「何なりと」

ミルケシオと呼ばれたミルは、深く頭を下げる。

否、自分が呼ばれたんじゃない。

ミルは気付いた。

自分の口を介し、目の前に獅子と会話する者。その者こそが、ミ
ルケシオなのだろう。

ミルはぼんやりと考え、魔王である獅子を見上げた。

「時が近付いている。ミルの内に秘めしコンクパールが花咲く時、
我が意に反する光の蝶がミルと同調するだろう」

「その蝶が適応者なのでございますね？」

ミルケシオが言った。

魔王と呼ばれる獅子は、軽く頷いた。

「まだ動きださぬ。だが、今のままでは、いつでも奴等は動きだせる。我が国といと高き国の守り子達が守っているが、奴等は侮れない。況して、守り子達もまた、我が意に反する可能性がある」

「ミルを研究所から出す必要がある、と？」

ミルケシオがくすりと笑んだ。ミルはぎよっとした。昨日の今日にシェリアから追い人の話を聞いたと言うのに、この者達はミルを外へと連れ出そうとしているのだ。

——嫌だ。

ミルは牙を剥いて嘆いた。

——シェリアとミルジェから離れたくない。

夢の中で、ミルは意識だけで逃げだした。体はミルケシオとやらに支配されている。彼女は魔王と話しを続けている。

——嫌だ。

ミルは耳を塞いだ。

此処を追い出されたくない。

ミルジェとシェリアとずっといたい。

暖かい環境の中でずっといたい。

平和なこの場所にずっといたい。

そして——。

ミルは夢を見渡した。

光と影が交差し、築かれていた世界が崩壊し始める。風が吹き、色が落ち、魔王と見つめ合って話す自分の姿が溶けていく。

魔王とミルケシオの声が、遠ざかっていく。

ミルはそれを見つめながら、溢れる涙を拭った。

そして——。

——パピヨンと、離れたくない。

シェリアが包帯だらけのミルジェと会ったのは、ミルに授業をした三日後の事だった。ここ最近、ミルはぼんやりと何かを考え、今まで以上に遊戯室に籠る事を望んでいた。

それではいけない、と研究員たちは如何にかミルが遊戯室から出るように説得したのだが、ミルは全く聞かなかった。その所為で、既に廃れていたと思われる脳手術の件まで上がりはじめ、冷やりとしたミルジェは、如何にかミルを操れないかと一人ベルを片手に調教を試みたらしい。

結果、ミルはやはりトランスを起こし、ミルジェへと襲いかかった。咄嗟にベルを鳴らしてもミルは大人しくならず、その人格を崩壊させ、遂にレアと呼ばれる男性の人格へと移り変わったらしい。彼は、荒々しくも冷静にミルジェのベルを跳ね退けると、ミルジェの羽根を封じ、喰らい尽くそうとその牙を突き立てた。だが、喉笛を噛み切られる前に、ミルジェは如何にか手を伸ばし、非常ベルを鳴らしたという。

ミルジェが喰われずに済んだのは、奇跡とも言える。若しも、彼女が喰われて死ねば、ズペルス事態を揺るがす大惨事へと発展していた。この国は、シェリアとミルジェ両方の力が調和して成り立っているのだ。後継者がまだ生まれていない今、何があっても死ぬ事は許されない。

この事故は、ズペルスの命運がかかった事故とも言える。

その為、駆けつけた研究員達は蒼白になり、慌ててミルを殴りつけて大人しくさせた。だが、すっかり猛獣と化したミルは決して大人しくならず、荒々しいままに遊戯室を飛び出そうとした為、止む無く研究員の一人が銃を持ち出して発砲した。それが、鉛玉だったため、更に波紋を呼んだ。銃弾はミルの肩と左後ろ脚を撃ち抜き、やっとミルは、元のミルに戻った。

すぐさま、ミルジェは運ばれ、適切な処置がなされた。幸いな事

に、ミルジェの抵抗は効果を成し、彼女は致命的な傷を負わずに事を逃れていた。だから、その日の内に、シェリアはミルジェに会う事が出来たのだ。

「ミルは如何してる？」

開口一番に、ミルジェはその言葉を口にした。

自分を食おうとしたと言うのに、ミルジェはミルが銃弾に倒れたのを心配していた。自分を襲ったのはミルでは無くて、レアとかいう男だ、と言うミルジェに、シェリアは呆れを通り越して感心した。「とっても痛い場所を突かれたみたいだね。ずっと泣き喚いて医療班の者たちを困らせているわ。トランスを起こす様子はないけど、あれじゃあ、治療も難航しそうね」

シェリアは呆れ気味に言い、ミルジェに微笑みかけた。

「大丈夫。暴れる元気はあるみたいだから、すぐに良くなるでしょう」ミルジェはくすりと笑い、手を握りしめてベルを取り出した。シェリアは、はっとした。窮地に陥ったミルジェを救ってくれなかったベル。彼女自身の光の力の化身であり、どんな猛獣も振じ伏せる、強い魔力を持った道具。

その魔力をトランスしたミルは跳ね退けてしまった。

ミルに何が起こっているのだろう。

「話している途中で、ミルがおかしな事を喚いていたの」

ミルジェは軽く羽根を動かしながら言った。

「『研究所を追い出さないで。パピヨンと離さないで』って、魘されるように。だから、落ち着かせようとして近づいたら、あの様よ。驚いたけれど、虎のミルに襲われた事は何度もあるから、落ち着いて対処したつもりだったけど、ベルが利かなかった」

ミルジェは溜め息を吐いた。

赤とオレンジの四枚羽根が垂れている。

出血の酷かった彼女は、同じ光の核を宿す者の力を注入されて命を取り留めた。この世の生き物全ての心臓に宿る核は、全身の血を作り出す原動力にもなっている。そしてまた、核の働きは、血の巡

りによって促される。その為、核を壊されれば、まず生きる事は出来ない。大量に出血した者も、核の動きが鈍り、放っておけば死に至る。だが、大量出血した者に、同じ種類の核の放つ気を浴びせれば、その核の鈍りを防ぐことが出来るのだ。古い方法だが、すぐに輸血出来ない時などは、未だにこれが使われている。

ミルジェに宿るのは、光の核。

多くはないが、決して少ない訳でもない。

この世に一番多いのは、白の核であり、それに次いで光の核と闇の核が同率でいる。しかし、朱の核は最も少なく、伝説とまで言われるほどであり、ミルジェがさつきから心配している原因は、ここにあった。

ミルは朱の核を宿しているのだ。

銃弾の破ったミルの肉皮からは留め無く血が溢れ、一時は騒然とした。ここでミルが欠血の危機に陥ったとしても、今の時点でこの研究所では気休め程度にしかミルを救えないからだ。だから、ミルに関わる班の者達は、皆、自分の首が括られる覚悟を決めたのだが、誰も銃を放った者を責めたりはしなかった。逃げられればもっと被害は拡大していたし、よく調べてみれば、ミルの傷は致命的なまでには至っておらず、偶々血管を傷つけ、血が溢れただけのようなだったからだ。傷付けてはいけない方の血管は無事だった。

シェリアは軽く目を閉じた。

ミルジェが一人だけでミルを説得しに行ったのも、問題だった。

今、彼女を責めるのは、余りに酷な事だ。だが、シェリアは少し寂しかった。

――何で、言ってくれないのよ。

その気持ちを押し殺し、シェリアは静かに言った。

「ミルジェ、暫くは休んで。無理をしては駄目よ。ミルの事は私たちに任せて、今は休む事に専念なさい」

ミルジェは何か言いたげにシェリアを見つめたが、やがて静かに頷いた。

シェリアは再び微笑みかけると、静かにミルジェの寝かされる部屋を出た。同時に、ミルジェの言っていた不可解な事が、頭を過る。研究所を追い出さないで。パピヨンと離さないで。

ミルは如何してそのような事を言ったのだろうか。ミルが心配せずとも、研究所がミルを手放すはずがない。そもそも、パピヨンとは何だろう。

シェリアはその疑問を胸に、遊戯室へと向かった。

ミルを《フラスコ》に戻す事を推奨し、それを実行しようとした研究員達の努力も報われず、結局ミルは、遊戯室にいた。傷を負い、トランスによる興奮が醒めきらないミルは、《フラスコ》のある方向へと連れて行くこうとしただけで、泣き喚き、自分の手を血が出るまで噛み始めた為だそうだ。驚いた研究員達は困り果て、結局、ミルに安定剤と催眠薬を注入しながら遊戯室に寝かし、完全に眠りに就いてから《フラスコ》に戻す事に決めた。

シェリアは急いだ。

ミルが完全に眠ってしまい、《フラスコ》に入れられてしまえば、二、三日は外に出されない。外に出た頃には、もう忘れてしまっているかもしれないのだ。

その前に、聞かなければならない事がある。

どうしても、気になる事がある。

焦りながら遊戯室の扉を開けると、点滴を受けるミルが、はっと見つめてきた。途端に涙目になり、ミルは掠れ声でシェリアに言った。

「ミ、ミルジェは？」

心の底から震えている声に、シェリアは息を吐いた。取り敢えず、まだ起きている。

薬が効くにはあと少し時間がかかりそうだ。

「大丈夫。今は休んでいるわ」

シェリアは答え、遊戯室へと入った。

扉は開けたままにし、ミルの状態を確認する。

ミルは注射も点滴も、項にて受ける事になっている。それは、痛さの余りにミルが刺さる場所に噛み付いたり引っ掻いたりする恐れがあるという事も考えているという。

今のミルも、同じく、横向けに寝転がり、項から伸びる管から薬を受けていた。

シェリアは眉を顰めた。

ミルの手足は鎖で縛られている。ミルジェを襲ったのが、今日の事だった為、仕方のない処置ではあるが、それでも気の毒に思える姿だった。

「ごめん」

ミルは泣きながら、少年の様な声で言った。

「俺、欠陥品だ。ミルジェを食べようとするなんて……自分が怖い」
うち震えるミルを、シェリアはじっと見つめた。この体の中に。この小さな体の中に、何人もの生き物が同居している。片や残忍な猛獣。片や甘えることしか出来ない無力な幼獣。それらが同居し、ミルを作っている。

「ミル、聞いていい？」

シェリアが訊ねると、ミルはすぐに見つめてきた。シェリアはその姿を目に宿し、赤い目を細めて訊ねる。

「パピヨンって何？」

その言葉を聞いたミルの震えを、シェリアは見逃さなかった。やはり、何か隠している。シェリアは思いきり、ミルに近づいた。如何に猛獣とはいえ、手足を鎖で縛られている以上、トランスを起こしても身動きが取れないだろう。

——大丈夫よ。

シェリアはミルの頭に手を置き、もう一度訊ねた。

「パピヨンって、何？ 何の事を言っていたの？」

「あ……あたしが、その名を？」

ミルは幼い少女の声で呟くように答えた。

「その名を口にしたの？」

シェリアはミルを窺った。答えたくないと言うよりも、答えるのを禁じられているかのような素振り。脅されているようにも、庇っているようにも見える。

パピヨン。

一体何者だろう。

——蝶々？

花の世界の住人だろうか。だが、そんな者を、如何してミルが口にするのか。離さないでとは、どういう意味なのだろうか。

「ミルジェが言っていたの。貴方、覚えていないの？」

「夢を見たんだ」

ミルは唐突に語り出した。

「すごく綺麗な蝶々と遊ぶ夢。だからだと思う」

嘘だ。

シェリアは直感でミルを疑った。シェリアの悪魔の目を以ても、不安定なミルの心を読み取るのは容易くはないが、それでもミルの言う事が嘘か本当かぐらいは分かる。

ミルは嘘を言っている。

パピヨンを庇う為に。あるいは、脅されている為に。

だが、今探っても意味がないだろう。

シェリアは思った。

ミルは絶対に語らない。語らせるには、じっくりと機会を狙うしかない。

「そう。それならいいの」

シェリアはミルの体を軽く撫でた。ミルは縛られたまま猫のようにシェリアに擦り寄り、愛撫されるままに喉を鳴らした。

だがミルは、薄らと目を開き、シェリアを見上げていた。

「ねえ」

撫でられる快感にうつとりしながらも、ミルは果敢にシェリアへと言葉をかけようとする。

「ねえ。シェリア」

「なに？」

シェリアは撫でる手を止めずに、応対した。

ミルは惚けるようにシェリアの手を受け、眩く。

「聞きたいことがあるの」

その桜色と灰色の目が、うつとりしたままシェリアを見上げた。

「魔王って何？」

シェリアは手を止めた。

今、何と言った。

ミルはシェリアの手が止まった事で、不思議そうにシェリアを見上げた。

シェリアはその目を恐る恐る見つめる。

何故、ミルが魔王の事を問うのか、シェリアには分からなかった。ミルを教育する為に、確かに色々な授業を行った。だが、ミルにシェリアの故郷であるマクア国の事や、グレイ山脈に住む魔王の事について、語った事がない。

何故、ミルが魔王を知っているのか。

まさか、魔王がミルにコンタクトを取っているのではないか。

ミルには秘められた力がある。

テレパシーを使えるのだ。未だに自分でその力をコントロール出来ていないが、そのミル自身の力を利用して、魔王がミルにコンタクトを取ることなんて十分できる。

だとすれば、何か放っておけない事が、起きているのかもしれない。

マクア王室へと向かうのは、極たまにあつたが、ミルが大きくなってからは殆どなかった。召集さえあれば、行かざるを得ないのだが、その召集がないため、尚更だ。ズペルスへと送られたばかりの頃は、寂しくて早く召集をかけて欲しいと願っていたが、今は

違う。召集がかからない事に、何の気持ちも持たなかった。

魔王自身がミルにコンタクトを取り、何かとんでもない事態が起ころうとしているのなら、シェリアが王室へと召集される事もあり得る。だが、それが今だとすれば、少し困るのだ。

バザイからと思われる密偵や工作員も、また来るかも知れない。それに、ズペルスをよく思わない者が、守り子の情報をかき集め、弱っているミルジェの事を嗅ぎ付けられない事もないのだ。

兎も角、今は、此处を離れたくない。

だが、若しも魔王が動く様な事が起きているのならば、そしてそれが、ミルに関係する事なのならば……。考えるだけで、シェリアの頭ははち切れそうになる。

シェリアは再び手を動かし、ミルを撫でた。不意をつかれたミルは、一瞬身を竦めたが、すぐに安心してシェリアに身を寄せ、返答を待っていた。

シェリアは静かに、溢すように、ミルに返答した。

「偉大な獅子の神」

赤い目を細め、ミルを見つめる。

「私達悪魔の、指導者よ」

シェリアの金髪が、微かに揺れた。

夜の研究所は相変わらず静かだった。遅くまで研究や実験をしている場所もあるが、その場所はひっそりとしており、音などが廊下へと漏れる事もない。

それもあったか、ミルの眠る《フラスコ》の部屋は一層静かだった。《フラスコ》を満たす液体に揺られ、体中を突き刺す管の一つに掴まり、ミルは眠った。水の流れる音ばかりが聞こえる。だが、その音に混じって、《フラスコ》のすぐ外の音が聞こえるような気がした。ミルは身をぐつと縮め、考えた。

——そんなわけ、ないよね。

ミルの眠る《フラスコ》を撫でながら、パピヨンは微笑んだ。
あと少し。

あと少し大きくなれば、時が来る。

「魔王も動きだしているしね」

床に座り込んで見上げているダブルが微笑みながら言った。
パピヨンはそれをちらりと見下ろし、軽く触角を揺らした。

「魔王に手出しはさせないわ。これはあたしの物。あたしの獣。あたしの言う事を聞く従順な僕なの」

「さすが、ミルの主。凶暴なミルを抑えるだけの強者だね」

ダブルはけたけた笑いながら、灰色の両目を赤く染めた。

「いっそ、ズペルスの柱も壊してくれたらよかったのに」

ダブルの声に、パピヨンは目を細めた。

日々、強くなる魔獣。

その強さがあやふやなまま、成長を続ける魔獣。

このまま、このままの状態で、完成して欲しい。

弱いまま早く完成して、コンクパールを結んでほしい。

「食べた後はどうするの？」

ダブルが面白そうに訊ねた。

彼もまた、弱い者を甚振るのが好きな人間。美しく堕ちた聖獣の、人間。

パピヨンは《フラスコ》を撫でながら、目を細めた。

「さあ」

そう言いながら、《フラスコ》の中のミルの顔を覗く。

「知らないわ」

——だって、あたしが持ち逃げするから。

パピヨンはその言葉を胸に仕舞い込み、ミルの顔を見つめ続けて

いた。

囚ワレノ万華鏡 其ノ伍

囚ワレノ万華鏡 其ノ伍

(パピヨン信じてはいけない)

ミルは魘された。《フラスコ》の中で見る悪夢ほど苦しいものもない。もがけば管が動き、苦痛が増大する。だが、全く動かずにはいられない悪夢。

ミルは不快だった。

早くこの中から出してほしい。

だが、出たとしても、この悪夢からは逃れられないだろう。

(彼女に安住してはいけない)

この声。ミルはふと気付いた。聞いたことがある。否、聞き飽きた声だ。最近よく見る魔王の夢。その魔王に平伏す自分の声。ミルケシオと呼ばれるその声。

(彼女はお前の破滅。伸ばされる手を握り返すな)

低い女の声。

ミルは目を開いた。

「どういう事？」

「ミル？」

今度は、はっきりとした声が響いた。ミルケシオの声ではない。

ミルはすぐに誰の声か分かった。見つめる先から感じる、堇色の視線。暖かな光。

「ミル、おいで」

(駄目だ。彼女の物になってはいけない)

ミルケシオが咎める。

だが、ミルはその視線から目を離せなかった。堇色の目。紺と紫の翅。暖かな光。美しいルリタテハの娘パピヨン。栗色の短い髪を揺らし、目を細めるパピヨンの手を、ミルはじっと見つめた。

（そいつは悪魔だ。種族などではない。非道で狡猾な、本物の悪魔だ……）

ミルケシオが内部からミルを揺さぶる。不意に、体を包み込む気配がした。狼と山猫の入り混じった匂い。力強いその腕で、ミルをしつかりと押さえ込む。パピヨンを見つめるミルを、動かないように捕まえるその腕の匂い。

（私を……）

ミルケシオが悲痛な声を上げる。

（私を殺した悪魔だ）

ある夜、ミルを戦闘利用する計画が持ち上がったのを、ミルジェとシェリアは真っ先に聞かされた。どうも、西国バザイとの関係がぎくしゃくし始めているらしい。

まさかとは思うが、若しもの時の為に、ズペルスを守る兵器としてミルを利用できないか、という話だった。勿論、この計画はこの研究所にて開発されている他の実験体にも持ち掛けられており、ミルはその一匹として、らしい。

主要となる実験体は、その為に開発されたとある神獣の血を引く少年だった事をシェリアは知っている。ヒポラスという獣人の一種であるその少年は、密林にひっそりとすむ大山椒魚の血を直に引く既に故人である青年のクローンらしい。クローンと言っても、ミル同様他の様々な遺伝子を掛け合わされているのだが、死んだその青年の面影をよく残しているという話だ。

兎も角、そのように兵器として開発された実験体は他にも多数いる筈なのに、何故、ミルまで此処に入れられてしまうのか、シェリアは納得できなかった。ミルジェもまた、計画を聞くと、空かさずそのような質問をした。

答えは、二つあった。一つはミルのトランス。誰もが手を付けら

れなくなるこのトランスを、有効に活用できないものか、という目的を含むらしい。そして、もう一つは時折ミルから抜け出してくる使い魔達の存在。彼らを利用すれば、かなりの戦力になるのではないかと言う事らしい。

「冗談じゃないわ」

シェリアは一喝した。

「ミルのトランスはコントロール出来ない。トランスしたミルは見境なしに周りを襲うでしょうから、戦力になんかなりはしないわ」

——そもそも、そんな危険な所にミルを送るなんて……。

最後の気持ちを、シェリアは胸の内に秘めた。

だが、計画を持ち込んだ兵士達は、シェリアの言い分を下げた。「申し訳ないが、これは取り下げ出来ない計画でしてね。守り子の貴女方にも協力願いたいのです。貴女方が一番、ミルの信頼を得ていると聞きました。如何にかミルを操って、生物兵器使用班の者達に貸し出せるように準備しておいて欲しいのです」

冷静に告げる兵士に、「しかし」と声を上げたのはレアだった。

「ミルにはエネルギー産出という大切な仕事があります。それをストップしてしまうのは、この班としても辛い物があるのですが……」
「いえ、エネルギー産出に支障をきたすほどはお借りしません。今回は只の試行ですので、絶対に無傷でお返しする事を約束します。若しも、本格的に決まったとしても、ミルを使うのは究極の時だけです。心配には及びません」

「ですが」とレアは言いかけたが、口籠った。

幾ら反論を上げてても、状況は変わらない。彼らがミルを使うという気持ちを変える事はないのだ。

思ったとおり、兵士達は一步も引き下がらず、結局、期日までにミルを調教する事を約束させられてしまった。ミルジェもシェリアも納得できなかったが、ミルの開発班長であるガークは、あっさりと次の計画に手を伸ばし始めた。

すなわち、ミルの繁殖計画。

兵器として使用される前に子を成せば、ミルに若しもの事があっても子が残ると言うその計画に、シェリアは怒りを覚えた。だが、研究所自体が薦めるその計画は、ミルジェやシェリアが幾ら止めようとしても進んだ。脳手術の時とはわけが違う。兵士達を信じていない訳ではないが、ミルに若しもの事があれば、エネルギー産出の実験は振り出しに戻るのだ。二度と成功しないかも知れないと言われているミルを、只で失う訳にはいけない。

――何が、守り子よ……。

シェリアは嘆いた。

幾ら、ズペルスにて、揺ぎ無い地位を得ているミルジェとシェリアにも、兵器と繁殖という二つの大きな計画を止める事が出来ない。何の為の地位なのか。ミルジェにもシェリアにも分からなくなってきた。

当のミルは自身を取り巻く雰囲気が変わった事に気付いていないらしく、いつもと変わらずにミルジェやシェリアに懐いてくる。十五を過ぎてもまだ幼さの残るこの幼獣に、あのようなえげつない計画が降り掛かろうとしている等、シェリアは信じたくもなかった。だが、やらない訳にはいけない。

トランスをコントロールし、兵士達に引き継げるように調教しなければならぬ。

「ミル、御免ね」

シェリアは誰にも聞こえない声で、ひっそりと詫びた。

ミルの眠る《フラスコ》をパピヨンは目を閉じ、触角を揺らしながら撫でていた。だが、ふと目を開くと不服そうに顔を顰め、《フラスコ》を睨んだ。その様子を床に座り込んでいたダブルは首を傾げ、パピヨンへと声をかけた。

「如何したの？ 何だか面白くなさそうだけど」

「面白くないのよ」

パピヨンはそう言うと、《フラスコ》から手を離してダブルの隣へと着地した。《フラスコ》を仰ぎながら、その中に眠るミルをちらりと見つめる。

「ミルとの触れ合いを邪魔されたのよ。あの狼猫に」

「君が殺した？」

ダブルがからかうように目を細めるのをパピヨンは睨み、翅を軽く揺らしてその場に座り込んだ。

「人聞きの悪い事言うなって。あれは、ロギラの命令。あたしは、ちよつと壊れやすい建物の傍で地面を揺らしただけよ」

「攫わずに殺しちゃうなんて、随分合理的だね。まあ、あの人狼女を説き伏せるなんて考えただけで手間がかかるけどさ」

その時、部屋の扉が大きく開かれた。

パピヨンとダブルは、はっと扉へと目をやり、そのまま影の中へと消えていった。

部屋に入って来たのは、ガークとレバ、そして数人の研究員。そして最後に、ミルジェとシェリアが入り、扉を閉めた。

ミルの計画を進める研究班のメンバーの殆どが集まっている。

「面倒な事になった。明日には例の見学者も来ると言うのに」

ガークが頭を抱え、《フラスコ》を見上げた。

「ミルはそろそろ出してやっても良いだろう。朝一に、出してやってくれ。昼にはその見学者が来てしまう。ミルジェ、シェリア、明日の昼は早速調教に入ってくれ。見学者の事は気にせずに厳しくって欲しい」

見学者の事は、シェリアも聞いていた。

如何やらバザイ国からの留学生らしいのだが、コントロールが難しく、誰もが断念すると言う白の核の力を開花させたという超能力

少年で、P S Iという超能力全般を使いこなす将来をかなり期待されている王立学園の学生らしい。その様々な能力を期待され、女王自らがその少年とコンタクトをとっているという。

まさかスパイじゃあるまい。

当初はそう思ったシェリアだったが、影からその少年を悪魔の目で見つめ、その考えを捨てた。どうやら彼は、素直にズペルスに勉強に来て、素直に女王の期待を受け止めているらしい。

そんな少年が研究所を見学に来るのは、ミルとの顔合わせも兼ねていた。ミルが彼を覚える必要はないのだが、その少年にはミルを覚えていて貰う必要がある。それは、万が一の中の方が一を考えてのものだった。少年はきつと何も知らずにミルを見学するのだろうかけれど、彼には其処にも期待されている事がある。

それは、ミルが若しも何らかの形で逃げ出してしまった時の事だ。この世に殆ど残っていないという朱の気を使いこなすミルは、ミルジェに取ってもシェリアに取っても脅威になり得る。だが、ミルを落着かせ、ズペルスへ連れ戻せるのは、ミルジェとシェリア以外にいない。だから、その前に、ミルを黙らせなくてはならない。ミルの朱の核は、白の核の放つ気を拒む。その為、白の核の気を使いこなす者を捜していたのだ。それが、その少年。若しもの時は、彼と協力してミルを追う事になるのだ。

そんな日が来なければいいけど。

「調教は、ミルのトランス管理だけでいい。ミルをトランスに陥らせ、それを振じ伏せる。とても危険な調教だが、どうにか頼む」

ガークの低い声に、シェリアもミルジェも頷いた。

気乗りはしないが、やるしかない。

「また、ミルの繁殖計画も進める。相手の候補は決まっているが、ミルとの相性を検討するべきだという事で、明日の夜引き合わせる事にした」

シェリアは唇を噛んだ。

「それは……急ではありません？」

シェリアが首を傾げると、ガークは首を振った。

「早過ぎる事はない。もたもたしていると期日が来てしまうからね。それまでにせめて、卵が手に入ればいいのだが」

ガークは軽く顎を搔いた。

ミルは、その雌雄がはっきりと判別できないにも関わらず、子を生むだろう事が予測されていた。雌だろうか、と言われたのだが、はつきりと雌だと判別する事も怪しいらしい。その為、完全体という説も流れたが、やはり曖昧なままだった。子は、卵の状態で産まれるらしい。微かに掛け合わされたカモノハシ型の魔物の性質が思わぬ所で現れたようだ。生むまでには然程時間を要しない事も推測されている。だが、これは運でもあるだろう。

「ミルが理解するかどうか……」

ミルジェもまた、苦く顔を綻ばせながら言った。

「驚いて抵抗したら、またトランスを起こすかも知れないし……」

「ミルも猛獣ならば、相手もまた猛獣。心配には及ばない」

ガークはシェリアとミルジェの言葉を跳ね退けるように言った。

この様子から、その意を変える気持ちはさらさらないようだ。ミルの気持ちなど、まるで考えていない。今更ながら、ミルジェもシェリアもげんなりしてしまった。

「分かったら解散だ。明朝迄にミルを出す準備を整えておけ」

ガークは唸るように言うのと、そのまま去っていった。残された研究員達が各々の活動を始める中、ミルジェとシェリアは静かに、眠り続けるミルを見上げた。

三日ぶりの外は、少し寒かった。

ミルは毛布に包まりながら、遊戯室の隅で震えていた。遊戯室は温かくしてあるのだが、如何しても震えが止まらない。これは寒いからなのか、もっと別の何かからなのか、ミル自身分からなかった。

ただ、此処で昼までミルジェとシェリアを待つように言った研究員達の雰囲気がいつもと違うような気がして、ミルは不安に感じていた。

「ねえ、今日は何かあるの？」

堪らずに聞いたのだが、研究員達は皆、曖昧な返事しかない。答えられないような事があるのだろうか。それとも、何ともないのだろうか。だが、ミルは首を振る。何ともないのならば、そう言えばいいじゃないか。また、《フラスコ》に慣れる練習でもするのだろうか。

そうこう考えている内に、昼になった。

「ミル？ 具合は如何？」

開口一番にやはりミルジェは、ミルにそう訊ねた。シェリアは黙ってミルを見つめていた。

「特に何も……」

ミルはおずおずとミルジェとその隣にいるシェリアに「ねえ」と、訊ねた。

「今日は何かあるの？」

ミルジェもシェリアも内心どきりとしたが、二人とも冷静を装った。直前までミルに不安を与えてはいけない。不安こそ厄介の引き金なのだ。

ミルジェが静かにミルに説明した。

「今日はお客さんが来るらしいわ。それで皆、そわそわしているのよ」

「お客さん？」

「そう。町からのお客さん。ミルはいつものようにしていればいいの」

ミルジェに言われ、ミルは首を傾げた。

「じゃあ、今から何をするの？ 何処かに行くの？」

「そうね。ちよっと訓練室まで行くわ」

「何を訓練するの？」

今日のミルはやけに質問が多い。

——不気味ね。勘付かれているんじゃない？

シェリアはそっとミルジェを見やった。ミルジェはその視線に答えるように微かに羽根を動かし、両腕でミルを包み込んだ。

「安心して、《フラスコ》とは関係ない事よ」

ミルジェのその言葉に安心したのか、ミルは口を噤んだ。だが、不安そうに何度もミルジェとシェリアを見上げる為、ミルジェもシェリアも気が気でなかった。

此れから行われるのは、ミルのトランス制御を狙った調教。調教というよりも、実験に近い。一晩で如何にか手を考えたものの、問題なのは其処ではなく、前提として意図的にミルを トランスに陥らせる必要があるという事だ。

トランスを起こすのは、様々な要因がある。しかし、そのどれもがミルにとって恐怖でしかない事だけは共通しており、まだ準備が整っていないうちにミルに悟られるのは危険極まりない事だった。

「ねえ、何をするの？ 訓練ってどんなの？」

訓練室へと向かう途中も、ミルは不安げにミルジェとシェリアを窺い続けていた。

「ちよっとだけ教えて、ねえ？」

質問が繰り返される中、ミルジェが濁しながら、或いは、無視しながらミルの手を引いた。不安なのか、ミルは度々立ち止まろうとしたが、シェリアの目を窺っては再び歩きだした。シェリアはじつとミルを見据えると、静かに声をかけた。

「今夜は遊戯室でじつとしていなさい。誰か訊ねてくると思うから、その人の言う事をよく聞くの。いい？」

「誰が来るの？」

ミルの問いに、シェリアは軽く息を吐いた。

エネルギー産出の為だけに作られた命。自分のしたいままにする事が許されない哀れな獣。その目がシェリアを見上げてくる。何も知らない目がシェリアを見上げてくる。

シェリアはミルの真っ白な頭を軽く撫で、目を閉じた。

「きつと、優しい人よ」

訓練室の中央に言われるままに座ったミルは、すぐさま目隠しと手枷を施された為、硬直してしまった。一体何をされるのだろうか。拘束は今までもあった。だが、目隠しされるのは、あまりない事だ。一体何が起きようとしているのだろうか。

ふと、明かりがついた。

目隠しされているミルは、鼻と感覚で辺りの様子を探った。

ミルジェとシェリアは何処にいるのだろうか。近くに居ない気がする。

「ミルジェ、シェリア？」

呼びかけてみても、返答がない。

居ない事はないだろう。この部屋の何処かに居る筈なのだ。因って、聞こえていない事もないだろう。

「ミルジェ、シェリア？」

何故、返答してくれないのだろう。

「ねえ……」

ミルはその場に蹲った。変な気配がする。妙な視線を感じる。とても良くない雰囲気。恐ろしい匂い。声。殺気。

「其処に居るのは誰なの？」

辺りにはミルジェもシェリアも、他の研究員達も居る筈だ。それなのに、誰もひと言も喋らない。聞こえてくるのは、荒い息使い。唸るような声。

「何なの……ねえ」

「ミル」

シェリアの声が聞こえた。

ミルは慌てて声の方向へと顔を向けた。見えないけれども、その先にシェリアがいるのは確かだ。冷たい色の声に、ミルは息を飲んだ。

「シェリア、何をするの？ 教えて、お願い……」

「ミル。今から貴方には、其処にいる魔物と戦って貰う」

「魔物……？」

ミルの声に反応するように、唸り声が上がった。

肉を喰らい、血を飲み干す魔物。そうか。この匂いと気配。それは、自分と同じもの。自分に混ざっているもの。同胞であり、敵でもある存在。

ミルは身を竦めた。

——闘う？

この状態で、闘えとシェリアは言ったか。

——まさか。嘘でしょ？

ミルは思ったが、紛れもない魔物の視線にびくりとした。

「冗談でしょう？」

ミルは言った。

幾らなんでも在り得ない事だ。まさか、目隠しして手枷までされている状態で、闘わされることはないだろう。悪い冗談か、きつと聞き間違いだ。

ミルはだが、安心しきれなかった。

すぐ傍に、魔物がいる。魔物の声が漏れている。ミルを既に敵であり獲物であると感じ始めている魔物の声が聞こえる。

——魔物サン？ 僕を食べる気なの？

ミルは魔物へと語りかけて見た。

見えない魔物は、不敵に笑い唸りながら答えた。

（おや。お前は何も知らないのかい？）

——何も？

（可哀想に。お前は俺へのチャンスだそうだ。お前を倒すことが出来れば、俺には自由が与えられる。ついでに、お前を如何しようが俺の勝手だよね。つまり、俺は自由と獲物の二つを手に入れられる。どんな猛獣がけしかけられると思いきや、まさかお前の様なひ弱な幼獣だったとはね。御喋りが過ぎたかな？ 安心しろ。甘えることしか出来ないような魔物を殺す趣味はない）

——じゃあ、食べない？

（ああ、食べやしない。だが、生き血を貰っていくぞ。お前の命の代価だ。お前は只の弱い生き物ではないようだしな）

ミルは唇を結んだ。

——血を……飲むの？

（ああ。牙を喰いこませてね。もがく獲物を押さえつけながら、脈打つ傷口を感じながら、獲物の上げる悲鳴を聞きながら。とても楽しい食事の時間だ。お前にも長く付き合って貰おうか）

「嫌だ！」

ミルは体に力を入れた。目隠しも手枷もどうにも動かせない。しかし、抵抗は出来る。牙は封じられていないのだ。魔物の動きを感じながら、抵抗は出来る。

「来るな。お前なんか飲まれて堪るかっ！」

ミルは少年の声を上げて威嚇した。魔物はくつくつと笑い、近寄ってくる。床を摺る音が、耳の奥にざらつくように入り込んでくる。

「シェリア、ミルジェ！」

ミルは助けを求めた。だが、シェリアもミルジェも、他の研究員達も、黙視しているだけ。それとも、もう既にこの部屋にはいないのか。

——如何して……。

（哀れなものだ。人間どもを信じて助けを求めるとは。殺しはしないと言っているだろう？ 苦しいかもしれないが、死ぬ事はないのだぞ？）

——嘘だ。

ミルは首を振った。

——お前は絶対俺を殺す。飽き足らなくて、結局全部の血を飲み干してしまうんだ！

（まあ、可能性はあるかもねえ。お前の味次第かな）

魔物は面白そうに言い、ミルのすぐ間近にて鼻先を近づけてきた。馬の様な匂いがする。だが、決して馬ではないだろう。硬い牙が軽くミルの胸元に宛がわれた。

噛まれる。

そう感じた途端、ミルは唸った。体の底から力が湧いてくる。その力は頭の奥にまで浸透し、ミルの意識を身体の内側へ、内部へと引っ張っていく。

——何、これ……。

手足を掴まれ、後ろへと引き摺られていく感覚。体の奥へと意識が引っ張られていく。その感覚の中で、ミルは胸への激痛を感じた。何かが食い込んだ。荒い息使いと共に、吸い取られていく何か。

ミルは悲鳴を上げた。

だが、その悲鳴が、途端に咆哮に変わったのを、ミルは自覚した。

——何なの、これ……。

体が勝手に動く。それと同時に、意識が無くなっていく。

ミルはぼんやりと前を見た。

真っ暗な前。何も見えない前。

——トランス……。

ミルジェとシェリアは自分の口を塞いでミルを見守った。

駁^{はく}という馬の様な吸血魔物と殆ど抵抗出来ないだろうミルとを引き合わせる。トランス状態にする為とは言え、危険過ぎないだろうか。

しかし、研究所の指定した方法はこれだった。ミルがこの魔物に

負けるとは考えていないらしい。つまり、駢の処分に困ったのだろう。駢には気の毒だが、此処はそういう所だ。実験体を消耗品として考えていない。

だが、予想に反して、ミルのトランス化は遅かった。きっと、判断が遅れたのか、駢に言い包められたかのどちらかだろう。言い包められたのならば、このまま駢の思うとおりになってしまうのではないだろうか。

ミルジェもシェリアも不安を覚えたが、如何にか口を出さずに見守り続けた。

（美味い。やはり、只の生き物でないようだ）

駢の声が聞こえた。

——遅い……。

シェリアは汗を浮かべた。

駢がミルに食らいついて二、三分経った。依然、血を吸われ続けている状態で、これ以上放っておくのは危険だ。ミルは間違いなくトランスしようとしているのに、如何して完全にトランスしないのだろうか。

（すまないが、約束は守れそうにないな。許せよ）

駢が目を細めた。

止めるべきだろうか。

ミルジェと目を合わせた時、突然、駢が大きく呻き声を上げた。

慌てて視線を戻すと、駢が目を見開いて、嘶くように前脚を上げていた。血だらけの白い馬の姿。

シェリアは緊張した。

その血はミルのもの……ではない。駢の右前脚から出血している。目隠しと手枷とに使っていた鎖と布が、無残な姿で床に転がっている。

——やっと来た……。

「準備を！」

シェリアは声を張り上げ、痛みに驚いて叫ぶ駢を悪魔の目で見据

えた。

——駁、死にたくなかったらミルから離れなさい！

駁は、はっとシェリアの赤い目を見つめてきた。

（悪魔か？）

——自由が欲しかったら私の一部になったら？

シェリアは一枚のカードを示した。描かれているのは、髑髏。その髑髏の絵を、駁はじっと見据えている。だが、表情を変えて、如何にか走りだす。右足を引き摺りながら、苦しそうに走り出す。その駁を追いかけるミルの姿が現れた。否、それはもはやミルではない。《レア》だ。ミルジェを食おうとした、手の付けられない猛獣。ミルを抑えようと、使い魔達が現れ始めた。だが、ミルは使い魔達を振り切り、駁へと猛進する。自分に危害を加えた駁へと、仕返ししようとしている。だが、その爪と牙が届く一歩手前で、駁の姿はシェリアのカードの中に吸い込まれていった。

ミルは片目を血走らせて、シェリアを見つめた。その表情に、幼気であどけないミルの面影一つ残されていない。完全に、《レア》になっているようだ。その姿が次第に膨れていき、虎へと変貌する。二尾の牙の長い縞無しの虎。

ミルが咆哮した。

シェリアは身を軽く振った。

すぐ横をミルの鋭利な爪が横切っていく。

「シェリア、こっちへ」

ミルジェが低い声で言った。

シェリアは床を軽く蹴り、たった今、駁を閉じ込めたカードを翳した。途端に、ミルの周りから粘りのある糸が飛びだし、ミルを襲う。ミルはそれを見つめ、小柄な山猫の姿へと変わり、そのまま小鳥の姿へと変わって空へと逃げた。

——逃がさない……。

ミルジェの近くに着地したシェリアは違うカードを手の中に忍ばせた。欠けた塔の描かれるそれを手で撥ね、小鳥のミルを睨む。す

ぐさま、ミルを雷電が襲った。小鳥のミルはすぐにそれを避け、再び床へと降り立って犬の姿へと変わった。

「すばしっこいわね」

ミルジェがふっと微笑み、ベルを翳した。

シェリアはそれに気付くと、輪の描かれたカードへと切り替え、それを大きく投げた。直後、ミルジェがベルを鳴らす。轟音が駆け抜けていった。普段ミルジェが鳴らすような音ではない。ミルジェの光の中の光と、シェリアの闇の中の闇が合わさり、共鳴し、反発し合って、部屋中に沁み渡る。殆どの人間には無害なそれ。獣や魔物ばかりを襲うそれ。この部屋に居る、唯一の獲物を見つけ、一気に詰め寄っていく。

「ミル！ 耳を塞ぎなさいッ！」

ミルジェが叫ぶと、犬の姿をしていたミルが、素直にヒトへと戻った。だが、シェリアの言う事を聞こうとする間もなく、その音に襲われ悲鳴を上げながら倒れた。

音が去っていく。

ミルジェもシェリアも、脱力し、その場に膝を突いた。

互いの光と闇を合わせて、ミルジェのベルの力を増幅させ、トランスしたミルを強制的に指導下に置くという作戦だったのだが、ミルにも、ミルジェとシェリアにも刺激が強過ぎたようだ。ミルジェには闇が、シェリアには光が食い込み、体を蝕む。一回だけでも酷く辛い。また、ミルに至っては、トランスの維持も、変身の維持も出来なかったらしい。今も、訓練室の中央で、耳を塞ぎながら蹲っている。その耳からは、心成しか出血しているようにも見えた。

「ミルジェ、シェリア……？」

ミルが小さな声を上げた。

シェリアは如何にか立ち上がった。ミルジェはまだ動けないようだ。シェリアは、茫然として動かない周囲を見やると、慌ててミルへと駆け寄った。

「シェリア……あたし、如何なったの？」

冷たい手を取ると、ミルは訊ねてきた。

シェリアはその目を窺った。

桜色と灰色の目が開かれている。

完全にトランスから醒めているらしい。

「ミル、耳は如何？ 聞こえる？」

「聞こえるよ。でも、何か痛い。ねえ、何が起こったの？」
一歩近づいたのだろうか。

今まで、意図的にミルのトランスを止める事など出来なかった。
使い魔達や或いは拘束具で押さえ、自然に醒めるまで待たなければならなかったのだ。だが、今回は、使い魔達を待つまでもなく、ミルジェとシェリアの力だけで押さえ込む事が出来た。

——若しかすれば、トランスそのものを制御できるかもしれない。
「シェリア？」

ミルが起き上がり、答えないシェリアをじっと見つめていた。はつと我に返り、シェリアがミルの質問に答えようとした時、ミルはふと、別の何かに気付き、一方を指差して首を傾げた。

「ねえ、あの人、誰？」

シェリアも、ミルジェも、その時になって、見学者の事を思い出した。ミルが指差すのは、ハーフミラー。こちらからは鏡にしか見えない筈のそれを、ミルは不思議そうに指差している。

「見えるの？」

シェリアが驚いて訊ねると、ミルはもっと驚いたように頷いた。

そしてまた首を傾げ、手を下げ、訊ねた。

「あれがお客さん？」

「そうでしょうね」

答えたミルジェを見やると、ミルは急に眉を顰めた。

「なんで、角が一本しかないの？」

何処まで見えているのだろう。きっと、ミルが見ているのは、見学者の少年で間違いないのだろう。噂によれば、彼は一本しか角を持っていないらしい。バザイ人と青い目の先住民であるケラヴァラ

人の直接のハーフである事が何か関係しているらしいのだが、シェリアにはどうでもいい事だ。だが、ミルが彼の一本角を覚えてしまふのは不味い事だった。若しもの事を考えているのならば、ミルに少年の顔を覚えさせてはいけない。そうすれば、ミルは彼を警戒し、回収が困難になってしまうからだ。

「さあね。知らない。それよりも、ミル、疲れたでしょう？ 遊戯室でゆっくりしようか？」

「えっ」とミルはシェリアを見上げた。そして、またハーフミラーへと目をやる。如何しても、少年の事が気になるらしい。見えないように考慮してのハーフミラーだと言うのに、これでは意味がない。そもそも、如何して見えてしまっているのだろうか。

「ミル。早く戻らないと、レバが怒るよ」

シェリアの言葉に、ミルは少し動じたものの、やはりハーフミラーから目を離さない。如何すべきかシェリアが吟味していると、ふと、ミルジェがベルを揺さぶった。ミルの体がぴくりと動いた。

「ミル、こっちに来なさい」

ミルジェが言うと、ミルは嫌々ながらもミルジェの方へと歩き出した。少年が気になって仕方ないらしい。シェリアは振り返ろうとするミルの後ろに立ち、その背を支えた。ミルジェの元へとミルを押しやると、ちらりとハーフミラーを見やり、目配せした。通じればいいのだが、と心配していると、ミルジェの制止にも構わずにハーフミラーを振り返ったミルが、一言漏らした。

「あ、いなくなっちゃった」

ミルジェもシェリアも心底安堵した。

囚ワレノ万華鏡 其ノ陸

囚ワレノ万華鏡 其ノ陸

ミルがハーフミラーを透視した事は、瞬く間に知れ渡った。すぐにその確認がガークからミルジェとシェリアに渡った。ハーフミラーをミルが見通せるとしたら、これまでの対応で変更等を検討しなくてはならない事が幾つも浮上するのだ。

見学者の事もその一つだった。

ミルが途中で気づいてしまった為、見学はし直しになったらしい。どうせ見えてしまうのなら、ハーフミラーという小賢しい手を使わずに、堂々とその場で見学して貰ってもいいのではないか、という声が上がったのだ。それに対し、ミルが、後に自身の捕獲者となる可能性のある少年の顔を覚えてしまったては困るという声も上がったが、これにはシェリアもミルジェも反論した。というのも、ミルは人の顔を覚えるのが苦手なのだ。特に関わりの無い人を意図的に覚える事は殆どない。トランスの制御という過酷な調教中に来る見学者の顔など、覚えている余裕はミルには生まれないだろう。後は、彼の一本角に気をつければいいだけだ。ミルが少しでもそちらを見ないような工夫をすればいいことである。寧ろ、ハーフミラー越しにするほうが、ミルの印象に残ってしまう危険性もある。そういう見解が受け入れられたため、見学者はその場で直接見学できる事になったのだ。

「……とは言ったものの、その場で見学されるのも気が散るわね」
ミルジェがぼそりと漏らした。

確かに、ミルジェの言う通り、余りに見つめられていると、如何しても気になってしまう瞬間があるかもしれない。シェリアは考えた。見学者の少年は、ミルを哀れな存在として見つめるのだろうか。ともすれば、そのミルを叱咤で動かそうとするミルジェやシェリア等

は、血も涙もない非人間に見えるかも知れない。

「確かにそうね」

部外者にどう思われようと構わないのだが、気を取られてしまう可能性は否めないだろう。そして、それは、直接ミルジェとシェリアに関わってくる事でもある。一瞬の隙が命取りなのだ。此処はもう見学者を無い者として意識から外すしかないだろう。余所者に気を取られていてミルの攻撃を避けられなかったなど、間抜けすぎる。天使としても悪魔としても終わっているだろう。

「でもまあ、やるしかないでしょう」

シェリアは言って、遊戯室の扉を開けた。

素早くミルが一瞥をくれた。だが、その表情は何処か虚ろで、ミルジェにもシェリアにも近づこうとしなかった。

安定剤を打っているわけでもない。

シェリアは怪訝に思ったが、すぐに思い当たる事が頭を過った。

「ミル？ 時間よ？」

シェリアは小さく声をかけた。

だが、ミルは首を振った。

「やだ」

ミルジェもすぐに近寄った。ベルをさり気無く忍ばせ、ミルの肩に手を置く。

「ミル。行きましょう。此処に居ても無意味よ？」

「やだ」

仄かに漏れる牙を剥き、ミルはシェリアとミルジェの手を叩いた。そして、二人から距離を置き、部屋の隅へと逃げていく。これまで、何度も同じような姿を見てきた。だが、今回ばかりはミルに同情せざるを得ない。シェリアは複雑な気持ちでミルに手を伸ばした。

「来なさい」

ミルは首を振る。気持ちを考えれば尤もだ。だが、それを許すわけにはいかないのだ。シェリアとミルジェが許しても、研究所は許してくれない。ミルの心は興味深いけれども、最優先事項ではない

のだ。

「来なさい！」

シェリアは力を込めた。

血も涙もない非人間種族。

——なつてやろうじゃない。

赤い目を光らせて、ミルへと近寄っていく。ミルはその表情を見て凍りついた。悪魔と呼ばれる種族の怖さを今更知ったらしい。シェリアは不敵に微笑んだ。天使であるミルジェは違うかもしれないが、魔物も魔獣も本気を出したシェリアにとってみれば、仔犬や仔猫のようなものだ。トランスしたミルならばシェリアにも危険な存在であるが、そうでない普段のミルならば、シェリアの相手にもならない。要は、トランスする前に、その心を捉えればいいだけだ。「いい仔ね。悪夢を見たくなければ、大人しく言う事をお聞きなさい」

手を伸ばしながら、シェリアは近づいた。

昨夜ミルに降りかかった出来事。シェリアには関係のない事だ。

シェリアは、シェリアに任された仕事をこなせばいい。

シェリアは小声で言った。

「ミルジェ、ベルを」

シェリアの赤い目に委縮していたミルジェが、ふと我に返ってベルを揺らし始めた。その音を聞き、部屋の隅で凍えるように震えていたミルは、表情を変えて耳を塞いだ。だが、その抵抗も空しく、次第に瞼を閉じていき、ことりと音を立てて床に倒れ伏した。

眠った。

今のうちに運べばいい。

目を覚ました頃には、準備は整っている。昨日と同じ手順。ミルは逃げ出す事も出来ない。若しかしたら、今回は相手となる魔物は知らないかも知れない。ミルは目を覚ました瞬間、絶望ただ一つでトランスを起こすかも知れない。

急速に眠りへと落ちていくミルを抱え、シェリアはその体温を感じ

じた。

——軽い。

こんなに軽かっただろうか。

一人では運べなかったような気がする。

まだ、幼さばかり残るその姿。それなのに。

——卵を産む日が来るの……？

「シェリア」

ミルジェが窺ってきた。彼女も何処か遣る瀬無い顔をしている。

まるで、唆されて仕方なく罪を作っているかのような。

「行きましょう。遅れてしまうわ」

ミルジェが溜め息混じりに言った。

（ミル、ミル）

夢の中でまた声がする。何度も話しかけていく声。何度も囁いていく声。耳から入り込む声なのに、まるで身体の奥底から湧きおこっているかの様な声。

（ミル、私の話を聞きなさい）

肩を掴まれているような気がした。

ミルはぼうつとその声を耳にしていた。

（今のままではいけない。お前だけでなく、全てにとって良くない作用を引き起こすだろう。お前はお前だけの存在じゃないんだ）

——全て？

ミルは首を傾げた。

体を包み込む何か。

見えないのに、確かに存在する。

（私の言葉をよく御聞き。これ以上奴等に身を委ねてはならない。天使と悪魔に伝えろ。今すぐに。彼らに外へと誘って貰え。それが出来ないのならば、あいつ等に従うのを止めろ。私の言葉は間違っ

ていない。ミル、聞いている？)

——如何して？

ミルは首を傾げた。

見えない何かの目を見つめ、訊ねた。

——何がいけないの？

(全てだ。この世界にとって良くない事だ。ミル、お前は自然の一部。誰一人とて欠けてはならないその一人。七色の力を秘める槌よ、適応者に跪いてはならない。魔王陛下の身体の一部として、放たれるべきだ。パピヨンとダブルに、ロギラとロタスに騙されるな)

——ロギラ？　ロタス？

不思議な事に、両方とも耳にした事のある名前だった。何処で、だっただろうか。起きている間ではなかったかもしれない。もっと虚ろな状態で、もっと不安定な状態で、もっと曖昧な状態で、その名前を耳にしたような気がする。

(卵を宿す前に、お前は逃げなくてはならない)

——ロギラ……。

ミルはふとガークの顔を連想した。何故だろうか、彼がロギラな気がしてならない。この直感は何だろう。そもそもただの直感なのだろうか。若しかしたら、彼が面と向ってロギラと呼ばれている所を聞いたのかもしれない。しかし、何時、何処で……。

ミルは頭を抱えた。

——ねえ、ミルケシオ。

遂に、その声の主の名を呼んだ。

——如何して魔王は僕に構うの？

(お前が魔王陛下の一部だからだ)

ミルはぴんと来なかった。

魔王の一部とはどういう事だろう。

そう言えばさっきも、魔王の身体の一部だと言っていた。一体、どういう事なのだろう。ミルはミルとしてこの研究所で生まれた筈だ。そのくらいは自分でも知っていた。ミルジェとシェリアの力で

やっと命を与えられたと言う事も、よく知っていた。自分の誕生に、魔王等という存在は全く関わっていない筈だ。魔王の存在自体ミルケシオに聞かされて知り、シェリアに詳しく聞こうと思ったのだが、シェリアはミルに魔王について語ろうとしなかった。シェリアはミルと関わる事と、マクア人としての自分を分けて考えているらしい。ミルの世話をしてくれる時は、シェリアは飽く迄もポエニシアン系ズペルス人だった。

——僕はマクア人じゃないし、魔王の子でもないよ？

（ああ、分かっている。そう言う事じゃない。だが、私からは何も教えられないんだ。私から言えるのはこれだけだ。研究員を信じるな。パピヨンやダブルを信じるな）

ミルケシオの凄みのある声が聞こえ、ミルは少し怖くなった。

何故。如何して。

その疑問を彼女にぶつけられるほど、ミルには勇気がなかった。

——ロギラ。

ミルがその謎の名前を思い出したのは、訓練室にてガークの姿を確認した瞬間だった。見学者の少年を副班長のレバに送らせて、ミルジェとシェリアに何かを言っている。ミルジェもシェリアも表情を変えず、人形のようにその言葉を聞いている。

ミルは耳を傾けたが、何のことかさっぱり分からなかった。

疲れていてそれどころでもなかったのかもしれない。

昨日の様に、耳からはまた出血していた。

とても怖い思いをして、思考が吹っ飛んだという事は覚えている。その後は曖昧にしか記憶になく、ミルジェの鳴らすベルが酷い雑音を産んだ事で目が覚めた。何時もは心地よい音楽を刻むそのベルの音とは思えなかった。

——また明日もやるのかしら。

ガークが歩み寄って来た。

ミルは座ったままガークを見上げた。ガークはじっとミルの瞳を見つめ、耳を押さえる手を退かして、出血する耳を覗いた。

「よし、今度はミルの状態を出来るだけ良好にしたまま、トランスを抑える訓練に入ってくれ。近々、使用班がミルの様子を見学に来る。それまでに、ある程度の調教を済ませて欲しい」

ガークはミルジェとシェリアの方向を見つめて言った。その手が頭に置かれ、ミルはじっとガークを見つめた。

――ロギラに騙されるな。

何故、ガークを連想するのだろうか。

何処かで聞いたのだろうか。

ガークはこの名前をどう思うのだろうか。

「以上だ。調教御苦労。今日はもういい」

ガークがミルジェとシェリアにそう言った時、ミルは頭に置かれたガークの手を掴み返し、その顔を見上げて呟いた。

「ロギラ……」

ミルジェとシェリアがちらりとミルを見下ろした。ガークは表情を変えなかった。だが、一瞬だけ、物々しい一瞥を落としたような気がする、とミルは感じた。その醸し出す雰囲気には怯んだのも束の間、ガークは何事もなかったかのように、ミルジェとシェリアに声をかけた。

「ミルは昨日の様に後で遊戯室に送る。お前達の今日の任務は終わりだ」

早く去れ、その意が込められている言葉に、ミルジェもシェリアもおおずおおと訓練室を出ていく。そう言えば昨日も二人とはすぐに引き離されてしまった。共に遊戯室に帰るとばかり思っていたのに、一緒に出ようとした所でガークに引きとめられたのだ。

訓練室を出た二人の背を見送り、座り込んだままミルは軽く指を銜えた。しかし、妙に視線を感じてちらりとガークを見上げると、ガークは怒っているかの様な目でミルを見下ろしていた。

「ガーク？」

ミルはすぐに訊ねた。

だが、ガークは何も言わず、目を逸らした。

繁殖は難航しているらしい。

だが、シェリアもミルジェもこの計画からは外されてしまった為、どのような事がどのように行われているのかを具体的に把握する事は難しいのだが、それでも班内の噂などで耳にすることはあった。

ミルが拒んでいるのではない。

ただ、運がないだけのようだ。

「ミル！ 集中しなさい！」

繁殖の計画とは別に、調教は行われる。

軍人が指定した期日まで、時間が無いのだ。

シェリアもミルジェも、ミルに同情している余裕がなかった。

ミルは時折、聞こえないふりをしたり、泣き喚いたりと手が付けられなくなったのだが、其処はミルジェのベルが物を言った。

ミルのやる気とは別に、トランスの制御は順調だったのは幸いだったのだが。

「聞こえてるんでしょう！」

シェリアが怒鳴ると、ミルは益々身を強張らせた。

トランスまで追い込み、力づくで抑え込む実験は既に終わっている。今やっているのは、ミルが自力でトランスに入り、そのままミルジェとシェリアの指令を聞くという訓練だ。ミルはやる気さえあれば、自力でトランスに近い状態になる事が出来るようだった。だが、そのやる気を起こさせるのが一苦労なのだ。

ミルは日に日に扱いにくくなっていく。

毎日のノルマは何とか達成できるのだが、素直にミルジェやシェリアの言う事を聞かなくなってきたという気がした。

——何でかしら……。

反抗期という説もあったが、ただの反抗期とは思えない、もつと不気味な何かが潜んでいるようにさえ感じる。

——思い過ぎか？

シェリアは何度もその不安を噛み砕き、ミルジェと共に気の抜けない調教を続けた。

だが、確かに、調教を続けられ続けるほど、ミルの表情には何処か不満の様な物が現れていくのだ。

「ミル？ 疲れた？」

ミルジェが声をかけると、ミルはゆっくりと頷いた。

シェリアは息衝き、カードを手から払い落すように消した。

「分かった。今日はもういい」

吐き捨てるように言うと、ミルは目を見開いた。慌てたように首を横に振り、口を開いた。

「御免なさい。怒らないで」

意外なほど弱い声だった。

「やる気がないんじゃないの、シェリア……」

芯から怯えているような声に、シェリアは再び溜め息を吐いた。

ミルの頭に軽く手を置き、赤い目を細めた。

「ミル、明後日は軍人と会うの」

シェリアは言った。

「それまでに、貴方はトランスに入って押さえ込めるようにならないと。明後日までの辛抱よ。お願い、もう少し頑張ってみて……」

ミルが疲れているのは良く知っている。

研究所はミルの実質については考えているが、実態について考えているとは思えない。

ここまで酷使するのは、絶対に良くない事のはずなのだ。

だが、ミルはシェリアを見上げると、静かに頷いた。

「分かった。頑張ってみるよ」

軽く細めた眼の光も、弱弱しいものだった。

使用班の者達が来た日。

ミルの調子は大分良かった。

実際にミルを使う事になる者との顔合わせも兼ねたその見学は、一時間足らずで終わったのだが、もっと長かったのではと思うほど濃いものだった。

ガーク達班の者や、ミルジェやシェリアは勿論、ミル自身も並々ならぬその雰囲気飲まれたのか、始終落ち着かない様子ではあったが、その緊張が却ってよい結果に結びついたらしい。

ミルは訓練の実演の間も、自分を使う事となる使用班の者達をしっかりと見ていた。覚えなくてはいけない顔だと無意識に判断したのだろう。使用班であるズペルス人達も、ミルを注意深く観察し、ミルが変身出来る全ての姿を確認して帰った。

ミルの所有優先権が、研究所から、軍へと一歩近づいた日だった。シェリアは妙な焦りを感じた。

この話は誰が考えたのだろうか。

ズペルス女王ではない事は確かなのだ。彼女はそういう人柄ではない。だとすれば、軍事に於いては女王さえも差し置けるような重鎮。

嫌な顔が過った。

ズペルスの守り子であるシェリアやミルジェを物として扱っているのでは、と思ってしまうような雰囲気醸す武将の顔。出来れば会いたくないような、ズペルス人。

彼の傘下にてミルが使用されるのが腹だたしい。

そして、そんな男を止められない立場に居る女王の身が心配だった。

ミルが成長した最近では、ズペルス城へと帰れる事も頻繁になっ

ていた。しかし、このミルの軍事利用の通達以降、ズペルス城に帰れなくなってしまったのだ。女王は如何しているのだろうか。一国を三百年も支えてきたというのに、彼女の真の味方は少ない。ミルジェもシェリアも心配だった。二人がいない間は、此の間見学に来た超能力少年が気休めに女王の元にて手伝いしていると聞く。彼だけで大丈夫なのか。

「軍人さん、恐かったね」

使用班が帰り、ミルを遊戯室に送り届ける間、シェリアはずっとそんな事を考えていた。ミルの事、女王の事、そればかりが、シェリアの頭を掻きまわす。ミルジェはミルジェで、シェリアと同じように疲れ切った顔をしていた。

「あの人達と一緒に戦うの？」

ミルの問いに、ミルジェは軽く羽根を動かした。

「若しもの時にね。当分は訓練止まりでしょうけど」

「怖そうだね」

ミルが率直に言うと、ミルジェは軽く笑んでその肩に手を触れた。ミルはその手をじっと見つめ、ミルジェとシェリアの両方を見比べた。

「今日も遊戯室なの？」

その問いに、シェリアはぎくりとした。

そろそろミルを《フラスコ》に入れようという話が届いていたのだ。

それが、今夜。

そんな事、ミルに伝えられるわけがない。

だが、嘘を吐くのも後ろめたい事であるし、きっとミルも根に持つだろう。

「そう言えば、ミル。此間、班長にロギラって言わなかった？」

シェリアは誤魔化すために、訊ねた。咄嗟に思い出した事だ。

「あれってどういう意味なの？」

ミルは誤魔化しているとも思わなかったらしく、素直に答えた。

「何となく、そうかな？って思っただけだよ？」

素直に答えてくれたが、シェリアには意味が分からなかった。

「どういう事？」

「どういう事って言われても……」と、ミルが困ったような顔をした時、遊戯室が見えてきた。ミルはその扉を見つめ、ほっと息を吐いた。

「良かった。今日も遊戯室なんだね？」

その言葉に、シェリアもミルジエも言葉を濁した。

ミルは不満に思った。

シェリアとミルジエを恨んでいるのではなく、見抜けなかった自分を恨んでいた。《フラスコ》に入れられると気付いたのが、眠気を覚えてからだったのだ。我ながら、暢気過ぎやしないか。首の後ろに刺さる注入器さえ取ればいいのだが、薬が変に漏れるとかかなりの激痛が走る為に怖くて出来ない。

それよりも、罰として起きたまま《フラスコ》に入れられるのが怖かった。沢山の管で繋がれる瞬間。《フラスコ》が閉められる瞬間。《フラスコ》に液体が入り込む瞬間。その時、その時が怖くて仕方ない。

大人しくするしかないだろう。

ミルは爪を噛んだ。

既に、体の節々には管を付けられ始めた。このままミルが眠りに入れば、大部屋に運ばれて《フラスコ》に固定されるのだろう。

——次はいつ出れるんだろう。

連日の訓練で疲れているのは確かだが、《フラスコ》に入るまでもない筈だ。別に入れなくていいじゃないか、とミルは溜め息を吐く。

欠伸を堪えながら、ミルは遊戯室のカーテンを見つめた。

外から覗かれる事の多いガラス窓。それを内側から遮るカーテン。最近、掛かってばかりなのだ。如何してなのだろう。瞼が閉じかけてきた。

もうそろそろだ。

――嫌だなあ。

ミルは爪を噛んだまま、思った。

外に出された日。ミルジェとシェリアとずっとしてきた訓練。角のある不思議な少年。ズペルス人の軍人達。

一瞬だけ、頭をかすめていく。

――今日は、《妖精》は来るのかな？

ミルケシオが警戒する、あの二人の《妖精》。

「御休み」

目の前が暗くなる前に、その声が聞こえた。

《妖精》の声。

パピヨンか、ダブルか、両方か。

ミルはぼんやりと考えながら、眠りに就いた。

囚ワレノ万華鏡 其ノ漆

囚ワレノ万華鏡 其ノ漆

「教えて」

ミルは言った。

いつもの夢の中で。

光の安定しない大自然の中で、記憶にはないこの風景の中で、ミルは自分によく似た妙齡の女ミルケシオをじっと見つめた。灰色の狼と山猫の目がぎらりと光っている。だが、ミルはたじろがなかった。

聞かなければならないのだ。

「何が起こっているの？」

ミルケシオの眼光がミルをじっと捉える。ミルは怯まずにそれを受け止めた。

彼女は知っている。ミルジェもシェリアも知らない事を、知っている。

訊くなら今の内だ。

ミルは思っていた。

目が覚めたら、また無力な自分に戻ってしまう。夢現な状態に戻ってしまうのだ。実際の夢の中だけだ。これほど意識がはっきりとしているのは。

「何で、魔王が私にコンタクトを取るの？」

真っ直ぐとミルケシオを見据え、ミルは訊ねた。

ミルケシオは表情を変えないまま瞬き、軽く身体の力を抜いた。

そして、ミルの腕を掴み、引き寄せると、囁くように答えた。

「おいで、見せてあげる」

世界の調和がまだ不完全だった頃、自然界を均そうとしていたグレイ山脈の魔王バルバラは、エネルギーをたっぷり蓄える九つの地点を解放する力を生み出した。それは、柱と化したエネルギーの塊を壊し、魂を解き放つ力を有する槌として、武器へと変化し、魔王の元へと保管されていた。

さて、武器は出来た。だが、魔王は困っていた。世界に散り散りに存在する柱へと向かう者がいない。魔王は、自身が過去に起こした地の民の殲滅という罪により、王座から離れられなかったのだ。年頃の皇子もまた、魔王の罪により、山から下りる事が出来ない。槌は、誰でも使える者ではないのだ。

魔王は困り果てた。だが、その時、魔王は六つある槌の一つ一つに、魂のような物が込められている事に気付いた。槌達は、外界の何処かに居る誰かと共鳴し、自身を託せるように勝手に準備をしていたのだ。

魔王は早速、その意志ある武器を託す者を探す為に、使い鳥アンズーを飛ばし、槌の適応者を探し続けた。そして、見つかったのが、六人。マクア人が二人。ズペルス人が一人。花の世界の者が三人。妙に偏っているが、生まれも性別もばらばらの六人だった。

魔王は彼らに槌を託した。

マクア人の変身能力を持つ男には、その柄にサードニックが輝く、燃えるような剣《日影》を。同じくマクア人の偉大なる力を持つ女には、その柄にガーネットが輝く美しき月のような魔法杖《月光》を。花の世界の蠅螂蜘蛛の大いなる魔女には、ラピスラズリの輝きが美しい深い魔力を秘める腕輪《冥想》を。同じく花の世界の蛾の戦士には、トルマリンが光る風のような文字槍《暖風》を。ズペルス人の吸血鬼には、アクアマリンが光る涼しげな短剣《海洋》を。そして、花の世界の澄んだ魔力を有する蝶々の魔女には、コンクパールパールの嵌められた玉虫色に光る鈴《七色》を。

六人の適応者は与えられた槌を手にも、柱へと向かい、見事その魂を解き放ち、世界はやっと安定した。

魔王は大層満足した。

だが、それも束の間、困った事が起きた。適応者達が、槌の魔力に飲まれ始めたのだ。《日影》と《月光》を与えられたマクア人の二人は、力に溺れるあまり、魔王の座を狙う様になった。彼らの反逆をきっかけに、魔王は槌と適応者を見直し始めた。《海洋》を与えられた吸血鬼は、その力に溺れるあまり、より凶暴で手の付けられない怪物へと変貌しつつあった。《七色》を与えられた蝶々の少女は、時折その意識を無くし、《七色》を乱用して災害を起こすようになった。

《冥想》と《暖風》は何も起こっていないが、危険性は十分ある。魔王はそう考えた。

だから、適応者から無理やり槌を奪い返したのだ。適応者達は嘆いた。もはや自分の一部と化していた槌を、無理やり奪われてしまったのだ。体の一部をもぎ取られたような物だ。一気に魔王バルバラに対する不信が高まり、適応者達は呪いながら去っていった。魔王はすぐさま、適応者達が槌を奪い返しにくるのを恐れ、槌の魂を取り出して世に放った。

それからだった。

世界の各地で、槌の魂を宿した六人の子どもがばらばらに生まれたのは。

年齢も種族も性別も全く違う子ども達。

だが、一つ共通していたのは、人間の血を引く事だった。

彼らは生まれては死に、死んでは生まれ、その度に世界の調和を守る為に六人全てがある程度大きくなると、魔王の召集を受けた。

ある代の槌達は、魔王の元で穏やかに過ごし、ある代の槌達はそれぞれ旅立って柱を壊しに行った。体を手に入れた槌に、適応者は必要なかったのだ。

しかし、適応者は諦めていなかった。

自分達の槌が、生き物として生まれている事を知るや否や、取り返すために幾度となく槌達の前に立ち塞がった。槌達は本能的に適応者を恐れ、再び一体となる事を拒んだ。そして、何度も、何度も、捕まっては、何度も、何度も、死んで逃げた。

適応者達は、槌の亡骸を抱える度に、思念を更に燃やしていった。何百年も繰り返される、戦いだった。

夜の静寂に包まれていると、《フラスコ》のある大部屋では液体の流れる音がよく響く。その音を耳にしながら、パピオンは淡い紅の液体を見つめた。

無数の管につながれ、カプセルの中で丸まっているミル。そのミルが、何も知らない筈のミルが、ロギラの名を口にしたと聞いた時、パピオンもダブルもぎよつとした。

原因は分かっている。

遙か彼方のグレイ山脈はマクア王室の魔王バルバラの所為だろう。ロギラ達は、バルバラが魔王だとは認めていなかった。彼らの祭る魔王は他にいるのだ。バルバラよりも、もっと神聖な闇の帝王が。だが、パピオンにとっては、どちらでもいいというのが本音だった。

ただ、自分からミルを奪っていったバルバラよりも、自分の元にミルを取り戻してくれたロギラ達の方に付いた。それだけのことだ。――そろそろ、退き時だ。

ロギラがそう言ったのは、昨日の事だ。

バルバラがミルを目ざとく嗅ぎ付けてしまった今、下手に手出しをされる前に此処から逃げるのだ。ズペルスの発展など、どうでもいい。もっと大切な目的が、ロギラ達にはあるのだ。政権交代という、大切な目的が。

そうなれば、もう誰も、ミルを奪う者はいない。

他の者もそうだ。

それぞれが、それぞれの欲しい物を手に入れられる。

この上ない幸福ではないか。

「パピヨン。まだ其処にいたのか？」

研究所ではあまり聞かない声に、パピヨンは身を竦めた。振り返る先に居たのは、蜘蛛の女。研究所にはあまり来ない花の世界の魔女アラクネだった。

「アラクネ。如何して此処に？ バザイに居たんじゃないの？」

「暇だったから帰ってきた。向こうはオルディアに任せている」

オルディアは、蠅螂の女だ。アラクネの相棒であり、相棒とは思えないほど仲が悪い。だが、その結びつきは、パピヨンが思っているよりも遥かに高いだろう。二人は一人であり、ささやかな好敵手でもあった。

「いいのかい？ 抜け駆けされるんじゃないの？ 槌を見張ってるんだらう？」

「いいのさ。まだ取るには未熟だったからね。暫く泳がせる」

アラクネは目を細め、一歩パピヨンに近づいた。パピヨンはさり気無く身を引いた。彼女とは距離を置きたいのだ。オルディアもそうだ。二人は信用できない。信用できない理由がある。安心して隣に居る事が出来ない存在なのだ。

「そう力むな」

アラクネは見通したようだった。

パピヨンはだが、距離を保ったままアラクネの様子を窺った。

蜘蛛のアラクネも、蠅螂のオルディアも、嘗て二人が本当に一人であった頃、蝶々であるパピヨンを食料として見ていた。今もそうかも知れない。そうでなくとも、彼らはパピヨンの無二の友を目の前で喰った事もある恐ろしい魔女だ。

彼らは仲間であり、敵であるのだ。

近づけるわけがない。

アラクネはパピヨンを一瞥し、軽く鼻で笑うと《フラスコ》を見

上げた。細めたままの目でミルを見つめ、静かに呟く。

「お前は恵まれている」

パピヨンに向けられていた。

「こうやって槌を作って貰えたのだからね。あの柱の所為で、もう二度と《七色》は生まれないと思っていたのに」

パピヨンは黙ったままアラクネを見つめた。

――ダブルが来たらしいのに。

ふと、頭を過った。

彼がいれば、安全が保障される。

万が一、アラクネの腹が空いても、ダブルがいれば手出しされない。空腹紛れに血を吸われる事もないし、肩の表面の肉を削がれる事もない。

逆を言えば、今は危険だ。

この部屋には、パピヨンとアラクネと《フラスコ》のミルしかない。ミルが助けになる訳もない。彼女がパピヨンを殺すなんて事は許されないが、命さえあれば、何をしても咎められないのだ。彼女の気分次第で、此処は地獄になる。

「《冥想》は随分、面倒な所にいるんだっけ？」

パピヨンは距離を保ちながらアラクネに訊ねた。

アラクネは未だ、ミルを見上げている。だが、その目がやや広がった。槌を思っている目だ。適応者は、槌を愛している。適応者にとって、槌は只の得物ではないのだ。自分の一部であり、半身であり、伴侶であり、魂を分けた兄弟にも等しい。それなのに槌は、適応者を怖がるようにバルバラに作りかえられている。パピヨンでさえも、腹だたしい事だ。

「バルバラの秘蔵っ子と言った所か……。幸い、今代は当たり代だ。奴等が柱を壊しに動き出したら何としても捕まえる」

「今度の《冥想》はどんな子だった？」

パピヨンは少しずつ壁に寄った。適当に話を切り上げて、去ってしまいたかった。だが、アラクネがその様子をちらりと見つめたの

で、パピヨンは固まってしまった。

「赤毛の少女だ。ランダの好みそうな目をしている」

ランダとは、ロギラ達と共に真の魔王を祭っているマクア人の魔女だった。若い娘の目を食べる野蠻な魔女で、彼女もまた、何百年にも渡って、自分の槌を追い続けている適応者だった。

「バルバラの使いッパシリが御供しているが、大したことはない。時が来れば難なく回収出来るだろうさ」

アラクネは《フラスコ》を見上げ、すぐに目を逸らした。「で？」とパピヨンを見やり、アラクネは訊ねる。

「この《七色》は完成しているのか？」

「もうそろそろいいらしい」

パピヨンは引き攣りそうな気持ちを抑えつつ、平静を装って答えた。

「直にここともおさらばだろうね」

「その頃にはミルの卵も一緒だったりしてね」

ダブルの声がした。いつの間にか、彼が傍に居た。軽く目配せするダブルに、パピヨンは少しほっとした。

アラクネは面白くなさそうな表情で、六本もある腕を組んだ。

「それはお前の仔か？ 責任取れよ」

アラクネは吐き捨てるように言う。「そういえば」と、ダブルとパピヨンへと顔を向けた。

「近々、ロギラが人狼の群れに本格的に潜入するらしい。此れからはロタスがお前達のパイプ役だ。きちんとと言う事を聞くように、とランダが言っていた」

「……と言う事は、もう直、時が来るんだね？」

ダブルが言った。

時が来る。

また、バルバラと戦う時がやってくる。

今度こそ、今度こそ、槌を取り返してやる。

パピヨンもアラクネも、目を光らせた。ダブルはその二人の表情

を見つめると、頬を搔いて大きく溜め息を吐いた。

「ふう、また集め直しですね。マークしているとはいえ、実際に捕まえるのは大変だ。皆、ミルみたいだったいのね」

「お前が無理する事無い。適応者じゃないんだから」

アラクネの言葉に、ダブルは苦笑した。

「いや、やらせて下さいよ。じゃないと暇だね」

「勝手にしな」

アラクネは溜め息混じりに言い、踵を返した。

「奴等はお前達、槌を集めるのに必死だ」

ミルケシオの声が、幻想の中で響いた。

ミルはぼんやりとその白い影を見つめ、耳を傾けた。

「魔王陛下は奴等に対抗すべく、一旦槌を王室に集めるつもりだ」

「僕も、その槌なの？」

「そうだ。だから、お前はここに居てはいけない。ここに居るのは、お前の為にはならないんだ」

ミルケシオの声が強まった。何してなのか、ミルは怯んだ。彼女の声の向こう側に、到底抗えないような力が存在している。

恐ろしく、大きな、力が。

「ミル。良く聞け。お前は――」

「いやだ……」

ミルは呟くように言った。

「いやだ、いやだ！　なんで！　行きたくないよ！」

「ミル！」

ミルケシオの一喝にも、ミルは怯まなかった。震えているのは、その他の原因。ミルケシオの声の裏に潜む、大きすぎる存在。

白い手が、ミルの頬をそっと撫でた。

「我が俣は駄目だ。行かなくてはいけないんだ。だから、許してく

れ。お前は夢の中で、静かに過ごすの良い。起きた頃には、全てが終わっているだろう」

「どういう事？」

ミルが白い手に軽く触れると、白い手はさらさらと砂の様に消えていった。

同時に、幻想も消えていく。

眠りの世界を作り上げる、幻想の壁が崩れ落ちていく。

「ミルケシオ……」

名前を呼んでも、ミルケシオはもう答えなかった。

シェリアがズペルス城から戻ったその日、突然ガークから呼び出しが入った。ミルジェと共にすぐさま向かうと、人事異動があるとの事だった。何が変わるのだろうか。新入りでも入るのだろうか、と軽く思っていれば、それは結構な変動だった。

「私、ガークは今日より班長から降りる事になった」

驚愕したのは、ミルジェやシェリアだけではなかった。少なからず、研究員の中にも動揺を隠せない者がいた。

「行き先は告げない。だが、暫く帰って来ないだろう。私の後任にレバを指名する。皆、レバの元でしっかりミルを守るように」

まだ衝撃から立ち直れない研究員達の返事は浅かった。

ミルジェもシェリアも、一瞬だけ目を合わせた。

いきなりの降任。

一体、何故なのだろうか。

「ミルジェ、シェリア」

ガークが二人に声をかけた。

「ミルはまだ《フラスコ》に居る。このまま変わりがないようだったら、二、三日置き、外に出して、調教の続きをやるといい」

それが、班長としてのガークの最後の命だった。

彼の行き先については、色々な憶測が流れたが、どれも信憑性のない噂でしかなかった。シェリアもミルジェも少なからず気になったが、余り深追いしている暇もなく、丸一日経てば、ガークのいない研究所にも慣れてしまった。

ただ、幼い頃からのさり気無い思い出が、時折、シェリアの頭を掠めていった。

「ミルはまだ出せないね」

大部屋の《フラスコ》の前でそう言ったのは、新たに班長に上がったレバだった。軽く顎を掻いて、彼は《フラスコ》の中のミルを見つめている。

「安定が悪い。直ぐにトランスでも起こしそうな勢いだ」

「安定剤は？」

ミルジェが訊ねると、レバは溜め息混じりに答えた。

「投与した。だが、一向に効いていないらしい。何か、変な病気にでもなっていないかればいいのだが……」

レバの最後の言葉が、妙に不安だった。《フラスコ》に眠るミルの表情は、いつもと変わらない。ただ、ミルの体内のパロメーターだけが、ミルを出すことを拒んでいる。

レバは眼鏡を外し、息を吐くように言った。

「様子を見るしかあるまい」

「様子を見るだなんて、まあ、他人事のように言えたもんだね」

夜の《フラスコ》の前で、パピヨンはからかうようにロタスに言った。ロタスはレバの恰好のまま、目を細めて空中に居るパピヨンを見上げた。

「他人事じゃないさ。間違いなく、後は様子を見るだけだったからね」

ロタスは眼鏡を外し、白衣の隠しに仕舞った。

「あと六時間ほどで、ミルは高熱を出すだろう。調教に出せない事を口実に、あの邪魔な天使と悪魔は城へ追い返す。そうすれば、こちらの物だ。機会を見極めてパピヨン、お前が連れ去ってしまえ。後は好きなようにするがいい」

「御冗談を。ちゃんとラビラに連れて行くよ。影蛇様の処にね」

パピヨンは董色の目を輝かせて、ミルを見つめた。

今の言葉が嘘になるかも知れない事は、ロタスも承知済みの様だ。きつと、誰もパピヨンを芯から信頼している者などいないのだろう。

ロタスは軽く笑み、声を潜めた。

「天使と悪魔がいなくなったら、ミルを治療と称して『フラスコ』から出す。その時は、我々しかない。気兼ねなく連れて行くがいい」

「その約束の日は？」

パピヨンが空かさず訊ねると、ロタスの目の色が変わった。

「三日後だ」

ミルが高熱を出した。それは、昔、ミルが罹ったトリコによく似た症状らしい。兎も角、治すには相当時間が掛かると推定されてしまった。

ミルジェもシェリアも、ミルが健康でないとあまり居る意味がない。嘗てはミルを狙った侵入者が後を絶たなかったが、研究所のセキュリティの向上や、何と言っても、あのバザイの失敗が、あらゆる国の勇気を削いでしまったらしい。今や、ミルジェやシェリアが居ても居なくても、ミルを守る力に然程変動は生じなくなっていた。となれば、ミルが元気になるまで、二人が此処に居る必要性が無くなってしまう。

そして、それは、研究所も同じ見方をしたらしい。

「城に……ですか？」

ミルジェの問いに、レバは頷いた。

レバに言い渡されたのは、帰還命令。

「二人にはミルが全快になるまで、城での公務に戻って欲しい、と城からの命が来しました」

城での公務。実際にやらなければならない事など極僅かだ。二人の執務は死なない事。守り子である二人が生きている事で、ズペルス国は安定を手に入れているのだ。

其処では、退屈な鳥籠の生活が二人を待っている。

だが、断る理由もない。ミルが目覚まさない限り。

「ミルが全快するのに少なくとも、三か月は掛かるでしょうね」

「そんなに？」

シェリアは思わず訊ね返した。

トリコならば、それほど掛からない。尤も、重症であれば話は違うが、ミルの病気は症状こそ似ているが、トリコとも少し違うらしい。

「我々も少しでも早くミルを治せるように力を注ぐ。だから、通達があるまではズペルス城で待機していて欲しい」

レバの言葉に、ミルジェもシェリアも口を噤んだ。

液体の流れる音。

何時ものように、そればかりが響いている。触れる《フラスコ》はひんやりと冷たく、熱を吸収していく。

パピヨンはその冷たさを感じながら、静かに《フラスコ》を覗いた。

約束の日。

ロタスは言ったとおり、邪魔な天使も悪魔も城へと追い払った。そして、今夜、治療の為にミルを《フラスコ》から出す予定だと聞かされた。

此処までは順調。

後は時間の流れだけだ。

だが、誤算も生じた。

研究所の中で療養中の他の重要実験体が、突如危篤に陥ったのだ。ロタスもレバとしてその実験体に関わっていた為、そちらへ行かざるを得なくなった。パピヨンは息を潜めながら、『フラスコ』の裏側で彼を待った。

部屋には研究員が数名いる。

彼らの会話だけが、外の情報源だ。

パピヨンは影のように、ロタスを待ち続けた。

何しろ、その重要実験体は、ミルと同じく研究所の威信に関わる程の存在だった。確か、山椒魚の血を引くヒポラスの子どもだった。パピヨンは軽く指を銜え、影から研究員達を見張った。レバが来れば、彼らを追い払う事が出来る。早く来ないだろうか。

その時、大部屋の扉が開いた。

一瞬期待したパピヨンだったが、入ってきたのは別の研究員だった。

「少し落ち着いたらしい」

新たに来た研究員が言った。

「もう直ぐレバ班長が戻って来れるそうさ。そうすれば、今日は終わり。それまでの辛抱だな」

研究員達は少し安堵したようだった。

パピヨンも安堵した。

見通しが立っただけでもよしとしよう。あと少しでレバが来れば、全てが終わる。長く待ち焦がれた瞬間が、すぐ其処まで来ている。バルバラとの戦いも、終わるのだ。

——ミル……。

『七色』の力をその身に宿す槌。コンクパールが体内で光っている。見えないのが不思議なほど、パピヨンには分かった。

——もうすぐ。

手に入る。

パピヨンが瞼を閉じたその瞬間、妙な音がした。卵が割れるような、奇妙な音。ぱきぱきという、亀裂の音。

――何？

パピヨンが目を開けたその瞬間、それは起こった。

突然の事に、パピヨンも研究員も固まった。

それを無視するかのように、薄紅の液体と、硝子の破片とが、雨の様にその場に降り注ぐ。瞬間に、大部屋の床が、紅と硝子の色に輝いた。その間で、体を震わせながら、紅に染まる白い獣が身を起す。

――ミル……。

赤く染まった白い長髪を、水揚げされた藻の様に揺らし、一步、また一步と床を踏みしめる。その向かう先は、出口。牙を漏らし、ただ逃げていく。パピヨンの思考が止まった。ゆっくりと逃走するその姿を、研究員もパピヨンも、ただ見送ることしか出来なかった。ミルはそのまま開けっ放しの扉を抜け、廊下を横切り、見えなくなった。

其処で、我に返った研究員の一人が、慌てて警報を鳴らした。

――逃げた。

パピヨンの体が奥底から震えた。

――逃げられた。

警報が鳴り響いた。

ズペルスの脳と称されるエネルギー産出機関が爆破された。

ズペルス城での執務に就いていたミルジェもシェリアも、すぐさま少女の様な外見の女王に附いてその一連の現場へと向かった。其処は、ミルジェとシェリアの馴染み深い研究所から、遙か彼方に離れたエネルギー産出機関までの十数キロの同圈内。最も被害が大き

かったのが、爆破されたエネルギー産出機関だった。地下より上は、何も無い。ただ、瓦礫だけが残されているだけ。当初何人かいたはずの管理人は、行方不明のままだった。

研究所は研究所で、沢山の実験体の檻が壊され、復旧に急ぐ役人たちの活動を度々邪魔した。確認によれば、九十九の檻が壊されたという。その数は、最後にミルの周りで発見された使い魔達の数と一致していた。

犯人は、ミルらしい。

高熱で療養していたはずの、ミルだという。

ミルが《フラスコ》を自力で破壊し、知りもしない筈のこのエネルギー産出機関へと向かい、根絶的に壊して去ったというのだ。

ミルジェもシェリアも信じられなかった。

だが、ミルは何処にも居ない。

処分、或いは回収された実験体の中にも、ミルは含まれていなかった。ただ、殆ど更地となっているエネルギー産出機関に、ミル以外の何者でもない白い体毛が、残されていた。焼けもせず。飛ばされもせず。其処に残っていた。

「追い人と呼んだの」

ズペルシス女王が蚊の鳴くような声で言った。

「すぐに来るでしょう」

その言葉通り、ミルゼリオ人の幼生に率いられた少年が、辛うじて原形を留めた地下より上がってきた。シェリアは静かに驚愕したが、すぐに納得した。其処に居たのは、シェンだった。黄金の一角と、淡い金髪が光って見える。

「おかえり、シェン」

ズペルシス女王がシェンに言った。

シェンは驚きを隠せないような表情になりつつも、すぐに膝を着いた。

「夢が現実になったみたい」

ズペルシス女王の声は、風に負けそうな程に細い。だが、不思議

とその声は響き、シェリアにもミルジェにも届いた。きっと、シェンにも届いているだろう。

ズペルシス女王は足元の白い毛の束を拾った。

「同じ匂い、同じ色、同じ光景……」

風に靡くミルの体毛を見つめながら、ズペルシス女王は溜め息を吐いた。堪らずに、シェンが口を開いた。

「その毛は、例の――」

だが、シェンが言い終わらないうちに、ズペルシス女王は頷いた。「周りを見て、シェン。あんなに強度の高かった建物が粉々になってしまった。ここにいた人間は殆ど行方不明。生きているか、生きていないか、それを知る手がかりさえも見つからない」

大きく風が吹いた。ズペルシス女王の手の中の白い毛が風に乗ろうとする。

「なのに、この毛は残っていた」

不意にズペルシス女王はシェンの元に近づくと、シェンの手に白い毛を握らせた。

「貴方が持っていて」

「捕獲ですか？」

シェンが首を傾げる。

なかなか察しの良い少年だ。超能力だろうか。

シェリアは身体の奥で、考えていた。

「復興には役不足ですけどね。あの子はこの国のものなんです。それに、危険だわ。あの任務のついでに探してくれれば――」

「分かりました。見つけ次第連れ帰ります」

ズペルシス女王は微かに微笑むと、ミルジェとシェリアの両方に同時に触れた。その瞬間、二人をこの地に縛っていた何かが、解かれた。

ミルジェも、シェリアも、ぎよっとした。

自分達が放たれた。

この事が、どういうことか。

「彼らに復興のための任を授けます。協力してくれますか？」

シェンの青味がかった茶の目が、反射した。

「勿論です。女王陛下」

シェリアもミルジェも、たった今、追い人となったシェンを見つめた。

行かなくてはならない。

追いかけてはならない。

重大な罪を犯した獣を狩りに。愛おしい我が子を取り戻しに。この国の為に。自分達の為に。鎖を断って去っていった万華鏡のような存在を、再び捕まえる為に。

行かなくてはならない。

ミルジェの赤い羽根と、シェリアの黒い羽根が、大きく揺れた。

向かうのは、ただ、獣の残り香のみ。心を鬼にし、愚かな獣を狩るのみ。

穏やかになった風に、シェリアは念を乗せた。

変わらない愛情と、容赦ない激情と。

今は何処かを逃げ去っている、ミルへと向けて。

長い追跡の旅が、幕を開けた。

囚ワレノ万華鏡 其ノ漆（後書き）

乱筆にもめげず、読んで頂き本当に感謝いたします。前作『獵犬ト狐』に続く短編『囚ワレノ万華鏡』如何でしたか。今作は『黒狗率イル旅ノ群レ』とは直接的な関わりが薄いのですが、そのスピントとして出そうとしている『赤星渡シ 蜃気楼ノ仔』と『人狼望郷ノ念抱ク』に繋がる作品でした。シェリアやミルジェ、シェン達などのように過ごしたのが『赤星』にて書かれ、ミルがその後どのように過ごしたのが『人狼』にて書かれております。どうか『赤星』や『人狼』も世に出せるように頑張ってください。それでは、お読み下さりありがとうございます。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

2009年4月15日 幼ゐこみ

赤く染まる空 其ノ壱（前書き）

『囚ワレノ万華鏡』にてちょっとだけ登場したミルケシオが主人公の話です。ついでに、今サイトの方で執筆中の『人狼望郷ノ念抱ク』の過去の出来事にもなります。なので、本編のネタバレが盛り沢山ですので、やはり前作同様、【別に気にしない方・本編に興味無い方・人狼くを読んだ方】は問題ありませんが、【人狼くのネタバレを防ぎたい方】がもしいらっしゃいましたら注意が必要です。また、あやふやなプロットによる更新でしたので、些か今まで以上に乱れがあるかもしれません。見つけ次第直していきますので、予めご了承ください。最後に、前回からかなり遅れた完結となってしまったことをお詫びいたします。

2009年9月1日 幼ゐこみ

赤ク染マル空 其ノ壱

赤ク染マル空 其ノ壱

虹色の世界。そう呼ばれている大陸がある。その中央に広がる大平原の北側は、もっと広大な山脈が広がっている。その山脈こそ、山神グレイ山脈と呼ばれており、其処には専ら魔王の王室があるという話が伝わっている。魔王は自然界を司り、全てに於いて調和に重きを持つ神であるらしい。温厚と言われていたり、残忍と言われていたり、その人情は全く分からないが、多くの者が畏怖すべき存在であるのは確かだった。

平原から山脈の北側へと掛る大きな虹の真下に王室はあるとの噂だが、其処へ行ってみたとしても、待っているのは見方によれば獣の頭にも見える大岩があるだけだ。だから、畏怖すべき魔王は居るのか居ないのかも謎だ。

それよりも、グレイ山脈に於いて一般的に恐れられる者は他に居た。それは、王室のあると言われる辺りから東全域にかけての範囲での話だ。

其処は、夜を告げる人狼達の縄張りなのだ。彼らはジュノア人という感情により変色する灰色の目を持つ人間でありながら、獣人達よりも獣染みた生活を営んでいる。即ち、群れで里を出で、狩りをして切り盛りしているのだ。獲物は獣人が殆どだが、何分、毎度のことである為、旅人の異民族の人間を狩る事も多かった。彼らは同胞でなければ何でも食べた。例え、同系のジュノア人であっても、人狼族の血を引いていなければ獲物の対象になった。

だからこそ、グレイ山脈を通る者は誰しも人狼達を、魔物以上に恐れていた。そんな旅人の救いになるのが、グレイ山脈の東区域の半ばにあるオアシスという町だった。其処は、殺伐としたグレイ山脈の中で、まさにオアシスと言える場所であり、其処の中に若しも

人狼族の者が入ったとしても、絶対に彼らは狩りをしないのだ。

それは、均衡を保つために、人狼族の族長が掟として固く守らせているかららしいのだが、旅人にとっては本当に助かる事だった。また、人狼族の者は、腹さえ空かせていなければ、気安い者も多かった。特に、元から獲物の範疇に入らなさそうな者などは、其処まで彼らを恐れていないのも事実だ。

だからだろうか。

決して多くはないが、人狼族と異民族の者が惹かれ合う事があるのだ。大抵オアシスの住民との事なのだが、今回もまさにそうだった。

オアシスの旅館の娘である山猫と、人狼族の静かな青年狼。その静かで落ち着いた恋愛の様子は、オアシスの者も、人狼族の者も、垣間見る事があった。だが、周囲は何も言わなかった。珍しい事ではないからだ。多くはないが、珍しくはない。取るに足らない事だったのだ。

また、何人かの人狼族の男は、その青年を羨ましがった。オアシスのその山猫は、とても美しかったのだ。狼にこだわらなければ、彼女を妻にしたいと思う者も少なくなかった。やがて、山猫娘は子を孕んだ。だが、その頃から、心成しかその娘の表情が凍りついてしまったような気がした。青年狼もまた、何処か寂しげに娘を身重の娘を支え、子が生まれるのを待っていたのだ。

人々は不思議だった。子を授かったのに、如何してあんなに悲しそうなのだろう。しかしやがて、子が生まれると、人々は何となく察するようになった。生まれた子は娘で、真っ白でとても愛らしい赤ん坊だった。狼と山猫の特性を平等に受け継ぎ、オアシスの町にて独特な成長を見せる彼女は、次第に周りの者達にある考えを持たせていくようになるのだ。

娘は母親にはよく似ている。だが、父親にはどうだろうか。

首を突っ込んではいけないと分かっているのだが、どうしても気になるのは生まれた娘の髪の色なのだ。淀みない真っ白な髪は、父

親の特徴でも母親の特徴でもない。祖先を辿ればその内に居ないとは断言出来ないが、それよりも、その白い髪を見ると、真っ先に思い出す人物がいるのだ。

人狼族の現族長ブレイン。彼の家系は、ある特別な血を引いている為に、代々白髪の子どもが数人生まれる。そしてその中から、族長が選ばれる可能性が高い。今は、白毛を受け継いでいるのはブレイン以外に居ない。彼の遠縁でさえも、白髪の仔を生んでいないのだ。族長になれる可能性が高いとはいえ、人狼達は白い毛の仔を望んでいなかった。何故なら、白い毛を持って生まれてしまった仔は、幾ら族長の一族の大いなる御子であるからと言っても、生まれつき定められた役目から逃れられないからだ。その役目は多くの場合眠っているとはいえ、族長にでもなるか、群れを抜けるかしなければ、完全に免除されないのだ。

山猫娘と青年狼が暗い顔をしているのは、そのような白い髪の子が生れたからだろうか。否、それよりも、気になるのは、白い髪は、族長一族以外に出た事がないという事だった。

しかし、誰も其処まで探る事は出来なかった。

山猫娘も青年狼も、暖かく娘を育てている。それでいいじゃないか。それをわざわざ崩壊させる必要など何処にもない。

だが、一つだけ気になった。

時折、山猫娘の見せる、怯えたような目が。

「ミルケシオは俺達の子さ。だからあの子の前で、そんなに暗い顔を見せないでくれ」

人狼の青年ジェルは、窓辺に座る山猫娘バスに言った。彼女は窓から入り込む風に髪を撫ぜられながら、溜め息ばかり吐いていた。ルーピルプ人という種族の彼女は、人間なのにその瞳だけが人間らしくなく、猫目石のような輝きを放っているのだ。日中、その細い

瞳で見つめられると、人狼であるジェルでも、どきりとしてしまう。今は、程よく暗い夜。それはそれで、猫の目は光るからいけない。「分かってるわ」

バスは溜め息混じりに言った。

「でも、だからこそ、あの子は不思議がるの。今日も言っていたわ『母さん、何故私の髪は白いの?』って」

「何て答えた?」

バスは力なく笑い、ジェルを見つめた。程良い人間らしい瞳だった。

「うんと小さい頃に、雪に包まれたのよって答えた」

ジェルは目を細め、頷いた。

「なかなか素敵なお答えじゃない。良く思いつくもんだ。それで大丈夫。あの子は俺達の子なのだから」

「ジェル、あの子を群れに連れて行くつもりなの?」

バスが不安を消さずにジェルに訊ねた。ジェルは笑みを消した。若しも子を持った場合、それが群れの中でも外でも、ある程度大きくなったら一度は族長に合わせるのが決まりだったのだ。今年六歳になるミルケシオも、そろそろ連れて行くべき年齢になりつつあった。少なくとも、あと三年のうちには連れて行かなくてはならないだろう。

「分かってくれ、バス。掟には逆らえない。何、行って族長に会わせたらすぐにオアシスに連れてくるさ。だから、心配しないで」

「でも、彼が、あの子の髪の色を見たら……」

ジェルは押し黙った。ミルケシオを連れて群れに戻った時、同胞達はミルケシオの髪を見て何を思うのだろう。そして、何よりも、族長は、何を思うのだろう。まさかとは思いが、ミルケシオがオアシスに帰れないなんて事にはならないだろうか。その前に、ジェルは、族長にミルケシオを会わせる事自体が不安だった。きっとバスも、そうなのだろう。ミルケシオが生まれてからというもの、バスは一步もオアシスを出た事がない。ジェル以外の人狼をも恐れてい

た時期もある。今は其処まではないが、それでも族長という言葉に妙な嫌悪を示すのだ。

「ともかく、愛しい娘を人狼の長に見せたくない」

この話になる度に、バスは頭を抱えてそう呟くのだ。ジェルは困り果てた。バスが言うのも尤もな事なのだ。自分も会わせたくない。だが、掟なのだ。人狼である限り、群れの一員である限り、掟を破る事は出来ない。

ジェルは悩み続けていた。

暖かい風が吹き込む様子を、灰色の目の少女は見つめていた。その風は目の前の大きな楓の木を揺らし、ゆらりゆらりと降りてくる。少女はその風の色を見つめ、同じようにゆっくりと目で追った。

ここは家の中。

メイプルの家と呼ばれる、楓に添えられた家だ。一本の楓を大黒柱として、この家は建っている。その圧倒的な存在感は、中に入っただけで直接的に味わなくなるとも、外観からでも十分伝わってくる。因ってここが称される時は、家名であるルクエシオではなく、メイプル——つまり、楓の名が用いられるのだ。

それほど此処オアシスにて印象的な家で、少女は生まれ育った。その名を、ミ・ルクエシオ。普段は繋げて、ミルケシオと呼ばれていた。彼女は猫の瞳のルーピルプ人である母を持ち、その性質をしっかりと受け継ぎ、昼は細く鋭い瞳で世を見つめていた。だが、その虹彩は不安定で、その時の感情に大きく左右される。平常時は灰色を成すその目は、今は昼の光に当たってオレンジに輝いていた。

この目こそ、彼女が狼の血を受け継いでいる証拠だった。

オアシスの付近に住む人狼である父は共に住んでいないものの、ちよくちよくミルケシオに会いにくる。だから、彼女は勿論、彼を父として受け入れ、慕っていた。父はいつも温厚で、不思議に輝く狼

の目を細めて笑いかけてくれる。

昨日も、そんな父が帰って来たばかりだった。

だが、最近、ミルケシオは小さな胸に疑問を抱いていた。自分の髪の色だ。父とも母とも違うその色。一体何処から来たのだろうか。オアシスでよく遊ぶ男の子のコメは、母親によく似た赤毛を持っている。同じくオアシスでよく遊ぶ双子の兄妹については、兄のフォクシは母に似た栗色の髪を、妹のビクシは父に似た鋼色の髪を持っていた。

私は、とミルケシオはよく自分の髪を梳かしたものだ。真っ白なその髪は、母にも似ていなければ、父にも似ていない。何故だろう、とミルケシオは考えた。考えても分らなかった為、母に訊ねた。

其処で得た答えが、雪に包まれたから、だった。雪と言うものは知っている。見た事はないが、絵画で見せて貰った事がある。白くてふわふわとした綺麗なものだった。その色は、ちょうどミルケシオと同じ色。

そうだ。きっと、ミルケシオが覚えていないほど小さい頃は、この辺りにも雪が降っていたのだろう。

ミルケシオはそう考えて一人頷いた。

そうだとしたら、何て綺麗なのだろう。真っ白い雪に包まれて、真っ白い色を吸収したこの髪。同い年の他の子は受け継がなかった白。それを、自分だけが、自分一人だけが受け継いでいるのだ。

そう思うと、優越感に浸れた。

でも、だからこそ、疑問だ。どうして、自分だけが受け継いだのだろう。

「ミルケシオ！ いるー？」

大きな声が聞こえ、ミルケシオは振り返った。一番仲のいいコメの声だ。ミルケシオは駆けだし、扉を開けた。思ったとおり、コメがこちらを見て立っている。赤い短めの髪をゆらりと垂らし、黒い目を輝かせている。扉を閉めて、玄関を飛び降りるミルケシオに、

コメは軽くタッチした。

「コメ、おはよう」

「なあ、師匠帰ってるって本当？」

コメは挨拶をすつ飛ばして訊ねてきた。何と行儀の悪い、そう思いつつも、ミルケシオは頷いた。コメは「やった！」と拳を握りしめた。

「また剣術を教えて貰いたいんだ！　なあ、会わせてくれよ！」

コメのずうずうしさに、ミルケシオはやや眉を顰めた。

「駄目よ。父さんは帰って来たばかりで疲れてるんだから。大体、コメ、今君はこんな所に居ていいわけ？　また君の伯父さんや伯母さんに怒られちゃうんじゃない？」

ミルケシオが一気に言うと、コメはしゅんと肩を竦めた。コメの父母はミルケシオの母と仲がいい。愛息子のコメが、人狼の血を引くミルケシオと遊ぶのに嫌な顔一つしない上、ミルケシオにも親切にしてくれる。だが、そのコメを親以上に過保護に育てるコメの伯父伯母夫婦は、母のバスならまだしも、ミルケシオやその父ジェルの事をあまりよく思っていないかった。

——父親が早く群れに連れ帰ってくれればいいのに。

そんな言葉は、何度かミルケシオの居る前でも放たれた。だが、ミルケシオはその事について、母に泣きつく事はなかった。そんな事をすれば、母を傷付けてしまう。この世に生まれて五年経った今、ミルケシオはすでにそんな事を想う様になっていた。

——あの邪悪な白い狼とまた遊ぶ気？

そのような心でミルケシオを見つめるのは、コメの伯父伯母だけではなかった。オアシスにてすれ違う住民の何人かは、ミルケシオに向けて良い印象をもっていない。彼らは何も言わないが、ミルケシオにはよく分かった。だからこそ、コメのように仲良くしてくれる存在は有り難かった。有難かったが、その分、気も使った。コメを失いたくない。コメが自分によって傷つくのが耐えられない。コメを大切にしたい。

彼にとって自分が害ならば、きつとあまり会わない方がいいのだ。そう思っていた。

「伯母さんや伯父さんの言う事なんて、関係ないよ」

コメは咳払いをして、「それよりも」と、続けて言った。

「訊いてもいいかな？」

「なにを？」

ミルケシオは少し緊張気味に訊ね返した。

コメは一つ頷くと、軽く咳払いをして小さな声で言った。

「お前、いつか、父ちゃんと一緒に群れに帰っちゃうって本当？」

ミルケシオは瞬いた。確かに、コメの伯母がそんな事を言う事はあったが、母や父が言ったことは決してない。それどころか、ミルケシオにとって、群れというものもよく分からないものだった。父は普段其処に居るらしいのだが、其処がどんな所なのか、見当もつかないのだ。父がその話をしてくれる事もなかったし、ミルケシオが疑問に思った事も、そういうば、あまりなかった。

「違うと思う。そんな話、母さんとも父さんともしたことない」

ミルケシオはそう答えたが、今すぐに家に戻って父か母に問い質したくなかった。まさか、とは思うが、母が自分を手放すなんて事がないと言えるのだろうか。

ミルケシオは寒気を感じた。

「よかった」とコメは溜め息をついて、笑顔を見せる。ミルケシオの肩を軽く叩くと、手を握って言った。

「あの分からず屋の伯母さんがそんな事言ってるのは知ってるでしょう？ 俺だってあんな事を信じてるってわけじゃないんだ。でもね、此間、俺の父ちゃんと母ちゃんがそんな事を話してたんだ。その時は寂しくなるって……。俺、びっくりして、まさかそんな事あるはずないって思って訊いてみたんだけどさ——」

ミルケシオは目を見開いた。

まさか、あの親切なコメの父母までもそんな事を言っているなんて。コメの伯母ならば此処まで不安にはならないが、さすがにあの

父母が言ったのなら、印象が違う。

ミルケシオは思わず、コメの手を離した。

「どうしたの？」

コメが驚いて覗き込んできたが、ミルケシオは落ち着けなかった。

「私……」

ミルケシオは唾を飲み込んで、踵を返した。

「訊いてくる！」

コメが慌てて呼びかけてきたが、ミルケシオの耳には入らなかった。群れに戻るとはどういう事だろう。何故、オアシスに居てはいけないのだろう。此処で生まれて、此処で育ったのに。どうして。

「母さん！」

メイプルの家の扉を開け、ミルケシオは叫んだ。コメが付いて来ているような気がしたが、構ってはいられない。一刻も早く訊ねたかった。

「父さん！ 母さん、何処？」

「ミルケシオ、落ち着いて」

やはり付いて来ていたらしく、すぐ横でコメが言った。

「母さん！」

「どうしたの？ そんなに大声出して」

母が階段から降りてきた。そして、横に居るコメに気付き、「あら」と笑顔を作った。

「おはよう、コメ。来ていたのね。ジェルに会いたいの？」

コメは笑顔で肯いた。彼は、ミルケシオの父をジェル師匠と呼んでいる。すっかり弟子でいるつもりらしい。ミルケシオの母は「そう」と笑顔で応え、コメに言った。

「二階の一番左のいつもの部屋にいるわ。起しちゃっていいよ」

コメは、嬉しそうに走り、階段を上っていった。

ミルケシオは少し安心した。コメのいる前で確認するのも怖かったからだ。一階に下りてきた母に、ミルケシオは飛び付いた。

「一体どうしたの？」

母の問いかけに、ミルケシオは見上げた。

「ねえ、母さん？」

「何？」

「私、父さんと群れに戻るの？」

その瞬間、母の表情が僅かに引き攣ったのを感じた。気の所為だろうか、否、気の所為ではなかった気がする。

「誰に聞いたの？」

「コメの父さんや母さんが言ってたんだって……」

「噂ね？」

ミルケシオの母は確認するように言い、ほっと溜め息を吐いた。

「そうね。ミルケシオも何時かは群れに行くでしょうね」

「うそだ！」

ミルケシオは驚きのあまり、大声で言った。母なら否定してくれる、そう信じていたのに。絶対離れたくない。オアシスにいたい。

「落ち着いて、ミルケシオ。大丈夫、行くだけで、すぐに戻って来れるの。旅行みたいなものよ。前に双子のフォクシとビクシが家族で虹の宿に行ったでしょう？」

そう言われて、ミルケシオは口を閉じた。そういえば少し前、フォクシとビクシが虹の宿に遊びに行った事を自慢していた。虹の宿は山を下り切った所にあって、このオアシスよりもずっと賑やかで凄かったらしい。その話を聞いて、ミルケシオも旅行に憧れたものだった。

それと同じ。

「本当に？」

「ええ。もちろん」

ミルケシオの母は目を細めると、階段を見上げた。

「さ、だから、安心して。コメと一緒に父さんを起こしてきなさい」

「うん」

ミルケシオは笑顔で頷き、二階へと上がっていった。

旅行の様なもの。それならば安心だ。

寧ろ、あんなに不安に思ったのが恥ずかしいくらいだ。

階段を上がり切り、廊下を思いつきり走ってミルケシオは独りで照れながら、部屋へと走っていった。

赤ク染マル空 其ノ弐

赤ク染マル空 其ノ弐

ミルケシオが、自分がいつかは群れとやらに行かなくてはいいな
いと知った日から、二年ほど経ったある日、帰ってきた父からつい
に話を持ちかけられた。ミルケシオは旅行みたいなものという母を
信じて父の誘いに乗り、その五日後、群れに帰る父についてオアシ
スを離れた。

見送る母やコメなどの友達を見つめていると、涙がこぼれそうに
なったが、すぐにまた帰ってこれると自分に言い聞かせ、ミルケシ
オは父について歩いた。

父によれば、群れは、そう離れてはいない場所にある里にあって、
父みたいな狼がたくさんいるらしい。狼といえば、自分も半分はそ
うなのだが、父以外の完璧な狼なんて見たこともなかったため、ミ
ルケシオは少し緊張した。これから少しの間、その狼の中で過ごす
ことになるのだ。どんな人たちなのだろう。

そう思っでは、きつと、父のように優しい人ばかりなんだ、と言
い聞かせる事を繰り返しているうちに、里に着いた。父の言うとお
り、オアシスからそんなに離れていないらしい。岩と岩の間を父に
手を引かれて歩いていく。ミルケシオには、すでに、自分が何処か
ら来て、何処に向かっているか分からなかった。ここから自分一人
で帰れと言われて、帰れるわけがない。不安がだんだん大きくなっ
ていった。

やがて、父が足を止めた。

ミルケシオも前を見ると、影が見えた。岩と岩の間に、目立つ灰
色の影が二つ。狼だ。狼はこちらをちらりと見ると、むくむくと大
きくなり、二人の男となった。

「おお、ジェルか」

一人が言った。

父と同じ目をしている。だが、その鋭さは父の何倍もあった。

「今回はなかなかゆっくりな滞在だったよう――」

彼は言いかけて、ミルケシオに気付いた。もう一人の男は前々からミルケシオを見つめている。二人の大人に見つめられ、ミルケシオはさらに緊張した。

「ジェル、その娘が例の？」

前々からミルケシオに気づいていた方の男が訊ねた。ミルケシオの父は頷き、固まっているミルケシオを前へと押しやった。二人の男に覗きこまれ、ミルケシオは益々固くなった。

「オアシスの恋人の子だ。ミルケシオという。族長に会わせに行くんだ」

二人の男は見合わせ、ジェルとミルケシオとをじっと見つめた。彼らは何を見比べているのか、ミルケシオは気になった。

「悪いことは言わん。止めておいた方がいい」

片方の男がそう言った。

「族長がなんて思うか。分かったものじゃないぞ」

「だが、掟は掟だろう」

ミルケシオの父はそう言い、大きくため息を吐いた。二人の男ももう一度顔を見合わせ、父の肩を叩く。

「ジェル。お前とその娘の健闘を祈る。ミルケシオだったね」

男の一人がミルケシオを見つめ、ふっと微笑んだ。

「疲れただろう？ ゆっくりしておいで。里の子どもたちとも遊ぶといいよ」

ミルケシオは少し安心して、笑顔で頷いた。

里の子ども達とはすぐに仲良くなれた。最初のうちこそ、半分だけ猫の匂いのするミルケシオをからかう子どもも多かったが、そう言う子どもは親に叱られたらしく、次の日には普通に遊べるようになった。

だが、ミルケシオは狼の子どもたちとの遊びに慣れるまで大変だ

った。何故なら、彼らはオアシスの子ども達とは比べ物にならないほどよく動き、とても遊び場とは思えない程の荒地で、とても幼気な子ども達とは思えないような遊びをするのだ。中でも、岩山登りはきつかった。ミルケシオよりもずっとずっと幼い女の子でさえも易々と登っていくのを、いつも後から追っていくしかなかった。その上、彼らは疲れ知らずで、やっと登り終えたミルケシオの前で、大人を真似た遠吠えを上げながら狼の姿となって飛び降りたりするのだ。

「もう！ 今やっと登ったのに！」

ミルケシオがいくら文句を言っても、何一つ効果はなかった。それどころか、「おおい、はやく降りて来いよー！」とまで言う始末。呆れながらミルケシオも、獣姿を晒して飛び降りるしかなかった。そもそもオアシスに居た頃は、獣姿なんて取る必要もなかった。

もともとヒト姿を持たない者や、ある種の獣人——彼らを、獣姿を持たない者も含めて、変身出来ない者という意味で、ビースタスと言う事をミルケシオは最近知った——以外は、獣姿で町をうろつくものなんてあまりいなかった。よっぽど急いでいる等の事情がある者ぐらいだろう。確かにミルケシオも、遊びで獣姿を見せる事はあったのだが、人狼の子ども達はそれよりもずっと頻繁に変身するのだ。そう、彼らよりもずっと、ミルケシオは自分の獣姿に慣れていない。狼と猫を足したような、真っ白な獣姿に。

だから、ミルケシオが狼猫の獣姿で飛び降りて、上手く着地できないのも仕方なかった。真っ白な足を挫きそうになり、しかし、人狼の子ども達に莫迦にされたくないのでそれを必死に隠しながら素早くヒト姿へと変わる。狼猫のままだと、尻尾で異変が分かってしまうので、なるべく早く行動を起こした。

「じゃあ、次は狩り場に行こうぜ！」

赤毛の少年が言った。彼はいつもそうだ、とミルケシオは呆れる。彼が何か言いだすから、ミルケシオまで付いて行かなくてはならなくなる。かといって、付いて行かないと、話題にも付いていけない

なり、その日は孤独を味わう事になる。

仲好くなるにも一苦労だ。

しかし、嫌いではない。オアシスとは全く違う生活は、ミルケシオに流れる血の半分を明らかに刺激している。疲れ切ったのは初日だけで、後は苦勞と共に、楽しさや面白さを自然に感じる事が出来た。

「狩り場ってどこ？」

ミルケシオは隣にいた少女に訊ねた。青い鬘を持つ、同じ年頃の綺麗な狼。彼女は水の流れるような声で答えてくれた。

「ふた山ぐらい越えたところにある袋小路。とっても面白いんだから」人狼の子ども達の面白いが、自分の面白いという感覚ときっちり同調するのか、ミルケシオは疑問に思ったのだが、ついて行ってみてからのお楽しみだ、と自分に言い聞かせた。

案外、努力して面白がろうとしているかもしれない。

自分が自然に群れに馴染んでいるのか不安を感じつつ、ミルケシオが一步踏み出した時、彼女は息を飲んだ。

——足が……。

挫いたのだろうか。否、そんなはずはない。確かに着地は上手くいかなかったが、捻ったりはしてない。しかし、痛いのは確かだった。ふた山超えるなんて考えられないほど。

——どうしよう……。

ミルケシオは戸惑った。

素直に足が痛いと言えはいいのだろうか、それには彼女なりのプライドが傷ついてしまう。懲りてない人狼の子どもに莫迦にされるかもしれない。そう思うと、とても言い出せなかった。

「さあ、行こうぜ」

——ああ、どうしよう……。

ミルケシオが密かに、額に汗をにじませた時だった。

「ミルケシオ、いるかい？」

群れの大人の声がした。父と親しい黒毛の大人だ。馴染みやすく、

ミルケシオにも優しくしてくれる、とてもいい小父さんだった。本人はお兄さんだと言い張るのだが。

彼は姿を見せると、ミルケシオに手招きをした。

「おいで、父さんが呼んでるよ。帰ってきなさい」

「ええっ！　これから狩り場に行くのに！」

そう叫んだのは、赤毛の少年だった。彼は面白くなさそうに黒毛の大人を見つめると、ミルケシオの手をぎゅっと握った。

「ミルケシオにも見せたいのに」

「それはとてもいいけれど、ミルケシオは大切な用事があるんだ。族長さまのお呼び出しだよ。守りなさい」

族長を出されて赤毛の少年はじめ人狼の子ども達は何も言えなくなった。赤毛の少年は「ちえっ」と軽い舌打ちをすると、ミルケシオの手を離れた。

ミルケシオは内心ほっとした。

この足でふた山も越えられるわけがない。いい言い訳が出来たものだ。

そして、疑問に思った。族長の呼び出しとは何だろう。父も一緒にのだろうか。母が近くに居ない分、とても不安だった。そして、人狼の子ども達と引き離された時、その不安はだんだんと大きくなっていく。黒毛の大人に手をひかれて、里へと戻る道すがら、ぼんやりと訪れるその不安に、ミルケシオは微かに震えた。

——なんだか、とても、怖い。

ジェルは友人の連れてきた娘の手を握ると、浮かない足取りで族長の元へと歩いた。族長のいる天幕を開けると、バスの怯えた顔が過った。

ジェルもまた、娘ミルケシオをなるべく族長から遠ざけたかいと思っていたのは事実だ。だが、娘とバス、ジェル自身の事を考えれ

ば、ミルケシオを然るべき年齢で群れに連れて来なければならないという結論に至ってしまうのだ。

真っ白い髪を持って生まれた娘を、人狼の大人達は意味深い目で見つめた。その目線をミルケシオ自身はどう取ったのか。

ジェルは怖くて仕方なかった。

「ジェル。その娘がバスの初子か？」

族長ブレインは、ミルケシオをまじまじと見つめて言った。彼がわざわざジェルの、ではなく、バスの、と言った事が引っかかったのだが、ジェルは黙って頷いた。

ブレインは含みのありそうな笑みを浮かべ、ミルケシオを手招いた。ミルケシオは戸惑ったが、周囲を眺めると、素直にブレインの元へと向かった。

ジェルは少し辛くなった。こうして見ると、ブレインとミルケシオが親子に見えるのだ。同じ毛色の所為だと思っていたが、どうしても、違う可能性を考えてしまう自分が腹立たしくなる。

「成程、母親に似て可愛い娘だ。殊に、混じり気のない白の毛皮が美しい」

ブレインは言い、ジェルをじっと見据えた。

「まるで、我が子を見ているようだ、なあ、ジェル」

ジェルはこっそりと唇を噛み締め、頭を下げた。

「勿体無いお言葉でございます、族長」

ふむ、と族長は軽く返事をし、ミルケシオの頭を軽く押して座らせると、再びジェルを見つめた。

「白い仔が生れて安心した。そなたに白毛の血でも流れていたのだろうかね？ バスの遺伝かもしれないが、可能性は十分ある。そうだな、ジェル、この娘は――」

「月が終わるころには――」

話が良くない方向に行こうとしている事を察知し、ジェルは素早く口を挟んだ。

「ミルケシオは母の元へ返すつもりです。それまで、どうか御鼻屑

に」

ブレインは面白くなさそうにジェルを見やった。だが、すぐに鼻で笑い、ミルケシオを軽く撫でて離れた。

「よかろう。この娘が心地よく里で過ごせることを、また帰ってきたいと思う事を保障しよう」

ブレインは目を細め、にやりと笑んだ。

「何しろ、我が娘にも等しい白毛の仔だからな」

不思議そうに見上げてくるミルケシオを撫でながら、ジェルは静かに族長ブレインを見つめていた。

族長と会ってから数日経ち、あつという間にオアシスへ帰る日となってしまった。

ミルケシオはこの里を離れるのが寂しくて仕方なかった。出来れば、もう少し居たい気もする。だが、父に、母やコメ達の事を言われ、ミルケシオは素直に変える事にした。

見送りには、一緒に遊んだ里の子どもたち皆が来てくれた。

特に仲の良かった青い鬘の少女や、人一倍印象的だった赤毛の少年の顔を見ると、ミルケシオは涙を堪え切れなくなった。

「また帰ってこいよ？」

「今度はもっと不思議な場所に行きましょう？」

「楽しかったよ！」

「早く帰ってきてね！」

赤毛の少年や青い鬘の少女、そして、他の子ども達に声をかけられながら、ミルケシオは父に連れられて岩道を歩いて行く。やがて、角を曲がって彼らの姿が見えなくなると、ミルケシオはいよいよ里で過ごした数十日の思い出を噛み締めて、涙を流した。

父に続いて山道を曲がり、岩を登って、また曲がっていくうちに、もう里への帰り道も分からなくなってしまうと、ミルケシオは涙を

拭った。

数十日ぶりに母に会えるのだ。

コメ達にも会える。

まさかとは思うが、ミルケシオの事を忘れていたりはないだろうか。

一抹の不安を抱きながら、ミルケシオは山道を歩いた。

見覚えのある道は、全く未知の通りなどを、父と離れないように進みながら、次第に懐かしのオアシスが近い事を鼻で感じ始めた。

オアシスから人狼の里へ向かった時よりも、幾分か早いような気がする。

「ミルケシオ、里はどうだった？」

急に父に問われ、ミルケシオは一瞬驚いたが、笑顔で答えた。

「とても楽しかった。友達も出来たし、おじさんやおばさんも優しくかったもの」

「誰と仲好くなったんだい？」

そう言えば、父に友達の話をした事がないと、ミルケシオは気付いた。その日の出来事は漏らさずに教えてきたのだが、具体的に誰と仲が良かったかを伝えていなかった。

「ペシエとベルチとフィユよ」

ペシエは同じ年だが、特に小さな狼の子だった。ベルチというのは、あの印象的な赤毛の少年……の弟だった。やや内気でいて、兄よりも身近な雰囲気醸す同年の少年だ。赤毛こそ兄に似ているが、顔立ち等はあまり似ていなかった。そして、フィユは、あの青い鬘の少女の事だ。皆で遊びに行く日も行かない日も、時折彼女と会って話をしたりした。不思議な雰囲気、神秘的な少女で、取っつき難そうな印象があったが、そうでもない事は話してみてすぐに分かった。

沢山の子ども達と遊んだが、特に親しく喋れたのがこの三人で、ミルケシオはまた会いたいと強く思っていた。

「フィユ……」

父は何故か暗い顔をした。

「フィユか……」

繰り返す父の顔を、ミルケシオは覗き込んだ。

「フィユがどうかしたの？」

父はちらりとミルケシオを見つめ、軽く笑んだ。

「いや、何でもない。そうか、フィユとも仲好くなったんだね」

フィユとも、その言葉が何故だか心に残ったが、ミルケシオはそれ以上訊ねなかった。訊ねなくとも、何かが含まれているのは良く分かった。父の青みがかった灰色の目を見つめっていると、特に。

オアシスに着いて、母の顔を見た瞬間、ミルケシオの目からは、人狼の里を発った時とは全く逆の涙が溢れてきた。そうだ。母に会えないのがこんなにも寂しかったのだ。母を見て、ミルケシオは考え、更に泣いた。

母はそんなミルケシオを抱き締め、語りかける。

「今夜はリングのスープにしましょう？ ミルケシオの大好きなハーブを添えて」

紛れもない母の匂いと母の声に、ミルケシオはすっかり安心した。父はそんな母子の様子を見つめると、何処か寂しげに椅子に座るのだった。

「そういえば、さっきまでコメがいたのよ」

母はミルケシオに言った。

「ここ最近、毎日訊ねて来ていたの。ミルケシオの帰りをずっと楽しみにしていたの」

「行かなきゃ！」

ミルケシオは目を見開いた。早くコメにただいまを言わなくては。跳び出すようにメイプルの家を出で、コメの家へと向かうミルケシオの背を見送り、母は静かに言った。

「気を付けてね」

ミルケシオの姿が見えなくなり、バスとジェルの間には静寂が訪れた。この静寂を破るには、相当な勇気が要りそうだとジェルは思っていたが、バスは難なく静寂を破り、振り返り際にジェルに言った。

「それで、無事に帰って来たという事は、私はあの子を失わずに済んだという事かしら？」

相変わらずの言い草に、ジェルは軽く溜め息を吐いた。吐いてから、慌ててバスを窺ったが、バスはあまり気にしていないような素振りを見せた。

ジェルはミルケシオの去った方向を見つめる。急いで飛び出した彼女は、家の扉をしっかり閉めるのを忘れたらしい。風に揺られて開閉する扉が、何時までもミルケシオの幻影を映し出している。

と、バスが扉をしっかりと閉めた。

「彼はあの子を何と？」

彼が誰なのか、何の事を言っているのか、ジェルにはよく分かった。バスがずっと気にしていたことなのだ。そして、若しかすれば、バスからミルケシオを奪いかねないことにも繋がることもある。

ジェルは低く唸り、唾を飲み込んだ。

「あの子は俺達の子だ。族長にもしっかりと伝えたつもりだ。大丈夫さ、ミルケシオが人狼の群れに永住する事はない。そんな事、俺がさせない。だからバス、君は、あの子の母さんとして、支えてやって欲しい。君からあの子を奪うなんてことはない。族長が相手でも、例え、神獣を相手にしても……」

神獣、とバスは繰り返した。途端に彼女の顔は青ざめ、山猫の瞳は大きくなっていく。彼女もジェルも、ミルケシオの髪の手で心配しているのは、族長の事などではなかった。相手はもっと大きな存

在なのだ。

「どうしてあの子なの……」

バスが力無く言った。

「どうして……器でもないのに」

「器……」

ジェルは溜め息混じりに呟いた。

青い鬘の少女フィユ。彼女とミルケシオが親しくなった。これは運命なのだろうか。見えない大きな力が、あの二人を引き合わせてしまったのだろうか。少なくとも、近いうちに、ミルケシオは辛い思いをするだろう。若しかしたら、もっと酷い思いをする可能性もある。

「バス、この話は止めよう」

ジェルは言った。

考えていても仕方ないのだ。

今を大切にするしか、方法はない。

「そうね」とバスは言い、歩きだした。「リングのスープの準備をするわ。ジェルは休んでいて。長旅で疲れたでしょう」

そう言って去るバスに、ジェルはついて行った。

「いや、リングの皮むきぐらいは出来るさ」

赤ク染マル空 其ノ参

赤ク染マル空 其ノ参

ミルケシオが成長するにつれ、人狼の里へ行く機会は増えていった。それは、ミルケシオ自身が人狼の里に残した友人と会いたがった事もあったのだが、それよりも族長の命である事は隠せなかった。バスは娘を送り出す毎に心配したが、ジェルを信じてミルケシオの帰りを待った。ジェルも、何があってもミルケシオをオアシスへと返せるように、人狼の長との話を慎重に進め、毎回ミルケシオを連れ帰った。

また、ミルケシオ自身も、成長していくにつれて、敏感に周囲の雰囲気を読むようになった。自分が果たして本当にジェルの娘なのか。そうだとすれば、この白髪は何を意味しているのか。人狼の長が何故、自分に固執するのか。そんな疑問も生まれた。

そしてその疑問は、ミルケシオが十二歳を迎えた数日後、大きく爆発する事になる。

その日、人狼の里に居たミルケシオは、里の者達が妙に慌ただしくしている事に、疑問を感じていた。父親のジェルに訊くと、今日は特別な日であるらしく、昼には里の者達と共に、日見丘へと向かう事になっているという。日見丘とは、朝日も夕日もよく見える丘であり、里からはそう離れていない。その為、朝焼けも夕焼けもかなり綺麗に望む事が出来て、ミルケシオはこの場所が好きだった。しかし、人狼の大人達は、此処を特別な場所としているため、子ども達が此処へ踏み込む事を良しとしなかった。

その日見丘へと行けるわけだが、ミルケシオは妙に不気味に思った。あれ程、大人達が避ける特別な場所へ行く用事とは、一体何なのだろう。

幾ら考えても、ミルケシオには見当もつかなかった。

そうして、考えているうちに、昼は訪れる。

里の者ほぼ全員が、日見丘へと移動する。ミルケシオはジェルと逸れないように寄り添い、不安げに日見丘を見渡した。日見丘には素晴らしい眺めを背に、人が一人寝そべる程の細長い岩が座っており、人狼達はその岩を中心にごろりと囲むように立っている。岩の付近には人狼の長やその側近が居り、その傍では呪術師が北側の空に向かって怪しげな祈りを捧げていた。

ミルケシオがその呪術師の祈りを見つめていると、群衆が割れて、其処から担架のような物が運ばれてきた。ミルケシオは何気なくその担架を見つめ、思わず息を嚥めた。其処に寝ていたのは、人狼だった。黄色い毛並みを整えた初老の男で、苦しそうに胸を押さえたまま、事切れていた。初めて見る死人だった。だが、起き上がって呻きだしそうなほど、その様子は生々しく、ミルケシオは何時でも耳を塞げるように身を縮めて、担架が運ばれていくのを見つめた。

ふと、反対側の群衆が割れた。ミルケシオはすぐさまそちらを見やり、今度は、はっとした。輿に乗せられた人狼がやってきた。その者を見つめ、ミルケシオは震えた。青い鬘を翻す、少女。その姿は息も止まるほど美しく、この世のものとは思えないほど、神秘的だった。少女は、静かに死んだ老人を見つめると、軽く目を閉じて輿を降り、細い岩へと寝そべった。ミルケシオは震えが止まらなくなった。これから一体、何が行われるというのか、その事が恐ろしくてたまらない。

やがて、呪術師の祈りに合わせて、焚かれている火がゆらゆらと揺れていく。辺りが急に薄暗くなり、死んだ老人の体が僅かに浮いたような気がした。と、思えば、今度はその老人の体が薄く輝き、見る者の目をくらます。ミルケシオはぎゅっと目を瞑り、暫くしてから恐る恐る開けてみた。

老人の遺体がない。

慌てて目で探したミルケシオは、ふと一点を凝視した。それは寝

かされている少女の真上だった。其処に、空を真っ赤に燃えあがらせる、光があった。朝日より夕日よりも強いその光は、見つめる人狼達をしんと静まらせた。その赤い光は、めらめらと燃えながら徐々に輪郭を整えていくと、かっと青い目を開いた。それは、狼の姿のようだった。正体は、初めて見るミルケシオにも分かる。神獣だ。人狼を守る神の姿だ。

神獣は目を細めると、真下に寝る青い少女を見下ろした。

「新タナ器。陶器ノ様ニ繊細デ脆ク、トテモ芳醇ナ香りノスル器」

体の芯を震わせるような声だった。ミルケシオは黙ったまま神獣と少女とを見つめた。神獣は大きく咆哮すると、真っ直ぐ少女へと飛びかかった。太く大きな牙が少女の胸元へと掛かると、少女は堪らず目を見開き、悲痛な声を上げた。

ミルケシオは息を詰まらせた。見ているのも、苦痛だった。無理もないだろう。その少女は、ミルケシオが昨日まで一緒に遊んでいた、フィユであつたのだから。神獣はフィユが黙るまで噛み付くと、そのままずっと消えた。ミルケシオには、だが、神獣がフィユの中へと吸い込まれていったように見えた。神獣の牙から解放されたフィユは、そのままぐったりと岩の上に倒れ、死んでしまったかのようにな動かなくなった。

ミルケシオは今すぐにでも駆け寄りたかったが、周りの雰囲気を押されて動く事すら出来なかった。それは、ミルケシオと同じく、フィユとよく遊んでいた人狼の子ども達の殆どが同じ気持ちであるらしく、それぞれが大人や兄姉の表情を窺っては、息を飲んでフィユの様子を眺めていた。

と、その時、フィユが急に起き上った。

ほっとしたミルケシオは、だが、すぐに異変に気付いた。フィユの表情が何処か違う。あの清楚で可愛らしいフィユではない。神秘さが増し、美しさに磨きがかかったようにも見える。兎も角そこには、以前の様な親しみが薄れ、絶対に手の届かない所に、フィユが連れて行かれたようにも見えた。

今この瞬間、ミルケシオは彼女に恐怖を覚えた。

何の恐怖なのか、それがどうして生まれたのか、ミルケシオには理解出来ない。しかし、ミルケシオは確かに、これから先、フィユに近づく事が難しいと感じたのだ。と、フィユがミルケシオへと視線を映した。その眼光は鋭く、ミルケシオの心臓を凍らせてしまうかのようなだった。

フィユは綺麗な作り物の様な手を伸ばし、ミルケシオを指した。

「私の薬花よ。その時まで、体を大切に――」

「ヤクカ？」

ミルケシオが首を傾げたその瞬間、里の者達の視線が、一気にミルケシオに向いた。ミルケシオは高い所に登らされたような気分で、フィユを見つめた。フィユは獲物の兎を見るような目で、ミルケシオをじっと見ていた。

「ミルケシオ、前へ」

族長の声に、ミルケシオはびくりと身体を言わせて、前へ出た。フィユに近づくのが妙に怖かったのだが、族長の命令に背く勇氣はなかった。真っ直ぐ族長の元へと進み、跪いた。

「ミルケシオよ。そなたは薬花である。これより先、フィユの為に生き、フィユの為に死ぬ事になるだろう。これは、人狼全体の存続に関わる大切な定めだ。だが、このままその役目を授けるわけにもいかぬ。その為、私は族長として命じる。ジェル。父親として、お前も聞くがいい」

人狼達がざわめいた。

ミルケシオは益々混乱し、ただただ族長の顔を見上げるばかりだった。

「ミルケシオ、そなたに夫婦の縁組を命じる。相手は私の養子であるベルチだ」

「族長――」

ジェルが思わず声を上げた。だが、族長は話を続けた。

「この命に背く事は、人狼全体の存続の危機に関わる。どういふ事

か分かるな？ ミルケシオ。お前に期待されているのは、白い毛並みの子を成すこと。その時が来る前に、ベルチの妻として、人狼の里で暮らすことだ」

「族長！ それはあんまりです！」

ジェルが吠えたが、周りの人狼達は冷やかに彼を見た。ミルケシオは状況を理解する事でいっぱいになり、何を言われているのか、どう反論すればいいのかが、頭の中をぐるぐると掻きまわしてしまい、混乱していた。

ただ、分かった事は、ベルチとの結婚を押し付けられた事だった。幼馴染のベルチ。彼と結婚するなど、考えた事もなかった。それよりもまだ十二歳になったばかりだと言うのに、結婚を決められてしまうなど、考えられない。オアシスでは、十二歳で結婚する者なんていない。それは人狼でも同じである筈だった。皆、十代後半か二十代もしくは三十代で縁組している。好きな時に好きな者と、というわけだ。

ミルケシオも自然と、そんな未来を予想していたのは言うまでもない。

それなのに、一体、何が起こったのだろうか。

「ジェル。お前はこの娘が生まれた時、覚悟をしなかったのか？ 私以外に白毛の者が生まれなかった事を気にしなかったのか？ 少なくとも、この未来を予想しただろう？ この命は取り消さぬ。ミルケシオには人狼の仔を生んでもらい、人狼族の存続に貢献して貰わねばならない。況してや神への供物だ。この娘は今よりお前の物でも、我が養子ベルチの物になるわけでも、私の物になるわけでもない。フィユの物だ。我々の神の物だ。勝手は許さない。例え母親でも、ミルケシオを持ち出させはしない」

「その子は私の娘です！ 族長、お慈悲を！」

必死に懇願するジェルだったが、族長は首を振った。

「駄目だ。この娘はフィユの物。フィユの葉花だ。その中の神への慰みと、誉れの供物だ。何時その時が来ても大丈夫なように、ミル

ケシオはフィユの元へと置くしかない。そして、その時が来る前に、ミルケシオには白い毛並みの仔を生んでもらわねば困る」

ミルケシオはやっと理解した。自分はきつと殺される。今ではなく、何時か。それも、仲のいいフィユによって。あんなに安心できる友であったフィユによって殺されてしまう。そして、フィユはそれを望んでいる。その為にミルケシオを離さず、傍に居るように求めている。そしてそれは、自分の白い髪の所為だ。神への供物を増やすために、自分は子を成すことを強要されている。

ミルケシオはぞっとした。

今までこの白い髪を疑問に思った事は多々あったが、こういう真実が隠されているなどとは思わなかった。そして、その運命が動き出したなどと、思いたくもなかった。次に頭をよぎったのは、オアシスの事。母親や友人の事。みんな、ミルケシオの帰りを待っている。ミルケシオの本当の家だ。此処へ来る時も、オアシスへ帰るつもりで来た。母親とまた暮らすつもりで来たのだ。

それなのに――。

「いや……」

ミルケシオは一步下がった。

頭の中に、オアシスでの思い出が蘇る。爆発しそうなほど、懐かしく、身を包んでくれる暖かい思い出だった。その温かさを、フィユの冷たい目線が凍らせた。

「嫌だ、嫌だ――ッ！」

ミルケシオはフィユの視線を投げ飛ばすように走り出した。

「逃がすな」

族長の短い声が聞こえ、周りの人狼達が一斉に動き出す。ミルケシオはその手を掻い潜り、群衆を割って日見丘から逃げ出そうとした。今すぐに里を出てしまおうしかない。その一心で、ミルケシオは走った。人狼達はミルケシオのすばしっこさに手を焼き、なかなか捕まえられなかった。族長がいよいよ唸りだした頃、フィユの透明な声が響いた。

「ミルケシオ、戻っておいで」

その美しい声に、あと少しで日見丘を降りられそうだったミルケシオの足が、ぴたりと止まった。ミルケシオはすぐに嫌な汗をかいた。どうして足が止まってしまったのか、理解出来ない。だが、足は絶対に動かないのだ。動かそうとしても、動かし方が急に分からなくなってしまった。

——どうして？

訊いても答えてくれる者などいない。

「おいで」

フィユの声に、ミルケシオは振り返った。

戻りたくない。絶対に、戻ってはいけない。そう思うのに、足が勝手に動く。真っ直ぐ人狼達の群れへと進み、その群れを割って再び、フィユや族長の前へと歩み寄っていく。ミルケシオは助けを請う様に父のジェルを見つめたが、父を頼れない事はすぐに分かった。ジェルは、族長への反抗の為か、若い人狼達に押さえ付けられていた。

ミルケシオは慌てて、族長に言った。

「父を離してください」

「そなたの返答次第だ」

族長は冷たく言った。

ミルケシオは唇を噛み締め、ちらりとフィユと、少し離れた場所に居るベルチを見つめた。どちらも友だった。昨日まで、普通に会話をし、遊んだ友だった。だが、どちらも昨日とは違う人になったかのようなだった。

「返答次第でジェルの処遇は変わるだろう」

族長は噛み締めるように言った。

ミルケシオは項垂れた。彼女にとって、この決断は辛すぎる。だが、決断しなければ、父親がどうなるか分かったものではない。

「——……分かりました」

長い沈黙の後、遂にミルケシオは消え入るような声で言った。

「父を離してください」

堪え切れず涙が溢れてきた。

族長は目を閉じたまま涙を流すミルケシオを見つめると、小さく笑んだ。

「よかろう。そなたは落ち着くまで岩戸にいるがいい。ベルチやフィユともゆっくり話せ」

力の抜ける身体を他の人狼に支えられながら、ミルケシオは初めて、呪いというものを感じた。今すぐにこの呪いを族長へとぶつきたい気持ちが溢れた。だが、それよりも、絶望の方が大きく、ミルケシオは萎れた植物の様に、人狼達に岩戸へと連れられるままに、その場を後にした。

岩戸ははじめとじていて、不気味だった。外からしか開けられない入口は、内側から幾ら押してもびくともせず、人知れず逃げ出す事は叶わない。その上、余りに押していると、外側に立っているらしい見張りが怒鳴りつけてきた。

監禁されてしまった。

此処は、岩の牢獄だ。依然、ミルケシオは此処に人が閉じ込められたのを見た事がある。群れを族長の許可なく逃げ出そうとした若い人狼が、捕まってこの牢獄へと入れられた。翌朝には、その人狼は身受けされて殺される事無く終わったが、この場所に閉じ込められた多くの者は、翌朝の朝日を最後に弑されてしまうという。

そんな不吉な場所に、ミルケシオはいる。

此処で、ベルチやフィユを待てというのだ。ミルケシオは不安で仕方無かった。友人から夫となるベルチ。そして、友人だったというのに、主人というよりも、持ち主と言ったほうがいいような関係となってしまう女神となったフィユ。

ミルケシオは絶望の中で、頭を抱えた。

器と薬花。

そう言えば、今は亡き老婆に昔話を聞いた。

今、人狼を守る神獣は、昔は悪い神であって、人狼を捕まえては喰っていたらしい。それに困り果てた人狼達は、神獣と話し合う事にした。すると、神獣が肉体を求めていることを知り、人狼達は自分達の中から、神獣の礎となる者を選び出すことにした。神獣は人狼達を見比べ、非の打ち所のない血統を探しだした。それから、その一族で気に入った者に生まれながらの印を与える事を神獣は決め、人狼達にその者を差し出すように求めた。それからというもの、神獣は器と引き換えに人狼達を守るようになり、器に選ばれなかった人狼達は、安心安全に暮らせるようになった。

しかし、幸せは長くは続かない。欲の深い神獣は、すぐに器だけでは飽きた。というのも、神獣と融合し、一つになった器は、特別な力を使える代わりに、力を使えば使うほど、神獣に身体を喰われていくのだが、この人狼を守る神獣は、捧げられる器に力を使う様に唆し、すぐに喰い尽くすようになってしまったのだ。

困ったのは人狼達だった。どうすれば満足するのか神獣に問うと、器から得られる味だけでは足りないと言った。そして、神獣は再び人狼達を見比べ、その中から薬花という嗜好品を得たいと言うようになった。神獣が嗜好品として選んだのが、白い毛並みの狼であり、彼は人狼達の頭であった。人狼の頭は自分の一族が選ばれた事に肩を落としたが、それよりも、神獣の興味の対象が、生まれつきの自分の娘へと向いた事に恐れ慄き、如何に神の望む事であれ、守りぬく事を決意した。しかし、その決意も空しく、その人狼の娘は、父親も母親も気付かないうちに、神獣に欲を刺激された器によって攫われ、人目のつかない場所で生きたまま食される事になってしまった。

その時から、今日まで、器と薬花達の戦いは続いているが、最後には必ず、器は薬花を攫い、誰にも邪魔される事無く、その新鮮な血肉を啜る事となっている。

そんな話だった。

聞いた時は、恐ろしいけれども、おとぎ話であるとは思わなかった。それがまさか自分に降りかかるなどとは、夢にも思わなかった。

――闘うも何も……。

そうミルケシオは心の中で嘆いた。

――最初から勝負は決まってる……。

入口が動いた。ミルケシオが力無く目をやると、赤く眩しい光が入り込んできた。もう直ぐ夜になるらしい。そう言えば、此処に入ってから父とは会っていない。その安否も気掛かりだった。

その時、赤い背景に、黒い影が映った。入口から見下ろしてくる影は、繊細な目つきでミルケシオを見下ろしている。

「フィユ？」

ミルケシオは問い、すぐさま背筋が凍りそうな感覚に襲われた。昔話を思い出したのがいけなかっただろうか。フィユが入ってくることが、途轍もない恐怖だった。

「ミルケシオ、大丈夫？」

フィユの声がする。

顔は見えないが、確かにフィユらしい。

だが、その声を聞いて、ミルケシオは身体力を抜いた。

其処に居るのは、さっきのフィユではない。昨日までのフィユだった。親しみを感じさせる、安心出来るフィユだった。

「具合は悪くない？」

フィユが入ってきた、

ミルケシオはただ彼女を見つめた。さっきまでの彼女とは明らかに違う。如何したものだろうか。フィユは虚ろな様子で、岩戸に入ると、そのまま入口の傍に座り込んだ。日が落ちていき、段々とフィユの顔が見えてくる。

「ねえ、私、全然分からないの。何が起こったの？ どうしてあなたは此処に閉じ込められているの？ 今日はい体、何があったの？」

ミルケシオはフィユを見つめた。

嘘を言っているのではない事はすぐに分かった。彼女は本当に分からないのだ。何が起こったのかも、自分が如何なっているのかも。

「何にも分からないの？」

ミルケシオは訊ねた。

「変なところとか、何にも感じないの？」

フィユは首を傾げ、そして軽く左胸に手を置いた。

「此処が蠢いている感じ。何かが私に囁いているような気がするの。これが何なのか、私には全然分からない。ミルケシオ、分かるの？」

フィユに問われ、ミルケシオは押し黙った。どう答えればいいのか、ミルケシオは暫し模索したが、やがて、静かに、首を振った。

フィユは軽く目を細めると、小さく息を吐いた。

「そう。そうよね。ごめんね、ミルケシオ。何故か分からないけれど、あなたなら分かるって勝手に思ってたみたい。ありがとう、ごめんね」

そう言うと、フィユは立ち上がり、岩戸を後にした。

その背は何処か儚げで、今にも消えてしまいそうだった。

赤ク染マル空 其ノ肆

赤ク染マル空 其ノ肆

オアシスに住むバスは、ジェルからの知らせを、鳶を通じて知った。ミルケシオが人狼達に奪われた。それも、器に命握られる薬花として。その知らせは、バスには過酷なものだった。バスは何日もの間泣き崩れ、その様子を見た近所の者達により、オアシス中はその噂は流れていった。すぐにミルケシオの友が数人駆けつけ、バスの様子を窺い、その噂が真実だと知る事となる。

同じく、バスの様子を見に来たコメは、ショックを受けた。

いつも人狼の里に行き、何事もなかったように帰ってくるミルケシオ。最初のうちこそ不安を感じながら見送ったものだが、最近は何とも思わずに送りだしていた。その事が、悔やまれて仕方ない。まさか、こんな事になるとは、全く思わなかった。

「師匠は……なんて……」

コメの言葉に、少し落ち着きを取り戻したバスが、力無く答えた。「ジェルは里に留まって、何とかしようと頑張っている。でも、相手は絶対的権力者。延いては生き物を超える存在。きっとジェルの方が消されてしまうでしょう」

バスはそう言うのと、両手で顔を覆った。

「いつかこの日が来るって、分かっていた。でも、こんなにも早く。こんなにも唐突に来るなんて……」

——分かっていた？

コメは放心状態になりかけながらも、少しずつ力を取り戻していった。

——もう諦めるつもりなの？

ぐっと拳を握りしめ、コメは唸った。

「俺が……俺が行ってきます」

突然のコメの言葉に、バスは顔を上げた。そして猫の瞳を大きく広げ、慌ててコメの両手を掴んだ。

「駄目よ！ 何を言っているの！ 何処にあるかも分からないというのに！」

「師匠に伝えてください。俺を案内して欲しいんです。ミルケシオを取り返すために！」

「いけない！ ジェルがそれを許すはずがないでしょうッ！」

「でも、ミルケシオは――」

コメは喰い下がろうとしたが、その直前で口を閉ざした。バスの目の表情に気付いたからだ。これ以上この話を続けてはいけない。そんな気持ちにさせる山猫の目に、コメは少しばかり怯んだ。

「ミルケシオは……」

虚しく口だけを動かし、コメは俯いた。確かに無謀だろう。ミルケシオを助けたい。バスやジェルのこの気持ちは、コメとは比べ物にならないほど大きいはずなのだ。しかし、その気持ちを押し殺さなければならぬ。押し殺さなければならぬものが、人狼の群れにはあるというのだろうか。

コメは信じたくなかった。他の友人達も同じだった。ミルケシオは少しばかりオアシスに住む人間達と違うところがあつたけれども、魅力的な友人だった。悪い所もあるが、それを十二分にカバーするほど良い所がある。彼女にしかない魅力が其処にある。他の誰でもない、ミルケシオなのだ。

コメはもう何も言わなかった。これ以上言っても、バスを心配させるだけだと悟つたのだ。何も言わずに黙ってコメの忠告を耳にすると、静かに札を言ってメイプルの家を出た。走り去るように出たので、友人達は驚いて追ってきた。

真っ先に追い付いたのは、フォクシだった。

「おい、どうしたのさ！」

「これ以上言っても無駄だよ。俺は自力で人狼の里を捜してみせる！」

コメの言葉に、他の友人達も目を丸くした。

「無理だよ！」

《にんじん》と皆に呼ばれている友人が、真っ先に言った。コメはにやりと笑い、そして、すぐに友人に背を向けて言った。

「そうだね、でも、俺は心配で仕方無いんだ。ミルケシオは此処に帰ってこなきゃいけないのに、人狼達は勝手だ」

「ジェルさんに任せた方がいいと思うよ」

控え目に言ったのは、フォクシの双子の妹のビクシだった。

「うん、俺もそれは分かってる。皆は此処で待ってて！」

コメは、そう言うと言わずに瞬間に駆けだして、オアシスの出入り口へと走り去っていった。友人達はしばし呆然とその背を見送ったが、我に帰ると慌ててそれを追った。

若き血を滾らせるコメを、黙らせられる者はその場に居合わせていなかった。それどころか、オアシスを疾風のように脱け出して、グレイ山脈を駆け回るコメを、止む無く追った友人達も、コメの熱い念に中てられ、いつの間にか彼らまでもが人狼の里を見つけ出そうと躍起になっていた。

しかし、自然の手厳しさが彼らの若き熱情を称える筈もなく、無慈悲にもその鋭い牙を、己が懷に直に抱える人狼達や獣人達に向かつての時と同じように、コメ達に向いたのだった。当然、グレイ山脈の本来の姿に慣れていない彼らが、人狼達や獣人達のようにその牙を掻い潜れる筈もなく、コメ達の熱気はあつという間に凍らされてしまった。誰もが互いの死を想い——特にコメが自責の念でいっぱいになった。誰かが死なないうちに、迎えた闇の中で、彼らはそれぞれ、幼い頃の夢を見た。日が暮れるまで遊び、そして、帰るべき所にそれぞれ帰っていく夢。誰もが心細くなった。オアシスに帰りたくなった。そして、オアシスにいた頃の自分達が、どんなに恵まれていたかを思い知った。あそこには、帰るべき場所が用意されていたのだ。もちろん、ミルケシオも自分達と同じ場所であるべきだが、自分達が立ち向かうには、余りに経験不足で、無謀だった。

若しも、自分達がこの為に死んだとなれば、ミルケシオはますますオアシスに帰れなくなるのだらう。そうなれば、彼女の家を奪ったのは紛れもない自分達だ。自分達は、彼女を人狼の元に閉じ込めようとしたのだ。

コメは、はっと目を覚ました。

――死ぬわけにはいかない。

そう強く思つての事だったのだが、目を覚ましてすぐ、呆氣に取られた。其処は、闇に包まれたその場所とは全く違う場所だった。人の手で整えられた木々の壁に囲まれ、ふかふかの寝台の上で、ふかふかの毛布をかけられている。家の中だ。それも、見覚えのある場所。段々と頭が冴えてくると、見覚えのあるところではない事に気付いた。其処は、自分の家だったのだ。後で分かった事によれば、自分達はグレイ山脈にある横穴の中で、疲労で動けなくなっており、其処をたまたま通りがかつた郵便鳥が比較的近かつたオアシスまで届けてくれたというのだ。彼らはすぐさまそれぞれの家に引き取られ、献身的な介護を受けたお陰で次第に元氣を取り戻し、最後の最後で目を覚ましたのが、ほかならぬコメだったというわけだ。

コメは他の皆が無事ということにまずはほっとした。だが、余裕を取り戻すと、ミルケシオを取り戻すどころか、人狼の住処すらも見つけ出せなかつた事を悔やんでいた。

こうして、コメの初めての挑みは失敗に終わったのだ。

ベルチと夫婦の契りを結ばされたミルケシオは、徐々にだが冷静さを取り戻し始めた。ただ喚くよりも、大人しくしていて隙を探す方が容易い事に気付いたのだ。ミルケシオが喚かなくなった事で、幽閉は解け、監視付きではあったが、父のジェルと暮らす事も敵う様になった。だが、フィユが望めばすぐさまフィユの傍に控えなければならぬ責務からは逃れられず、ミルケシオは絶えずフィユの

状態を警戒していた。

わざわざミルケシオを呼び出すような時、フィユは大抵いつものフィユじゃないのだ。何処か違う。あの仲のいいフィユではなく、ミルケシオを対等に扱っていないようにも思われる。それだけでなく、フィユの神獣との融合の状態は、歴代の要と比べてもあまりよくないらしく、触れればすぐに壊れてしまうのではないかというほど、弱々しかった。そして、弱々しければ弱々しいほど、ミルケシオは恐怖を覚えた。フィユに対してではない。フィユの中身に対してだ。フィユを器として人狼全体を守護する中の者は、その対価として欲望のままにフィユを内部から喰らい、崩壊を早めている。このまま行けば、想定していたよりも早く、ミルケシオがこの世の全てに別れを告げなければならない日が来てしまう。そして、その気休めも空しく、嗜好品を失った神獣は更なる欲をフィユにぶつけ、全てを喰らい尽くすのだろう。

今、目の前で苦しそうに胸を押さえているフィユを見て、ミルケシオは悟った。

——あまり、時間がない。

その事は、人狼の群れを焦らせているらしく、族長のブレインは、どうにかミルケシオに子を産ませようと、空想的な圧力をかけてきた。一方ベルチは、既に次期族長とも噂されている、兄に対して焦りを見せたらしく、当初はミルケシオを自由にさせていたのに、段々とブレインの言うままにミルケシオに迫ってきた。だが、ミルケシオはそれをどうしても飲めず、様々な理由をつけては、フィユの傍や父ジェルの元から離れなかった。

そんな抵抗が、一年続いた。

ミルケシオ自身、あつという間に破られる抵抗だと思っていた為、段々と警戒も解かれていき、次第にその抵抗がマンネリ化していった。既に、ブレインもそうしつこくミルケシオに圧力をかけるような事もなくなっており、ミルケシオは比較的楽な気持ちで毎日を過ごせるようになった。ベルチだけはまだ固執しており、まだまだ油

断は出来なかったのだが、暫くの間、ミルケシオが戦いに敗れるという事態には陥らなそうだった。

しかし、その状況も、二年目を迎えたある日から一変した。

その日、ミルケシオはフィユの元に居た。子の生まれていないミルケシオが、二人きりでフィユという事は、群れにとってもやはり怖かった。特に、歳を重ねるごとにフィユの状態は悪化していき、今や人狼族に昔から伝わる呼吸法で、どうにか繋いでいるようなものだった。フィユ自身、自分の先が長くないような事を口走るようになっており、旧来の友として、ミルケシオは少なからず不安を感じていた。

「私、聞こえるの、中であの人が、私に言ってる」

うわ言のようにフィユの声は響いていた。

「薬花、薬花を食べたい、そうずっと唸ってる」

フィユは息を吐いて、光の薄れた目で、ミルケシオを見ていた。

「お願い、もう此処から出て行って、お願い」

「フィユ、大丈夫よ。父さんの言ってたあの呼吸をして。落ち着くから」

「駄目、駄目なの、ミルケシオ、中のあの人が、あの人が一――」

突然、フィユの目が見開き、ほぼ同時に悲痛なうめき声が漏れた。ミルケシオは反射的にフィユに近寄った。直後、離れるべきだったかと後悔したが、もう遅かった。フィユの悲鳴に被さるように猛々しい咆哮が響き渡り、フィユの意識を何かが完全に攫って行った。

フィユはもう長くないだろう。

フィユ自身だけでなく、群れ全体でそう言われていた。それは、ついこの間、フィユの次代とされる器が、もう生まれたからだ。フィユの伯母の仔として、次代の器は生まれた。きっとフィユは長くない。

ミルケシオも散々聞かされていた。

「フィユ、しっかりして！」

ミルケシオが叫ぶと、フィユの体を裂くように、赤い狼が這い出

てきた。赤い狼はぎろりとミルケシオを見つめ、威嚇するように唸る。

と、その時、騒ぎを聞いた他の人狼達が駆けつけてきた。

「フィユ……」

駆け付けたブレインが力無く声を上げた。赤い狼が踏みつけるフィユの体は、狼が少し動く度にびくりと痙攣している。その表情から、意識は感じられない。完全に赤い狼の意思が勝っている。

「葉花……」

赤い狼が唸った。

「葉花ヲ寄越セ」

低い唸り声が響き渡った。

「葉花ヲ……早クッ」

赤い狼の目はミルケシオを映している。その目はまるで、ミルケシオに自ら来るように促しているようだった。ミルケシオが自ら来る事を強要しているようだった。だが、ミルケシオは動けなかった。どうしても、体を動かすことが出来ないほど、恐ろしかった。

「来ナイトイウノダナ」

赤い狼が唸り、炎をあげるように咆哮した。しかしその直後、赤い狼の唸りは途切れ、全く別の者へと注目を逸らした。

「貴様、何ヲスル気ダ……」

赤い狼の声に、ミルケシオは気付いた。見開かれている双眸。赤みの増した灰色の目。水色の髪の下で、しっかりと赤い狼を捉えている。

——フィユ……。

「戻れ」

フィユが静かに、だが、とても響く声で唱えるように言った。

「戻れ」

その言葉だけで、赤い狼の体は一気に透き通っていった。そして、炎が消えていくように、その輪郭は萎んでいき、やがて恨めしげな唸り声共々フィユの体へと吸い込まれていった。全てが治まり、静

けさが取り戻されると、フィユはミルケシオに向かって小さく笑み、そのまま倒れ伏した。

「フィユ！」

ミルケシオはすぐに歩み寄ろうとしたが、体が動かなかった。腰を抜かしてしまったらしい。代わりに、周囲に居たブレイン他の人狼達がフィユへと駆け寄り、フィユの体の状態を確認していた。

「外傷なし。神獣も戻っている」

「己の力で欲を制したらしい」

一人の人狼がブレインの指示でフィユを抱えた。抱えられたフィユの髪を軽く撫で、ブレインは眉を顰めた。

「うむ、なかなかの根性だ。……だが、長くは持つまい。目を覚ますかも怪しいものだ。すぐさま安全な場所に避難させよ。次代の器の育つ日まで、しっかりと保管しておくように」

ブレインの命令は、ミルケシオの心にぐざりと突き刺さった。もう目を覚まさないかも知れない。このまま神獣に完全に喰われるまで、フィユは目を覚まさないかも知れない。つまり、永遠に、フィユとは会えないかもしれない。ついさっきのフィユの笑みが、蘇ってきた。あの少女が、もう目を覚まさない。

ミルケシオは立ち上がれなかった。色々な事が、ずしりとのしかかってきた。

「ミルケシオ」

ブレインに呼ばれた時も、顔を上げられはしたが、立ち上がれなかった。

「お前はすぐに帰るがいい。課せられた役目を果たすよう。いいな？」

ミルケシオは俯いたまま、何も答えなかった。

フィユが隔離されてから更に一年経ったある日、狩りの場でいざ

こざがあつた。運の悪い事に、別の集団とぶつかってしまったらしい。それが旅人ならば、すぐさま新たな獲物として処理されたのだが、それがヒポラスという獣人たちだった事がまずかった。ヒポラスとは、グレイ山脈の尾部と呼ばれる区域に広がる密林の住人であり、その多数は爬虫類や両生類であるらしい。蛇王を中心に独自の文化の下で暮らしており、場所が近い所為か、人狼族とのぶつかりも多い。特に、飢饉のときは、お互いの弱者を狙っての戦争が起こる事もある。実際、それぞれがそれぞれの子どもや弱い者を攫っており、両者ともいがみ合いこそすれ、手を結ぶことは一切ない。そんな集団と、ぶつかってしまったのだ。それも、狙った獲物が重なったことで、ただでさえ張りつめていた緊張が一気に爆発し、獲物を忘れた乱闘へと突入してしまったらしい。お互いに血の猛る若者ばかりだった事も、運の悪い中の一つだろう。兎も角その所為で、互いに引くに引けなくなるような損害を被った。

そう、いがみ合いが後に引けなくなる程に。

お互いの指導者は、これ以上の犠牲を出さないためにも、会合する事にした。しかし、会合は失敗。ヒポラスと人狼との間の溝は、更に深まったらしい。

ミルケシオは、その原因がヒポラスの蛇王の息子の所為だと聞いた。第一皇子である息子は度々問題を起こし、ヒポラスの中でも悪い噂が上がっているという。その皇子が、どうやら人狼の族長ブレインの機嫌を損ねたらしい。

近々また大きな戦争が起きる。

人狼族の者達が、そう噂している。何人かの者が、ブレインに無礼を働いたヒポラスの皇子を非難し、戦いに参加すると言いだした。さらに、その数日後、ヒポラス側でも同じように立ち上がるとうする者達がいる事が伝わった。そしてついに、人狼の里に、ヒポラスからの使者がきた。戦争が起こる。如何にか持っているフィユの中に居る神獣の力が使われる事になりそうだ。ミルケシオは一抹の不安を覚えた。

天敵同士とはいえ、人狼とヒポラスとの間には、圧倒的な差があるらしい。それは、自分達だけの神獣を有しているかないかの違いである。人狼には自分達を守る神獣と、神獣を部族に繋ぎとめる器、更に、神獣を喜ばせる為の薬花があるなど、神獣と部族の繋がりは深いものだが、ヒポラスは違う。ヒポラスには、自分達だけの神獣は存在せず、同じ密林に住む別の神獣と約束をし、守ってもらっているらしい。その絆は、人狼族ほど深いものではない。その為か、人狼族の者達は些か楽観的だった。フィユに負担をかけずとも戦争は終わると信じている者も多かった。

だが、本当に大丈夫なのだろうか。

この一年、フィユの眠る人狼の祠にあたる場所の傍で、ミルケシオはずっと隔離されるフィユを見守った。一年前、フィユはミルケシオの命を救ってくれた。神獣を自分に押し込め、ミルケシオが喰われるのを阻んでくれた。あの日から、フィユは目覚めていない。ブレインの指示で、人狼達はミルケシオをフィユに近づけなくなった。後継者がいない以上、今ミルケシオが喰われるのは困るらしい。しかし、無理をし過ぎたフィユを失うのはもっと困るはずだ。本当に戦争が起きても、フィユは無事なのだろうか。

ミルケシオは疑問に思った。

戦争は確かにすぐに終わった。三日余りの戦争。その期間は、人狼達の予測通りだった。だが、誰しも予測していなかったのは、被害の酷さであった。フィユの力を思い切って使えなかったことと、ヒポラスの問題児皇子が思いの外、厄介だったらしい。最終的にヒポラス側は四人、人狼側は六人の犠牲を出し、人狼族が退却することで戦争は終わった。そう、負けたのだ。皇子の差し出しを要求しなかった事と、人狼族が暫く狩り場へと向かわないという条件で、ヒポラスは追撃してこなかった。

しかし、犠牲は酷いものだった。死んだ六人のうちの二人は、新しく生まれた器の父母だったのだ。預けられた先の母方の祖母はもう年老いており、幼い器の仔を育て切るには頼りなかった。

先日、ミルケシオは、その幼い器の仔に会った。一年前に生まれたばかりの人狼の仔。フィユの従兄弟にあたる次代の器。輝かしい金の髪に、フィユと同じ形の灰色の目。母も父も失ったことを知らないその瞳は、ミルケシオを不安そうに見つめていた。

「私が……」

ミルケシオはブレインに会った日、思いきって告げた。

「私がその仔——ユノを育てます」

赤ク染マル空 其ノ伍

赤ク染マル空 其ノ伍

時が去っていく。あの日、あの時に引き取った幼いユノは、すくすくと育っていく。不安げに母を求めていたその瞳は、いつしか信じ切った目でミルケシオを見つめるようになっていた。初めての仔だった。自分の腹を痛めた仔でなくとも、可愛いことには違いない。新たな器として固く守られるその仔狼を、ミルケシオは温かく包み込んだ。少しずつ成長していったユノは、次第に沢山の事を訊ねるようになり、里の子ども達と共に、色々な物に興味を持つようになっていく。ミルケシオの手が少しずつ離れていった頃、忘れてかけていた事柄が、彼女の心を蝕むようになった。それは、度重なるベルチの訪問でのことだ。ユノもジェルもない時を狙って、ベルチは現れた。ミルケシオと二人きりの時に限って、夫婦の誓いを持ち出し、人狼族の忠誠を掲げて、ミルケシオを責めた。だが、ミルケシオは折れなかった。いつか辛い運命を背負うかもしれない。そうと分かっていて、何故、仔を産めるだろうか。

だが、時は過ぎていく。通りがかった祠の隙間から、寧ろ、まだ生きている事が奇跡的であるフィユの荒い息を耳にし、ミルケシオは息を吐いた。自分にももう、時間は残されていないかも知れない。フィユは何時まで持つか本当に分からない。来るべき未来、自分を喰うのは、フィユなのだろうか。それとも――。

「族長の命なのだ。従え、ミルケシオ！」

ベルチの怒鳴りも、ミルケシオの心を揺さぶることはない。ミルケシオはベルチの訪問を避け続け、ユノの養育を理由にベルチの接近を拒絶した。ベルチは怒った。未来の器であるユノに手を下す事も出来ない。だが、ミルケシオに仔を成すことは、人狼族の中での

立場に関わる事だった。安定した上位の立場を確保するには、何としてもミルケシオに仔を成してもらわなければならない。それも、自分の仔を。

「お前の我が儘に付き合っている暇はない。時は過ぎて行くのだぞ、ミルケシオ。あの仔狼が育ち、やがて、フィユは骨まで食い尽くされる。その前に食い荒らされるのはお前の方だ。時間がないのだぞ、ミルケシオ。死ぬ前にお前は、仔を成さなければならない」

「ベルチ、私はどうして死ななければならない？ フィユの為？

あの仔の為？ この里全体の為？」

日光を遮る岩の陰で、ミルケシオは静かに言った。目敏く自分を見つけ出したベルチに、冷めた一瞥を加えながら、近づいてくるベルチを客観的に見つめながら、ミルケシオは身体の手を抜いた。

「私にはよく分からない。族長がそう言うから従うのか？ 私の命は、誰の物なのだろうか？」

ミルケシオは言いながら、幼い頃に遊んだ場所でユノが遊んでいるだろう風景を想像した。あの仔が大きくなるまで、自分は見ていけるのだろうか。あの仔の成長を、一体何処まで見ていけるのだろうか。そんな事を考えながら、自分を押さえつけるベルチの姿をぼんやりと見上げた。もう、疲れた。もう、どうなってもいい。ミルケシオの意思が、弱まった瞬間だった。そして、それをきっかけに、そんな事が数回続いた。

しかし、仔は授からず、何事もなかったかのように、前と変わらずユノの成長を見つめる日々が続いた。ミルケシオはジェルと共に、ユノに狩りを教え、その他、生きていく術を少しずつ教えていった。ユノの覚えは早く、少しずつ教えていく事も減っていく。前にも増してユノは、岩山を元気に駆け回るようになっていた。ユノの無垢な笑みに、ミルケシオはささやかな幸せすら感じていた。

そんなユノを待っているのが、残酷な使命である事をミルケシオは考えたくもなかった。

ユノはいつものように目を覚ました。同年代の子ども達の呼びかけ声が聞こえてくる。慌てて寢床から飛び起き、ユノは出口へと走った。朝食も取らず、と、義母であるミルケシオにすぐさま見つかった。彼女は朝食に関して口煩い。朝っぱらから硬い干し肉を噛ませられる食事が、ユノは苦手だった。まだ顎の力が弱くて噛みちぎるだけで疲れてしまうからだ。だが、だからといって、幼子のように噛み砕いて貰ったものを食べるのは抵抗があったため、ユノは朝食の方にいつも時間を喰われていた。

「ほら、朝起きたらまず何だっけ？」

ミルケシオの芯の強い声が響く。

ユノは濁し笑いを浮かべ、言った。

「おはよう」

「はい、おはよう。間違っではないんだけど、そうじゃなくて、朝御飯でしょう？」

「だって、友達が――」

「友達は後！　まずはご飯食べなさい」

あっさりとミルケシオに言われ、ユノは金色の前髪を軽く吹かした。また時間をかけて朝ご飯を食べて、また友達にからかわれる。これだから大人っていうものは、子どもの事を分かってない。そう思いながら、ユノは朝食に取りかかるのだった。

食べ終わったのは、やはり、随分経ってからだった。やっと許されて外に出てみると、友人達は殆どすでに遊び場へと向かっていた。ユノは溜め息混じりに候補である地を訪れる事にした。

まずは、子ども達の間で《鷹の飛び場》と呼んでいる岩場。絶壁に登れるような段差があり、それを使って頂上まで登った子ども達は、狼になって一気に飛び降りる。まるで鷹になったような気持ちで飛ぶのだ。怪我人続出の危険地帯だが、不思議な事に、その事で大人から別段禁止されるようなこともない。此処にはいいようだ。

次に、大人達に教えられる狩り場の中で、追いこみに使われる場所。ユノも近頃は、ミルケシオやジェルの指導で獲物を追いつめる為にここに訪れる。袋小路になっており、此処へ追い込まれた獲物に逃げ場はない。獲物を追うという行為に血を燃やす子ども達は、よくこの場所でも遊ぶ。この時の獲物は鼠や兎などの子どもでも相手に出来る者だ。遊びながら狩りの練習をしているわけだ。だが、今日は此処にもいない。

となれば、ユノのまっさきに思いつく場所が限られてくる。一番ありそうな可能性に賭けてみようか。だが、それは危険なことだとユノは分かっていた。第三の遊び場は、『鷹の飛び場』での危険な遊びさえ禁じない大人達が、口を揃えて禁じる所なのだ。だが、其処の地形は子ども心を――特に、仔狼心をくすぐるもので、いくら大人が口ずっぱく言っても、子ども達の心にはなかなか届かない。しかしそれは、集団の成せる業であり、今独りであるユノには、少々勇気のいる場所だった。そう考えれば、大人達の忠告はそれなりに効いているのかも知れない。其処は、ヒポラスとかいう蛮族の土地のすぐ近くだった。時折ヒポラス達は、自分達の領域を超えてこちら側に侵入してくるらしく、その為に大人は禁じているんだと、何でも知っている物知りな仔狼が皆に教えてくれた。もし、誰も居なくて、たった独りでヒポラスに会ってしまったら。そう考えると、妙に寒気がした。でも、いるとしたら、其処に居る可能性がずっと高い。少しでも様子をみる価値はあるんじゃないかとユノは思っていた。

だからだろう、迷いつつも、ユノの足は確実にその地へと向かっていた。奇妙な程に生き物の気配の少ない山道をてくてくと歩いて行き、金色の髪を揺らしながらユノは歩いて行く。途中で、狼の方が早いような気がして、変身して歩いてもみたが、毛皮が暑くて断念した。そういえば、喉が渴いた。ユノはヒト姿に戻りながら思った。家からはちゃんと水を飲んできたが、一番目と二番目の遊び場から休む間もなく移動してきたので、さすがに疲れたのもあるだろ

うけれども、それよりもたった今の毛皮の暑さによるものと考える
ほうが自然だ。

——変身なんかしなきゃよかった。

ユノはそんな後悔をしながら、三番目の遊び場へと足を進めた。
友人達がいる事を願いつつ、ユノは風の匂いを感じてみる。ああ、
よかった。探している匂いが漂ってきた。やっぱり、この三番目の
方で皆遊んでいたらしい。そうと分かれば怖がる必要はない。ユノ
は走りだした。皆、これまでに何をして遊んでいたのだろう。上手
く途中参加できるといいけど。そんな事を思いつつ、走っていくユ
ノ。その鼻に、突然、語りかけてくる匂いがあった。

ユノは、はっと息を顰めた。

——血？

誰かが獲物を仕留めたのだろうか。否、これは同じ狼の血の匂い
だ。では、誰かが怪我をしたのだろうか。そう思うと、ユノはますま
す不安になった。この血の匂いは些か酷い。小さな怪我ではなさそ
うだ。

ユノは更に急いだ。

一体、何が起こっているのだろう。

そして、やっと三番目の遊び場に辿り着いた。

昼下がり。ユノがいつものように遊びに出かけてからやや経った
頃、里の子どもの数名がぼろぼろな形で帰ってきた。遊びに行った
全ての子ども達が帰ってきたのでは無く、帰って聞いたのは数名だ
け。その中に、ユノは含まれていなかった。ミルケシオは里の子ど
も達からの話を聞く内に、段々と血の気を失っていった。

攫われた。

子ども達が。

ユノが。

ヒポラスの男に。

子どもが一人も逃げ帰れなかったら、知り得たのは明日になっていただろう。そうなっていれば、ユノは――。否、今もユノ達は、どうしているのだろう。

子ども達の証言の途中で、ミルケシオは走りだしていた。たった今聞いた場所を目指して、ユノの無事を祈りながら。真っ白い毛皮を晒して、狼とも山猫ともつかぬ姿で走りだした。子どもの足で遠いだろうが、ミルケシオには然程遠くもない。すぐに着けるはずだと、思っている傍から、子ども達の言った通りの血の匂いがしてきた。鼻が他の人狼程よくないミルケシオでも、強く感じ取れる。ミルケシオは走り切り、その第三の遊び場とやらへと飛び込んだ。其処は、狩り場だった。子ども達の練習ではなく、ヒポラスとの共有地となっている狩り場。その狩り場の地面には、無数の赤い痣があった。子ども達の血だ。間違いなく、狼の血の匂いがある。

ミルケシオは倒れそうな身体を鞭打ち、その匂いは何処へ向かっているのかを探った。この辺りには、子ども達の影もなかった。勿論、ユノも。

――まさか、ヒポラスの森へ？

そう思ったが、ヒポラスの匂いと共に、仔狼達の匂いは全く違う方向へと向かっていた。不審に思ったミルケシオだったが、すぐさまそれを追った。ユノもそちらにいるはずだ。そう信じて走っている。匂いを追いかけて、風に問う。彼らとの距離はそう離れていない。まだ間に合う。

ミルケシオは咆哮した。それは、仲間へ、子ども達へ、そしてヒポラスのその男へ向けた、遠吠えだった。ヒポラスの気配が、咆哮を受けてなのか、動きを止めた。ミルケシオはその間に、走りに走った。差が縮まっていく。岩山を風のように抜け、隙間と隙間を飛び去り、やがて見えてくるやや広い場所。ミルケシオの目が見開き、その足が止まった。子ども達だ。集団で怯えて、一箇所に固まっている。一人がミルケシオに気付いた。泣きながらミルケシオに縋り

つく。年長者である子どもも、すっかり顔が青ざめていた。

「怖かったよ」

「怖いよ」

「帰りたいよ」

「ママ」

「お腹空いたよ」

「もう帰ろうよ」

口々に子ども達は鳴き始めた。ミルケシオはもう一度咆哮した。

これは、仲間への合図だ。子ども達が見つかった。全員怪我をしているが、無事の様だ。そう伝えて、ミルケシオは今一度、子ども達を見渡した。十数名の子ども達は、各々の場所で泣いたり、ぐったりしたりしている。その中で、ミルケシオは捜した。ミルケシオが此処まで走ってきたその理由を。即ち、ユノを。

——いない？

「ミルケシオ……」

年長者の子どもが、さっきよりも更に青ざめたような顔で、ミルケシオに話しかけた。ミルケシオはその子どもの手を取った。とても冷たい。冷や汗をかいている。寝かせたほうがいいかもしれない。

「ミルケシオ、聞いて……」

その子どもが必死に何かを伝えようとしている。

「どうしたの？」

「ユノが……ユノが……」

「ユノが何？ ユノは何処に居るの？」

「……連れてかれたんだ、ユノだけが。……皆は此処に捨てられて、ユノは特別な仔だからって……ヒポラスのお兄さんが……」

ミルケシオは唇を噛んだ。今すぐにでも助けに行きたい。だが、此処に居る子ども達を放っておくわけにもいかない。ユノを連れて行ったヒポラスの男が、真っ直ぐヒポラスの森に向かって居ないのは好都合だが、手放しに喜べるわけでもない。個人的な狩りであれば、何処でも食事する事は出来る。

「そのヒポラスはどんな奴だった？」

ミルケシオは聞いた。少しでも手掛かりになるように。すると、年長の子どもだけでなく、怖がっていた他の子ども達も、口ぐちに喋り出した。

「変な目をしていた」

「赤と青なの」

「黒い鱗をした背の高いお兄さんだった」

「黒い髪だった」

「赤っぽい線が入ってたよ」

「すごく嫌な感じのお兄さん」

赤と青の目。黒い鱗に赤い線の入った……。

「――毒蛇だった」

年長者の子どもが最後に呟くように言った。その途端、ミルケシオの脳裏に、一人のヒポラス男が浮かんだ。

その男の名は、バジル。ヒポラスの第一皇子、バジル。ヒポラスの問題児であるあの皇子。赤と青の目に、赤い線の入った黒い鱗の毒蛇。彼以外に思いつかない。

ミルケシオの心臓が大きな音を立て始めた。そしてその時、彼女の耳に、仲間からの返答が聞こえてきた。

荒く揺さぶられる男の肩から、ユノはぼんやりと地面を見つめていた。里が遠くなっていく。それだけは何となく分かる。これから何処に連れて行かれるのか。これはいくら考えても分からない。ただ、酷く目が眩み、体の力が入らない。金の髪の一部を濡らす赤が、ユノの額から頬へと伝っていく。体中が痺れている。同じような赤で染まっている右首筋から全身に広がるように、痺れが走っていく。しっかりと男に捕まれて、ユノは身動き一つせずに連れられていた。「こいつさえあれば……」

ヒポラスの男は幾度となく繰り返していた。こいつさえあれば、こいつさえあれば、この生贄さえあれば。

——生贄？

ユノはぼんやりと考えた。友人達に追いついてから、すぐ傍に潜んでいたこの毒蛇の男に噛まれた。それからずっと担がれていて、はつきりと周りの状況が分からない。さっき見捨てられた他の友人達はどうしているのだろうか。皆も出血していたが、大丈夫なのだろうか。だが、彼らがどうしているかを想像する力は、ユノには残されていなかった。ただ、男の進む道を目で追っていくだけ。今やそれすらも、億劫になってきた。視界が黒ずんでいく。きつとこのまま何も見えなくなる。そうになったら、どうなるのだろうか。

——ミルケシオ……。

ユノは心の中で呟いた。

——助けて……。

「お前はきつと気に入られるだろう」
いきなりヒポラスの男が、さっきとは違う事を言った。意識を失いかけているユノに語りかけるように。

「なかなか器量のいい狼だ。成長すればきつと立派になろう。だが、儀式の前に貰わねば意味がない。お前が駄目だったら、後は王室の姫を攫おう。私以外となれば、器でなければ気に入られまい。許せよ、器。口を付けられる前に、お前を貰う必要があった。どうしても私は死にたくなかったのだよ」

——死ぬ？

ユノの頭にその言葉が響き渡っていった。だが、その響きは何処か客観的で、不思議と現実味を持っていなかった。

——死ぬって、誰が死ぬの？

ヒポラスの男の足が、やや遅くなった。

「早速来たようだな。早いものだ」

やや楽しんでるかの様な男の声に、ユノは震えた。風が運んでくる匂い。ユノを救おうと走ってくるその匂い。ユノには分かった。

それが誰か。きっと彼女しかいないだろうけれども、ユノ自身助けを求めたけれども、実際に彼女の匂いが分かってくるにつれて、ユノは怖くなった。

男は、何故、笑んでいるのだろう。

ユノの灰色の虹彩が、黄色に染まっていく。その黒い瞳は、ぼやけている景色の中で、映えある白を映し出していた。

そう、ミルケシオの艶やかな白い毛皮を。

赤ク染マル空 其ノ陸

赤ク染マル空 其ノ陸

「私の仔に手を出すとは良い度胸だね」

ミルケシオが低い声で言った。その目は真っ赤に燃え、狼とも山猫ともつかない毛を逆立てている。瞳は一杯に開き、声とともに低い唸り声が上がっている。その二つの目は、目の前に居る二つの姿を捉えていた。一つは金色の鬣の仔狼、或いは、金色の髪の子ども。もう一つは、その子どもを担ぐ、黒髪に黒い鱗の青年。

「崇高なるヒポラスの生贄が、私の仔どもに何の用かな？」

「いらっしやい、人狼の薬花。私をよく知っているらしいね」

ミルケシオの目の前の男が、にやりと笑んだ。

「バジル。お前を知らぬ人狼などいないわ」

ミルケシオの姿がヒトへと変わった。バジルはその姿を見ると、笑みの種類を変えた。まるでミルケシオを品定めするように目を細め、息を吐く。

「ほう、流石は薬花。神獣の慰み者だ。捕え易そうであれば、お前でも良かった」

「ユノを如何する気だ？」

「ユノ……こいつの名か？ お前、己の命運を知っておきながら、器を養子にしたのか？ 正気とは思えないな」

「質問に答えろ、バジル」

「ミルケシオ、だったかな？ 器に、薬花。本当に人狼は恵まれていて羨ましいもの」

「答えろッ！」

ミルケシオは地団太を踏んだ。だが、バジルの表情は変わらない。相変わらずミルケシオを眺め、不敵に笑んでいる。その笑みに、ミ

ルケシオの心が逆撫でされた。身を低くしたミルケシオは、そのまま手を前に突き出した。即座に手は前足と変わり、バジルの肩へと飛び掛かった。バジルはすぐさま避け、ミルケシオの背後を取る。だが、彼は気付かなかった。その傍にいる影に。

「なに？」

バジルが気付いた時には、忍び寄っていた影にユノを取られた後だった。風の様にユノを攫っていたのは、人狼。バジルの表情が一瞬硬くなったが、彼はすぐに笑みを作った。

「ほう。なら私は、魔王に勝負を挑む他ないらしいな」

あっさりとそう言い捨て、彼は背を向ける。ミルケシオの燃えあがった血に、油が注がれた。

「待て、敵に背を向けるのか？」

雄狼のように唸る彼女は、駆けつけた仲間の制止も聞かずに逃げ始めたそのヒポラスを追っていく。ユノを傷つけられた事による怒り。頭に上った血が、なかなか治まろうとしない。それはきつと、逃げ続ける獲物に一牙加えない限り、燃え続けるだろう。

ミルケシオは大きく跳躍した。真っ直ぐバジルの背を狙い、牙を光らせる。既に、仲間の人狼も、保護されたユノも、何処に居るか分からなくなっていた。ただ、この背に一牙加えたい。それだけの衝動で、ミルケシオはバジルを追っていた。だが、飛びかかるミルケシオの前で、バジルは意外な行動をとった。あと少しで牙が撃ち込まれるという時に、バジルが身を翻したのだ。ミルケシオがはつと気付くのも束の間、息も止まりかける衝撃が彼女の頭を襲った。そして、その衝撃は全身を駆け抜け、彼女の力を奪っていった。

地面に落ちたミルケシオは、その衝撃で獣姿を解いた。ミルケシオが自分の頭を押さえると、其処はぬめりとしており、出血しているのが分かった。目の前が眩み、全身の痛みにより今にも視界が曇りそうだった。だが、ミルケシオは粘った。此処で寝る訳にはいかない。唸りを抑えずに、きつとバジルの姿を睨んだ。

「油断したようだね。それとも、捨て身だったのかな？」

バジルがミルケシオを覗き込む。その毒々しい赤と青の目に、ミルケシオの表情が歪んだ。バジルの手が、ミルケシオの肩を掴む。

「触るな……貴様を八つ裂きにしてやる」

「立場が逆じゃないか？」

バジルは冷静に言う、ミルケシオの背を抱いた。

「追って来てくれて嬉しいよ。それも、独りきりでね」

バジルの言葉に、ミルケシオは徐々に力を失っていった。意識を保つのも限界になってきた。だが、失う訳にはいかない。今、失ってはいけない。

「これなら、お前でもいいかもしれない。思わぬ収穫だった。なあ、ミルケシオ」

「気安く呼ぶな」

「お前は呼ぶ癖に？」

バジルの手が、ミルケシオの衣に掛った。抵抗が出来ない。抵抗する力がない。ミルケシオはただただ唸り、牙を剥いた。

「雌狼の癖に、それも、混血の癖に、私に立てつくのがいけない。この罪、それなりの対価で償って貰おうか」

バジルの牙が、ミルケシオの衣を裂いた。その途端、ミルケシオの視界が、真っ白になった。

単身でバジルを追ったミルケシオを捜す為に、数頭の狼達がグレイ山脈を走っていた。幸い、バジルの匂いも、ミルケシオの匂いも濃く残されていた為、路頭に迷う事はなかった。だからこそ、見つけられた。だが、反省すべきは、もっと早くに追いつくべきだったという事だった。檻樓切れになった衣に縋り付きながら横たわるミルケシオに、その場に駆けつけた狼達は蒼白になった。だが、一番真っ青だったのは、力無く横たわるミルケシオ本人だった。彼らが見たものは、辺りに散った血と、その血を吸った衣だった布切れ、

そして、体中痣だらけのミルケシオ。その場にバジルはいなかった。追い掛けてくる狼の気配を感じ、既に逃げた後だった。

誰もが、此処で何が起こったのかを悟った。だが、誰もが、それを否定したかった。自分達の薬花が。自分達の神への大切な供物が。選りによって、ヒポラスという敵の手に掛かったという事実を、否定したかった。

だが、一番否定しなかったのは、其処に横たわるミルケシオ本人だった。全く抵抗出来なかった自分も、全く太刀打ちできなかった自分も、全て否定したかった。しかし、現実はこちらだった。廃人になりかけたミルケシオをどう扱うべきか、その場にいた狼達は暫し悩んだ。そして、最も悩んだのが、ベルチだった。ミルケシオが身籠って貰わなければ、ベルチの立ち位置は危うい。更に、自分の仔よりも先に、若しも彼女がヒポラスの仔を身籠ってしまえば、立場はもつと崩落する。その不安もあった。だが、ベルチは、そんな事ばかり考えているような狼ではなかった。幼馴染の一人として、嘗て親しく遊んだ仲間として、ベルチはミルケシオが心配だった。今にも枯れてしまいそうなこの薬花が、とても心配だった。神獣に捧げるまでは、自分だけの花である筈だった彼女が、とても心配だったのだ。

「ミルケシオ、話がある」

廃人になりかけた彼女に、ベルチがやっと言葉をかけたのは、誘拐事件の丁度三日後の事だった。聞いているのか居ないのか分からない彼女。暫く反応を待ったベルチだったが、やがて、自分から話を続けた。

「男の俺には想像出来ない心中だろう。だから、お前に必要なのは、俺よりももっと理解ある存在だと思う。ミルケシオ、もしも此処から出る気になったら、一度オアシスに戻ったらどうだ？」

ベルチの思わぬ提案に、ミルケシオの目にやや生気が戻った。

「まだ無理に出ろとは言わない。暫くは思うままに此処に居ると良い。でも若し、そうするなら、ジェルと一緒に行くといい」

「……出られるの？　この里から」

ミルケシオが発した声は、殆ど掠れていた。

「俺が話しておく。今のお前には外が必要だ」

その言葉は、ミルケシオの耳の奥で何時までも響いていた。ミルケシオとベルチの間にあった奇妙な蟠りが、次第に解かれていこうとした瞬間だった。

だが、その変化も、この更に一週間後に起こった出来事で、見事に潰されてしまったのだった。

フィユが遂に食い尽くされた。

その知らせは、流行病の様に里を駆け巡った。遂に薬花を口にすることなく、フィユは自分の身だけを神獣に喰わせ、ミルケシオを守ったのだ。そんな事は前代未聞の事であったし、きっと神獣との融合前から人一倍忍耐強かったフィユしか出来ない芸当だったろう。兎角、その知らせは絶望の淵にいるミルケシオに重く押し掛かった。だが、同時に、ミルケシオを住まいから押し出してしまった。

喰い尽くされた。つまり、フィユが逝ってしまった。別れを告げる事も出来ず。礼を告げる事も出来ず。フィユが逝ってしまった。里を守る神獣を収めた器が壊れたのだ。となれば、今から一日足らずで、儀式を行わなければならない。そう、新しい器を連れて、あの丘へと行かなければならない。

ミルケシオが住まいを出ようとした時、衣を引っ張る者がいた。

それは、騒ぎを聞いて目を覚ましたユノだった。

「ミルケシオ、何が起きたの？」

目を擦るユノの顔を見たミルケシオは、急に恐ろしさを感じた。この仔にはまだ何も知らせていなかった。他の仔と全く同じように、狩りや生きる知恵を教えた以外、ユノ自身の人生に大きく押し掛かる事は、まだ何も教えていないのだ。

「どうして皆騒いでいるの？」

——ああ……。

ミルケシオは胸が苦しくなった。今すぐにこの仔を連れて逃げ出したい。まだ何も知らないこの仔を連れて、オアシスへと逃げていきたい。だが、それが叶わない事は、嫌になるほど分かっている。忍び寄ってくる足音によって。聞こえてくる言葉によって。肌を突きさす程の周囲の雰囲気によって。

不思議そうに見上げているユノを抱き締めたまま、ユノは泣き崩れた。抑えきれない感情が、一気に噴き出してきた。堪える事もままならず、ミルケシオは泣けるだけ泣いた。今から真実を知る仔の前に、運命というもののその壮大さを呪いながら、不思議そうにミルケシオを見つめるユノの視線を感じながら。

そして、聞きたくない声の聞える時が来てしまった。

「ミルケシオ、ユノを連れて出て来い」

ユノは分からなかった。いつもは気丈なあのミルケシオが、どうしてこんなにも泣き崩れたのか。ユノは分からなかった。いつもは穏やかな里の者達の顔が、どうしてこんなにも恐ろしい表情をしているのか。ユノは分からなかった。いつもは立ち入ると怒られる場所に、どうしてこんなにも強引に連れて行かれるのか。

分からなかった。

だが、全てを理解する前に、周りでは時が過ぎていく。

訳も分からないまま輿に担がれたユノが目にしたのは、作り物の様な肌をした青い髪の娘だった。ミルケシオと同じくらいの年頃だとユノでも分かった。実は、ユノがその娘を見たのは初めてではない。ミルケシオが数回、会わせてくれた事があった。彼女は、ユノの従姉になるという。兄弟のないユノは、彼女に至極興味があった。いつかその荒い息が落ち着き、目を開けて、ユノと喋ってくれる日

は来ないか。ユノは静かにその日を待っていた。

だから、その息が止まることを願ったりはしていなかった。

もうその願いが叶わない事だけ、ユノは知れた。

「ユノ、其処に寝なさい」

傍に居る呪術師の声に、ユノの体がぴくりと動いた。祈祷師の灰色の眉と目を見つめ、ぎこちなく頷いて、もう目覚めない従姉の向こう側にある、細い岩へと乗った。ふと、従姉の体が動いた気がした。ユノは凝視したくなったが、早く寝そべらないといけない重圧を感じた為、ユノは諦めた。

横になった後、ちらりと横目を向けると、従姉の体が辛うじて見えた。ユノは懸命に彼女を観察した。若しかしたら、自分の望みは叶うかもしれない。そう思ったのだ。しかし、その望みも、彼女の体が火を吹き消すように消えてしまった時に、一緒に吹き消えてしまった。ユノは、はっと上空を見た。赤く燃える炎が見える。否、それは、狼の姿をしているらしい。ユノの真上で赤い狼が、美味しい物でも喰ったように舌なめずりをしている。

ユノは恐怖で動けなくなった。

「新タナ器。此ノ細腕ノ下ニ、馴染ミ深イ熱サヲ感ズル。辛ソウナ肉。辛ソウナ血だ」

赤い狼が何なのか、ユノには分かった。焔を操って人狼を守る神獣。そんな伝説は、何度も聞いた事があった。

その時、赤い狼がユノに飛び掛かってきた。ユノが小さく悲鳴を上げたか上げなかったかで、その鋭く尖った牙が、胸元へと突き刺さった。全身を痛みが駆け抜けていった。手も足もばたばたと動かさずにはいられなかった。だが、幾ら動かしても、幾ら喚いても、その痛みは消えない。寧ろ、あんまり動くユノを黙らせようとか、赤い狼は更に牙を喰い込ませた。いよいよ動きが取れなくなってきた。動く力も失せ、ユノはもはや声でない声を漏らしながら、辛うじて生きていた。体の中に、何かが入ってくる。それはもぞもぞと体中を隈なく調べ回り、頭の前から足先までを何かで満たそうとし

ている。そして、最終的には心臓付近へと宿り、どっと血が滾るような振動を、ユノの内部から作りだした。

ユノは放心していた。

いきなりの痛み。いきなりの違和感。そして、いつの間にか居なくなつた赤い狼の残像を見つめ、ぼうっと岩に寝そべっていた。そして、糸に引っ張られる様に、ユノは起き上がった。ぼんやりとしたまま、自分を見つめている人狼達を見渡し、ユノはゆっくりと手を上げ、一人の人物を指差す。今、自分が何をして、何をしようとして、何を喋ろうとしているのか、全く分からなかった。

「まだ取つてある。私の薬花だ」

ユノはそう言った。だが、自分がいったい何を言ったのか、自分でも分からなかった。ただ、自分が指したのが、ミルケシオだったという事はよく分かった。そして、ミルケシオの顔が妙に引き攣っていたのも、よく分かった。

赤ク染マル空 其ノ漆

赤ク染マル空 其ノ漆

ユノは何が起きたのか全く覚えていなかった。それは、かつてのフィユと同じ事。ミルケシオはふと儀式で見たフィユの死に顔を想起した。フィユの亡骸は消えた。神獣が喰ってしまったのだ。これだから、人狼を守る神獣は強欲だと言われる。次から次に器を食い荒らし、新しい器を求め続けるのだから。

今、一緒に日見丘に座るこの小さなユノも、何時かは神獣に食い尽くされてしまうのだろう。だが、器達は、ただ喰われるだけの供物ではない。少しでも長く、少しでも楽に生きようとする思いが、呼吸法を産んだ。この呼吸法は、代々器に選ばれる一族ならば誰でも知っている。ミルケシオの父ジェルは、その一族の遠縁だったが、その呼吸法を教えるのが上手かった。

ユノは理解出来るだろうか。受け止める事が出来るだろうか。

全てを危惧しながら、ミルケシオは空を見上げた。日が沈んでいく空は、かの神獣が現れた時の様に真っ赤だった。その赤を見続け、ミルケシオは静かに息を吐いた。

「ユノ、何が起こったか、まだ分からないね？」

おずおずと頷くユノを、ミルケシオは見据えた。

「ずっと籠っていた私が引き出された理由も、お前に対する皆の態度が変わった理由も、分からないだろうか？」

不安げなユノの目を見て、ミルケシオは少しだけ笑んだ。そして、すぐにその笑みを消し、再び真っ赤な空を見た。

「明日から、ジェルのところに行きなさい。今のお前が頼りに出来るのは、ジェルだけだ」

「何が起こったかは話してくれないの？」

ユノの言葉に、ミルケシオは口を噤んだ。

何から説明すればいいのだろう。この時を迎えるまでに、伝え損ねた事が多すぎたかもしれない。だが今更後悔しても遅い。

ミルケシオはじつと、隣に座るユノを見据えた。

「神獣……この群れを守る神獣について、どの位知ってる？」

唐突な問いに、ユノは一瞬呆氣に取られた。だが、すぐに考え、ユノは首を振った。

「……すべての神獣は、とても大きな力を持っているけれど、肉体が無くて、肉体に憧れている。だから、人々は神獣の気を引くために、仲間の内から神獣の肉体として相応しい者を選び、それを器と呼んで神獣に契約を持ちかける。或いは、神獣が仔を成し、その子孫より器を選び出し、人々はその器の一族を守る。」

神獣は器に接触し、その身体に入り込んでいく。これを融合という。神獣は大いなる力の持ち主だ。だから、融合した時は、その感謝の印として器に力を託す。力を得た器は、卓越したエネルギーを元に様々な事が出来るようになる。

しかし、力を使えば使うほど、器は神獣に飲まれていく。これが同化だ。同化が進めば進むほど、器の体は神獣に蝕まれていく。そして、最後には完全に喰われ、器は二度と自分の意思で動けなくなってしまうんだ。そして体内から器を食い尽くした神獣は、また新たな器を求めて彷徨い始める」

ミルケシオは淡々と説明した。

「この人狼の群れにも、神獣がいる。赤く燃える狼の神だ。彼は随分力強いが、強欲な神だ。もともと、人狼達を攫って喰っていた悪神なのだが、人狼達が生き延びる為に器を差し出した事がきっかけで、守り神になった。」

しかし、かの強欲さが増したお陰で、彼は器を唆す様になった。つまり、器にわざと力を使わせて、骨の髄まで食い尽くして遊ぶようになったしまったんだ。次々に器が消え、困った人狼達に、神獣は言っただけだ。

『足りない』とね。

そして、新たに薬花と呼ばれる一族が選り出された。族長の家系だ。かの神獣は、女子どもを好き好んで選りだしていると言われていた。柔らかい肉が好みらしくてね、器に欲を産みつけて、目に付けた薬花を攫わせているんだ」

其処まで話すと、ミルケシオは顔を伏せた。

「ユノ、お前は器だ」

ユノの目の色が変わった。

「たった今、融合を終えたばかりの器だ」

ミルケシオは静かに笑み、続ける。

「そして、私は薬花」

見つめてくるユノの視線を感じながら、ミルケシオは言った。

「お前は、いつか私を食べる存在。その時が来たら、迷うな」

ミルケシオの体調に異変が起きたのは、それから間もなくの事だった。すぐに人狼の上役達が集められ、呪術師がミルケシオの様子を見た。そして、その結果は、疾風のように里を駆け巡ったのだ。本来ならば、朗報だった。しかし、時期が良くなかった。ついこの間、ヒポラスのバジルの仕出かした事件があったばかりなのだ。だから、皆が疑った。ミルケシオの胎内には、一体何者が宿っているのだろうか。

そして、それを一番疑っていたのは、ミルケシオ本人だった。

「わかった」

ついに族長の重たい口が開かれた。人狼の仔か、ヒポラスの仔か、生まれなければ分からない。安息の中で生むには、人狼の里は相応しくなかった。だから族長のブレインは、ベルチの後押しもあって、ジェルに命じたのだ。

「ミルケシオをオアシスのバスの所へと返すがいい」

その途端、ミルケシオの体に押し掛かっていたものが、すっと消えた。帰れる。生まれ故郷に。別れてきた母バスにも会える。もう何年会っていないのだろうか。バスの情報は、偶にオアシスへと向かう事の許されているジェルからしか聞けなかった。ジェルを介しての母娘の会話。長くそればかりが続いていた。そんな日々が終わる。仔を生んだ後はまた戻らなくてはいけない事は分かっている。だが、兎に角嬉しい。

この里から、離れられる。

だが、同時にミルケシオは心配だった。ユノの事だ。神獣と融合した器、つまり人狼の要であるユノならば、各々の人狼達が代わる代わる世話してくれるだろう事は分かるが、それでもミルケシオは心配だった。

仔が生れるまで、ユノには会えなくなる。

それを、どう説明するのか。

「オアシスに行つて、ミルケシオはいつ帰つて来るの？」

明日、旅立つという日の夜、ユノの問いに対して、ミルケシオは答えた。

「お前の弟か妹がこの世に降りてきたら、すぐに。それまでにお前は、里の人々の手伝いをよくして、その内に返ってくるジェルの言う事をきちんと聞くのだよ」

「弟か妹……」

ユノは首を傾げた。ミルケシオは頷き、目を細めた。

「そうだよ。この仔が生れたら、どんな仔であれ、お前が守らなくてはいけない。私はお前を信じている。ユノ、それまでに、立派な狼におなりなさい」

ミルケシオの言葉に、ユノは一瞬だけ悲しそうな顔をした。だが、湧いてくるその感情を振り払うかのように首を振ると、強いオレンジの目でミルケシオを見つめ、そして力強く頷いた。

「分かった。それまでに、ミルケシオが自慢できるような狼になつてみせる。だから……だから、無事に帰ってきてね」

力強いその目には、やや夜露がかかっていた。

久しぶりに歩くオアシスへの道は、信じられないほど晴れやかだった。昔は長くかかっていたこの道も、今や記憶していた倍は早く通り過ぎ、あっという間にオアシスの入口へと差しかった。

オアシスの入り口にて、ミルケシオはやや緊張した。子ども時代以来の事なのだ。町は如何になっているのだろうか。そして、町の人々は如何になっているだろうか。

一步踏み出して、啞然とした。

其処は、子ども時代と比べる限り、知らない町だった。見た事もない店や、見た事もない建物、見た事もない物体が溢れている。人の数も、子ども時代の倍どころでは無くて、ごった返していた。良く見ると、近国のズペルス人と思しき者がたくさんいる。この町にはもともと、国を持たない種族の者ばかりが住んでいた。行き場も生き場もない彼らが、自然と集まった結果としての町だったのだ。だから、しっかりとした国を持つ近隣国のキャヴィア、ズペルス等の住民は、旅をしている者以外滅多にいなかった。

それなのに、とミルケシオは目を丸くしてオアシスを見渡す。

まるで、ズペルス国だ。

よく見れば、ズペルス国発と思しき店まで開かれている。

「驚いたでしょう？」

ジェルが言った。

「一年、一年のズペルスの成長が凄まじいらしくてね。裕福になった住民たちが挙って旅に出るわけだ。ズペルスは勢力を広げようとしているとの噂もあるぐらいだ」

ミルケシオは驚きから立ち直れなかった。人狼の里に閉じ込められて以降、周りの文明の進化について行けてないというわけだ。人狼達に捕まってもう十数年は経っただろうか。それだけ格差が激し

い事に、ミルケシオはショックを受けた。

「さあ、バスに会おう。知らせは飛ばしたから、きっと待っている」
ジェルの言葉に、ミルケシオはぎこちなく頷いた。

「母さん……」

ずっと会えなかった母の姿は、驚くほどに昔と変わらなかった。
変わったのは、彼女を取り巻く雰囲気。昔は向日葵のような色が取り巻いていたのに、今は寂しげな月光を思わせる雰囲気となっていた。久々に抱きついた母の体は、記憶していたものよりもだいぶ小さく、ミルケシオは静かに震えながら、母の瘦せた背を撫でた。

バスは何も言わなかった。ただ、ミルケシオを見るなり、おいおい泣き崩れた。その姿に、ミルケシオの目から、ひと雫の涙が流れていった。

自分の母はこんなにも小さな存在だったのだろうか。

ミルケシオは涙の零れた目で、バスの姿を見つめた。

バスはひと呼吸置くと、ミルケシオの顔を見つめ、にこりと笑んだ。

「今日は林檎のスープを作ったの。パンプキンパイに、ムニエルもあるわ。さあ、入りなさい」

バスの暖かい声に、やっとミルケシオは心の底から安堵した。

「お帰り、ミルケシオ」

バスが微笑みながら言った。

「ただいま、母さん」

オアシスに帰郷してすぐ、旧友たちには会えた。会えなくなってしまう者も沢山いたものの、よく遊んでいたビクシやフォクシ、

そして、忘れてはならないコメにも会うことが叶った。十何年振りに会ったというわけで、ミルケシオと三人の間には、妙な緊張が訪れた。たおやかに美しく成長したビクシと、女かと見間違ふような美しさのフォクシ、そして、逞しく成長したコメ。

分かつてはいたが、彼らが昔の彼等でない事に、ミルケシオは少し怯んだ。

しかし、その蟠りも、昔と変わらないコメ達の接し方によって、すぐにほぐれていった。彼らは毎日のようにメイプルの家を訪れては、ミルケシオの様子を見に来た。そして、沢山の話置いて行った。

一番驚き、同時に何だか嬉しかったのは、彼らが盛んにミルケシオを取り返しに行こうと計画してくれていたという事である。さすがに、実際にグレイ山脈に赴いて遭難した話は卒倒ものだったが、彼らの愛が、とても温かった。

賑やかなコメ達の会話は、ミルケシオの毎日の楽しみへと変わっていき、母であるバスとの生活は、心にゆとりを生んでくれた。

まだ傍からは目立たないが、胎内ですくすくと育つ我が仔の存在を感じながら、ミルケシオは何度も願った。この時が、何時までも続けばいいのに、と。

そんなある日の事、バスの元に手紙が来た。渡り鳥の運んだ、ズペルスからの手紙である。遠縁の者が、どうしてもバスと直接話をつけたいという事だった。本来なら、あちらから赴くべきだが、足が悪い者がいる為、こちらから来て欲しいという話だ。

何のことか、ミルケシオは分かっていた。この数日間、母であるが、その前に、まだまだ年頃の女であるバスが周囲から色々な誘いを受けているところを、ミルケシオはひっそりと目撃していたのだ。

美しい女。それも、一つの宿を所有している主人。ジェルとは仲睦まじくはあれども、結婚しているわけではない。美と、富つまり土地とを願う者など、星の数ほどいる筈だ。

遠縁の者のところには、バスよりも少し年上の男がいるらしい。

ミルケシオはあまり覚えていないが、会った事もあるそうだ。昔はこの宿にも、よくバスの親戚が訪れていた。一児を抱え、独りでひっそりと切り盛りする彼女に、言い寄ってくる男も数知れずいたというのは、最近知ったばかりだ。

面倒臭そうに手紙を折る母だったが、それでも彼女は行かなければと言ったのだ。

独りで行かせられる訳もない。

ミルケシオは告げた。

「私も行くよ。ズペルスでしょう？」

その言葉に、バスは目を見開いた。

「何を言っているの、貴女は！ 里とは違うのよ。ズペルスとどの位離れていると思っているの？」

「いいえ、私は平気。母さんは忘れたの？ 私は、人狼の血を引いている。お腹の仔だってそう」

「兎に角、駄目よ。母さんが行っている間、コメ達に色々と頼んでおくわ」

「いいえ、一緒に行く」

母バスと娘ミルケシオの論争は長く続いた。如何にバスが説得しても、ミルケシオは聞く耳を持たない。いつまで経ってもその繰り返しで、最後にとうとう折れたのは、バスの方だった。

「……分かったわ。一緒に来なさい」

バスとミルケシオがズペルスに旅立った事は、人狼にも届いた。ジェルもベルチも非常に心配したが、族長のブレインが問題無いだろうと判断したため、それ以上介入する事が出来なかった。

事実、ミルケシオは、大事に至ることなくズペルスの地へと踏みしめる事が出来た。周りが心配するよりも、遥かにけろりとしていた。もちろん、ミルケシオ自身が己の状態を上手く見極めた事が大

きかったのだろう。

そんなわけで、二人はもう直、手紙を寄越した遠縁の家に着くという所だった。

其処は、ズペルスの中心地。さすがに、異世界だった。オアシスの中でも中心地というものはあるが、それと比べるというのも滑稽な話だ。そのくらい、ズペルスは賑やかな場所だったのだ。

二人はまるで姉妹の様に町を歩いた。実際に通りすがった者は、姉妹だと思っただろう。それほどバスが歳を取っていないという事でもあるが、二人の仲の睦まじさにも要因があった。

二人はあと少しで遠縁の家に着く所だった。

工事中らしい大きな建物の横を歩き、地図を頼りに進んでいく。よく分かりづらい地図だったが、ふと目印となる店をミルケシオは見つけた。安心して、ミルケシオは数歩そちらへと駆け寄った。

そして振り返って、バスに言おうとした。だが、振り返った先のバスの様子がおかしかった。

はっと上を見るミルケシオの目は、急速に色を変えた。迫ってくる灰色の何か。異臭のする液体。そして、その遥か上から見下ろしてくる、董色の目。紺色の翅。

——え？

ミルケシオの視界は、そのまま真っ暗になった。

今にも消え入りそうな音の世界の中で、最後に聞こえたのは、母の叫び声だった。

バスは今にも発狂しそうだった。寧ろ、自分が発狂しない事が不思議でならなかった。娘が瓦礫の下敷きとなり、建物の塗装に使われていた薬品が、辺りに散らばっている。その匂いの中てられているうちに、我が子は駆けつけたズペルス国軍による救助隊によって引き出された。すぐに病院へと搬送されたが、目撃した誰もが結果

を知っていた。ただ、バスだけは、最後まで望みを持ち続けた。

しかし、そんなバスを当たり前のように突き離すのは、重たい現実だった。

バスは納得出来なかった。この目で見なければ、納得出来なかった。しかし、それすらも叶わなかった。ミルケシオが被った薬品は、気化してはいけない物だった。それだけの説明で、バスは死んだ娘に会えなかった。見る事も何も出来なかったのだ。病院は、幾らバスが訴えようとも、その立場を崩さず、ミルケシオの遺体は軍へと運ばれる必要があるとだけ告げたのだった。

バスは納得出来なかった。

しかし、一人の力でも、遠縁の力を借りても、国軍を後ろに控える巨大な病院には叶わなかった。

ミルケシオが死んだ。

その知らせは、人狼の里を揺るがした。

皆が里の行く末を案じ始めた中で、ジェルはユノを呼んだ。すでに噂を聞いたのだろう、ユノは、とても不安げな顔をしていた。真実は真実なのだ。ジェルは深い溜め息を吐いた。娘が死んだ。例えば血が繋がって居なくとも、ミルケシオは紛れもなく娘だった。その娘が死んだ。腹に仔を抱えたまま。

「ユノ、知らせを聞いたか？」

ユノの顔は真っ青だった。ぎこちなく頷くのを見つめ、ジェルは続けた。

「ならば、分かるな？ 噂は本当だ」

ジェルの言葉に、ユノの瞳が揺らいだ。

「ミルケシオの母……つまり、お前の祖母になるバスの遠縁の一人が俺にも知らせてくれた。可哀そうに、バスは錯乱しているらしい」ふうと目を伏せ、ジェルは言葉を詰まらせた。

「俺も……錯乱しそうだがね……」

ジェルの虹彩は今や真っ青だった。ユノは無意識に起こっていた自分の震えを押さえた。強く、逞しく、そして暖かったミルケシオ。本当の母で無くとも、ユノにとっての母はミルケシオで間違いなかった。

その母が、逝ってしまった。

まだ生まれていない弟か妹を連れて、突然、逝ってしまった。

「どうして？」

ユノは呟くように訊ねた。

「どうして、ミルケシオは……」

「事故らしい」

ジェルは静かに答えた。

「ミルケシオの遺体はズペルスが離さなかったらしい。バスは親戚と共に、仕方無しにオアシスに戻ったそうだ」

目を見開いたままのユノを見つめ、ジェルは言った。

「明日、俺はバスの元に行く。ユノ、お前は――」

「連れて行って」

ユノの遮りに、ジェルは眉を顰めた。

「一緒に行かせて」

暖かい日々が打ち砕かれた。ずっと待っていた幸せが、風に攫われていった。

バスは自分を呪った。ミルケシオの攻めに折れてしまった自分を呪った。だが、呪った所で、ミルケシオが戻ってくるわけではない。折角暖かい灯が照らし始めていたメイプルの家の中が、また寒くなかった。

親戚に連れられて帰郷してから、バスと親しい者は勿論のこと、コメやフォクシ、ビクシ等、ミルケシオと親しかった者も、頻繁に

バスの様子を見に来てくれた。だが、誰もが氣力を失った様子で、嘗てのような幸せは、もう二度と戻っては来ないとバスは理解していた。

暗い部屋に光を入れようと、バスは窓を開けた。

ミルケシオを永遠に失って、時というものが分からなくなってきた。遅いのか、早いのか、在るのか、ないのかですら、分からなくなってきた。

だが、一つ分かっているのは、今日はジェルが訪れる日であるという事。

バスは二階の窓から外を見つめ、目を細めた。

その目には、二つの影が見えていた。

一つは、長年見慣れた狼ジェル。そして、もう一つは、金の鬘を翻す、まだまだ子どもともとれる、若い狼だった。

二つの影を見つめること暫し、バスは静かに、窓から身を引いた。

赤ク染マル空 其ノ漆（後書き）

ミルケシオを主人公にした『赤ク染マル空』、如何でしたでしょうか。前作の『囚ワレノ万華鏡』と密かに繋がる話でしたので、ミルケシオを襲った事故の裏側も少しばかり垣間見えたかもしれません。前回、前々回と違って、人狼という少し変わった種族の中での話だったので、想像しなきゃならないことがたくさんありました。私の想像力の足りなさが招いてしまった不具合もたくさん含まれているかも知れませんが、ひとつの形として生まれたこの作品を整える形で調整していこうと思います。なので、また読み返したときに、一部変わっていたりするかもしれませんが、悪しからずご了承くださいませ。それでは、ご愛読ありがとうございます。続きも宜しく願います。

2009年9月1日 幼ゐこみ

翡翠ノ海 其ノ壺

翡翠ノ海 其ノ壺

虹色の世界。そう呼ばれている大陸がある。此処は人が獣になり、獣が人になる事が当たり前の世界。大陸の真ん中には果てしなく広がる大平原があり、色取り取りの風が駆け抜けていく。

その中を、少年が一人、てくてくと歩いていった。

彼が「白鬼」と言われるようになったのは、確かその少年の母が亡くなって三年も経たないうちの事だった。白というよりは灰色。鬼というよりは獅子。ヘイゼルの猫の様な眼を光らせるその少年は、シーという名前だった。

本名、シーマ・オシユア。

今、彼が背を向けている方角——平原の西側に広がる、バザイ帝国の生まれのバザイ人。だが、バザイ国を建てた、長三角尖短耳の生粋のルチフェル人ではなく、少しだけ、昔の血を引いていた。それは、バザイが経つ前に、この地で栄えていたというラビラ七王国の血。青い目の印象的な、ケラヴァラ人の血。

シーの母は、ケラヴァラ人だった。

父親は知らない。

シーは、母と二人だけで暮らしていた。

幼い頃のシーには分からない事だらけだった。何故、周りの角の生えた人は、シーと母親を蔑むように見つめてくるのか。何故、たまに見かける青い目の人は、シーの額の角を憎々しげに見つめるのか。

シーと同じように、混血の子どもは溢れるほどに居た。

しかし、こんな風に冷たく見つめられるのは、シーだけのような気がしていた。

幼い頃の彼は結局、分からなかった。そう、母親の墓石を見つめ

るまでは。

「ぼく、一人なのかい？」

母親が死んだ時、たった独りで母親の墓石を見つめているシーに、話しかけた大人がいた。それは、どうやらルチフェル人の血を引くバザイ人ではなかった。ケラヴァラ人でもなかった。

——異国の人だ。

猫のような瞳。

色の変わる左目の虹彩。

翡翠のように輝く右目の虹彩。

さまざまな血が入り混じっているという事だけは分かった。

何処の国から来たなんて、問う気にもなれない。

それは、見るからに、風来の人だった。

「お母さんが死んだんだね？」

その人物は、墓石に刻まれた字を読むと、シーをじっと見つめた。

「これからは何処で暮らすんだい？」

シーは首を横に振った。

分からないのは確かだ。シーの住んでいた界隈の者達は、未だにシーをどうするのか決めていない。母の親類なども当てにならない。父親の事など話にも出てきたりはしない。何処か余裕のある家が、シーを引き取るしかないという話だった。しかし、何処に家も首を縦に振れない事情があった。

ただでさえ、何処にも余裕はない。

ただでさえ、今いる者を喰わせるのに精いっぱいだ。

そのうえ、あの……。

「ふん、どうやら良くない風が吹いているようでもあるしな。ぼく、お前さんも村にとっちゃ厄介者なわけだ」

その時のその人物の言葉は冷たく、シーは泣きそうになったのを覚えている。今でこそ、思い起こせば、なるほどその人物らしい言葉ではあると思える余裕がある。

「泣くな、ぼく。そのくらいで。お前さんのようなやちゃ一杯いる。

せいぜい強く生き延びるこった」

そう言って立ち去ろうとしたその人物を、シーはじっと見つめた。悠々とした後ろ姿。太く重たそうな剣。風につばを靡かせる、麦色の帽子。其処から少しだけ漏れる、金色の髪。

シーは立ち上がり、その人物を追いかけた。

とことこと追いかけていく、シー。それに、気付いているはずなのに、その人物は振り返ったりしなかった。ただ黙々と進んでいく。大人の足で、大人の速度で、バザイの地を北へと向かっていく。

「ここまで付いてくるとは御苦労なこった」

やっとその人物がシーを振り返ったのは、さすがの旅慣れした大人も休憩しようと川の辺に腰を下ろした時だった。

「其処まで根性のある奴も珍しい。ぼく、お前さんは、何て名なんだい？」

そう問われ、シーはぜえぜえと息を整えながら、どうにか答えた。

「シー。……シーマ・オシュア」

「シー……か」

その人物は携帯食料を齧りながら呟くと、猫の瞳を細めて、シーを見つめた。

「なるほど、さすがは獅子の血を引く子よ。シー、こっちへ来な。

腹が減っただろう？」

この瞬間から、シーはその人物と共に過ごすことが決まった。

シーは、その人物が行く所に黙ってついて行き、ただ何となく一緒に居る。足手まといになるばかりで、少しも役立たないシーを、その人物は追い払ったりはしなかった。

シーがそんな大人にやたらと付きまとう理由。

それは、力だった。

たまに見かけるその人物の鍛練。重たそうな太刀を振り回す、その姿。ただ、見えない敵ばかりを追っている、猫の瞳。

そんな姿を見る度に、シーは背筋を凍らせると同時に、強い憧れを抱いた。

——あの人のようになりたい。

「シー、お前さん、戦い方を知りたいんじゃないか？」

ある日、シーはそんな事を問われた。こちらから言いだす前に。

「身を守る術は研いたほうがいい。明日から訓練じゃ」

その日から、シーはその人物を《師匠》と呼ぶことになった。シーの母親が死んでから、まだ一か月も経っていない頃のことだった。

「シー、シー？ 何処に居るの！ 早く来なさい！」

大陸の大平原にある唯一の街、虹の宿。そのざわついた賑やかな場所で、喚かしい声が響いたのは、晴れ晴れとした真昼のことだった。周りの声はそう静かじゃない筈なのに、不思議と響き、当のシーにもよく聞こえる声だった。そう、共に旅をしているヒュミの声は、そんな特殊な声だった。

「全く、何処に行ったのよ。シー？」

「此処に居るよ」

シーは呆れたように、ヒュミの前に姿を現した。

ヒュミと共に旅をすることになって以降、おちおち抜けがけも出れない。せめて、あと一人か二人一緒に旅をしていたら、とシーはたまに思う。

「ちよつと、何処に行ってたのよ。心配したじゃない！」

ヒュミのオレンジの目が、強く輝いた。シーはその目をおずおずと見つめる。ヒュミはアライグマ。シーは獅子。明らかにこちらの方が強い筈なのに、シーはヒュミに逆らえない。逆らうと、五月蠅いからだ。

「あなたっていつもすぐに居なくなっちゃうんだから！ こっちがその度にどれだけ心配するのか分かっているの？ 大体、此処に来る前も——」

ヒュミが怒りだすと話が長くなる。シーはいつも説教を聞き流し

ながら、行く町行く町を観光していた。そして、その日泊まる宿を
探す頃になると、口煩い姉という感じのヒュミも静かになるのだ。

そう、ヒュミは姉ではない。

彼女はズペルス人。バザイ帝国とは反対側である平原に東の大国
ズペルスを建てたという民族の少女。シーと同じルチフェル人の血
は引いているが、ズペルス人の彼女の角はとても小さく、耳は逆に
とても長い。

もちろん、恋人でもないし、主従関係にもない。

ただ、成り行きで一緒に旅をしているというだけ。

その成り行きが濃い出来事だったのだけでも。

「この間だって、あなた、ちょっと目を離れたすきに、変な大人に
絡まれていたし」

「あれは言いがかりを受けたただけだよ。僕は悪くないもん」

シーはただそうとだけ答えた。

さて、今日もヒュミの愚痴を聞いたまま、泊まる宿に着いた。

七つの通りから成る虹の宿が見渡せる、有名な安値の宿だった。

飯も美味いらしい、というのは、先ほど同じ宿に泊まるらしい銀

狐の男が言っていたのをたまたま聞いた情報である。

「ねえねえ、平原まで見えるよ！　すごいね、ヒュミ！」

さっき怒られた事など忘れて、シーはテラスから外を眺めた。

ヒュミはそれを呆れて見つめた。

夕暮れになった。

ヒュミと二人きりの夕飯は、退屈ではないが、時折緊迫したもの
となる。礼儀作法に厳しいヒュミによって、毎晩シーは、びしびし
と鍛えられるのだ。ある意味それは、《師匠》と呼んでいた大人か
ら受けた訓練よりも、ずっと過酷で、ずっと辛いものではあったけ
れども、ヒュミが選ぶ店に外れはなく、舌だけはいつも満ち足りて

いた。

「ほうら、左手が御留守よ!」

ヒュミが小声で言った時、シーはスープを飲んでいた。慌てて椅子にバカンスに行っていた左手を、スープの皿へと呼び戻す。

なにも礼儀に厳しい店にいるわけではない。

現に、ヒュミとシーを取り囲む大人達は、ヒュミが注意をしだしたら三日は説教が終わらなさそうなほど無作法な者ばかりだ。しかし、こんな場所においても、ヒュミはシーに作法を強要する。

シーは面白くなかったが、だからといって、齒むかうと怖いので、黙って行儀よく食事することにした。

「ヒュミ、ところでさ」

シーは俯きながら言った。ヒュミは、食事中の御喋りは禁じない。だから、安心して口を開く事が出来た。

「グレイ山脈の西側って行ったことある?」

シーとヒュミが共に旅をしまして、まだふた月も経っていないだろう。それまで、お互い、独り旅をしていたという事に、お互いが驚いた。

どちらも年端もいかない子ども。それも、旅する場所が場所だ。治安どころか、未だに共食いをするような場所だったり、未開の地であったり、戦場だったりする。

お互い、自分だと驚かないが、他人にもそんな人がいるなどとは思わなかった。

シーも《師匠》と別れて以降、様々な所を旅したのだが、歳の所為か、ヒュミには敵わなかった。倍はいろんなものを見ているらしい。そのことに少し嫉妬したが、少し頼りに思っていた。

「なあに、突然」

ヒュミはそう言いながら、水をひと飲みした。

そして、難しい顔を見ると、呟くように言った。

「……グレイ山脈の西側っていうと、人狼の縄張りになってないあの禁断の森ね」

「行ったことあるの？」

「一回だけ」

さすが、とシーは感心した。

「どんな所なの？」

「まさに禁断の森って感じね。住んでいる獣人たちも変わった獣ばかりだし、外からの者を排除するような雰囲気漂っていたわ」

「ルリの生まれたところでしょ？」

シーのか細い問いに、ヒュミは「ルリ」と、繰り返した。

シーの頭にはルリと呼ばれる人物がいた。それは、シーがヒュミと旅をするきっかけになった時の事。大陸の南西にある、フェザスという島国に旅した時の事だ。肉食主義のピジュア人と、猛禽のホーカー人の戦争真ただ中という混乱した地に於いて、シーとヒュミはたまたま居合わせたルリという娘に同行した。ただ同じ船に乗っただけという間柄だったのだが、このルリがまた癖者だった。

魔女。

そう言ってしまうのが一番簡単だろう。

赤い層の分かれた目を持つ彼女は、マクア人の血を引いていた。様々な国において、マクア人は恐れ、敬われ、そして蔑まれている。彼らを悪魔と呼び、出来る限り関わりを無くそうとする輩は多く、関係なく同じ目を持って生まれたポエニシアンと呼ばれる子ども達を間引く事も未だにあるという。

しかしルリは、そんなポエニシアンではなく、本当にマクア人の血を引いていた。しかし、彼女に何となく安心感を抱いたのは、彼女に流れるもう半分の血が、シーと同じケラヴァラ人の血であったからだろうとシーは信じている。

ともかく、一人謎めいた目的で動く彼女に好奇心を抱いたのはシーだけでなく、その為にヒュミと一緒に彼女に付きまどったのだ。

目的を果たした後、ルリは一人去っていった。

シーは、どうせ旅をするのなら、とヒュミと共に行く事に決めたのだが、ふとルリの事を思い出す事はままあった。

「ルリね……居たのでしょね……もちろん、私が行った時は会えなかったのだけど……」

そう呟いて、ヒュミはじっとシーを見つめた。

「シー、ルリに会いたいんでしょう？」

シーは俯いてスープを飲み続けた。

何度も擦り剥いた膝。

砂まみれの頬。

はたいても、はたいても、埃っぽい頭。

シーは地面に落とした長刀を拾い、ふうと息を吐いた。

どうしても、《師匠》のようにはいかない。この長刀だって、《師匠》の持っている物の半分にも満たないというのに、シーには重すぎる。

だが、もう一度。

もう一度と念じて、シーは長刀を振るった。

「ふうん、なかなか上達せんなあ」

《師匠》は貶す訳でもなく、笑う訳でもなく、怒る訳でもなく、ただそう言った。

「きつと、剣が重すぎんだろ。おい、シー、短刀にせい」

そう言われてシーは、慌てて首を振った。

「そんな、僕は長刀を使いたいんです！ このまま練習させて下さい！」

「ええい、五月蠅い。そんなこた、短刀を扱えるようになってから言え！」

《師匠》は唸るように低く言うと、溜め息混じりに付け加えた。

「長刀はその後でやってみてもいいだろう。試しに短刀を使ってみろ」

そう言って投げ渡された短刀を、シーは取り損ね、しぶしぶ拾っ

た。

この時、シーがその短刀をその先ずつと使う事になろうとは、投げ渡した《師匠》でさえも思わなかった。

夜中、シーはふと目を覚ました。

何だか嫌な気配を感じたのだ。

だが、特に変わったところもない。

夢は昔の夢。幸せな思い出ではないが、悪夢というまで嫌な夢でもない。

――何だろう？

シーは寝台を抜けだし、テラスへとこっそり出た。

夜の街は一部を除いてとても静かだった。

夜の風は身を凍らせるほど冷たく、薄着で出てきたシーを少し後悔させた。

――特に変わった所はない。

シーはテラスから外を見渡して、首を傾げた。

「気のせいかな？」

言葉の最後は欠伸に吞まれた。

何にもない以上、外に出続けている意味もない。

ヒュミが目覚めて文句を言いださないうちに、早く戻ろう。

そうシーは思い、部屋に戻った。

翡翠ノ海 其ノ弐

翡翠ノ海 其ノ弐

「こらあああ、起きんかーッ！」

山々を木霊する叫び声は、深い深い夢の中で道に迷ったようになつていたシーの耳にもしつかりと届いた。はっと起き上り、自分が寝ていたことによくやく気付いた。慌てて擦る目には段々と周囲の景色が映り込んでいく。醒めたばかりの目と頭には、眩しすぎる風景だった。

「疲れてるだろうからって、ちよつと放っておいたらすぐこれじゃ！」

耳にぎんぎんと響くのは《師匠》の声。猫の目がかつと見開き、起きたばかりの獅子の仔のシーを威圧する。シーはすっかり委縮しながら、慌てて飛び起きた。

「ごごごごめんさい、全然気付かなかったです……」

「ふん、まあ、ええだろ。さっさと支度せい。今日もまた山越えだからの」

きりつとした瞳に、シーは戸惑った。今、山越えをしていること以外、《師匠》が何処まで行くのか、何故行くのか、シーはあまりよく知らないのだ。ただ、《師匠》から得られるものを得たくて、彼が行くところへとついて行っている、それだけだった。

山越えの間も、《師匠》による修行は、何の前触れもなく突然始まる。

シーは授けられたばかりの短刀を握っては、《師匠》の課す題目を少しずつこなしていった。使ってみて改めて気付いた。やはり、長刀よりも、ずっと使いやすい。

「暫くは短刀を使うといい。身体が大きくなれば、長刀も扱えるよ

うになるだろ」

《師匠》の言葉に勇気づけられた。

「さあ、思いつき打ちこんでこい、シーッ！」

《師匠》の咆哮が聞こえる。獣姿とヒト姿とを使いこなし、シーは飛び込んでいく。姿を揺るがし、風を切り、地を這って、風になり。――切り込む。

「シー、朝よ？」

目を開ける。

鳥の話し声が聞こえ、町の息吹が宙を泳いでいる。日差しはとうに明るく、シーの顔を容赦なく照らしており、シーはすぐに目が潰されるんじゃないかと怯んだ。

「なーんかぶつぶつ寝言言ってたわよ。ルリの夢でも見たわけ？」

声のする方向を見ると、ヒュミがからかうようにこちらを見ていた。テーブルに置いてあるカップに、茶を注いでいるようだった。シーはやっと自分が何処に居て、何をしている所なのかが分かり、深くため息をついた。

「そんなんじゃないよ」

すぐにヒュミをねめつけ、シーは寝台から降りた。ふわりと風が舞いこんできて、初めて窓が開いていることに気付いた。外はすっかり賑わっているようだった。

「今日も面白い物？」

シーはテラスに向かいながら訊ねた。朝の陽ざしは強く、少し心地よい。だが、やはり、シーは気になった。昨日からぴりぴりする、この不思議な感覚。これは何だろう。

「そうね、町を巡ってみたいする？」

「……ヒュミ、なんか感じない？」

思わずシーはヒュミに訊ねたが、ヒュミは不思議そうにシーを見つめ返した。

「なんかって？」

「なんか……」

うまく答えられないことが、もどかしかった。

しかし、明らかに何か異常があることを、シーは感じていた。空気
のうねり。闇の気配。日常にうまく溶け込んだ、異常。その動き。
シーの翡翠のような目には映らない。けれど、確かに存在している
はずの、気配だった。だが――。

「ううん、何でもない」

そう言うしかなかった。

外に出たシーとヒュミを待っていたのは、騒々しいほどの賑わい
だった。

虹の宿がいつも賑わっているのは、平原を行き来する旅人が多い
からでもあるが、この場所に居ついて商売をしている者も非常に多
い。特に旅人は噂に敏感で、新しい店が出ると評判などもすぐに出
回るため、自ずといい店だけが残っていく。さらに、三年持てばそ
こそこいい店とさえいわれるほど、競争も激しいらしい。

さすがにヒュミは、店の評判に詳しかった。

シーも歳の割に、たくさん旅をし、虹の宿にも立ち寄ったつもり
だったが、ヒュミは少しでも長生きしている分、もっと虹の宿に足
を運んでいたし、もっと人から情報を聞き出すのが上手かった。泊
っている宿のロビーでの会話から、町の人々の動きなど、全てを何
となく把握し、どの店が繁盛していて、どの店が本物なのかを、ヒ
ュミ並みに見極めていた。彼女の選んだ店は、大抵外れることがな
く、シーはその能力が、心底羨ましかった。

「どうしてそんなに店を選ぶのが上手いの？」

昼食を取りながらシーは素直に訊ねてみた。

思いがけないシーの質問に、ヒュミは少なからず嬉しかったらし
い。照れ隠しで目をそむけ、軽くあしらった。

「そんなことより」

ヒュミは話を変えた。

「最近、グレイ山脈の王室で動きがあるっていう噂が流れていたわ
ね」

ヒュミの言葉に、シーの目の色が変わった。

グレイ山脈とは、虹の宿から繋がっていて、大陸の北側を隔離している大きな山脈のことである。その中には、オアシスという町のほか、人狼の里や、秘蔵の森、マクア王室という神聖な場所が隠されていると言われている。

なかでも、ただ王室と略されることの多いマクア王室は、実際にあるのは確かなのに、誰もかれもが踏み込めない不思議な場所である。その名の通り、北の地の唯一の国、マクアを束ねる魔王が住んでいる場所であり、大陸に伝わる神話などでは、自然界の司とも言われている。その実体は、生き物というよりも神獣であると言われ、巨大すぎる力を山に繋ぐために、その場から動けないように呪われているらしい。

マクア国の王室。

シーが目の色を変えたのは、ここだった。

始終頭の中に浮かんでくるとある人物のイメージ。フルーレをかざし、風の精霊と対話し、レオポン姿で野を駆ける魔女の姿。彼女――ルリは、ある、特別な事情で、魔王に仕える使者だった。

「王室に人が出入りしているという噂よ。何処からそんな噂が持ち上がるのやら」

シーはじっとヒュミの目を見つめた。彼女の目は違うことを提案していた。言葉にはしていないけれども、シーにはちゃんと読みとれた。ヒュミがシーに許可しているそのこと。ヒュミが、シーが言い出すのを待っているそのこと。シーはじつくりとそのことを頭の中で噛み締めてから、口を開いた。

「ねえ、王室に行ってみようよ」

天候が急に悪くなったのは、一通り買い物も散策も終わり、そろそろ宿へ帰ろうという時だった。奇妙な匂いの風が吹き、空が段々

と赤黒く染まっていく。シーは、多くの通行人と同じく、ただの夕焼けだと思おうとしたのだが、夕焼けではないことは明らかで、段々とそれは、気のせい留めておける範囲を超えていった。やがて、通行人のほぼ全てが空を見上げ、不気味なほどの赤黒さを醸す空を指して、様々なことを呟いていた。

「あれ……何なんだろう？」

シーの呟きに、ヒュミは渋く目を細める。

「……まさか……そんなはずはないしね……」

「そんなはずって？」

シーの問いにも、ヒュミは空から目を離さなかった。

「暗雲よ……」

暗雲。

シーも聞いたことがあった。それは、グレイ山脈を越えた北側。つまり、マクア国のある方面、赤の世界と呼ばれる地域でたびたび起こる嵐のことだ。昼夜問わず夕焼けのような景色をしているその場所では、雲が黒く反転し、雷鳴のような音と暴風を伴いながら、地上の砂漠の砂を巻き上げ、砂嵐のようなものを引き起こすという話だった。だが、一回ぐらいいしかグレイ山脈を越えたことのないシーは、暗雲を見たことがなかった。ただ、今見ているそれが、暗雲であるというのを疑える理由はあった。暗雲は、グレイ山脈以南では起こらないはずなのだ。

「馬鹿なことを言っているって思われているのは分かるわ。でも、そうとしか思えない。これは、ただの嵐じゃないわ……」

ヒュミは独り言のようにそう言うと、さっとシーの手を掴んだ。

「早めに宿に戻るわよ。外は絶対に危ない！」

言われるままに従っただけのシーだったが、その数十分後には、ヒュミの意見に従っていてよかったと心から思った。宿に帰るなり、ヒュミが全ての扉を頑丈に閉めた直後、外で人が叫ぶような音が鳴り響いたのだ。

「暴風？」

宿の構造はしっかりとしたものだったが、それが如何程のものはシーには分からない。ただ、グレイ山脈以南を襲うはずの無い暗雲に耐え切れるように作られていると考えることは、とても出来なかった。

「誰か、叫んでる……」

シーは呟いた。

獅子の咆哮のような雷鳴に、悲痛に叫ぶ人々の声。それは、魔獣が街で暴れているかのような音だった。がたがたと音を立てる壁に、ぐらぐら揺れる床。シーはヒュミに縋る様に縮こまった。この歳で、幾度となく、悪漢やら盗賊やら魔物やらと戦ってきたものだったが、この大の大人ですら畏縮する敵は、想像以上に大きすぎた。

——強さは抗うことじゃない。

頭の中に、そんな言葉が蘇ってきた。

ヒュミに引つ張られ、テーブルの下へと潜る。壁にかかっていた絵やら、棚に置かれた花瓶やらが落ち始めた。まるで、地震が起きているかのような唸り。悲鳴はまだ響き渡っていた。助けて、死にたくない、怖い、寒い、苦しい。シーにはそう聞こえた。

「誰かが助けてって……」

「風よ」

ヒュミの冷静な声が、シーの頭にすっと入りこんできた。

「風よ」

シーのヘイゼルの目が揺らいだ。

——適応こそ強さだ。

師匠のいつにない真面目な表情が、脳裏に浮かんできた。

硝子の割れる音がした。隣の部屋か、廊下。若しかしたら、気のせいかも知れない。だが、シーには風の音が強くなった気がした。傍にヒュミがいると分かっている、幾ら自分に言い聞かせても、心の中にて不安が湯水のように溢れ、心の床をびしょびしょに濡らしていた。その不安を生み出す蛇口を必死に閉めようとするけれども、シーの手は溢れる不安に押し戻され、一向に蛇口に届かない。

——敵わない相手の力を、利用出来る者こそ強者だ。

暗雲は、シーとヒュミの言葉すら奪っていった。二人は無言で嵐の生み出す騒音を聞き、まるで、すぐ傍に肉食の魔獣や魔物が居るかのように、息を潜め、存在を消した。

そのまま、数時間。

シーはいつの間にか寝ていた。だが、夢の中でも、不安や恐怖から解放されることはなく、真っ暗やみの中に差し込む光をひたすらに追いかけて、自分は音の魔物に追われるという夢に閉じ込められていた。ヒュミに優しく揺さぶられて、はっと目を覚ました時には、自分でもびっくりするぐらいの寝汗をかいていた。

そのことによる驚きが去ると、すぐにシーは気付いた。

ぴしゃりと閉められた雨戸の間。

そこからは、眩い光が差し込んでいた。

街は思った以上に無事だった。

シーとヒュミはテラスから下の様子をじっと覗き、少しだけ安堵した。音のみの恐怖に慄いていたときは、もう外は壊滅状態だろうと勝手に思っていたからだ。だが、無事とはいっても、やはり犠牲はあった。店の幾つかは店主もかわいた笑みを漏らすほどに壊滅していた。死者も行方不明者もいるらしい。

街の声はすぐに、グレイ山脈の何処かにあるという王室へと向いた。というのも、虹の宿にいるマクア人達が、不安げに声を上げ始めたからだ。

「暗雲がグレイ山脈以南で起こらないのは、王室の魔王陛下が見張っていらっしゃるからだ。それが起こってしまったのなら、陛下の御身に何か起こったに違いない」

シーは居ても立ってもいられなかった。

ルリは魔王の配下だった。王室には、ルリがいるかも知れないの

だ。

「ヒュミ……」

マクア人達の話に興味津津に聞く集団の中で、シーはこっそりヒュミの袖を引っ張った。ヒュミは分かっているといった表情でシーをちらりと見つめたが、またすぐに集団のほうへと目を向けた。一瞬、シーはむっとしたのだが、すぐにそれをもっと情報を聞き出すための行動であると気付き、開きかけた口をすぐに閉じた。

「マクア国の魔王は神獣だろう？　神獣が如何にかなってしまいう事なんてあるのかえ？」

猫の瞳のルーピルプ人の女がマクア人達に訊ねた。マクア人達は顔を見合わせると、暗い表情を変えずに小さく頷いた。

「確かに陛下は神獣であらせられる。我々のような庶民が手を出すものなら、忽ち灰になるだろう。しかし、神獣の存在は一柱のみではない。神獣同士で何かいざこざがあるとすれば、恐らく」

シーはちらりとグレイ山脈を見上げた。

思えば、鳥人間達の国のフェザスにて、ルリも何か大きな者と戦う羽目になっていた。彼女が柱と呼んだ不思議な気を放つ岩。それを守り、ルリを《槌》と呼び、魔王を無条件に憎む悪魔の存在。そして、その悪魔と共に、ルリの邪魔をした謎の人物。

彼女達の戦いが、この異常を引き起こしたのだろうか。

魔王に何かあった。

それはつまり、ルリ達の側が、圧されているという事ではないのだろうか。

「何にせよ、我々の介入できることではなさそうだな……」

そう言ったのは、グレイ山脈の北東にある竜人の国キャヴィアから来た、キャヴィア人剣士だった。緑の鱗に透き通るような茶色の目を輝かせ、彼は冷静に言った。

「言うまでもないが、神同士の戦いに凡人は首を突っ込めない。此処はマクアの魔王が持ちなおすことを祈るしか手はないだろう」

彼の一言で、集団の興味はすっかり失せていった。それもそうだ、

と満場一致の溜め息が漏れ、束の間の現実逃避は過ぎ去り、皆、各々の復興作業やら、挨拶回りやらに戻っていった。

シーはヒュミの袖を握ったまま、集団の解散する模様をじっと見つめていた。少しずつ解体していく中、最後にマクア人達が消え去ると、其処には皆が現実に戻るきっかけを作ったキャヴィア人だけが残された。

彼は現実に戻っていった人々を見つめると、軽く目を細め、静かにその場を立ち去って行った。

ヒュミの手に力が入る。

シーはそれを感じ、緊張した。

「追いましょ……」

予想通りの言葉に、手に汗が滲んだ。

翡翠ノ海 其ノ参

翡翠ノ海 其ノ参

服装は質素だが悪くない。外套の下にちらちら見える太刀の質もかなりしっかりとしていそうだ。わざわざ武器を持っているという事は、魔術には明るくないと見える。だが、明るくないと言っても、彼は何かしらの竜の血を引く竜人だ。竜の一種では、炎袋を体内に持つ者がいるという。防火の装備など、生憎、持ち合わせていない。シーの体には自然と力が入る。

獣人であろうと、竜人であろうと、半分以上獣の血が濃いのならば、油断してはならない。例え、自分が地底人の血を引いていようともだ。《師匠》に散々聞かされた話だった。半魔獣の子どもに油断したが為に命を落とした旅人の話。半獣人を襲おうとして、返り討ちにあった地底人の悪漢の話。どれも自業自得だが、獣人達の強さが分かる話だった。

目の前にいるのは竜人。その力は半端無く強いと言われる。目の前の男も、きつとそうだろう。シーもヒュミも、系統は違えども、同じ地底人の血を引いている。地上人に比べ、地底人の力は確かに強いし、体力も高いが、相手がただの人間でなく竜人となれば、さすがに変わってくる。

それも、大人と子どもだ。

人間ならばきつと身体を壊すぐらい重い太刀を振り回し、いったん頭に血が上ると中々手がつけられない者が多いという竜人。あの太刀もきつと、竜人用の物だろう。純血の地底人の大人ですら、竜人の太刀は一部の者しか持てないという。それを振り回す相手との戦いとは、如何なるものか……。

考えてみて、シーは身震いした。ヒュミもシーもただの子どもで

はない。けれど、子どもではあることには変わらない。相手がただの大人でないのならば、なおさらだった。悪魔ともまた違う恐怖。今、尾行しているその男からは、力の威圧感を感じた。いつか、ルリの手助けをしようとして対峙することになった悪魔の女から感じたのは、魔力という目に見えないものへの恐怖だった。今は違う。力への恐怖。物理的で、具体的な恐怖。それと戦わなくてはいけなくなるかも知れないという恐怖だった。

男を追って、シーとヒュミは虹の宿の大半の街を歩き通した。キヤヴィア人のその男は、ゆっくりと、堂々とした歩調で、賑わう空間を静かに突き破るように歩いていった。売っているものには目もくれず、静かに、静かに、空間を突き破っていく。

シーとヒュミも、彼に悟られないように、行き交う人に紛れつつ、距離を保って彼を追った。男は、一切振り返らなかった。気付いていないのか、無視しているのか、シーにもヒュミにも分からなかった。

やがて、男は一番街と七番街の間にある路地に入りこんだ。シーとヒュミも慎重にそれを追ひ、路地に足を踏み入れた。男の足取りは変わらなかった。ただゆっくりと、ただ静かに、進んでいく。

「さて、ここら辺でいいだろうね」

男がぼつりと言った。

「どうしてついて来たのか教えてくれるかな？」

ちらりと振り返る目に、シーもヒュミもぎょとした。気付かれるのは承知の上だった。危なくなったら、すぐに逃げようと思っていた。だが、その目は、男の目は、何の感情も見出せない、不気味な無機質で満たされていたのだ。逃げるべきか、逃げなくていいのか、判断に苦しむ。判断に苦しむ時は、どうすべきだったか。

「シー！」

ヒュミの鋭い声に、シーは我に帰った。

こういう場合、どうすべきか。

「特に何でもないの。人違いよ」

ヒュミが大声で男に言い、シーの手を引っ張った。シーが慌ててその手を握り返し、踵を返そうとしたその時、男はまた、口を開いた。

「人違い？ 本当にそうだろうか？」

ヒュミの手に汗が滲んだ。

帰るべき道。二人の後ろ。一番街への道。閉ざされている。いつの間にか、二人の後ろには、誰かが居たらしい。

「パエーリヤ」

後ろの誰かが言った。

「この二人の匂い、覚えておくといい」

ちらりと後ろを見つめ、シーはその瞳に声の持ち主の姿を刻んだ。目の前の男と同じキャヴィア人。濃紺の鱗を持った竜人。今しがた、パエーリヤと呼ばれた緑の竜人の男よりも、不真面目そうな印象を醸している人物だった。

「小娘がヒュミ、小僧がシー……だ」

濃紺の竜人が呟いた。

シーもヒュミも驚愕した。名前を読み取った。超能力やら魔法が入り乱れるこの世界で、そんな能力がある人物がいないなんて思いはしないけれども、自分の名前を読み取られるなんて、やはり不気味だし、気持ち悪かった。

それに、そのことが無害なのかどうか、まだ分からない。

「槌と同じ匂いがする。こいつらが槌か？」

今度はパエーリヤが言った。

槌という言葉に、シーもヒュミもはっとした。瞬時に思い出す、ルリの姿。そして、フェザス国で体験したあの出来事。槌を求め、槌を阻む、陰鬱な存在の確認。

「いや」

濃紺の竜人がにやりと笑んだ。

「こいつらはただの餓鬼だ。匂いは移っただけのもの。槌と会ったことがあるのだろうか」

無駄に力が入った。

この二人の竜人に、関わるべきではなかった。でも、もう遅い。逆に捉えれば、この二人を利用すれば、ルリにまた会えるかもしれない。シーは、服の下に潜む武器に手を当てた。ヒュミは息を殺し、冷静に二人を観察している。

「シー、ヒュミ、はじめまして」

濃紺の竜人が笑った。

「槌に関わってしまった憐れな一般人どもよ、私の名はシュラだ。暗黒竜のシュラ。君たちにはきつとまた何度也會えるだろうね」

不可解な言葉だった。分かるのは、彼らが到底味方とは思えないこと。彼らは、フェザス国にてルリを阻んだ者たちと、同じ匂いがあった。それを感じた瞬間、シーは咄嗟に身を竦めた。彼らには何かある。シーやヒュミでは到底敵わない何かが、ある。

——どうすべきか……。

シーは迷った。

立ち向かうのか、様子を見続けるのか。

二人の竜人の眼光が、シーとヒュミを捉え続けている。シュラと名乗った濃紺の竜も、パエーリヤと名乗った緑の竜も、どちらも血走った目をしていた。

得物を触るシーの手に汗が滲み出る。

戦うべきか、否か。

「やめなさい、シー」

ヒュミが極小さい声で言った。

「こんな狭い場所よ。奴らも満足に動けるはずがない」

「そうかな……」

シーは警戒を怠らず、いつでも飛びかかれるように身構えたまま、ヒュミに答えた。

「来る前に先手を打つべきだと思うけど」

聞こえているのか分からないが、シュラもパエーリヤもにやりと笑んだ。路地からの出口を塞ぐ二人の顔を順々に見回し、シーはタ

イミングを見計らう。

「待って」

ヒュミがシーの腕を掴んだ。ぐっとシーは身を強張らせた。アラ
イグマの力は意外と強いものだ。その上、地底人ときている。食い
込む爪をちらりと見つめ、シーはヒュミの顔を見上げた。ヒュミは
オレンジの目を鋭く光らせ、シーの顔をじっと見据えた。

「よく聞きなさい」

そう言って、シーに耳打ちする。

シーはそれを聞いて、はっとした。

大柄の竜人の大人。そして、小柄の自分達。

「こないのなら、こっちから行きますよ。なぜ、パエーリヤの後を
つけたのか、教えていただきましょうか」

パエーリヤとシュラが、同時に踏み出した。

逃げ道を塞ぐ彼らは、ゆっくりと近づいてくる。

シーは相変わらず得物を握りしめ、おもにパエーリヤの方向を見
つめていた。

「抵抗する気か」

シュラが立ち止まって言った。

「生憎我々は、お子様にも手加減しない性分なんでね。楽しませて
もらおう」

パエーリヤは変わらずに近づいてくる。シーの目には、ヒトのよ
うな姿の周りに、大きな竜の幻影が見える。あれが、彼の獣姿。本
当の姿。

——自分の本当の姿ってのは、大事にせにゃならん。

シーの耳に、言葉がよみがえってきた。

——行け。

ヒュミの合図が、感覚的に伝わってきた。

二人は同時にパエーリヤの方向へと踏み出し、突撃していく。パ
エーリヤはそれを見つめ、冷静に身構える。各々の得物を触り、地
を駆け抜け、身を低くし、長身の自分へと飛びかかってこようとす

る子どもたちの前に、パエーリヤは立ちはだかる。二人が地を蹴る足に力を込めた。パエーリヤは見逃さなかった。剣を抜き、構える。

——今。

パエーリヤの予測した通りのタイミングで、二人は地を蹴った。その後の動きを読んで、パエーリヤは剣を振るう。シーとヒュミは流れに任せたまま、パエーリヤの下へと飛び込んでいく。パエーリヤの剣が唸った。しかし、彼の目同様に鋭く光るその剣は、空中を空しく切り裂いただけだった。

パエーリヤの目は、そのまま、自らの剣が逃した獲物達を追っていった。

小さな角の生えたアライグマと、小さな角の生えた仔獅子。

パエーリヤからすると相当小さく見える彼らは、がら空きになっているパエーリヤの足元へと突っ込み、そのまま突き進んでいった。バランスを崩し、転倒しそうになったパエーリヤは瞬時に彼らの行く手を阻もうと、彼らの進行方向へと飛び移る。しかし、それは、少し遅かった。

「やった……」

仔獅子姿のシーは、思わず口に出した。

「出られた！」

それから、後ろからの視線を気にする暇もなく、逃げ続けた。

宿の正面へとたどり着き、シーとヒュミはようやくヒト姿へと変わった。体中汗だらけだった。懷に隠す得物さえも汗が移っており、妙にべとべととしている。髪も皮膚にべたつき、灰色頭を隠すバンダナも、汗まみれだった。それが何だか不快だった。獣の姿のままであればよかったと少し思った。

「もう部屋に戻ろうか」

シーはヒュミに言った。

ヒュミは周囲をぐるりと見まわしてから、こくりと返事する。
鍵を預かる受付人は、シーとヒュミの様子を怪訝そうな表情で窺ったものの、何も言わずに鍵を渡してきた。

そして部屋に辿り着くと、シーはそのままへたり込んでしまった。

「つ……疲れた……」

ヒュミがよろよろとソファへと向かい、ぐったりと項垂れる。シーも何とか立ち上がると、同じくソファへと向かった。

「何なのよ、あいつら」

ヒュミがソファに寝そべりながら、そう言った。

「ものすごくやばい奴らじゃない」

「きつと魔王の敵なんだよ……」

シーはぼんやりと言った。

「槌って言っていた。きつと、ルリの敵なんだよ……」

ヒュミがちらりとシーを覗いた。そのオレンジの目からは、特に何の感情も読み取れない。シーはソファに寝そべり、続けた。

「フェザスでルリを襲っている奴と同じ匂いがしたし……」

「そう」

ヒュミは短く反応した。

「僕達の名前を、読み取った……」

「あまり関わりたくないわね……」

ヒュミはそう言ったきり、黙り込んでしまった。シーはちらりとヒュミの方向を見やった。寝ているのか、いないのか、よくわからない。だが、好都合だった。会話を続けるのも億劫なほど、シーも疲れていた。

緊張とその解放感と疲れが、一気に襲って来たのだ。

シーは柔らかなソファの上で、しばし、深く呼吸し、目をつむった。

翡翠ノ海 其ノ肆

翡翠ノ海 其ノ肆

三日後、ヒュミとシーは虹の宿を発つことにした。

必要なものを買い占めて、向かう先はグレイ山脈の西側にあるという禁断の森。ヒュミが訪れたことがあるという場所。偉大な悪魔の娘であるルリが育ったという場所だった。

虹の宿からグレイ山脈までは早く、あっという間に辺りはごつごつした殺風景な雰囲気にも包まれていく。遠くで狼の遠吠えが聞こえてきた。人狼の声だろうか。このあたりにいる人狼は、旅人を襲う。フェザス国で猛禽達と戦ってきたシーとヒュミだったが、やはり人狼には会いたくないものだ。彼らはなかなか諦めない。とても厄介な存在だ。

「このまままっすぐ登れば、いつかはマクア国の王室に着くわ」

ヒュミが先を見つめながら言った。

もうずいぶんと歩いた頃だった。後ろには小さく虹の宿の影が見える。結構歩いたが、まだまだ先は長そうだ。

「王室への道のなかにね、絶壁で囲まれる細い山道があるの。とても静かで、陰鬱な場所よ。そこ以外からも王室へ行けるし、何しろ、其処で人狼に出会った厄介だから、旅人も、住んでいる者も、誰も通らないっていうわ。人狼だけが堂々とそこを通れるというわけね」

ヒュミの見つめる先はずっと遠く。シーの目には、その絶壁の影すらも見えない。

「その細い道からルリの育った禁断の森に行けるってこと？」

シーの問いに、ヒュミはゆっくりと頷く。

「人狼に会わないことを祈って、向かいましょう」

「そこって、どんな所なの？」

「まさに、禁断という雰囲気森よ……」

ヒュミは前と同じことを答えた。シーは、じつとヒュミのオレンジの目を見つめたが、ヒュミは前を見つめたまま、逸らさなかった。「さあ、行きましょう。グレイ山脈で不用意に立ち止まるのは危険だわ」

ヒュミはそれっきり口を閉ざし、静かに歩き始めた。

空気から伝わってくる彼女の緊張に、シーの身も引き締まった。人狼だけを恐れているのではない。何度も危険な目にあっているからこそ、警戒心は強まっていく。シーも感じていた。ここら辺りまでを取り仕切る人狼の匂い、そして、人狼の影でひっそりと暮らす、あらゆる魔物や、蟲の匂い。全てが有害とは言わないが、全てが無害ともいえない。

いつ崩れるか分からない平常の中で、シーは慎重に、ヒュミの後を追った。

この一日は三十時間。日の光が世界を占めている時間は、大まかにいっても十五時間はある。いま、その中の何時間を歩いて来たのか、シーには分からない。ただ、高大なグレイ山脈を登って行くのと、広大な平原を歩いて行くのでは、また違った絶望感が与えられるとシーは感じていた。ここまで長ければ、外敵への警戒心を保つための緊張によって、気力までもを失っていく。

また、何処かで狼の遠吠えが聞こえてきた。

「近いわ……」

ヒュミが息を殺した。

たしかに、近かった。

シーの身体に緊張が走る。もともと緊張だらけだというのに、これ以上どこから緊張が生み出されるというのだろうか。

もう一度、遠吠えが響いた。

「『オオタカからハゲタカへ。獲物を見つけた。すぐに……を……』」

ヒュミが遠吠えを聞きながら、ぼそりと言った。

「分かるの？」

シーは驚いてヒュミの顔を見つめた、ヒュミは遠吠えの声を探り探り、低く唸る。

「うーん、これが限界だわ……。人狼の遠吠えについての研究所があつてね、ちよつと前に故郷で読んだことがあるの。最初は分かったけど、最後らへんはてんで分からなかったわ」

「獲物を見つけたって……？ まさか僕たちじゃないよね？」

「声の遠さから違うはずよ。ただ、その獲物がこちらに逃げてこないとは限らないわ。早めに先に進みましょう」

「襲われる人は……？」

「残念だけど、極力関わらないべきね。襲われる人がどうにかすべき問題よ。狼にとっても食べる物がないと困るものね」

「奴らも、魔法食に切り替えればいいんだ！」

シーは叫んだ。

魔法食というのは、食べる者の必要な栄養素と、欲する味が反映される不思議な食物のことだ。これによって食べ合いをする必要がなくなり、本来肉食や雑食の者が、菜食する者を襲う必要がなくなる。

この虹の世界の大陸において、殆どの国でこの食べ物導入されているのだが、一部の肉食民族からは不評で、今も平然と狩りを続けている種族も少なくない。人狼もその一派だった。

「人狼がその気にならないと意味がないわね」

ヒュミはため息交じりに言い、再び歩き出した。

「でもね、あまり知られていないことだけど、その魔法食の元になつているのは、マンドゴリアのとある一族の果実なのよ」

ヒュミの言葉に、シーは一瞬だけ息を詰まらせた。

マンドゴリア。

それは、虫や植物たちの花の世界の住人で、一部の者達からは、動く植物とも呼ばれている。ケラヴァア人、ルーピルプ人、カプリコア人、ジュノア人などの人間や、ルチフェル人のような地底人た

ちとは関わり合えない者達。

シーもヒュミも、姿はちらりと見たことがあっても、その声は全く聞いたこともない。彼らが何を考え、何を見ているかなんて、シーは想像したこともなかった。しかし、確実に命あり、心あるものだということは、獣人を友に持てば分かる。

そのマンドゴリアの果実を使った食物。

つまり、シー達にしてみれば、胎児や卵のようなものだ。考えれば恐ろしいことだが、それが広く知られたところで、使用を避ける者が現れるとは思えない。今まで食べていた獣人達も、これからも普通に食べるだろう。

そういうものなのだ。

何か最善の手を考えたとしても、何処かしらに犠牲は来る。

そういうものなのだ。

「人狼は……どうして旅人を襲うんだろう……」

シーは歩きにくい岩道を乗り越えながら、小さく呟いた。

人狼は人間だ。獣人ではない。

ジュノア人の大きな一派だと言われている。人間の中でも、ジュノア人の他の種族からも嫌われている。世に一番散らばっているジュノア人の流族^{るぞく}達は、人狼を冒瀆し、人狼と対峙する北東の密林の民族ヒポラスを称えることで、他種族からの偏見を免れている。

ただ、そんな流族も、陰で二枚舌と称されていることも、シーは知っていた。

「どうして、食べ合わなきやいけないんだろう……」

シーは空を見上げた。

日が傾き始めている。あともう少しで日の入りだ。黄昏迫る山道。危険な時間の足音が近づいてきた。人狼だけでなく、危険な獣人や、魔物たちも目を覚まし始める。

「急ぎましょう。あと少しよ」

ヒュミの声が低くなった。

また、狼の遠吠えが聞こえてきた。

シーは、声の聞こえた方向を呆然と見つめた。

——近い……。

「……走って」

ヒュミが唸る。

「早くッ！」

ヒュミの唸り声に、シーの背中が押された。

そのあまりの威圧に足を取られかけたが、どうにか持ち堪え、身を低くして山道を登っていく。

この近さ、人狼の獲物はこちらに逃げてきている。

きつとその者は知っているのだ。ずっと西へ行けば、人狼の縄張りじゃなくなることを。或いは、身代りになりそうな旅人が、こちらにしていることを。

彼らの気配がまとわりつくなか、シーのヘイゼルの目に、影が映った。

二つの絶壁の影。

——あの間に道が……？

しかしそれは、まだまだ遠かった。

「ヒュミ……」

「しっ、ただ走ることだけを考えて」

ヒュミに言われ、シーは口を噤んだ。

人狼に追われている獲物は、どっちに向かって逃げているのだろうか。

シーの不安を嘲笑うかのように、日が落ち始めた。

「腰を抜かしておっちゃあ、魔物には勝てん」

二つの短剣を握りしめるシーに、《師匠》は言った。鋭い猫の瞳が、シーを睨んでいた。

「魔物は向かい合う相手が自分に対して恐怖を感じていると知った

ら、途端に強気になる生き物だからねえ。どんな奴が目の前にいても、動揺しているようじゃ勝てんぞ」

平然と言う《師匠》は、表情一つ変えずにけたたましく吠える魔物へと視線を移した。

そこにいる魔物は、類稀な大物だった。

赤い大牛の体、肩には二つの竜の首が生えている。角は黄金に光り、胴の脇からは蛸足のようなものが四本ずつ生えている。とても大きく、とても威圧的で、初めてその姿を見るシーには、想像もつかない生き物だった。

「まあ、こんな生き物、溢れちゃいないわな。見ておれ。魔物つてやつあ、殺さなくても勝てる生き物じゃ」

そう言って《師匠》は相変わらず無表情のまま、剣を抜いた。

魔物が吠える。耳を劈く声。不快な印象しか持てない声。相手を怖がらせることばかりを意識したような声。

《師匠》の醸す気配の色が変わった。

日はすっかり落ち、ちらほらと魔物の姿も目に見えるようになった頃、薄暗い中で浮かび上がる絶壁の影は、もうかなり大きくなっていた。

「着くわ……あと少し……」

遠吠えはたまに聞こえてくる。

だが、それは、獲物を倒した勝利の雄叫びではないようだった。獲物はやはり、西へと向かっている。つまり、だんだんと近づいて来ている。追いつかれるか、その前に捕われるか、シーは何度も後ろを振り返った。

時折姿を見せる魔物たちは、シーとヒュミにはちよっかいを出さなかった。二人が魔物たちを相手にすらしないうことを分かっていたからか、はたまた、シーとヒュミがただの無力な子どもではないと

本能的に感じ取っていたからかは分からないが、集中したい二人にとっては、とても有難いことだった。

そして、とうとう、その細道は見えてきた。

王室へとつながる大きな道。その脇に繋がる、小さな道。

「あの小さな道なんだね？」

「そうよ」

ヒュミが答えたと同時に、石の転がる音が響いた。

さすがにシーはぎょつとした。だが、辺りを見ても、誰もいない。代わりにいるのは、無害な魔物だけ。きっとあの魔物が小石でも転がしたんだろう。今はそう信じる事にして、シーとヒュミは細い道へと入り込んだ。

ヒュミの説明通り、其処は陰鬱な道だった。

耳を澄ませば音が聞こえてくる。

山の命の音の全てが凝縮され、響き合っているような音。神秘的だが、そのために不安を生む、心細い音。この何処かに、山脈の西、禁断の森へと続く抜け道がある。その禁断の森への入り口に相応しい、不可解な雰囲気だった。

「どのぐらい先なの……？」

シーは不安になってきた。

人狼達とその獲物がこちらに入り込まないとも限らない。

そんな樂觀なんて出来ない。

巻き込まれる前に、早く抜け道へと逃げ込みたかった。

「あと少しよ。そうとしか言えない！」

ヒュミの答えも尤もだった。彼女がどう答えようと、シーの不安は打ち消されない。抜け道をこの目で見て、入り込まなければ意味がない。

二人は息を潜め、そして先へと進んだ。

何処までも続く暗い道。

いつかは、マクア王室の入り口付近の山道へと出るらしい。

しかし、今はそんなことはどうでもいい。願うのは、進行方向か

ら、人狼やその獲物が入り込んでこないことだった。

そればかりを祈って、早足で先に進む。

しかし、祈れば祈るほど、悪い事態は招かれるらしい。

シーは自分達の運の悪さに絶望した。前から蹄の音がする。こつこつとこちらに近づいてくる蹄の音だ。鹿か馬の歩くような音。

きっと、人狼達の獲物だ。

「そこにいるのは誰？ 狼なの？」

少女の声だった。

ヒュミもさすがに表情が渋かった。

「違うわ。あなたが獲物ね？」

月の光がこの狭い道を照らす。少しだけ、少女の姿が見えた。少女はシーとヒュミを窺うように近づいてくる。紛れもなく、獣姿だった。その姿に、シーは一瞬見惚れた。銀の鬘の漆黒の馬。美しい目が、こちらをじっと見つめている。

「地底人ね」

馬の少女が言い、こちらに近づくと同時に、ヒト姿へと変わる。

銀髪の小麦色の肌の少女だった。歳はちょうどシーと同じくらい。

緑の右目から、東南の島国ギャロップが出自とされるカプリコア人の血を引いていることが分かる。

「あなたがこちらから来たってことは、狼も前から来るのね」

ヒュミが淡々と問うと、少女は首を振った。

「あたし、逃げ脚だけは早いよ。狼がどちら側から来るかなんて分からないわ」

そう言って、少女は振り返る。

「あたしの匂いを追ってくるかもしれないし、先回りして逆から入るかもしれない……あたしにはどちらかなんて分からないわ」

「そうね、彼らだったら、二手に分かれるでしょうね」

ヒュミはぼそりと呟き、シーをちらりと見てから、もう一度少女に向かって言った。

「あなた、名前はなんていうの？」

少女は短く答えた。

「エヌ」

ヒュミはそつとシーの手を握り、エヌに言った。

「エヌ、あなたに提案するわ。私達と一緒に禁断の森にいかない？」
ヒュミの言葉に、シーははっと思いついた。

きつと、ヒュミはエヌの馬姿を連想している。彼女に乘せてもらえば、もしかしたら人狼がこっちに襲ってくるよりも早く、抜け道に逃げられるんじゃないかと期待しているのだ。

エヌは首を傾げ、困ったようにシーとヒュミを見つめた。

「でも、あたし、オアシスに戻らなきゃならないわ」

「オアシスの住人なのね？」

空かさずヒュミが訊ねる。

「うん、パパもママもお兄ちゃんもお姉ちゃんも弟のデルタも待っているわ」

「でも、このまま奴らに捕まれば、家族にはもう会えやしないわ」
ヒュミに容赦なく言われ、エヌは口ごもった。

シーは心底焦った。エヌが考えている間にも、人狼達は近づいて来ている。早く動き出さないと、それだけ無事に切り抜ける確率が減っていく。

「森に行ったら、いつか帰れる？」

エヌがヒュミに問う。

ヒュミは頷いた。

「きつと、帰れる日が来るわ」

その言葉に、エヌの気持ちが変わったらしい。

「分かった。一緒に行く。行かせて」

シーもヒュミも心から安堵した。

翡翠ノ海 其ノ伍

翡翠の海 其ノ伍

道も険しく、危険も多いグレイ山脈のなかでも、オアシスという町は、名前の通り、特に安全な場所だと言われている。

まさに平原の中の虹の宿のような場所で、殺風景な山の中に、ぽつねんと、賑やかな町として存在しているのだ。

その中では人狼も殺生しないという掟を守り、時に、町の住人と人狼との間に恋が芽生えることまであるという。人狼と町の者の恋愛については、シーも懐疑的だが、それほどオアシスという町は平和であるという事でもある。

そんな平和な町で生まれ育ったエヌにとって、グレイ山脈で出会った危険は想像以上のものだっただろう。

そもそもエヌは、家族の中でも、近所の子どもたちの中でも、一際やんちゃで御転婆で悪戯っ子だった。両親ともに一体誰に似たのやらと首を傾げる程で、外に遊びに行けば必ず生傷をつくって帰るような子どもだったらしい。

同時に、幼い頃から悪戯ばかりしているからか、逃げ脚はかなりの自信があるらしく、今も人狼達を恐れつつも、彼らからかなり距離を置いて逃げられているはずだと鼻高々に言った。

「人狼の中にも足が速い奴はいくらでもいるわ」

ヒュミがそう一蹴するまで、エヌは足の自慢を続けていた。

「何よ。乗せてあげてるのに！」

エヌは気分を害したらしく、馬の姿のままでそうばやいた。

そう、シーとヒュミは予定通り、エヌの背中に乗せてもらう事に成功していた。そのままエヌが来た道に戻る形で進み続け、ヒュミの記憶を頼りに抜け道を探っていた。ここでヒュミが記憶違いを起こすと、忽ち命の危機に陥るだろう。勿論、シーは人狼なんかを負

ける気なんてなかったが、戦いは何が起こるか分からない。それにこっちは、エヌを抱えているのだから。

ヒュミは小さく溜め息をつき、エヌの白銀の鬘を撫でた。

「そうね、ごめん、エヌ。その自慢の足を借りるわ」

あっさりとヒュミが折れたので、エヌは口籠りつつ、「分かっているだったらいいんだけど」と呟いた。

そのままエヌは口を嚙み早歩きで進んだ。

ヒュミは、その間、周囲に目を配っていた。

ここからは彼女の記憶次第。

シーは祈った。

「あった？」

しばらく歩いて、無言に堪えられなくなったエヌが小さく問う。

「まだよ……」

ヒュミはさらに小さく答え、すぐに口を閉じた。

無言で過ぎ去る時間。あとのくらいで狼たちと鉢合わせになるか分からない。遠吠えも聞こえなければ、まだ匂いもしない。狼に見つかるのが先か、抜け道が見つかるのが先か。シーは祈りつつ、周囲に目を配った。

そして、その時に、遠吠えが響いた。

「近いわ……」

ヒュミの呟きに、エヌが顔を上げる。

「きつとね、今やっとあたしの入ったこの道を見つけたのよ！」

エヌの言うとおりだったらまだ見込みがある。と同時に、カウントダウンの始まりということでもある。

このまま、本当に、抜け道には辿り着けるのだろうか。

「狼の足は速いわ……」

ヒュミが低く言った。

「急いで、エヌ！」

強い口調に、エヌは押されるように走り始めた。

ヒュミはじっと前を見ている。もう、抜け道の場所を把握してい

るのかもしれない。

シーはそう信じつつも、いつでも戦える心構えをしつかりとしておいた。

——大丈夫。狼も猛禽もさして変わらないさ……。

問題は、エヌもいるところだけでも。

「まだ？ まだ走っていればいいの？」

エヌはそう問いながら、疾走する。

ヒュミは何も言わないことで肯定した。

そのうちに、シーにも分かってきた。ヒュミの言う抜け道。それが段々と近づいて来ている。音と匂いと風の感覚で、近くに一本道じゃない何かがある事が分かってきた。

「あと少しだね！」

シーの声に、ヒュミが首肯する。

「あと少し……？ あと少しなのね……？」

エヌは問いながら、さらに走る。

彼女にも感じ取れてきただろうか。

抜け道は、もう目の前。

——自分の身に付けた力は自分だけのもんじゃない。

《師匠》はそう言った。

——守りたい奴、味方したい奴、全ての奴と共有するもんじゃ。

山猫の瞳はいつもよりも一際、鋭かった。

——だから、忘れるな。どんな敵が目の前に居ても、きっと、きつと……。

失踪していたエヌは、前を見つめ、はっとした。

エヌが慌てて止まった時には、シーもヒュミもすでに得物を抜き、エヌから飛び降りていた。ヒュミの目線だけの指示でエヌは理解し、そのまま下がる。

あと少し、あと少しだった。

三人のすぐ目の前に、ヒュミの言っていた抜け道らしきものが見えている。それなのに、その手前に、邪魔な者がいる。

「仔馬だと思って油断していた……手古摺らせやがって……」

目の前にいるのは、赤い狼率いる数頭の狼の群れ。

この様子だと、後に下がっても意味がない。

戻る途中で別の狼たちが入り込んでくるだけだろう。

ヒュミはシーとエヌにだけ聞こえる声で、指示を出した。シーには異存ない事だったが、エヌは目を見開き、ヒュミとシーを窺った。
「大丈夫、問題ないよ」

シーは小さく笑み、二つの短剣を光らせた。

先頭にいる赤い狼は、やや警戒を見せた。どうやら彼は、子どもだからといって、シーやヒュミを見縊るほどの小物ではないらしい。部下達は一向に突撃しないボスを窺うように見つめる。赤い狼はそれでも何も言わず、黙って三人の行く手を阻んだ。

シーは気付いた。

きつと彼は時間を稼いでいるのだ。仲間達が反対側から追い付いてくるのを待っている。

ヒュミもそれに気付いた。

「エヌ……」

ヒュミは小さく呼びかけると、剣を持ち上げ、素早く、横の絶壁を叩いた。

その動き、そして音に狼たちが怯んだと同時に、エヌが駆け出し、跳び上がる。狼たちが気付いた時は、エヌは狼たちの頭上高く跳躍しており、到底届かない位置にいた。そのまま、美しい形で狼たちの後方へと着地すると、急いで抜け道へと逃げ込んだ。

ここまで確認出来れば、もう心配はない。

シーとヒュミはいったん顔を見合わせ、同時に飛び出した。

彼らと睨み合っている間、有利にさせるだけだ。それなら、数が少ないうちに、出来るだけ倒してしまおう。そのつもりだった。その間に、エヌが出来るだけ遠くへ。禁断の森にまで辿り着ける事を願うしかない。

「仔馬を追え！」

赤い狼が後方の狼達に怒鳴り、二頭の狼がそれに従う。

シーは慌てて地面につき、シーの身長以上はありそうな長い杖を取りだした。新たな武器に、狼たちの動きが一瞬止まる。その隙に、シーは小さく何かを唱え、狼たちの後ろへと杖を思いっきり投げつけた。

「さすがね」

ヒュミが小さく褒め、シーは目を細める。

杖は上手い具合に抜け道の傍の地面に刺さり、すぐに薄い膜を張った。

赤い狼が唸りつつ振り返り、その光景を確認する。

エヌを追いかけようとした二頭の狼が警戒しつつも、膜に体当たりをする。しかし、彼らの体は膜によって柔らかく跳ね返された。

「結界か……厄介な」

赤い狼はシーとヒュミに向き直り、身を低くする。

「やはりただ者じゃないな。俺達、人狼族を目の前にしても、身震い一つしやしない」

シーはヘイゼルの目を細め、二つの短剣を持ち替えた。

「それはあなた達が南西の国フェザスの猛禽と、さほど変わらないからですよ」

「たかが鳥と……」

黒っぽい狼がにやりと笑む。

「……あたい達とを比べたことを後悔させてやるよ！」

彼女の咆哮と共に、三頭ほどの狼が襲いかかってきた。シーとヒュミは、冷静に飛びかかってくる狼たちの動きを見つめ、得物を握

りしめる。

空を切る音とともに、鈍く痛々しい音が空間を揺るがす。

飛び散る鮮血を浴びて、シーのヘイゼルの目が光り輝いた。

赤い狼は表情を歪めた。

たかが地底人の子ども。だが、この二人からは只ならぬ気配を感じていた。それでも退かなかったのは、彼らの狼としての誇りがあったからだ。肉食をやめない人間の部族として、最強であり最凶と称される人狼族。地底人に唯一対抗できるであろう人間。その誇りが、彼らにはあった。

それなのに、これは、どういうことだろうか。

地面に転がる三頭の仲間。深手を負い、動くこともままならない。あっという間についた決着。赤い狼にすら、彼らが斬られた瞬間を捉える事が出来なかった。

狼の血潮を浴びてシーは静かに微笑む。

その姿を見て、赤い狼が爆発したように咆哮した。彼を怒鳴らせ、走らせるのは、ただ、狼の誇りの力のみ。他の狼達も、仲間がやられたのに怒り、シーとヒュミに特攻した。

怒りに我を忘れた攻撃。

シーとヒュミは、冷静に、反撃した。

呆気なく斬られ、動けなくなる狼もいる。斬られても、少しだけ体勢を崩させる狼もいる。何度斬られても、動じない狼もいる。無傷で一牙打ち込むことが出来る狼もいる。

シーとヒュミの周りには、七頭の動けない狼が蹲っていた。

血潮に塗れる二人は、残った五頭の狼を見つめる。シーもヒュミも、返り血と自分の流す血の境が分からなくなってきた。だがそれは、狼達も同じだった。残った五頭の狼がじりじりと二人に近づいてくる。

シーとヒュミはちらりと顔を見合わせた。

——もうそろそろ。

頷き合い、得物を握る。

残った狼達も、二人の行動を予測したらしい。

そして、ぶつかり合う。

斬り込みながら、進み続ける二人。それを阻むために、斬られつつも尚噛みついてくる狼達。エヌを逃した以上、シーとヒュミを逃すことの出来ない彼らは、しぶとかった。しかし、命がかかっているシーとヒュミは、それ以上にしぶとかった。

——やった……。

力押しで狼を振り切り、二人は遂に、体勢を変えた。

狼は一方のみ。

狼を振り返る二人の後ろには、抜け道とそれを守るシーの杖。

血塗れとなった狼達は恨めしそうにシーとヒュミを振り返った。

同時に、二、三頭が力尽きて倒れた。残った赤い狼と、黒っぽい狼とが、大きな目を光らせて、息を荒げてじりじりと近づいてくる。

しかし、もう恐れることはない。

彼らに、襲いかかってくる力はないはずだ。

ヒュミは結界の張られた抜け道の傍へと寄り、さっとその中へ入った。

ふと振り返ったヒュミが、急いでシーの腕を引っ張り、シーの身体を完全に結界の中へと入れた。驚いたことに、その直後、残った二頭の狼が飛びかかってきた。完全に油断していた。あと少しヒュミが気付くのが遅かったら、シーは狼の牙をまともに受けていただろう。二頭の狼は、猛犬のように結界にぶつかってくる。

「杖は……」

ヒュミが言いかけ、シーは首を振った。

「少しくらい遠くからでも消せます。今は、早くここを去りましょう」

そう言つて、ヒュミを先へと促した。

絶壁に囲まれた先程の細道よりも、ずっと真っ暗な抜け道の中で、狼の唸る声が少しずつ聞こえなくなっていく毎に、シーの心から警戒心と殺気が薄れていった。

それと同時に、やっと、傷からの痛みを感じてきた。

エヌは途中で待っていた。しかし、ちゃんと待っていた理由
はあった。

シーとヒュミがエヌの優雅な姿を目に捉えた時、同じく見えてき
たのは、草蔓の囲む岩々だった。転々と存在するその姿の向こう側
を見て、シーは興奮した。

木々が密集している。

深い緑で覆われる木々が、抜け道を囲む崖を呑みこもうとしてい
る。それまで灰色ばかりの覆っていた世界が、途中から緑で覆われ
始める。

その奥に繋がる場所。ただの森にしては、独特で、得体の知れな
い異質さが漂う、不思議な場所。

此処こそが、禁断の森。

「着いた……」

シーが呟いた。

エヌは静かに傷だらけのシーとヒュミに近づき、小さく頭を垂れ
る。

「ありがとう、戦ってくれて。ありがとう、守ってくれて。此処に
は狼達はきつと来られないわ。オアシスに帰れる日まで、あたしは
此処でそつと暮らすわ」

シーとヒュミは顔を見合わせ、くすりと笑って馬姿のエヌにそれ
ぞれ抱きついた。

「君がオアシスに帰る日。その日はきつと、僕たちもオアシスに行
く日だよ」

ヘイゼルの目を輝かせて、シーはエヌの綺麗な目を見つめた。

「だから、それまで一緒にこの森で過ごして、一緒に帰ろう！」

ヒュミがそう続けて、エヌの項を撫でた。

エヌはじつとシーとヒュミを見つめると、途端にヒト姿に変わり、そのまま膝を着いて、両手で顔を覆った。

白い月の光が、エヌの銀の髪を輝かせている。

その光はエヌの後ろに広がっている、翡翠のような世界をも光らせている。

柔らかな風がその世界を通り抜け、漣のような耳触りのよい音を、生んでいた。その音は決まったリズムで、いつまでも、いつまでも、三人の耳に住みつき、揺り籠のように、その心を揺さ振っていた。

翡翠ノ海 其ノ伍（後書き）

『翡翠ノ海』をお読みくださりありがとうございます。前三話とは少し違った話となったと思います。シーとヒュミという人物は、『黒狗率イル旅ノ群レ』の次々作にと考えている『人狼望郷ノ念抱ク』という作品に出てくる人物達で、ここで語られるエピソードも、『人狼』の草稿に合わせて書きました。なので、『黒狗』以降の二作もいつかは公開出来たらなと思います。それでは最後にもう一度、お読みくださりありがとうございます。ここで一度完結ということにしますが、暇が出来たらまた更新していこうと思いますので、よろしく願います。 2010年2月16日 幼ゐこみ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4766g/>

虹色ノ夢

2010年10月8日13時25分発行